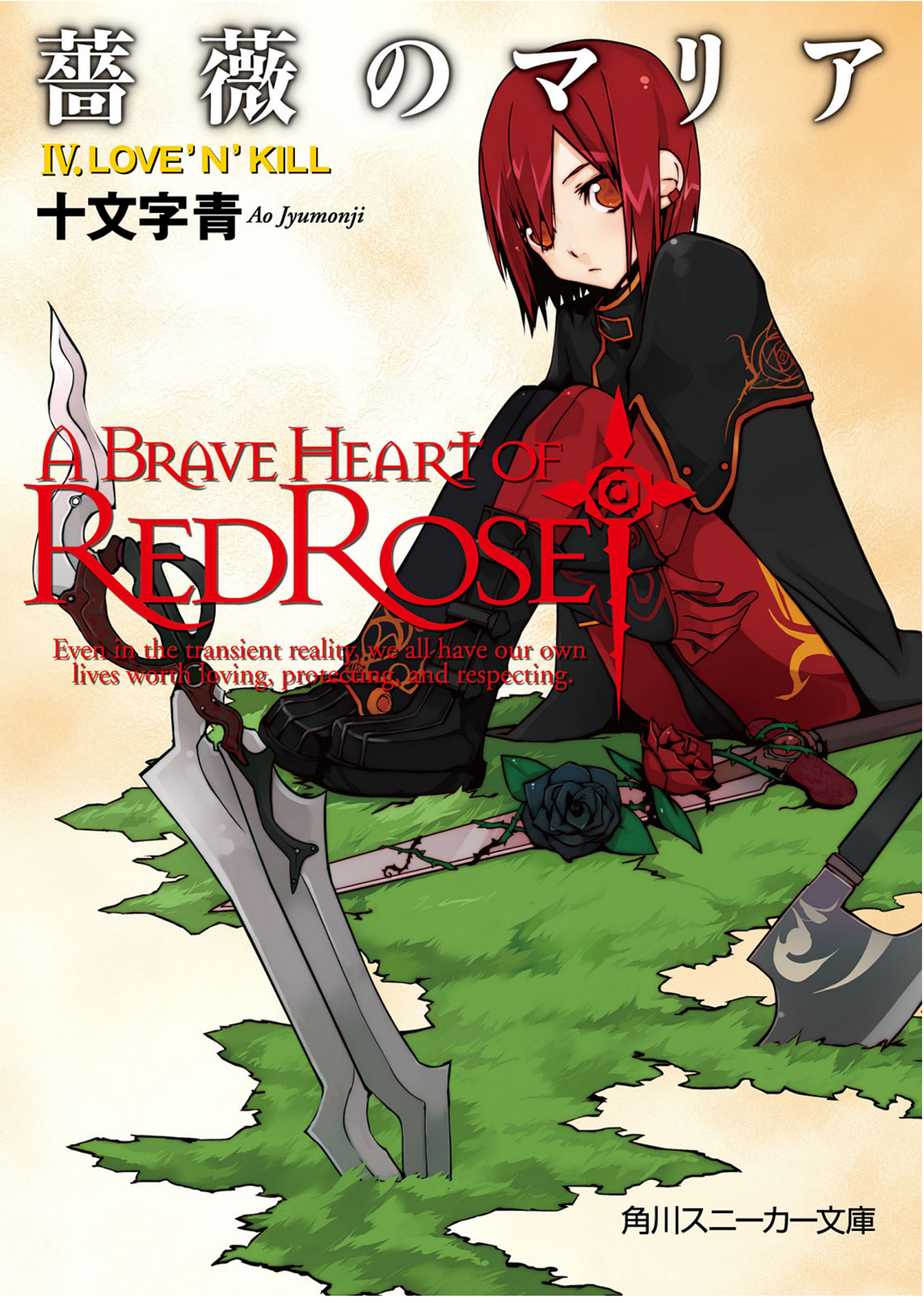
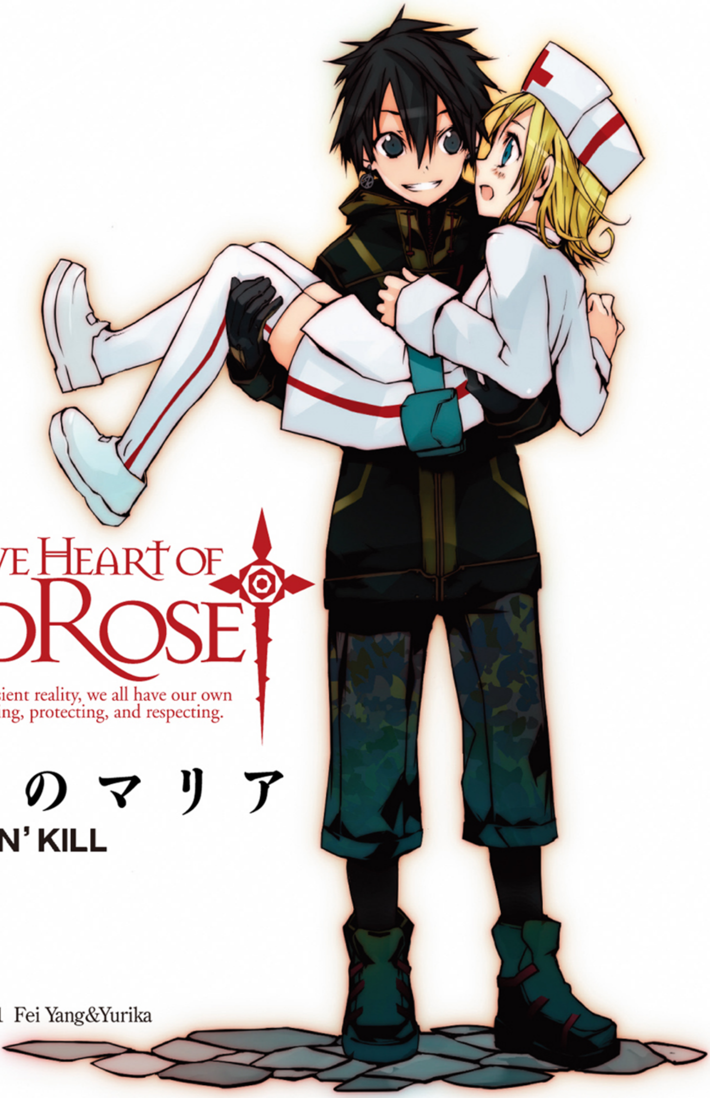

薔薇のマリア
Ⅳ. LOVE' N' KILL
十文字青
Ao Jyumonji
A BRAVE HEART OF RED ROSE
Even in the transient reality, we all have our own lives worth loving, protecting, and respecting.
角川スニーカー文庫



A BRAVE HEART OF RED ROSE

Even in the transient reality, we all have our own lives worth loving, protecting, and respecting.

薔薇のマリア

Ⅳ. LOVE' N' KILL

LOVERS CASE 1 Fei Yang&Yurika


LOVERS CASE 2 Azian&Mariarose
サンランド無統治王国首都エルデン第十三区
"彷徨える魂区(RSW)"
ああ、マリア。マリア、マリア、マリア。ボクの愛。ボクの魂。ボクのすべて。極限愛(ラヴマックス)。
告白しよう。ありったけの誠実さをこめて。
正直、こうしてこの腕で真正面からキミをぎゅっと強く抱きしめられる時がやってくるなんて、信じることのできなかった日々もたしかにあった——。
でも、今、ボクの腕のなかにはキミがいる。
ボクは何ものにもかえがたい、大切で、貴重で、美しく、気高くて、愛おしくてたまらない一輪の薔薇を、キミを、手折(たお)ってしまわないように、それでいてきつく抱きしめて耳許で囁く。
「大丈夫。ボクを信じて」


胸もとを手で押さえても、胸の高鳴りがおさまらない。
あの人のすぐそばまで歩いていって、どうしていいかわからなくなって、すとん、とその場に座りこんだ。
眺める。あの人を見ている。この距離で。こんなに近くで。あの人は眠っていて、手をのばせば、届く。ふれられる。ふれて、どうするの……？わたしの右手は、何をしようとしているの……？　だめ。いけない。でも——だけど、髪の毛に、さわるくらいなら——勇気を出して。さあ。手を。指を。
「ト……トマト……クン……」
あの人の名前を呼んでみる。
起きて。目を開けて、わたしを見て。起きないで。もう少し、このままでいさせて。起きて。起きないで。
起きて——
サンランド無統治王国
首都エルデン第十二区
〝トマトクン邸〟
LOVERS CASE 3 Tomatokun&Safinia



サンランド無統治王国首都エルデン第一区
〝シャイニンググローリーパレス〟
王はその巨大な玉座のなかほどに腰かけている。
天井から床に落ちている幾本もの光の柱は玉座をさけているため、王の姿は半ば闇につつまれて、はっきりとは見えない。
「グッダー。あれはもうできあがりましたか」
「擬似異界(パラアウター)内で最終調整中だ」
「そうですか。長かったですね。でも、ナ・インも本望でしょう。いずれにしても、準備は整いつつあると思っていいようですね」
「汝はどうなのだ」
「いいかんじですよ。ついに、見つけてしまいましたし——」

薔薇のマリア

Ⅳ．LOVE'N'KILL

十文字　青

角川スニーカー文庫

A BRAVE HEART OF RED ROSE Ⅳ

—LOVE'N'KILL—

Ao Jyumonji

First published 2006 in Japan
By
Kadokawa Shoten Publishing Co.,Ltd.

illustration : BUNBUN
design work : design CREST

A BRAVE HEART OF RED ROSE

IV

CONTENTS

CONTENTS

A BRAVE HEART OF REDROSE IV

MAIN CHARACTERS



Azian
アジアン
クラン《昼飯時(ランチタイム)》の頭領(マスター)。



Mariarose
マリアローズ
主人公。美貌の侵入者(クラッカー)。



Pimpernel
ピンパーネル
ZOOのメンバー。



Yurika Snow-white
ユリカ・白雪
ZOO所属の医術士。



Katari
カタリ
クランZOOのメンバー。



Twaning
トワニング
ZOO専属の僧。



Safinia
サフィニア
ZOO所属の魔術士。



Tomatokun
トマトクン
ZOOの園長(マスター)。



Judi
ジュジ

ルイが連れている猫。



Louis Catharsis
ルイ・カタルシス

ベストセラー小説家。



Fei Yang
飛燕（フェイヤン）

クラン《S＊K》（シリアル・キラーズ）の頭目。



Korona
コロナ

魔術士。天然。



Lilly
りりぃ

紅色の謎。



Funny Frank
ファニー・フランク

クラン《創世の翼》（ジェネシスウィング）のマスター。

and the others

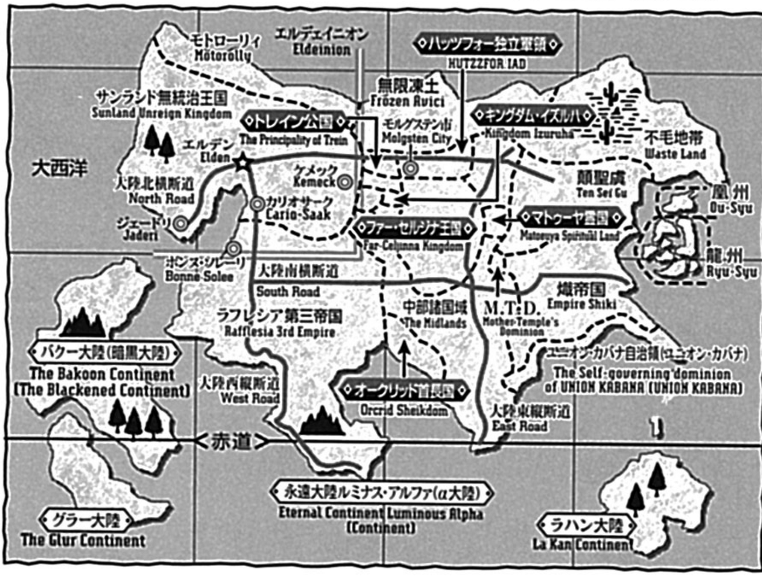
"The Chopper"鋏使い
"The Compresser"圧搾魔
"Fist Princess"拳姫
"Super Eater"超食漢
Molly Lips モリー・リップス&Beatrice ベアトリーチェ
Johann Sunrise ヨハン・サンライズ
Veronica ヴェロニカ&B・B
and etc.

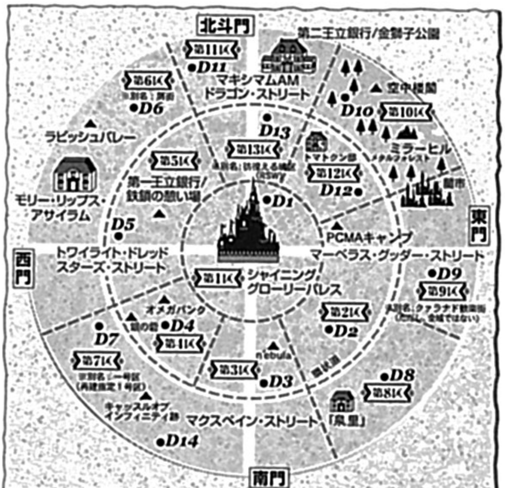


King Gooder
キング・グッダー

サンランド無統治王国国王。

The World of "A BRAVE HEART OF RED ROSE"





Elden:the Metropolitan area of Sunland Unreign Kingdom
サンランド無統治王国 首都エルデン

MAP製作 On Graphics

Omenage 897 10th revolution 8th day

サンランド無統治王国首都エルデン第十三区
〝彷徨える魂区(RSW)〟

a prologue

キミとダイヴ

ああ、マリア。マリア、マリア、マリア。ボクの愛。ボクの魂たましい。ボクのすべて。極限愛ラヴ・マツクス。

告白しよう。ありったけの誠実さをこめて。

正直、こうしてこの腕うでで真正面からキミをぎゅっと強く抱だきしめられる時がやってくるなんて、信じることのできなかった日々もたしかにあった。望んではいたが、ボクもそれなりの年月を生きてきて、義理もあり、くだらないしがらみもあって──笑ってくれてかまわない。責任めいたものもある。何もかもをためらいなくあっさり捨て去ることは、やはり簡単じゃない。

でも、今、ボクの腕のなかにはキミがいる。

ボクは何ものにもかえがたい、大切で、貴重で、美しく、気高くて、愛いとおしくてたまらない一輪の薔ば薇らを、キミを、手た折おってしまわないように、それでいてきつく抱きしめて耳みみ許もとで囁ささやく。

「大だい丈じよう夫ぶ。ボクを信じて」

「……や、信じるって──」その先は言わせなかった。あらがういとまも与あたえなかった。

アジアンはマリアローズを抱いたままダイヴした。

地上三十数メーテル。

第十三区のとある高層建築の屋上から。

アジアンとマリアローズは飛んだ。落下する。落ちてゆく。速度が見る間に上がってゆく。アジアンの黒衣が、マリアローズの真しん紅くの頭とう髪はつがはためく。「うわわぁっ」マリアローズの慌あわてた、かわいらしい声を聞きながら、アジアンは無言だ。下は見ない。上だけを見ている。まさか追ってはくるまい。そう思うのだが、どこかで警けい戒かいしている。否ノン。自分のなかの何かがさかんに警告してくる。ぬるいなまぬるいぞ貴様は無知だ何も知らぬ弱いか弱い生き物だが貴様の敵は違ちがう強い手て強ごわい生命だ強きよう靭じんな敵だ貴様ではあらがいきれぬ打ち勝てぬ所しよ詮せん貴様は弱者で搾さく取しゆされる側だ哀あわれでみじめ

で卑ひ劣れつで虚きょ言げん妄ぼう言げん吐はきの美しくも醜しゅう悪あくな裏切りの王子よ。

―黙だまれ。

しかし、すぐにアジアンはおのれのあやまりを、見こみの甘さを思い知ることになる。

やつは屋上のへりから顔を出して下をのぞきこむと、少しだけ首をひねって、あきらめるかと思いきや、躊ちゅう躇ちょするそぶりも見せずに、飛んだ。

追ってくる。しかも、頭を下に向けて、逆立ちの体勢で落ちてくる。その両手には、人間たちがつけたやつの呼び名の由来である「鋏はさみ」に似た形状の凶きょう暴ぼうな得物が光っている。

〝鋏使いザ・チヨツパー〟。

年季の入った侵入者クラツカーたちの間では知られた名らしいが、アジアンにしてみれば、耳にしたことはあれど、興味はなかったし、ましてや実際こうしてやりあう羽目になるなんて思いもしなかった。

そもそも、鋏使いがＤ13で猛もう威いを振ふるったのは、もう十年も前のことだ。その後、俺がやつをしとめたイヤ俺だイヤ私だという話をする馬ば鹿かは何人もいて、これが証しょう拠この「鋏」だと掲かかげて見せたブツは、だが、どれも偽にせ物ものだったらしい。

つまり、鋏使いはある日忽こつ然ぜんと姿を消した。それ以来「鋏使いが再び現れた」などという話は、年を食って落ちぶれた侵入者クラツカーの痴しれ言、放言か、お調子者の酒に酔よったあげくのジョークでしかなかった。鋏使いと一いつ緒しょに暴れまわったやつのお仲間も、仲よく行方ゆくえをくらました。連中の存在は忘れられかけていた。そのまま忘れ去られるはずだった。

それがなぜ、今ごろになって本当に姿を現したりしたのか。

「チィッ……！」アジアンは舌打ちをして右手を前方、少し上にさしむけた。同時に左腕はマリアローズをさらにいっそう強く抱きしめる。さすがにこの状じょう況きょうでは、マリアローズも抵てい抗こうはしない。ああ……！　胸が締しめつけられ、軋きしんで、

もう張り裂さけてしまいそうだ！　あまりにもキミが愛おしすぎて！　ボクは願わずにいられない。この甘かん美びな痛みと無上の喜びをもたらす瞬しゅん間かんが、永遠につづけばいい、と。時よ、止まれ……！

　だが、一時の快楽のために、キミを止まった時の檻おりに閉じこめてしまうのはボクの本意じゃない。

「舌を噛かまないように！」アジアンは短くマリアローズに注意を与えながら、解放した。右腕のなかを、百万匹びきの蟲むしが蠢うごめき這はいずりまわるがごとき感覚。嘔おう吐と感。万まん力りきで後頭部を締めつけられているかのような頭痛。耳鳴りがする。

　それは、ビシュルルルルルルルゥッ――と、ほとばしりでた。

　右の掌てのひらと手首の間くらいの場所から飛びだしたそれは、材質不明の黒い紐ひもと化してすさまじい勢いで斜ななめ上方に伸のびて、伸びて、向かいの高層寺院の壁かべに突つき刺ささった。「――ッ！」ガクンと落下が止まった。衝しよう撃げきで右みぎ肩かたに激痛が走ったものの、我が慢まんできないことはない。そこからアジアンの体は、振りきった振り子のように斜め下へ。向かいの高層寺院までは十メーテルと離はなれていない。壁がぐんぐん迫せまってくる。アジアンはちらりと鋏使いの姿を確かく認にんした。やつは――空中で半回転、落下方向と平行の壁に両手の鋏を思いきり突き立てた。落下が止まった。

　いや、止めたのだ。

　そして、壁にしゃがみこむような姿勢でアジアンの方を向いて、ニタリ、と笑った。

　そのように見えた。

　人間ではない、異界生物フリークスの、蜥蜴とかげに似たやつの表情などわかりはしないが。

「――爬は虫ちゆう類るいの分際で……！」

　アジアンは黒い紐に命じた。

　戻れ。

　あのおぞましい感覚とともに、紐は急激に縮んでゆき、それにあわせてマリアローズを抱いたアジアンの高度も上がってゆく。さりとて壁が接近してくるのは変わらない。もうすぐだ。アジアンはマリアローズの体を片腕でしっかりと固定したまま、押しよせてくる壁に両足を向けた。激げき突とつした。その瞬間、膝ひざを曲げていくらかショックを吸収して、再び伸ばした。上へ。壁に着地。上へ。着地。それを繰くり返し、壁を伝って高層寺院の屋上まで達すると、黒い紐がアジアンの体内へと収まった。名な残ごり惜おしくてたまらないが、アジアンはマリアローズを放した。

「マリア！　キミはここにいて！」

「でも──」その場にへたりこみそうになって、すぐに持ちなおしたマリアローズは、口にしかけた反論を引っこめた。さすが、我が一輪の真っ赤な薔ば薇らは頭の回転が速い。「わかった。僕は邪じや魔まだね。気を……」

「その先は言わなくていい」アジアンは前まえ髪がみをパサリとかきあげて微笑ほほえんでみせた。「気づかいは無用サ。ここで見ていてくれ。一秒たりともキミを心配させたりしない」

「だ、誰だれが心配なんか！」

「照れることはないヨ？」

「照れてない！」

「フフッ」

　アジアンは身をひるがえして鋏使いを捜さがした。やつは壁に鋏を突き刺しながら地上に降りようとしているところだった。あえてゆっくり時間をかけている。

　待っているのだ。

　アジアンを。

　感じているのか。

　自分と互ご角かくに戦える相手が、すぐそばにいることを。

　──一秒たりとも心配させたりしない、か。

場合によっては嘘うそになってしまうかもしれないが。

だからといって、それ以外になんと言えよう。

アジアンはギリッと奥歯を噛みあわせた。マリアがいる。無様な姿は見せられない。見せたくないもの、知られたくないこともたくさんある。ボクは不実なのか。

でも、マリア、これだけは本当だ。

キミを守りたい。

いや、絶対に守ってみせる。

アジアンは屋上からダイヴした。今度は一人きりだから身軽だ。鋏使いはアジアンをじっと見み据すえている。少しだけ血が騒さわぎだした。それはおそらくサインだ。どうやら少しだけ本気にならないといけないらしい。鋏使いザ・チヨツパー。危険な相手だ。ボクのなかのケダモノを目覚めさせかねない敵だ。

しかし、それにしても━どうしてだ？

キング・グッダーの〝古代九頭竜の呪のろい〟によって、アンダーグラウンドから出られないはずの異界生物フリークス、蜥蜴人の鋏使いが、なぜこの第十三区に？　地上に……？

Omenage 897 10th revolution 5th day

サンランド無統治王国首都エルデン・アンダーグラウンドD13下層

〝ダーナムレーン〟

chapter.1

壊れた絆

彼女は間ま違ちがいなく人間の女性の外見的特とく徴ちようをいくつか備えていたが、万ばん人にんがすんなり納なつ得とくできる意味での「人間の女性」ではないこともまた、一見して明らかだ。

やや暗い紅くれない色の、なめらかで、ある種のなまめかしさを漂ただよわせる、なんらかの材質でできた身の丈たけ二メーテル以上の人形。

あるいは、頭の先から足の先までを紅色の甲かつ冑ちゆうで完全に覆おおった、かなり背の高い女。

もしくは、その中間。

それとも、まったく別の──人じん智ちの及およばない、説明不可能な何か。

どちらにしても、彼女は美しい。人間の体としてはたしかに異様だが、その造形美と機能美は、彼女を目にした者すべてが、たちどころに理解するだろう。彼女が完かん璧ぺきに計算しつくされて生みだされ、作りだされたものだということは、誰でもすぐにわかるはずだ。

そんな彼女には、不安定な生よりも、むしろ完全な死が似つかわしい。

今このときも、彼女の足あし許もとにはおびただしい死がさまざまに横たわっていた。

アンダーグラウンドＤ13下層ダーナムレーン。

この地を支配しているのは、成体で身長一・六～一・九メーテル、後こう肢しで二足歩行するが、地上に棲せい息そくする爬は虫ちゆう類るいとよく似た表皮性の角かく鱗りんや尻尾しつぽ、瞳ひとみを持つことから、人間には蜥蜴とかげ人と呼ばれている異界生物フリークスだ。

蜥蜴人は、人間と同質ではないものの、同等の知性を有するという。高度な鋳ちゆう造ぞう、製せい錬れん、鍛たん造ぞうの技術を持っていながら、かたくなに石造建築にこだわるなど、人間にしてみれば不可解な部分も多いが、それは優ゆう劣れつではなく、相そ

う違いというべきだろう。

　いずれにせよ、侵入者クラツカーにとって、蜥蜴人はかなり手て強ごわい相手だ。

　彼らが独自の文明的な生活を送っている荘そう厳ごんな石造りの街ダーナムレーンは、複雑に入り組んだ階層状の構造で、縦じゆう横おう無む尽じんに張りめぐらされた火管シユ・ダと呼ばれる管状の照明設備により、一日の半分は明るく、もう半分は薄うす暗ぐらく保たれている。

　ここは、そのダーナムレーンでも最下層に近い。

　ダーナムレーンの奥深くに設けられた迷めい宮きゆうの入口が、彼女の目の前にある。

　ほんの少し前まで固く閉とざされて、厳重に、何重にも施せ錠じようされていた分厚すぎる合金製の扉とびらが、今は開け放たれている。

　そして、扉の前には十いや二十いや三十いやそれ以上の屍しかばねが━━数えるのも難しいほど細切れにされて潰つぶされてぐちゃぐちゃになった骸むくろが━━元蜥蜴人たちの肉にく片へんと骨片と血液と臓物と彼らが身にまとっていた物体のなれのはてが散乱していた。彼女はそのおぞましくどす黒い泥でい濘ねいの中心に立って、底暗い口をあけている迷宮をじっと見つめているようだった。

　だが果たして、彼女がそれをやったのか。

　仮にそうだとしても、誰だれも驚おどろかないだろう。

　彼女はそれほどまでに死と近い。無数の死体が彼女の足許にひれ伏ふしている光景は、少しの違い和わ感かんもなく、巨きよ匠しようの手による名画のごとく、付け足すものも削けずるものもない。

　神よ。天上から人を見下ろし、いい気になっている愚ぐ神しんどもよ。

　彼女を見るがいい。彼女はおまえたちと違い、完璧だ。何しろ事情、経けい緯いはどうあれ、彼女は自ら選んでそうなったのだ。彼女は自らを創造した。自分自身がおのれの創造主である。それは神にすら叶かなわぬ領域に属する、真に妙たえなる最大最後の御み業

わざではないか。

　ただし、無意味なだけにいっそう無残な死をそこらじゅうにばらまいたのは、彼女ではない。

　それにしても、いくらなんでも、もういいかげん気づいているだろうに。

　近づいてゆく。

　後ろから。

　十メーテル。

　彼女はようやく振ふり向いて、両手に禍まが々まがしく反り返った長い長い刃はを出現させた。

　その刃に刻まれた文字は〝緋ノ魂滅〟。

　アルティメットブレイド・〝ギャラクシー〟・ダブルオーセブンティーエイト・メタルデス。

「貴様……」

　彼女は昔と変わらない声をかすかに震ふるわせた。

「これは、貴様の仕し業わざか」

「きっときてくれると思っていたよ、姉さん」

　意図的に問いかけを無視して別の言葉をぶつけると、彼女はすうっと右みぎ腕うでを上げて緋ノ魂滅の切っ先をこちらに向けた。

「あたしを姉と呼ぶな」

「じゃあ、どう呼べばいいのかな」

「なんなら二度とどのようにも呼べなくしてやろう」

「冗じよう談だんだよね？」

「あたしは冗談が嫌きらいだ。理解できないし、しようとも思わない」

「知っているよ。たった二人の姉きよう弟だいじゃないか」

「そうだな。だったら、あたしの気が決して長くないことも覚えているだろう」

「もちろん存じあげておりますよ、姉上」

　そして、結局のところ、肉親を容よう赦しやなく斬きってしまえるほど、非情ではないことも。

　そもそも、それが致ち命めい的てきな差となって、栄光に満ちた悲劇の道をみずから選ばざるをえなくなったことも。

　よくわかっている。

　だから、茶番のような緊きん張ちようをはらんだこの沈ちん黙もくも、長くはつづかない。

　予想どおりだった。

　ややあって、彼女は緋ノ魂滅を下ろした。

「……今はなんと名乗っているのだ」

「ルイ・カタルシス」

「貴様に似つかわしいふざけた名だな」

「でしょう？」

　ルイは石の床ゆかに置いた革かわ鞄かばんに腰こしかけて、足を組んだ。

　その肩かたの上に、灰色の猫ねこがいる。

　体格は小こ柄がらだが、被毛は長めで、青玉サフアイヤの瞳と黒い肉球と赤い首輪が素す敵てきなジュジだ。

　ルイの人さし指で顎あごの下を撫なでられると、ジュジは気持ちよくなって目を細め、ごろごろ喉のどを鳴らした。

「ラフレシアで節操のない物書きをやっているんだ。小説が主だけど、依い頼らいがあればなんでも書くよ。近ごろは、推理小説と恐

きよう怖ふ小説、それからロマンス小説のシリーズ物を書きながら、全十巻の旅行記を出すためにα大陸中を旅して回っている。これでも、売れっ子なんだよ。ああ……あと、この服や鞄も──」ルイの指が白黒豹ひよう柄がらのタイトなスーツと襟えりの大きい暗紫色ワインレッツドのシャツを示した。「ぼくがデザインしたんだ。野生ワイルド・の王朝ダイナステイーっていうブランドでね。ぼくが創立者でリード・デザイナー。今はもう経営は他人に任せているけどね。さすがに忙いそがしいから」

「それが表の顔か」

「わりと楽しんでいるよ。旅もね。いろいろ出歩くのは昔から好きだし」

「戯ざれ言はよせ。冗談は嫌いだと言った」

「だって、姉さん、ぼくが本当のことを言ったらもっと怒おこるでしょう？　あれ。困ったな。それじゃぼく、姉さんに何も話せないじゃない」

「わかっているのなら、あたしの前に姿を現すな」

「ひどいな。久しぶりなのに。姉さんがアンダーグラウンドのどこかにいることはわかっていたけど、ただ捜さがしたって見つけられっこないと思ったから、わざわざ──」

「あたしをおびきよせるような真ま似ねをしたのか」

「そんな、人聞きの悪い。まあ、こうしておっかない異界生物フリークスを解き放てば、姉さんのことだから必ずきてくれると信じてはいたけどね。ぼくは本当に、是ぜが非でも姉さんに会いたかった。それだけだよ」

　ルイの指がまだらに染めた髪かみの毛の先をつまんだ。もともとは黒髪だが、今は半分ほどプラチナブロンドで、七三にわけて少ないほうを耳にかけ、多いほうは頬ほおのあたりに垂らしている。このヘアースタイルも自分で考案した。

　もっとも、なんでもありのサンランドでならともかく、ラフレシア第三帝てい国こくではやや奇き抜ばつすぎるらしい。著作や衣類、雑貨類ほど評判はよくない。右目に固定式の片眼鏡モノクルをつけて、ラフレシア上流階級の流行も一応取り入れているのだが、

一部の保守的な貴族たちの目には、それさえも自分たちへの愚ぐ弄ろうと映るようだ。

「──会って、訊ききたいことがあったんだ」

「その訊きたいこととやらがなんであれ、あたしが素直に答えると思うか」

「そこまでうぬぼれてはいないよ。ぼくも嫌われているってことは自覚しているしね。でも、姉さんは正直だから……」

　相変わらず、かわいいひとだ。

　あなたはこちらが何を尋たずねようとしているのか察しているに違ちがいないし、それに対してこの反応では、もう返事をしているようなものじゃないか。

　それでも、念には念を入れて確かく認にんするため、もう一押しした。

「ひょっとして、見つけちゃった？」

「何をだ」

　案の定、彼女は顔色一つ変えず即そく座ざにとぼけてみせた。まあ、紅くれないの装そう甲こうの奥に素顔を隠かくしている彼女の表情がわかるはずもないが。仮にも姉弟だ。それも、ずいぶん長い間、姉弟をやっている。わかる。当然、彼女も弟に隠しおおせるとは思っていまい。

「そういえば──」

　ルイがゆっくりと立ちあがって鞄を手に持った。

　ジュジはルイの肩にしっかりと爪つめを立てて、身じろぎもしない。

「あの男にも会ったんだけど、何か知っているようだったよ。くわしいことを聞きだすどころか、すぐに追い払はらわれちゃったけどね。なんとなくそんなかんじだった」

「あたしの前であの男の話はするな」

「最近、会ったんでしょう？」

「殺しそこねただけだ」

「次は殺しておいてよ。ひょっとしたら、彼は邪じや魔まになるかもしれない」

「もしあたしがあの男を殺すとしても、貴様の思おも惑わくとは無関係だ」

「姉さん」

　ため息が出た。

　ぼくはいつからあなたをそう呼ぶようになったんだろう。

　彼女を見つめて、呼びなおすべきだと思った。

「──りりぃ」

　その瞬しゆん間かん、りりぃとの間に横たわっている空間と時間が凝ぎよう縮しゆくしたように感じた。

　むろん、それは単なる錯さつ覚かくに違いないが。

「ぼくらはもう、戻もどれないのかな。あのころみたいな、互たがいの他ほかには誰だれもいらない姉弟ふたりに」

「不可能だ」

　りりぃは首を横に振ふった。

「あたしはもう誰も必要としない。お前は望んでもいないことを口にして、あたしのことさえたばかろうとする。何もかも変わった。ひとたび壊こわれてしまったものはもとには戻らない。どれだけゆがめられようと、それが世界の真の姿だ」

「世界、か……」

　──世界。

　世界、だって？

　やはり、りりぃ、そうやってあなたは、ぼくから遠ざかっていこうとするのか。ぼくの声は、手は、あなたに届かないのか。それを望んだのは貴様のほうだとあなたは言うのか。

「でも」

　わかっている。

　あなたは昔からかたくなだ。

　それでも、ぼくはあきらめない。

「ぼくは必ずとりもどすよ。たとえこの心が壊れているのだとしても、ぼくはぼくでいるしかないしね。ぼくをやめてしまうわけにはいかない。そのための準備も進んでいる。あの馬ば鹿かな蛆うじ虫むしは性しよう懲こりもなく無む駄だなことばかりしているようだけど、他はおおむね順調みたいだ。どうやらここで見つけられそうだから、ぼくもちょっといろいろ動いてみようと思う」

「勝手にするがいい。あたしは今のところ介かい入にゅうする気はない」

「そう。それを聞いて安心したよ」

「わかったら失うせろ」

「はいはい」

　ルイがジュジを肩かたにのせたまま、りりぃに背を向けて歩きだした。

　一度、振り返ろうと思ったが、やめた。

　姉さん。

　──りりぃ。

　たしかに、ぼくらは壊れてしまったのかもしれない。完全にはもとに戻れないのかもしれない。ぼくはあなたのことさえ利用しようとする鬼き畜ちくなのかもしれない。

　でも、信じてくれないだろうけど、りりぃ、ぼくはあなたをまだ

愛してる。病やめるときも健すこやかなるときも、互いに支えあって守りあってわけあって耐たえて逃にげて強くなって勝って、ともに生きのびたあなたを、片時も忘れたことはない。あなたにとってぼくはもう不要品なのかもしれないけど、ぼくにとっては決してそうじゃない。

　ぼくは戻りたい。

　そのためなら、なんでもしようと思っている。

　信じてくれなくてもいい。

　信じてもらう必要もない。

　でも、本当に、ただそれだけなんだ。



Omenage 897 10th revolution 5th day

サンランド無統治王国首都エルデン第九区・第十区境

〝闇市〟

chapter.2

運命の意地悪

　エルデン第九区と第十区にまたがる闇やみ市いちは、ちょっと前まであの加虐的Ｓ殺戮ｍ愛好会Ｃの支配下にあった。

　まあ、支配といっても、闇市の雑多な商店や阿片窟シエルターや賭と場ば、それらすべてをある一つの組織が牛ぎゆう耳じって管理、経営するわけではない。ようするに、ここいらで平へい穏おん無事に商売するため、誰に所場代を払はらうべきか、という話だ。

　とはいえ、当然、影えい響きよう力は素す晴ばらしく大きくて、闇市でＳｍＣに逆らうやつは死にマニアかよっぽどの阿あ呆ほうだった。ＳｍＣの反はん抗こう者に対する暴力は、殺す前に爪つめを一枚一枚剝はいで、髪かみの毛を抜ぬいて、指を一本一本切り落として、皮ひ膚ふを少しずつ剝むいて、失神したら叩たたき起こして、痛みでショック死するか失血死するか、とにかく何かのはずみで死ぬまでヘラヘラ笑いながら解かい剖ぼうするたぐいのものだった。もちろん、異性が相手ならこれに陵りよう辱じよくが加わる。いや、同性でも場合によってはやられる。そんな頭のイッてるクソ野郎モウフオどもを敵に回すなんて愚おろかだ。内心で舌を出しながら表面上はヘイコラして金を出して、賢かしこく立ちまわればいいのだ。

　ところが、そのＳｍＣが、ある日なくなってしまった。

　誉ほまれ高き〝銀の軍団ザ・シルバリイ〟、秩序モラルの番人・キーパーズとの抗争──サックドール襲しゆう撃げき戦、一号区会戦、嵐あらしの泉セン里リ決戦を経て首領マスターＳＩＸを失ったＳｍＣは、事実上、壊かい滅めつしてエルデンから消えた。

　結果、闇市の支配権は宙に浮うく形となった。

　これはたぶん、闇市の住人たちにとっては歓かん迎げいすべき事態だったろう。

　しかし、彼らの喜びも束つかの間の夢だった。ＳｍＣがそれをベースにして肥え太ったように、闇市を手に入れれば、うまい汁しるをしこたま吸える。そんな場所が放ほうっておかれるはずもない。それまでＳｍＣという台風に吹ふき飛ばされぬよう鳴りをひそめていた悪党クランどもが、一いつ斉せいに動きだした。が、遅おそかった。もっと手の早い、目先の利きく者たちがいたのだ。

　そいつらはＳｍＣの敗北にあわせて、あっという間に闇市を掌しよう握あくしてしまった。

　ただ、今のところ、そいつらの評判はそれほど悪くない。少なくとも、ＳｍＣ時代よりは所場代も安いし、理り不ふ尽じんにはっちゃけた振ふる舞まいも目立たないとのこと。もっとも、彼らの支配はまだ始まったばかりだ。先々どうなるかはわからない。闇市の住人たちも、今後、そのあたりを注意深く見守ってゆくことになるだろう。

「──というわけで、今回からメンテ料値上げな」

「は？」

　マリアローズは闇市の片かた隅すみでひっそり営業中のとある壁店の前にいた。壁店というのは、闇市では珍めずらしくない形態の店で、合成骨材コンクリートの箱みたいな建物の外壁に穴があいていて、そこを通して取引を行う。闇市の商売人のなかには、自分の素す性じようを知られたくない者もいるし、安全性の確保という意味でも、一定の利便性があるらしい。

　その壁店の穴から、掌てのひらを上に向けた右手がにゅっと突つきでている。

「お会計、一万ダラーになりまーす」

「いちまんダラーぁ？　籠こ手てのメンテナンスだけで？　前回は千だったじゃないか」

「あれ、今すぐ餓が死ししそうレベルに安すぎた。だいたいボッキーが衰すい弱じやく死ししそうなくらいがんばって作った特注品カスタムメイドの籠手、ペアで三万ってどういうことよ。ありえないべよ。ボッキー死んじゃうよ。ボッキーの才能が正当に評価されてないってかんじで毎夜毎夜絶望落らく涙るいしっぱなしよ。今から取り返してかなきゃ。走らなきゃ。飛ばなきゃ。やってらんねーべ根比べ実際」

「きみがやってらんなかろーがなんだろーが知ったことじゃないね。所場代が安くなったのに値上げってわけわかんないし。とにかく僕としてはそんな不当な要求には絶対に応じない。認めない。受けつけない。許さない」

「じゃー籠手は返さない。あーホントは返品は一いつ切さい受けつけておりませんがね？　しょうがないですよね？　金払わないってんだものね？　そんな不良客にニコニコスマイリーでヘコヘコ品物渡わたすウンコたれはどこにもいないですよね？」

「ねえ、ミギー・左・トラットリオ・シュトラウスベルン」

　マリアローズがその名で呼んだ瞬しゅん間かん、穴から出ている手がびくっと震ふるえた。

「デザイナーのジョシリーさんは元気？　まだ切れてないんでしょ？　そのこと奥さんは知ってるの？　知らないよね。知ってるわけないか。そっかー。奥さんかわいそうに……」

「いつもどおり千ダラーでいいです」

「はぁ？　きみ、自分の立場わかった上で言ってる？　スコ──」

「えーもうマジすみませんホントごめんなさい、さっきの名前はまだいいとしてそっちだけは超ちようシャレにならねーので頼たのみますからやめてくださいどうか何とぞ。もちろん今回は特別大流血サービスでお代は結構でございます、はい。あ、矢の補ほ充じゆうはいかがしやしょう？　二十本ほどおつけしやしょうかゲへへ。いえいえ遠えん慮りよなんかなさらずに是ぜ非ひともつけさせてください」

「しょうがないなー」マリアローズが出した両手の上に、ひとそろいの籠手と紐ひもでくくった専用矢がそっと置かれた。と、金や商品の受け渡しに使う穴の上にある小さなノゾキ穴から、ごくごく小さな声がもれてきた。「このウンコたれ小こ悪あく魔まめ……」

「何か言った？」

「いいえめっそうもない」

「あんまり舐なめたことすると明日はないよ？」

「舐めたことなんてするわけないじゃないですか？　どんなに貧びん乏ぼうでも苦しくてもひどい遅ち漏ろうでも、一いつ生しよう懸けん命めいがんばれば明日のお天道てんと様さまを拝めると思うからボッキー生きてけるんスよ？」

「だったら、少しは口に気をつけた方がいいんじゃないの、〝ショコラット〟」

　マリアローズは専用矢の束を背負い袋ぶくろに入れ、両手に装着した籠手の具合を確かめた。重量。可動性。矢の発射装置。問題なし。新しい塗と装そうも悪くない。泉里でお腹なかにでっかい穴をあけられたのでＨｎＨヘルンヘイヴンの新作に買いかえたボディスーツ、それにあわせて新調した外がい套とう、ブーツ、グローブ、背負い袋も、いいかんじで体に馴な染じみつつある。

　ちなみに、あの戦いで損傷した装備については、秩序の番人が補ほ償しようしてくれることになっていた。おかげで、マリアローズの預金残高はそれほど減っていない。いろいろあったが、身銭を切らずに装備をアップグレードできたわけだ。その一点のみで、今となっては何もかもいい思い出だと言いきってしまえるような気がする──というのは、さすがに嘘うそだが。

　だけど、後ろを向いていてもしょうがない。

　明日は黙だまっていたってやってくるし、それならうつむいてしょんぼりしているなんてもったいない。

　見上げれば太陽。あるいは、雲。星。月。それとも、光の届かない地下の天てん井じよう。

　もうそれらを見たくても見ることのできない人がたくさんいる。彼らに対してどうとか、そういうわけじゃないけれど、とにかくマリアローズは生きているのだ。最近、そのことを強く思う。はっきりと意識している。自分が、限られた時間を生きているんだということを。

　だから、立ち止まってなんかいられない。

　稼かせがないと。

　──いや、お金だけの問題じゃなくて、結局のところマリアローズの生なり業わいは侵入者クラッカーだ。今はもう孤こ独どくな一いつ匹ぴき狼おおかみではないが、それならそれで磨みがかなければならないものがある。たとえば集団パーテイ戦に適応した戦術的思考。集団のなかでの自分の活いかし方。ＺＯＯに加盟して以来、ずっと考えてきて、それなりに役割をこなすことを覚え、さらに泉

里決戦を戦い抜ぬいて、いろいろと見えてきた部分もある。手て応ごたえも感じているし、「やれる」という自信もついてきた。

　でも、まだまだだ。

　もっと、今以上にうまくできないと、お話にならない。

　一人で登る山なら、傾けい斜しやのゆるい場所を選んで、休み休みたらたら歩いてもいいが、マリアローズには仲間がいるのだ。しかも、仲間は皆みな、マリアローズより先を行っている。足の速さだって違ちがうから、追いつけるかどうかわからないが、少なくとも追いかけないと何も始まらない。このまま置いてゆかれて、どんどん離はなされる一方なんて冗じよう談だんじゃない。

　そういうわけで、明日はカタリ、ユリカ、ピンパーネルと一いつ緒しよにアンダーグラウンドにもぐることになっている。

　ＳＩＸを討ちとったことですっかり有名人になってしまい、外を歩けば指をさされ、群がられ、決けつ闘とうを挑いどまれる状じよう況きようにうんざりして、引きこもり気味のトマトクンは不参加の予定だ。姉弟で子しの天才魔導士ウイザード〝垂れ目ベテイ・ザ・のベドウルーピティングアイズ〟に「才能に溺おぼれずに精しよう進じんなさいな」とアドバイスされたサフィニアは、第十区にあるメタルフォレストの自宅にて魔ま術じゆつの修しゆ行ぎよう中で、同じくお休み。基本的につきあいのよくない髭ひげは別としても、この二人がいないのは残念だが、とくにトマトクンは、いると絶対に頼たよりきってしまう。訓練と考えれば、こういうメンツも悪くないだろう。

　しばらく、もろもろの事後処理やら何やらで、忙いそがしい――というわけでもなかったのだが、落ちついて金稼ぎ――じゃなくて、侵入者クラツカーとしての心技体向上に励はげむ余よ裕ゆうがなかった。

　もちろん、剣けんの鍛たん錬れんなど基き礎そ的なトレーニングは少しずつやっていたものの、実戦は十日ぶりということになる。

　明日の目的地は、Ｄ13下層ダーナムレーンだ。ダーナムレーンの蜥蜴とかげ人はかなり手て強ごわい部類に入るし、久々の相手としては若じやつ干かん厳しいかもしれないが、やつらの持ち物は結構高く売れるので、気合いが入る。これもちょっとした試練だと思え

ばいいだろう。

　とにかく、今日は少し体を動かしたらじっくり休んで、気をひきしめてかからないと。

「じゃ、いつもありがと、〝ショコラット〟。これからもさんざん世話になると思うけど、初心忘るべからずでしっかりばっちりサービスしてね。奥さんによろしく」

「あいあい、邪じや悪あくな笑え顔がおの素す敵てきな小悪魔ちゃん。とりあえず今回は、メンテ料と矢二十本にあわせて三年殺しの呪のろいをサービスしておきますですよ」

「最後のはいらないから。あと、小悪魔とか呼ぶのもやめて」

「まったく注文の多いウンコたれだな……」

「何か言った？」

「はい、言いましたよ？　あなたみたいな素晴らしいお得意様は他ほかにおりません、とね！」

「あれ？　変だね。僕の耳にはぜんぜん違うふうに聞こえたけど。僕の耳が悪いのかな？」

「そそそそそそそーんなことあるはずないでげしょう？　よりにもよってマリアローズ様のお耳がお悪いだなんて、ねえ？　そりゃあもうあーた、マリアローズ様にはお悪いところなんて一つたりともありゃしませんですよ？　完かん璧ぺきですよ？　完全無欠の神のごとき存在ですよ？」

「ふん……」これ以上、こいつの無む駄だなお喋しやべりにつきあうのは時間の浪ろう費ひだ。マリアローズはこの界かい隈わいではわりと名の通っているはぐれの機術士〝ショコラット〟の壁店をあとにしようとした。踵きびすを返す寸前だった。「──あ」と〝ショコラット〟の声。「ん？」なんだろう。影かげ。後ろ……？

　ぞわり、とした。

　悪お寒かん。

　それだけにとどまらなかった。

　手だ。やけにでかい何者かの手がマリアローズの首を、絞しめる、というところまではゆかない。ただ、いつでも絞められる。誰だれかの左手は、ソフトタッチとハードタッチの中間くらいでマリアローズの首をつかみ――右手の人さし指と中指が、頬ほおから唇くちびるのあたりにふれかけたところで、ピタリと止まった。「今すぐボクのマリアから離れないと殺すヨ？」

　アジアン？

　でも、この手はアジアンじゃない。

「いや、やっぱり今殺そう」

　一いつ瞬しゅん、皮ひ膚ふをビリビリさせるような殺気が、あたり一帯の空気を硬こう質しつ化させた。マリアローズは動けなかった。結果的には動く必要もなかった。おそらくアジアンが放はなったのだろう殺気に弾はじかれるようにして、あの手の持ち主がマリアローズから飛び離れたからだ。

　マリアローズは振ふり返って、ようやくそいつの正体を知った。

　闇やみ市いちの往来で五、六メーテルほどの距きょ離りをあけてアジアンと対たい峙じしている、かなり背の高い、ひょろ長い印象のその男は――

　金こん色じきの龍りゅうが刺し繍しゅうされたファー付きの黒い皮革製ジャケットに、同じく皮革製のパンツ、ブーツをはいて、黒くろ髪かみを逆立ててセットし、黒い色眼鏡サングラスをかけている。

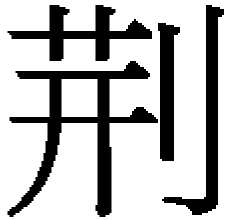
　見覚えがあった。

　というだけですませてしまうのは、軽すぎるかもしれない。

「……あの変態……」

　現在、闇市を支配している龍りゅう州しゅう連れん合ごうは、Ｓ＊Ｋシリアル・キラーズ、王おう龍りゅうという二つのクランが中ちゅう核かくとなっている。

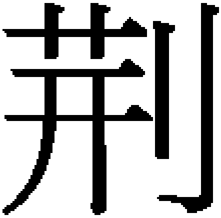
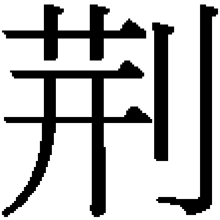
　その片方、王龍を率いているのが、今、アジアンと向かいあっていて、さっきマリアローズの口のなかに指を突つっこもうとして、

たぶん歯を抜ぬこうとしていた──そういう特とく殊しゅで倒とう錯さくした変態的な趣しゅ味みの持ち主である、ジン王ワンだ。

「なんだよいいとこだったのにウンコたれ小こ悪あく魔まなんてそのままやられちゃえばよかったのに」

「ちゃんと聞こえてるから」マリアローズは後ろでブツブツ言っている〝ショコラット〟に釘くぎを刺さしながらも、アジアンとジン王ワンから目を離さない。アジアンは泣き叫ぶスクリーミング短剣・ダガーを逆手に持ってただ突っ立っているだけのように見えるが、決して武芸の達人とかではないマリアローズにも、まったく隙すきがないことは一いち目もく瞭りよう然ぜんだ。対する ジン王ワンはぐっと膝ひざを曲げてかなり重心を低くして、右手で腰こしにくくりつけてある武器を抜こうとしている。

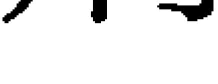
　だが、抜くタイミングを少しでも間ま違ちがえれば、やられる。

ジン王ワンはそう理解しているのだろう。色眼鏡サングラスのせいもあって表情はあまりわからないが、ジン王ワンの口くち許もとは引きつってかすかにピクピクしていた。

　一いつ触しよく即そく発はつだ。

　でも、ちょっと待て。

　なんで？

　唐とう突とつな成り行きに、マリアローズの頭がついていっていない。本人に直接訊きくのが一番てっとりばやいだろうが、そういう状じよう況きようでもなさそうだし——と、両者を交こう互ごに見比べているうちに、アジアンが一歩前進して距離をつめようとした。が、ジン王ワンはそのぶん下がる。アジア

ンが前に出る。刑ジン王ワンは後退する。少し斜
ななめに、円を描えがくように。ぱっと見たところ、刑ジン王ワンが気け圧おされているように思える
が、そう単純な話でもなさそうだ。

　何しろ、あのＳＩＸを一いつ騎き討うちで斃たおしたトマトクン
と、互ご角かくの戦いを演じてみせたアジアンが相手だ。

　しかも、アジアンは「やっぱり今殺そう」と宣言した。

刑ジン王ワンはいきなり後ろからマリアローズに
悪戯いたずらしようとしていたのだから──アジアンの性格やマリア
ローズへの気色の悪い情念を考えあわせると、こんなことは認めた
くないが、あの言葉は本気だったはずだ。

　げんに、アジアンはもう泣き叫ぶスクリーミング短剣・ダガーを
抜いている。

　背後で行われたことなので、マリアローズには見えなかったけれ
ど、アジアンは実際に斬きりつけたのだろう。

それなのに、刑ジン王ワンは生きている。

刑ジン王ワンは他人の歯を抜くのが大好きというド変態で、マリアローズも奥歯を二本ほど抜かれたが、なかなかどうして手て強ごわい男らしい。

「お前は━」

そうした印象を裏付けるように、刑ジン王ワンの口許はもう引きつっておらず、声こわ音ねも平静だった。

「昼飯時ランチタイムのアジアンか。一別以来だな」

「会ったことがあったっけ？」

一方のアジアンは、冷たい薄うす笑わらいを浮うかべて見下すような口調だ。

「すまないが、ボクはさっぱり覚えてない。雑ざ魚こには興味がないのでネ」

「覚えておいてもらおう。俺は刑ジン王ワン。この闇市を統すべている龍州連合、王龍の頭だ。誰だろうと、ここで好き勝手はさせない」

「知ったことじゃないヨ。それはキミのルールで、ボクのルールじゃない」

「ここでは俺がルールだ」

「キミにボクを従わせるだけの力があるのかい？」

「今、考えているところだ。正直、必ずしも自信はない。それ以前に、お前が俺を邪じや魔ました理由がよくわからない。こいつは──」刑ジン王ワンはちらりとマリアローズに顔を向けた。「お前のものなのか」「んなわけないだろ！」アジアンより先に答えたのは、むろんマリアローズだ。アジアンは不満そうに顔をゆがめたが、何か思いついたのか、ぱっと表情を明るくした。

「そう。マリアの言うとおり。マリアはボクのものなんかじゃないヨ。マリアは誰だれのものでもない。ボクは、つまり、マリアの崇すう拝はい者なんだ。信しん奉ぽう者なんだ。一番の理解者でもある。ボクはマリアの盾たてであり、剣けんであり、ようするに騎き士しだ。たとえその愛が未来永えい劫ごうボクに向けられることがなくとも……ああ！」アジアンは自己陶とう酔すいの極きわみにある。それでいて隙を作っていないのはすごいが、マリアローズとしてはこの阿あ呆ほうにわずかばかりも感心したくない。「──それはもちろん、地じ獄ごくの責め苦に等しい苦痛ではある。でも、それでも、ボクはマリアを愛しつづけるのサ。ボクの愛は変わることが

ない。いや、刻一刻と強まってゆく。この愛は成長する。果てることなく、どこまでも。そしていつか──いやいや、それはさておいて、そういう間あいだ柄がらだヨ。ボクとマリアは。これは運命なんだ。誰もボクたちを引き裂さくことはできない」

「僕的にはすっごく誰かに引き裂いて欲しいかんじなんですけど……」

「とりあえず、相思相愛の仲じゃないことだけはわかった」

ジン王ワンは唇くちびるの端はしにかすかな笑えみを浮かべた。

　──どうして？

　なぜに嬉うれしそうなの？

「だったら、俺にも望みはあるというわけだ」

「は？　なんの望み……？」

　思わず尋たずねてしまった僕を、お願いだから、どうか誰も責めないで欲しい。

　だって、意味不明だ。

　マリアローズとジン王ワンの出会いはわりと不幸なものだった。それから短い時間を経て、別れに至るまでも、憎ぞう悪おや恨うらみつらみを生みこそすれ、プラス方向の感情は

ーいつ切さい発生しえない、できれば思い出したくないような経けい緯いだった。

　やつはマリアローズの奥歯を抜ぬいて、マリアローズはやつに爆ばく弾だんを食くらわせたのだ。

　あのとき、マリアローズは死んでしまえと思って爆弾を投げた。やつの死体が見あたらなくて残念だった。龍州連合が闇やみ市いちを手中に収めたと聞いたときも、なんだよあいつやっぱ生きてたんだウゲーッと思った。それなのに。

ジン王ワンは不意にバックステップを踏ふんでアジアンから離はなれると、近くの壁店の穴を足がかりにして、あれよあれよという間に屋根に上ってしまった。なんて素す早ばやい。あの「俺にも望み」発言で虚きよを衝つかれたせいもありそうだが、アジアンも半ば呆あつ気けにとられている様子だ。

「今は退ひくことにする。この街では、慎しん重ちようのうえにも慎重に立ちまわらなければ馬ば鹿かを見ると思い知らされた」

ジン王ワンは屋根の上で片膝ひざ立ての体勢になり、右手の中指で色眼鏡サングラスの位置を直した。

「それを教えてくれたやつがいる。正直、あれはきつかった。体が焼けた。これは比ひ喩ゆじゃない。喉のどから肺のなかまで少し焦こげて苦しかった。のたうちまわったよ。あんなみじめな思いをしたのは初めてだ。いい教訓になった。一生忘れることはないだろう、そいつのことは──」

「……もしかして、それって」

　マリアローズはおそるおそる自分を指さそうとして、やめた。でも、やめたところで、刑ジン王ワンのなかの「そいつ」とやらが変わるわけじゃない。どうにかして変えたいのだが。刑ジン王ワンはマリアローズに色眼鏡サングラス越ごしの熱視線を送ってきた。

「いつか必ずお前の歯をぜんぶ抜いてやる。俺はあきらめない。お前は上玉だ」

「……お願い、アジアン、あいつを殺して」

「え？　あ、それはもうキミの頼たのみとあらば──」

　ぽかんとしていたアジアンが慌あわてて攻こう撃げき態勢に移ろうとしたときには、刑ジン王ワンはすでに建物の向こう側に飛び降りて見えなくなっていた。

　アジアンはどうしようかという顔でこっちを向いたが、さすがに追っていって縊くびり殺せとまでは言えない。というか、命令ならともかく、アジアンに頼み事をして借りを作るなんて危険すぎる

し、いやすぎる。

　まあ、本当はいろいろ借りだらけなのだが、それはなかったことにしておくとして。

「しかし」アジアンは泣き叫ぶスクリーミング短剣・ダガーを鞘さやに戻もどして、肩かたをすくめてみせた。「なんだい、あれは。どうもキミのことをうかがっているらしい妙みような気配があると思ってずっと警けい戒かいしていたんだけど、まさかあんなふうに出てくるとはネ。さしものボクもとっさに反応が遅おくれそうだったヨ。歯がどうしたとか言っていたけど……」

「てゆうか、それがわかるってことは、きみも僕を尾つ行けてたんだよね」

「それは大いなる誤解だヨ、マリア。ボクはキミのピンチにはいつだって駆かけつける。尾び行こうとか、そういうのでは決してなく、これは、そう━キミの騎士としてのボクの神聖なる役目なのサ。実際、今だってボクがいてよかっただろう？　いやいや、べつに恩に着せるつもりなんて毛頭ないんだ。見返りも求めない。無む償しようの愛。ボクのキミに対する愛はまさしくそれだヨ」

「あっそ。じゃ、お役目ご苦労様。もういいから、さっさと消えろ」

「相変わらずつれないネ？」

「うん」

　マリアローズはあえてにっこり笑顔を作って、思いっきりうなずいてやった。いつもと違ちがうリアクションで攻せめてみたのだが、これが逆効果というか、なんというか。

「……か━」

　アジアンがいきなり目をまん丸くして、その顔が真っ赤に染まったので、何事かと思ったら。

「か、か……かわいい。やばい、それはやばいやばすぎるヨ、マリア、その表情は……」

「ばっ、なっ、何がかわいい、だ！　この！」

マリアローズが繰くりだした右ストレートを、アジアンは無造作にがっちり左手でつかまえた。すかさず唸うならせた左の膝ひざ蹴げりもあっさりガードされた。しかも、アジアンはマリアローズの左手をもとらえて、体を密着させてきて、容よう赦しやなく動きを封ふうじてくる。おかしい。なんか変だ。やばい。こいつ、本気だ。目がえらくマジだ。それだけに、マリアローズも本気になって抵てい抗こうした。ヘッドバットだ。一切の躊ちゅう躇ちょなく、アジアンの顎あごに額をぶつけてやった。アジアンもいつもよりどこか抜けていたようだ。

「あくっ」「━っぅ」自分も痛かったけれど、アジアンにも一応、ダメージを与あたえることができたらしい。マリアローズは拘こう束そくがゆるんだ隙すきに、アジアンの足の甲こうを踏み抜いて飛びのいた。しかし、想像していたよりもアジアンの顎が硬かたかったのか、思いきりやりすぎたのか。

ジンジンする額をこわごわさわってみると、見事に腫はれていた。

「……いったぁー…………この……鬼き畜ちく変態助平極ごく道どう畜生大脂羽蟲ゴツキー野や郎ろうのエロガッパ！　死ね、即そく死ね、きみなんか死んじゃえ、どっか行け！　二度と僕の前に現れるな！　しっしっ！」

「マ、マリア！　おでこが！　キミの大切なおでこが！」

「あーもう、よるな消えろ失うせろ消しよう滅めつしろ！　僕のおでこくらい僕が自分で面めん倒どうみる！」

「でも━」

「うっさい！　きみがそれ以上何かくっちゃべってこの場から離れないなら、僕がどっか行くから！　いい？　絶対ついてくるな！　ついてきたら絶交！」

マリアローズは回れ右をして駆けだそうとしたところで、〝ショコラット〟がおかしそうに笑っている声を耳にした。プッチーンときてやつの壁店のノゾキ穴のあたりにハイキックを見舞まい、「笑うなこの下げ衆す野郎！　きみの正体ばらされたいのか！」「ひーごめんなさいごめんなさいもうしませんどうか許してごめんなさい」〝ショコラット〟の声こわ音ねは怯おびえきっているよう

に聞こえたが、どうせ一秒後には小声で毒づくのだろう。そういう男なのだ。こんなやつを相手にしていてもしょうがない。それはアジアンだって同じだ。

「マリアァァァァァァァァァァァァァ――――――――――――ッ……！」

　アジアンの芝しば居いがかった声を背中で弾はじきかえしながら、マリアローズは走った。

　しかし、サフィニアじゃないけど、僕ってばよっぽど不幸な星のもとに生まれついてしまったのか。アジアンだけでもうざったいってのに、今度は刑ジン王ワンという抜ばつ歯しフェチの性的倒とう錯さく者まで。最悪だ。超最低ＳＵＣＫ。本当に超最低ＳＵＣＫだ。僕が安心して楽しくゆったりのんびり落ちついて暮らせる日は、いったいぜんたい、いつ訪おとずれるんだろう。あるいは、そんな日はやってこないのか。

　マリアローズは自分の運命を少しだけ呪のろった。たくさん呪えば改善されるというのなら、いくらでも呪っただろうが、残念ながら世界はそれほど都合よくできていないことを、マリアローズは知っていた。運命なんて、たいがい理り不ふ尽じんなものだ。

　それでもなんとか生きてゆこう、生きたい、と──何かの嫌いやがらせみたいに意地悪な運命にしがみついて、もがいている、哀あわれな者たちの街なのだ。

　このエルデンは。

Omenage 897 10th revolution 6th day

サンランド無統治王国首都エルデン・アンダーグラウンドD13上層

〝デトルアープ〟

chapter:3

エアヘッド半魚人

「―でも……うーん……」

　先頭を行くカタリについてゆきながら、マリアローズは眉まゆをひそめていた。

　ここはアンダーグラウンドＤ13上層テトルアープ。下層ダーナムレーンに棲すまう蜥蜴とかげ人たちと系統は同じだが、ずっと昔に分化して、異なる進化の道を歩んできた種族だという下等蜥蜴人たちのテリトリーだ。

　その異なる道とは、繁はん殖しよく力を強化することだった。蜥蜴人が年に一度、三～五個の卵を産むのに対して、下等蜥蜴人は年に二度、それぞれ十～二十個も産卵するらしい。彼らは殖ふえて殖えまくることで、種としての勢力を伸のばそうとしたのだ。また、過か剰じよう摂せつ取しゆした薬が毒になるようにそのせいで生まれる深刻な食しよく糧りよう問題も、ある風習によって見事に解決される。

　共食いだ。

　数十の部族にわかれている下等蜥蜴人は、部族ごとに対立抗こう争そうしたり、融ゆう和わしたり、また仲なか違たがいしたりするなかで、殺した同族を食べてしまう。研究者の報告によると、食糧確保のための戦争も珍めずらしくないという。

　彼らはそうして平和とは程ほど遠とおい生活を営みながら、個体数をだいたい一定に保っている。

　人間には、そして、おそらく彼らに支配的な影えい響きようを及およぼしている蜥蜴人たちにとっても、きわめて野や蛮ばんとしか思えないが、それはそれで一つの合理的なシステムなのだろう。

　とはいっても、やはり下等蜥蜴人には、凶きよう暴ぼうでおぞましい異界生物フリークス、というイメージがどうしてもつきまとう。蜥蜴人と違ちがって頭も悪いので、単体での戦せん闘とう能力はさほどでもないが、何しろ好戦的な連中だ。無数の篝かがり火びに照らされた石造りの粗そ末まつな家屋が建ちならぶテトルアープは、侵入者クラツカーにとって決して楽な狩かり場ではない。マリアローズも単独で侵入者クラツカーをやっていたころ、何度かここ

に挑ちよう戦せんして痛い目に遭あった。

　まあ、今日は、半魚人はともかく、ユリカとピンパーネルが一いつ緒しよにいる。

　油断さえしなければ、それほど怖こわい場所ではないこともたしかだが、それにしても。

「なんか、静かすぎ」

「しょうね」「そうか？」最さい後こう尾びのピンパーネルは無言だったが、マリアローズの後ろについているユリカと前にいるカタリが、ほぼ同時に反応した。太平楽なカタリは脳みその半分以上が海水と化しているので仕方ないとして、やっぱりユリカも同じことを感じていたようだ。

「なんだか、前にきたときより、下等蜥蜴人がじゅいぶん少しゆくない気がしゅるわ」

「だよね。めっちゃ少ないよ。あいつらって、数だけはやたらめったら多いからさ。一人でここにきたときなんて、一匹ぴきでぶらぶらしてるやつを見つけるの、すごくたいへんだったもん」

「そらきっとアレやろ。わしらの発するハイパァーな闘気オウラァーを警けい戒かいして、近づいてこんだけちゃうか」

「いや、きみが一番前歩いてるかぎり、それはないでしょ。むしろ逆じゃないの。うっひょー獲え物ものだーとか思ってわらわらよってくるのが普ふ通つうじゃない？」

「なんでわしが獲物やねん」

「人間よりおいしそうだから？　そういえば、人魚の肉を食べると不老不死になれるって伝説があるらしいよね。あ、でも、きみは人魚じゃなくて半魚人だから、ちょっと違うかな。それに、不老不死になれるからって、おいしいかどうかわからないし。うん。たしかに、きみはいかにもまずそ。てゆうか、見てるだけでご飯がまずくなりそうな顔？」

「誰だれが飯めしマズなる顔じゃボケ！　だいたいやな、マリアローズ、今日という今日は言わせてもらうで。お前じぶん、毎度毎度さんざんっぱらわしの顔けなしよるけどな、よーく見てみぃ！

わしの顔、そこまでひどいか！　そら、男前やないっちゅうことはわしかてよーわかっとるがな、けどな！　正味の話、女がヒクほどわやくちゃな顔やないはずや！　どや！　おお！」

「んー……そうだなぁー。ま、見ようによっては、キモカワイイとか……」

「キモを外せ！　キモを！」

「や、そこは外せない。絶対無理。ありえないから。カワイイのほうは取り外し自在っていうか、外したほうがいいっていうか、積極的に外したいかんじだけど」

　などという、じつにくだらない話をしていても、まったく脅きよう威いを感じないくらい、今日のテトルアープは平へい穏おんだ。いや、平穏という表現はおかしい。平穏といったら、変わったこともなく穏おだやかだという意味だが、ここが穏やかであること自体、すでに普段と違う状態なのだ。

　こういうときは何かが起こる。

　それは、侵入者クラッカーとしての勘かん──というほど大おお袈げ裟さなものではない。カタリほどの底なしの楽天家でなければ、誰だって最低限の危機を察知する能力は備えている。

　マリアローズは一つ深呼吸をした。ちょっぴりゆるみかけていた気持ちをひきしめなおさないと。そもそも、マリアローズたちの目的地はテトルアープではなく、ダーナムレーンだ。油断してこんな場所で何かヘマをやらかしでもしたら、笑い話にもならない。

「ダーナムレーンまで、もう少しだよね」

「せやな。その前に、奇グロス岩ロツク砦ホールドを越こえなあかんけど」

　テトルアープは二層構造になっている。地上からつづく一層目は、平らで石造りの家がとにかくびっしりと並んでいるが、その果てから降りられる二層目は、傾けい斜しやしていて進むごとに建物がまばらになってゆく。そして、二層目の終わりにあるのが奇グロス岩ロツク砦ホールドだ。

　呼び名のとおり、人間には理解しがたい、おぞましく奇き妙みよ

うな形に削けずられた岩でできた奇グロス岩ロツク砦ホールドは、むしろ迷めい路ろ状の通路といったほうが実情に近いかもしれない。ダーナムレーンへと降りるためには、基本的にこの砦とりでを通り抜ぬけなければならないので、内部にいる下等蜥蜴人の群れを突とつ破ぱする必要がある。

　ただ、下等蜥蜴とかげ人どもは、決してダーナムレーンに足を踏ふみ入れようとはしない。自分たちの上位者である蜥蜴人に遠えん慮りよしているのか。あるいは、蜥蜴人によってそう強制されているのか。いずれにせよ、その不思議な習性を利用すれば、連中を力ちから業わざで排はい除じよしなくても、ダーナムレーンへ行くことは可能だ。

　まあ、もしかしたら今回は、そんなことをごちゃごちゃ考えなくても、簡単にダーナムレーンに行けてしまうかもしれないが。

「──僕だけかな……」

　何しろ、そうこうしているうちにやってきた奇グロス岩ロツク砦ホールドの前には、人っ子一人、いや、蜥蜴っ子一匹いなかった。

「気配、さっぱりしなくない？」

「しないわね……」

「そないなかんじもせんでもないなぁ」

「はイ」

　もともと奇グロス岩ロツク砦ホールドの周囲は何もない岩場で、下等蜥蜴人もそんなに見かけないが、砦の前には五～十匹程度の集団がたむろっていることが多い。どうやら、奇グロス岩ロツク砦ホールドを根城にしている部族がいるらしく、彼らにとってはダーナムレーンへの侵しん入にゆうを阻はばんでいるというより、自分たちの居住地を守ろうとしているようだ。

　とはいえ、奇グロス岩ロツク砦ホールドの内部が結構広いせいもあってか、ひしゃげた三角形の砦出入口に近づくことも許さない、という警備態勢ではない。また、タイミングによっては、先客がその甘い警備を破ってしまっていることもある。

　もっとも、今回にかぎっていえば、その可能性はどうやら小さそ

うだ。

　死体が見あたらない。

　新しい戦せん闘とうの形けい跡せきもない。

　見ようによっては、たくさんの蜥蜴がくんずほぐれつしているように見えないこともない彫ちよう刻こく──ともいいづらい妙みような形の巨きよ岩がんが重ねられ、あるいは岩がん盤ばんを掘くつ削さくしてできた奇グロス岩ロツク砦ホールドは、不気味なくらいひっそりしている。

　むろん、外から見た印象だ。なかに入ってみれば、また別かもしれない。用心のために一応そう思いはするが、正直、ぜんぜん信じてない。本当に、気配がしないのだ。

「入る……？」

「当たり前やろ」

　カタリは、何言ゆうてんねんという表情で砦の出入口に近づいてゆく。

　出入口までは、だいたい十五メーテルくらいだろうか。マリアローズは振ふり返ってユリカと顔を見あわせ、かすかにうなずきあってから、ピンパーネルに「お願い」と声をかけた。考えるまでもなく、この四人のなかで戦力的に一番頼たよりになるのは、間ま違ちがいなくこの元アッサシンだ。何かあったときは、ピンパーネルを中心にして動くことになる。マリアローズは、トマトクンほどピンパーネルをうまく使う（というと表現は悪いが）ことはできないけれども、前もって言いふくめておけば、彼もそのあたりを考こう慮りよして動いてくれる。つまり、「お願い」とは、いざというとき、自分の判断で最善の行動を選せん択たくして実行に移して欲しいという要よう請せいだ。

　そのあたりの意思伝達をスムースにこなしてしまえるのも、マリアローズが成長した証あかしかもしれない。

　実際、泉里決戦でも、ＺＯＯの指揮をとっただけでなく、自らの手で死霊術士ネクロマンサーを討ちとるというめざましい戦果をあげることができた。

もちろん、あれがぜんぶ自分の実力だなんて思ってはいない。でも、僕は、少しずつかもしれないけれど、進歩している。着実に、前へ進んでいる。みんなに追いつくことはできていなくても、ちゃんと追いかけている。できれば、いつか追いついて、みんなと肩かたを並べたい。

だいたい、絶対に追いつくことができないなんて、誰だれが決めた？

誰も。

あえていえば、自分だ。

自分で、僕はどうせこんなものだと決めつけて、どこかであきらめていた。

あきらめる必要なんて、どこにもないのに。僕だって、できるのに。

げんに、やれた。やってみせた。僕は自信を持っていいはずだ。僕はまだ進めるはずだ。僕はまだまだこれからだ。ようは、やり方なんだ。やり方次し第だいでどうにでもなるんだ。これからだってなんとかしてみせる。できる。きっと、やれる。

だから、もっと経験を積みたい。もっと、もっと、実績をあげたい。僕もやれるんだって、みんなに示したい。認めてもらいたい。自分の限界値をできるだけ押しあげて、足りない部分をおぎなう方法を考えながら、お金も稼かせぎたい──のはおまけとしても、とにかく、そのためにこうしてダーナムレーンへ向かっているのだが。

「カタリ、あんまりどんどん進まないで」

「おう」

「ホントにわかってるのかな……」

「わかっとるがな。信用ないのう。わしを信用せんで誰を信用するんやっちゅうくらい、誠実さに満ちあふれとる漢おとこやのに」とか言いながらカタリは出入口の脇わきの岩がん壁ぺきに身をよせた。マリアローズ、ユリカ、ピンパーネルの順でそれにつづくと、カタリはこちらを一いち瞥べつして、「ほな、行きまっせ」するりと出入口の中へ身を滑すべりこませた。「──ん。やっぱり、なーん

もおれへんみたいやな。隠かくれとんのかもしらんけど」

「……そっか」

　マリアローズも、さすがにその言葉まで疑いはしなかった。ユリカ、ピンパーネルと目を見み交かわしてからカタリのあとを追うと、そこは幅はば、高さとも三メーテルほどの通路だった。

　ただ、ゆがんだ三角形なので、実際の広さよりもかなり狭せま苦くるしく感じる。岩壁のところどころに篝かがり火びを据すえ置いているへこみがあって、明るさはまあまあだが、通路の屈くつ曲きよくが激しく、見通しは悪い。少し進むと、いきなり下り坂で、天てん井じようが高くなり、人間くらいの大きさの生き物なら入ることができそうな空間があちこちにあって――どこに下等蜥蜴人がひそんでいるかわからないから、いつもなら緊きん張ちようしまくりの状じよう況きようのはずだが、なんだかそういう気分になれない。いけない、いけない。集中しないと。

「気のゆるみが一番怖こわいんだから……」

「せやったら、景気づけにいっちょ歌でも歌おか。みんなでこう、声をあわせてな」

「一人で歌ってろ怪かい魚ぎよ。だいたい、なんで景気づけしなきゃならないわけ？」

「細かいやっちゃな。ええやろ。気分や。ノリや。トークはリズムやで。ちゅーか、怪魚て。わしはそんなにレアなんかい」

「うん。超ちようレア。えら呼吸なのに陸上でこんなに動きまわってる生き物、僕、きみの他ほかに見たことないもん」

「そらそうやろな……そんなん、わしかてないわ……あったらそれこそ一番怖いわ……」

「まったく、きみって存在自体が怪かい奇き現象だよね。どうでもいいけどそろそろ黙だまって」

　マリアローズたちは、カタリの先導に従って、異様な静せい寂じやくに押しつつまれた奇グロス岩ロツク砦ホールドを進んでゆく。下り坂。わかれ道。階段。通路はやけに広かったり、急に細くなったり。下等蜥蜴とかげ人的には何か規則性があるのかもしれない

が、人間にはでたらめとしか思えない構造だ。それでも、一度、体に覚えこませた道はまず忘れないカタリは、少しも躊ちゅう躇ちょするそぶりを見せない。水を得た魚みたいに、すいすいと正解（だと思いたい）の道を選んでゆく。マリアローズもただついてゆくだけではなく、できるだけ道順を頭に叩たたきこもうとしているのだが、次回、一人で行き来できるかどうか。何箇か所しよか、重要なポイントになっている分ぶん岐き点は把は握あくしているものの、ちょっと自信がない。

　だが、そんなところに気を回していられる現状は、やはりそうとうおかしい。

　五分。

　十分。

　これだけ奇グロス岩ロツク砦ホールドのなかを歩きまわって、一匹ぴきの下等蜥蜴人とも出くわさないなんて。

　さすがにカタリも不思議なのか、さっきから何度か首をひねって「うーむ……」と唸うなっている。ちらりと振り返ってみたら、ユリカも愛らしく眉まゆをひそめていた。ピンパーネルは普ふ段だんどおりに見えるが、もとより多少のことでは表情を変えない男だし──と、長い急な石の階段を降りている最中だった。そのピンパーネルが突とつ然ぜん、足を止めた。「声・しまス」

「……声？」

「ふぇ？」カタリが立ち止まり、耳をすませる仕草をした。「──お？　おお……？　たしかに……」「しっ」マリアローズは唇くちびるに人さし指をあててみせ、皆みなに聞こえるか聞こえないかぐらいまで声をひそめた。「静かに。人の話し声みたいだけど──カタリ、この先って」「階段降りきって角曲ごたら、すぐダーナムレーンに通じとる暗黒門ダークゲイトやな」「だよね」ということは、そこで侵入者クラツカーが一休みしていたとしても、べつにおかしくはない。しかし、今日はいつものテトルアープと違ちがう。用心するに越こしたことはないだろう。

「ピンパーネル、様子を見てきて」

「はイ」答えるが早いか、ピンパーネルはユリカ、マリアローズ、

カタリの横をすり抜ぬけて、足音も立てずに階段を駆かけ降りていった。目がいいから、確かく認にん作業もあっという間だ。ピンパーネルは角のところからわずかに顔を出して、すぐに戻もどってきた。

「八人・いまス。男六人・女二人」

「侵入者クラツカー？」

「はイ。でも・一人ちガう」ピンパーネルは少しだけ困ったように顔をしかめた。どう説明したものか迷っているのだろう。そのあげくに、ピンパーネルはぽつりと言った。「ネコ」

「……猫ねこ？」

　訊きき返すと、ピンパーネルはうなずいた。

「ネコと・男」

「えーと……ごめん、よくわかんないんだけど、とりあえず略奪者ルーターとかっぽいわけじゃないんだよね？」

「はイ。怪け我が人・いまス」

「治ち療りよう中なの？」ユリカに尋たずねられて、ピンパーネルは首を振ふった。それを見たユリカは怪け訝げんそうだ。「医い術じゆちゆ士しがいないのかしら」

「妙みようやな。雰ふん囲い気きからしたら、ダーナムレーンでヘタ打って逃にげてきたっちゅうトコやろうけど、医術士なしでこないな場所くるか、フツー？」

「ダーナムレーンで死んじゃったのかもしれないから、それはなんとも言えないでしょ」

　情報が少ないので、本当にまだなんとも言えないが、どうもいやなかんじがする。今日のところは、引き返したほうがいいんじゃないのか？　だけど、それも弱気すぎるような──ここはアンダーグラウンドで、いろいろなことが起こるのがあたりまえなわけで、そのたびにいちいち過か剰じよう反応して地上に戻っていたら、何もできないし──

「うーん……どうしよう」

「そんなん、どうもこうもないで」

いや、考えなしの半魚人はそうだろうが。なんでも決めてくれて、責任をとってくれるトマトクンがいない以上、マリアローズとしては、もっと客観的に、総合的に、冷静沈ちん着ちやくに物事を見て判断する必要がある。決断をミスって誰だれかが傷ついたりでもしたら、目もあてられない。

でも、これってすごい重圧だ。

いつもなにげなくポンポン決めて、サクサク命令を出すトマトクンが、とんでもなく大きな存在に思える。トマトクンだけじゃない。秩序の番人の初代総長故デニス・サンライズや、二代目総長羅ラ叉サは、同志たちに戦って死ねと命じていた。あのアジアンだって、昼飯時ランチタイムの首領マスターとして仲間たちの命を背負っている。彼らは何も感じないのだろうか？　重荷じゃないのか？　苦痛じゃないのか？

マリアローズも、泉里決戦ではトマトクン以外の仲間に指示を与あたえて、彼らの生死を左右する立場にいたのだが、あのときは正直、そんなことを考える余よ裕ゆうもなかった。いきなり明日はＺＯＯを任せるとトマトクンに言われて、どうしよう、どうすればいい、でもやらないと、やるしかない──そんな状態で戦せん闘とうに突入すると、あとはもう開きなおるしかなかった。めまぐるしく移り変わる状じよう況きようを追いかけて、とにかく頭と体を動かす以外なかった。

ただ、今、振り返ってみると、よくもまあやれたものだと自分でも呆あきれる。

自分が決めて、何かが動きだす。その責任から逃のがれたい。腰こしがひける。思考が止まりかけている。僕ってこんなに優ゆう柔じゆう不ふ断だんだったのか。いけない。この程度の決断で迷ってどうする。これくらいさっさと決めてしまわないと。トマトクンだったらどうするだろう？　僕は──

「わたしとしては、怪我をしている人のことが気になるけど……」

「ここでグズグズしとったかて、なんもわからへんのやし、行くし

かないやろ」

　結局、マリアローズは、ユリカの医術士らしい倫りん理り観とカタリの強ごう引いんな意見になかば引きずられてうなずいた。

「……じゃあ、行こう。カタリが前に出て、こっちに敵意がないってことを示して。そういうの、得意でしょ。相手が女の子じゃなければ」

「どういう意味やねん」

「そのまんまの意味だよ。ユリカとピンパーネルは万が一に備えておいて」

「わかったわ」「はイ」

　マリアローズたちは少しだけ足音を立てて、しかし慎しん重ちようように、注意深く階段を降りた。

　角を曲がるときが一番緊きん張ちようする瞬しゆん間かんになるはずだったのだが、そうはならなかった。

　その前に、角の向こうから小さな動物が悠ゆう然ぜんと姿を現したのだ。

　灰色の、わりと毛が長い、小こ柄がらな猫だった。

　目は青玉サフアイヤのようだ。赤い首輪をしている。毛並みもいいので、飼い猫か。まあ、アンダーグラウンドに野の良ら猫がいるはずはないのだけれど、飼い猫だって普ふ通つうはいない。疑うべくもない。ピンパーネルが言っていた「ネコと・男」の猫のほうだろう。

　その猫が、カタリを見上げて、にゃー、と高く細い声で鳴いた。

「──っと……」カタリはマリアローズを振り向いて肩かたをすくめてみせた。たしかに、対処に困るシチュエーションだ。何しろ小さくてすごくかわいらしくてきれいな猫だし、尻尾しつぽをぴんと立てているということは、こちらに敵てき愾がい心しんは抱いだいていないと見える。マリアローズも猫は嫌きらいじゃないので、思わず顔がゆるみかけた。ユリカはそれ以上だった。

「ちっちっちっ。おいで」

　しゃがんで舌を鳴らしながらのばしたユリカの手めがけて、猫が小走りで駆けてくる。顎あご。首。背中。尻尾。猫はユリカの手に体をすりつけながら目を細めて、とても気持ちよさそうだ。ユリカも完全にここがどこか忘れているようで、ついには猫を抱きあげてしまった。

「いくらなんでも、もうちょっと用心したほうがいいと思うんだけど……」

「あ。ごめんなしゃい。でも、ふちゅうのみーちゃんよ？」

「みーちゃん？」と訊きいたら、ユリカの頬ほおが赤らんだ。

「あの、ええと……小しゃいころに飼っていた猫の名前がみーちゃんだったの。しょのしぇいで、猫はみんなみーちゃんって呼んでしまうくしぇが抜ぬけなくて……」

「猫はぜんぶみーちゃん、犬はポチで虎とらはトラキチ、豹ひようはヒョウロクダマっちゅうわけやな」

「や、虎だの豹だのの猛もう獣じゆうは物好きの大だい富ふ豪ごうとか貴族でもないと飼わないでしょ」

「ダァホ、わしのファミリーは王様家族やで？」

「う。そっか……」

「ゆうても、親兄弟の顔も見たことないねんけどな！　ナハハハハ！」

　そんなふうにカタリがあまり笑えない自じ虐ぎやくネタで一人笑う声などは、角の向こうにいる一団にも丸聞こえだろう。迂う闊かつといえば迂闊だが、かえってあやしまれないですむかもしれない。というか、マリアローズとしてはそこまで計算したうえで、カタリの話につきあった──なんて言っても誰も信じてくれないだろうし、自分のこともだませそうにないので、とりあえずカタリの背中をドンと押した。

「さ、ばかなことばっかり言ってないで、さっさと行って」

「わーっとる。わーっとるがな、せかすなや。ウォッホン」

　カタリは咳せき払ばらいを一つしてから、角の向こうに進みでた。

「あー、まいどまいど！　なんやぎょうさんいはりまんなあ。どないしたん？　下の蜥蜴とかげ人にやられはったんか？　怪け我が人もおるみたいやないか、って――」マリアローズが角を曲がったのはそのあたりだった。急に声を失ったカタリが、十二、三メーテルほど先にたかって、壁かべにもたれたり座りこんだりしている一団を指さしていた。いや、正確にいうと、カタリはそのなかの一人を指し示していた。「お前じぶん……」

「……あー？」

　だるそうなその声には、マリアローズも聞き覚えがあった。

　赤と緑の騎兵服ライダースーツ。ボサボサの金きん髪ぱつに無ぶ精しよう髭ひげを生やし、どろんと濁にごった目をしていて、岩の床ゆかに座って煙草たばこをくわえている。十メーテル以上離はなれていても、その身に染みついた濃のう厚こうなやる気のなさが漂ただよってくるような男だ。

　カタリやマリアローズ、その後ろのユリカと目があうと、男はばつが悪そうに舌打ちをしてのっそりと立ちあがり、右手で腰を押さえながら、岩がん壁ぺきに立てかけていた投槍ジヤベリンを左手にとった。

「いっつつ……やべぇな、腰。つーわけで、俺、ここらで抜けるわ」

「おいアドリアン、いきなりそんな――」

　と、隣となりに立っていたやたらと派手な装よそおいの中年剣けん士しが、すかさず男の肩をつかもうとした。その手は、だが、投槍ジヤベリンの柄えで乱暴にはねのけられた。アドリアンと呼ばれた男は笑えみを浮うかべている。なんとも不ぶ恰かつ好こうで、どこか自じ暴ぼう自じ棄きな笑みだ。

「気安くさわるんじゃねぇよ、ファニー・フランク。俺は金になるって話だから、お前さんにつきあってやったまでだ。それがどうだ。このままじゃあ、金になるどころか俺が骨になっちまう。割に

あわねえどころの騒さわぎじゃねえ。もともと紙の上の契けい約やくがあるわけでもねぇしな。俺は帰りたくなったんで帰るってだけのことだ。何か問題があるか？」

「そういう意味の問題はないが……侵入者我々には侵入者我々の仁義というものが……」

「仁義ぃ？　仁義だと？　まさかお前の口からそんな上等な言葉が出てくるとはな。それともジョークのつもりか？　まあ、どのみちお前のジョークはくだらなくて退たい屈くつで笑えねぇんだ。悪いことは言わねぇから、冗じよう談だんはそのクソたわけた恰好だけにしとけよ、ファニー・フランク。だいたい、俺はそんな食えもしねぇもんに縛しばられるつもりは毛頭ねえ。この国では盗ぬすむも奪うばうも殺すも自由なんだろう。仁義だなんだとつべこべぬかしてねえで、気に食わなかったら俺を力でねじ伏ふせりゃいい。それがこの国の流りゆう儀ぎってやつじゃねえのか」



「私は紳しん士しだッ！　そのような野や蛮ばんな真ま似ねはしないッ！」

「そのなりで紳士ねぇ。この国の紳士はひと味違ちがうな。田舎いなか者の俺には理解できねえよ」

「き、きっ、貴様……も、もう、いい儲もうけ話があっても、貴様は誘さそわんぞッ！」

「そのいい儲け話ってやつに釣つられてこのザマだ」

「くっ……」ファニー・フランクは悔くやしそうに歯を食いしばっているものの、これ以上、アドリアンをひきとめるつもりはないらしい。

　しかし、おかしな名前だし、身体からだ中に色とりどりの羽根飾かざりを大量にぶら下げているいでたちもかなり珍ちん妙みようだ。面めん頰ぽおを上げた兜かぶとも、左手の盾たても、腰こしにさした剣も、羽根だらけ。これではまるで極ごく彩さい色しきのメリクルだ。この恰好でいったいどうやって戦うのだろう。興味はつきないが、それよりも今はアドリアンだ。

　アドリアンとは、今年の夏にひょんなことから知りあった。たかだか数日のつきあいだったが、マリアローズとカタリ、ユリカにとっては忘れがたい出来事がその間にあった。まさか、こういう形で再会することになるとは思わなかったが、それは相手も同様だろう。

「よう」アドリアンはカタリの前で足を止め、すでに短くなっていた煙草を捨てて爪つま先さきで踏ふみ消した。「元気そうだな」

「オッサンも」カタリはそう応じたものの、アドリアンと目をあわせようとしない。アドリアンには殴なぐられたり蹴けられたりいろいろあったので、脳天気で根に持たないタイプのカタリもさすがに複雑な心境なのだろう。「──いや、そうでもないな。顔色めっちゃ悪いわ。お前じぶん、ドス黒いで」

「肝かん臓ぞうにでもきてんじゃねぇのか。稼かせがねぇと酒が飲めねえし、稼いだら稼いだで朝から晩まで酒ばかりだ。酒飲みの俺にとっちゃあ、クソみてぇな天国だな、この街は」

「いいかげん少しお酒ひかえないと、そのうち死ぬんじゃないの」

　マリアローズが冷たい声こわ音ねで口を挟はさむと、アドリアンは自らを嘲あざけるように唇くちびるをゆがめた。

「どうせ死んじまうなら、もっとうまい酒を飲んどかねぇと損だな」

「救いがたいね」

「ここじゃあそんなやつも少なくねぇだろう。それどころか、俺よりひでぇ愚おろか野や郎ろうどもがごろごろしてる。気が楽でいい」

　下の下にまだ下がいるってのは気分がいいもんだ、と、アドリアンは肩かたを揺ゆすって笑い、新しい煙草に火をつけた。そのまま行ってしまうのかと思ったが、ユリカにかすかに目礼して、ピンパーネルを見て首をひねり、少し歩いたところで振ふり向いた。

「あー……この先な。ダーナムレーンっつったか。行くつもりなら、やめといたほうがいいぞ。俺も若い時分はずいぶんひでぇ戦場いくつも経験したけどな。あいつはマジで怖こえぇしやべぇ。シャレになってねえ。まだ命が大事なら、回れ右して今すぐ帰れ」

「あいつ……？」

　アドリアンはマリアローズの問いに答えず、角の向こうに姿を消した。カツンカツンと投槍ジヤベリンの石いし突づきで床を突く音が遠ざかってゆく。あいつは本当に怖こわいしヤバイ？　蜥蜴とかげ人のことだろうか。

　でも、あれでもアドリアンは、元ラフレシア第三帝てい国こくの猟りよう騎き兵へいだ。エルデンにきてから日は浅いし、大酒飲みでヘビースモーカーだが、並みの侵入者クラツカーよりはずっと腕うでが立つと思っていい。蜥蜴人はたしかに手て強ごわい異界生物フリークスだが、そんな男が「シャレになってない」と評するほどだろうか。

　おそらく、その答えは、アドリアンが去って七人になった一団が知っているはずだ。

　七人のうちわけは、メリクルもどきのファニー・フランク。それから、重装備の男が二人に、ボディスーツ姿の男性剣士が一人。魔ま術じゆつ士しらしき女が一人。軽装で弓を持った女が一人。ちなみに、剣士は右腕の肘ひじから先がなく、見るからに重傷だ。魔術士は壁かべにもたれて座ったまま動かない。すでに事切れているのかもしれない。弓女も腹部と左の肩口がごっそり抉えぐられていて、呼吸が荒あらかった。

そして、最後の一人が、角張った革かわ鞄かばんに腰かけて足を組んでいる男だ。

そいつは、ファニー・フランクに負けず劣おとらず派手だった。

まあ、ファニー・フランクよりはセンスがあるというか、ひどくはなかったが、白黒豹ひょう柄がらのタイトなスーツに襟えりの大きな暗紫色ワインレツドのシャツ──までは許せるとしても、プラチナブロンドと黒のまだらに染めた髪かみの毛を七三にわけて片眼鏡モノクルをつけていると、ふざけた仮装みたいだ。そもそも、彼は武器も持っていないようだし、アンダーグラウンドにはまったく似つかわしくない。少しは時と場Ｔ所柄Ｐと場合Ｏってものを考こう慮りよするべきなんじゃないか。

「ええと……」

だが、七人のなかでいち早くマリアローズたちに声をかけてきたのは、鞄から腰を上げたその男だった。まあ、彼にしてみると、その理由はあったわけだが。

「ジュジをあずかっていただいていたようで、ありがとうございます。おいで、ジュジ」

男はユリカに抱だかれている猫ねこに手をさしのべた。ところが、猫は男をちらりと見ただけでそっぽを向き、ユリカの腕のなかから動こうとしない。猫は犬と違って飼い主の命令におとなしく従う動物ではないが、それにしてもつれない態度だ。男も傷ついたように顔をしかめている。

「参ったな。いつもはちゃんと言うことを聞いてくれるんですが。本当ですよ？　聞きわけのいい、かわいいこなんです。よほどあなたのことを気に入ったのかな……ああ、そうだ、お名前をうかがってもよろしいですか？」

「あ、はい、ユリカといいます。ユリカ・白雪しゆノーホワイト。あの、わたし──」

ユリカが猫のジュジを下ろそうとすると、男は慌あわてたように両手を広げて振ってみせた。

「いや、いいです、そのまま、そのまま。どうかそのまま抱いていてやってください。ちょっぴり寂さびしいですけど、ジュジの幸せ

がぼくの幸せなんです」

「でも、わたし、怪け我がをしている方がいらっしゃるようなので、よければしょの手当てを」

「手当て？」男は周りを見まわして、今、気づいたとでもいうように目を見開いた。「なるほど。よく見れば、いや、ぱっと見ただけでわかる。ユリカさん、あなたは医術士服をお召めしになってらっしゃいますものね。ファニー・フランクさん、こちらの方は医術士のようですよ。ここは一つ、お仲間の治ち療りようをお願いしてはいかがです」

「あ、ああ……それはとても助かるが」

　ファニー・フランクはユリカの姿を見て、戸と惑まどい気味というか、不ふ審しんげだ。ユリカの外見年ねん齢れいと実年齢のギャップを考えれば、その気持ちもわからなくはない。だが、マリアローズにしてみると、こみあげてくる不ふ愉ゆ快かいさは抑おさえようもなかった。また、抑えてやる義理もない。

「いらないんだったらいーんだよ。僕たちはべつに。あんたたちのことなんて知らないんだし。あーあ。でも、かわいそうに。外見でしか人を判断できない鳥頭が治療受けるの渋しぶったせいで失血死か。僕だったら化けて出るね」

「と、と、とっとっとっとっ鳥頭とはなんだ！　無礼なッ！　いや、だがしかし、私の兜かぶとは実際、鳥頭だ……」ファニー・フランクは変なところで納なっ得とくして、ユリカに向きなおった。「申し訳ない。私は創世の翼ジエネシスウイングというこぢんまりとしたクランを率いている、ファニー・フランクと申す者です」

「こぢんまりとしてるわりには、ずいぶんご大層な名前だね」

「余計なお世話だ！　夢は大きーくッ！　羽ばたく鳥のように理想はあくまで高ーくッ！　今はまだこぢんまりとしているが、いずれはエルデンの一大勢力となるのだッ！」ファニー・フランクはマリアローズのツッコミに取り乱しかけてハッと我に返り、ユリカに深々と頭を下げた。「一重ねて申し訳ない。それで……どうか私の仲間を治療していただけないだろうか。今は残念ながら手持ちがないが、謝礼は後日、必ずさせていただく」

「しょのお気持ちだけで結構でしゅ。医い術じゆちゆ士しの習しゆう性しえいみたいなものでしゅから」

　ユリカはそう言うと猫のジュジを床ゆかに下ろして、さっそく右腕を負傷している剣士に駆かけよった。残念ながら、魔術士は手て遅おくれのようだから、今すぐ治療が必要そうなのは剣士と弓女の二人だが、当然、同時には無理だ。どうやらユリカは剣士、弓女の順で手当てするつもりらしい。「腕は──やっぱり、筋肉で動脈が閉へい鎖しやしゃれて、出しゆつ血けちゆはしょれほどひどくないわね。とりあえじゅ、ちゃんと止し血けちゆしておくから」「……かたじけない」「しょちらの女の方、ちょっと待っててね。しゅぐに終わらしぇるから」「は、はい……」

　二人の呻うめき声や低い悲鳴を聞いているだけで、こっちまでつらくなってくるが、そんな重苦しい雰ふん囲い気きのなか、一人だけやけに朗ほがらかな男がいた。

「やあ、やっと戻もどってきてくれた」

　あの白黒豹柄スーツの男だ。

　男は相好を崩くずして、持ちあげた猫のジュジを自分の肩かたにのぼらせた。ジュジは仔こ猫ねこといっても通用しそうなくらい体が小さいから、男の肩の上でもさほど窮きゆう屈くつそうではない。いやがっている猫を無理やり、というかんじではないから、微笑ほほえましいといえば微笑ましい光景だ。周囲の状じよう況きようをまったく無視すれば、だが。

「──で」いずれにしても、ユリカが負傷者の治療を始めてしまっていることもあるし、これ以上、何がなんだかわからないままではいられない。「いったい何があったの？」

「うむ……」ファニー・フランクは沈ちん痛つうな面おも持もちで語りだした。でも、マリアローズはそのとき初めて気づいたのだが、こいつ、じつは結構苦み走ったいい男だ。年の頃ころは、三十後半か四十歳くらいだろうか。まあ、そういう男がメリクルもどきのおかしな扮ふん装そうをして、真しん剣けんな顔つきでいると、余計に滑こつ稽けいではあるのだけれど。

　━━今日、ダーナムレーンを目指したのは、ファニー・フランクの創世の翼ジエネシスウイング十名と、彼に誘さそいを受けた七名、それにルイ・カタルシスと名乗る男の、あわせて十八名だった。

　もともとは、クァラナド歓かん楽らく街の端はじっこにある居酒屋ＰＵＢ「高貴ノーブルなるハイパー爆乳チツツ」でファニー・フランクが友人らと一いつ杯ぱいやっていたとき、ルイ・カタルシスに声をかけられたことがきっかけだった。

　たまたま近くの席で酒杯を傾かたむけていた猫連れのルイ・カタルシスは、ファニー・フランクが友人たちに語っていた過去の華はなばなしい武勇譚たんを小耳に挟はさみ、興味を覚えて声をかけたらしい。

「ぼくはこういう者です」ルイ・カタルシスが差しだした名めい刺しには、文筆業、野生ワイルド・の王朝ダイナステイーリード・デザイナー、この二つの肩書きとともに彼の名が記してあった。「これでもラフレシアではわりと有名人なんですが、ここではさっぱりですね。ああ、そんなことはどうでもいいんです。じつはぼく、今、旅行記を書くための取材旅行中でして。で、サンランドといったら、やっぱりアンダーグラウンドじゃないですか。しかし、ぼくはこのとおり、根っからの文化系で、剣けんも使ったことがありませんし、一人じゃちょっと。そのようなわけで、一いつ緒しよにアンダーグラウンドへ行ってぼくを護衛してくれる人を探さがしているんです」

「ほう、アンダーグラウンドに。ですが、アンダーグラウンドといっても広いですぞ」

「みたいですね。でも、ぼくもいろいろ調べて、行きたいところはもう決めてあるんです」

「どこですかな。まあ、物見遊ゆ山さんであれば、メリクル迷めい宮きゆうあたりがよいと私は思うが」

「いやいや。メリクルはダメですよ。あれはようするにちょっとだけ人間似の大きな鶏にわとりでしょう。鶏ではね。絵的によくない。ぼくの旅行記には、専門の絵師さんが挿さし絵えを描かいてくださるんです。アンダーグラウンドの章はハラハラドキドキの冒ぼ

う険けん小説風に仕上げたいんですが、鶏が相手ではギャグですよ。笑いをとりたい場面じゃないんです、そこは」

「では、亜人ボーグの地中砦とりでアヴァシーとか」

「ボーグもね。あの異界生物フリークス、地味にけっこうラヴリーでしょう。もちろん外見だけですが」

「それでは、穴大蛇の巣にいる土竜もぐら人びとはどうだ」

「連中、もぐってばかりであまり出てこないですし」

「こうして聞いていると、ずいぶんおくわしいようだが……」

「調べたんですよ。調べるのは得意なんです。これでも物書きの端くれですからね。それで、ぼくが行きたいのは、Ｄ13の――」

「テトルアープですか」

「いいえ。テトルアープの下等蜥蜴とかげ人では、いかにも中ちゅう途と半はん端ぱですからね。中途半端というのは一番まずいんです。それくらいなら、いっそメリクルのほうがいい。ですから、ぼくはダーナムレーンに行きたいんです。蜥蜴人を見てみたい」

「だが、それは……」危険だ、と、ファニー・フランクは思ったという。たしかに、見物目的の非ひ戦せん闘とう員をともなっておもむく場所として、ダーナムレーンはふさわしくない。

「やっぱり危ないでしょうか。ですが――」

　ルイ・カタルシスは片眼鏡モノクルのフレームを右手の中指で撫なでながら、ファニー・フランクが友人たちに話していた与よ太た話（に違ちがいない）のことを持ちだした。

「ファニー・フランクさん。あなた、さっき仰おつしやっていましたよね。十年近く前に〝鋏使いザ・チヨツパー〟とかいう蜥蜴人を討ち果たしたと。凶きよう暴ぼう、凶悪きわまりない弟てい妹まいを率いて、多くの侵入者クラツカーたちだけでなく、同族の蜥蜴人をも手当たり次し第だいに惨ざん殺さつし、当時のＤ13を血の海に変えた――あまりに強大で伝説的な異界生物フリークスだから、誰だれも信じてくれないけど、これは本当なんだとあなたは仰っていたじゃないですか。もちろん、ぼくは信じますよ。そういうお話は大

好きなんです。そのうえで、護衛をお願いするとしたらあなたしかいない、と、こう思っているわけですよ、ぼくは。当然、報ほう酬しゅうはお支し払はらいします。はずみますよ。これでもぼくはお金持ちなんです」

　そこまで言われると、ファニー・フランクとしても断るわけにはゆかなかった。それはそうだろう。「いやーさっきのは調子に乗って言っちゃっただけでホントは嘘うそなんスよー」と後ろ頭をボリボリかいてみせられるような男には見えない。ようは、仁義だ紳しん士しだなんだと偉えらそうにのたまっているが、お調子者で、プライドだけ高くて、法ほ螺ら吹ふきの、センスがおかしい変なオッサンなのだ。

　だから、ファニー・フランクは、護衛仕事を請うけあったものの、内心、不安だった。自分が率いているクランの十名だけでは心こころ許もとないと考えて、腕うでの立つ知りあいの侵入者クラッカーに片っ端から声をかけ、最終的に七人かき集めて一緒にきてもらうことにした。

　そのうちの一人がアドリアンだったわけだが──それにしても、十七人の戦闘要員とはただごとではない。いくら場所がダーナムレーンで、非戦闘員を一人守らないといけないとしても、多すぎる。べつに、多すぎることが悪いわけではないけれど、報酬はどうなるのか。

　他人ひと事ごとなので、どうでもいいはずのそんな疑問にファニー・フランクが答えたところによると、この仕事の報酬は三千万ダラーで、あとは山分けらしい。

　ということは、十七人だと一人あたり百七十六万ダラーくらい。

　エルデンでの一巡じゆん月げつ分の食費は平均約三万ダラーなので、五十八巡月分。六年にちょっと足りない程度か。これでもなかなかの稼かせぎだ。というか、悪くない。ファニー・フランクが集めた侵入者クラッカーたちも、その金に魅み力りよくを感じて話に乗ったのだろう。まあ、それにしたって十七人は多いと思うが。

　ともかく、こうしてファニー・フランクと創世の翼ジエネシスウイング、それにアドリアンら侵入者クラッカー＋ルイ・カタルシス（＋猫のジュジ）の総勢十八人（＋一匹ぴき）は、午前八時に第十三区の出入口からアンダーグラウンドに入り、まずは下等蜥蜴人た

ちの巣そう窟くつであるテトルアープに足を踏ふみ入れた。

　で、彼らが抱いだいたテトルアープの印象も、やはり「何かおかしい」だったらしい。

　静かすぎる。

　下等蜥蜴人が少なすぎる。

　場所によっては、のんびり昼ひる寝ねをしても大だい丈じよう夫ぶじゃないかと思えるくらいで、ある意味、タチの悪い連中がそこらじゅうをうろついている地上より安全かもしれない。

　とはいえ、彼らの目的地はダーナムレーンだ。労せずしてテトルアープを通り抜ぬけられるのなら、それはそれでかまわない。ファニー・フランクは意い気き軒けん昂こうとして言い放ったという。

「おそらく愚ぐ劣れつ貧ひん弱じやくなる下等蜥蜴人どもは、我々の雄お々おしき威い容ように恐おそれをなして近づいてこないのであろう！」

　誰かさんも似たようなことを言っていたような気がするけれど、それはさておき、彼らは一度も危険な目に遭あうことなく進んだ。進んで、進んだ。奇グロス岩ロツク砦ホールドにたどりついた。奇グロス岩ロツク砦ホールドのなかに入ってからは、道にくわしい者が案内役に立って、さらに進んだ。ここでも下等蜥蜴人には出くわさなかった。さすがに不ふ審しんがる声が次々とあがったが、ファニー・フランクは逆に得意そうで、なぜか興奮しまくっていた。
「何を恐れることがあるのだッ！　もうすぐダーナムレーンだぞ！　ああダーナムレーン！　汝なんじは甘い蜜みつのごとく私を誘さそう！　蠱こ惑わく的な悪女のようにッ！」

　ところが、ダーナムレーンは悪女よりもはるかにヤバかった。

　奇グロス岩ロツク砦ホールドの最さい奥おう部ぶ、黒く硬かたい岩でできていることから暗黒門ダークゲイトと呼ばれる門をくぐり、螺ら旋せん状の黒い階段を降りてダーナムレーンに入ったファニー・フランク一行は、最初、テトルアープと同じ雰ふん囲い気きを感じとった。静かだ。美しい石造りの建物が縦じゆう横おう無む尽じんに入り組んで、火管シユ・ダという照明設備で照らされたダーナムレーン。まるで太古の超ちよう文明が残した静せい謐ひつ

な遺い跡せきみたいだ。だが、それがとんでもない勘かん違ちがいだったことは、間もなく判明した。

とりあえず、一つの大きな建物に入り、降りたり右に曲がったり左に曲がったりして、やがて大きな広場に出た一行は、驚おどろくべき光景を目もく撃げきした。

何か巨きょ大だいな、四メーテルか五メーテルはありそうな生き物が、手づかみで次から次へと何かを大きな口に放ほうりこんで、ボリボリガツガツムシャムシャと食べていたのだ。

食べられているのは、どうやら蜥蜴人たちのようだった。

食べているほうは――今もってよくわからないとのことだ。

ただ、そいつの全身は、蜥蜴人みたいな鱗うろこに覆おおわれていたらしい。下等蜥蜴人の鱗はだいたい茶色か緑色だが、蜥蜴人の場合、かなりバリエーションが豊富だ。そいつの鱗は黄色っぽかったという。尻尾しっぽもあって、かなりの肥満体ではあったが、体つきもどことなく蜥蜴人に似ていた――ような気もしないではないとのこと。普ふ通つう、蜥蜴人は成体で一・六～一・九メーテルくらいのはずだから、人間とそれほど変わらない。四メーテルも五メーテルもある人間なんて現実的ではないので、そう考えると、そいつが蜥蜴人だとはちょっと思えないが。

いずれにせよ、いきなりそんな化物に遭そう遇ぐうして、ファニー・フランク一行はパニックに陥おちいった。先頭をきって逃にげだしたのは、「決して怖こわかったわけではなく、リーダーが死んでしまっては誰が皆みなを統とう率そつするのだと思い、強きょう烈れつな責任感と義務感から、いち早く転進するよりほかになかった」（本人談）ファニー・フランクだった。

とはいえ、デカブツは食事に夢中だったから、ヤツが現れなければ、もしかしたら全員無事にテトルアープまで戻もどることができたかもしれない。

むろん、仮定の話は無意味だ。実際、ヤツは別のルートから広場に入ってくるなり、猛もう然ぜんと一行に襲おそいかかってきたのだから。

ヤツは明らかに蜥蜴人だったが、かなり背が高くて、そうとうな

猫ねこ背ぜなのに、ゆうに二メーテルを超こえていた。

　鱗は青というか緑色というか、それよりとにかく身体からだ中が傷きず痕あとだらけで、なおかつ全身に巻きつけた革帯がやたらとカラフルだった。

　そして、その両手には、大きな鋏はさみに似た武器を一本ずつ持っていた。

「――まさしく、〝鋏使いザ・チヨツパー〟だった……」

「ちょっと待った」マリアローズはものすごく深刻な顔つきで鋏使いの登場シーンを語るファニー・フランクに、一応、礼れい儀ぎとして最低限のツッコミを入れた。「鋏使いって、十年近く前だかにきみが倒たおしたんじゃなかったの？」

「うむ……」

　ファニー・フランクは一つ息をついて、首を横に振ふった。

「あれはまさしく、鋏使い……」

「繰くり返してないでちゃんと答えなよ。十年近く前――」

「ええいやかましい！　今はそんな些さ細さいなことにかかずらっている場合ではなかろう！　鋏使いだぞ！　ヤツは私の仲間四人と知人の侵入者クラツカー六人をあっという間にッ！　我々は、我々はッ、我々はァァッ……！　クウウゥゥゥ……ッ！」

「きみのクランの人が四人で、他ほかが六人……？」

　十分の四と、七分の六。ずいぶん損害率に差がある。ありすぎる。というか、ファニー・フランクをはじめ、創世の翼ジエネシスウイングの生き残りたちが気まずそうにしているのはなぜだろう。

　――そうか。つまり、こいつら創世の翼ジエネシスウイングは大半が一も二もなく遁とん走そうして、他の者たちはとっさに応戦しようとした。きっとそういうことなのだ。マリアローズはその場面を

見たわけではないので推測にすぎないが、ここにいるやつらは、結果的に彼らのおかげで逃げのびることができたのかもしれない。だから、ファニー・フランクにしろ他の生存者にしろ、マリアローズと目をあわせようとしないのだろう。

「ま、どうでもいいけど」

　所しよ詮せん、自分とは関係ない他人のことだ。ユリカが負傷者を手当てするのは、彼女の職業意識というか、そういう性格でもあるので、仲間として文句は言うまいと思う。だが、こうして事情を知って、この先にある暗黒門ダークゲイトの向こうがたいへんなことになっているとわかった以上、引き返す以外ない。リスクを冒おかすだけのメリットがあるのならともかく、今日の目的は訓練とお金稼かせぎだ。鋏使いなんて、冗じよう談だんじゃない。

　そんなわけだから、マリアローズとしてはさっさとこの場をあとにしたいのだが、ユリカの医術式はもうちょっとかかりそうだ。弓女の怪け我がが思ったよりひどいらしい。

「──それで、きみたちはどうしてまだこんなところにいるわけ？早く地上に戻ったほうがいいんじゃないの」

「そうもいかん」ファニー・フランクは難しい顔で腕うで組ぐみをした。「死体を回収せねば。蘇そ生せいが叶かなう者が一人くらいはいるかもしれんだろう。我々はしばらくここにいるが、鋏使いとあのでかいやつはどうやら追ってこないようだし、ひょっとしたら瀕ひん死しのまま生きておる者とているやもしれん」

　ずいぶん楽観的だと思ったが、口には出さないでおいた。蜥蜴人を食べていたというデカブツが、人間をも──という想像は、いくら赤の他人でもさすがにおぞましい。おそらく、アドリアンなどは、それと同じようなことを考えてどうせ無む駄だだと思い、一人で帰ってしまったのだろうが。

　どっちにしても、マリアローズとしては、あとはもうユリカが治ち療りようを終えるのを待って、ひとまず地上に戻ったあとで、これからどうするか考える。それしかない。そのはずが。

「鋏使い、かあ……」

　カタリがそう呟つぶやいた瞬しゆん間かん、なんとなく悪い予感

がした。

「せやけど、こてんぱんにされたあとの死体回収っちゅうのも、ものごっつ難儀やろな」

「だが、仲間のために何もせず、このまま尻尾を巻いて逃げるわけにはいかん」

　話を聞いているかぎり、一番逃げ足が速そうなファニー・フランクの言葉だ。まるで重みがない。それなのに、カタリはしきりとウンウンうなずいている。

「いや、わかる。わかるで。その気持ちは痛いほどわかるがな。漢おとこならな」

「おおッ！　わかってくださるか！　熱き血潮の漢道をッ！」

「わからいでかっ！　よっしゃ──」「って、待て馬鹿魚！」「みぐっ」マリアローズはすかさずカタリの後ろ頭を籠こ手ての硬かたいところでぶん殴なぐった。あまり手加減しなかったせいか、かなりいい音がした。「アホなことしないでよね。きみ一人のときなら何やろうと勝手だけど、団体行動中なんだ。否いや応おうなく僕らも巻きこまれちゃうんだからさ。だいたい、何がオトコ道だっつーの。やられてる仲間を助けないで逃げちゃうような臆病者チキンが、はあ？　オトコ道ぉ？　ちゃんちゃらおかしいよ」

「だ、だっだっだっ黙だまれッ！　にゃ、にゅ、女によ性しようには理解できないかもしれんがな……！」

「誰だれがニョショーだって？」マリアローズは右籠手に仕込んである矢の射線上にファニー・フランクの眉み間けんをすえて、左手の人さし指と親指をスイッチにそえた。「頭の回転があんまり速くなさそうだから、そのぶんも考こう慮りよに入れて五秒以内に訂てい正せいしないと撃うつよ？　いい？　はい、いーち、にー」

「うお？　どおッ……？　ふおお……！」

「さーん」

「ななぼッ！」

　わざわざゆっくりカウントしてやっているのに、ファニー・フラ

ンクは奇き声せいを発しながらおろおろするだけだ。こんなやつに本気で怒おこるのも大人げないかもしれない。一応、五まで数えて目一いつ杯ぱいビビらせて、それでおしまい。そんなシナリオを頭によぎらせながら「しー」と言って、五の前に一つため息をついたときだった。

　横からマリアローズの右籠手にそっとふれる手があった。

　マリアローズは驚おどろいた拍ひよう子しに思わずスイッチを押してしまった。

　それでもとっさに狙ねらいを外した。右籠手から放たれた矢は、ファニー・フランクの顔のすぐ脇わきを通って岩がん壁ぺきにあたり、はねかえって床ゆかに落ちた。

「──お、おあ、あ、危ないではないかッ……！」「危ないだろ！」「あ、ごめんなさい」

　ファニー・フランクとマリアローズの怒ど声せいと白黒豹ひよう柄がら男の謝罪が見事なハーモニーを奏かなでた。

「ふふ。いやあ、ですが……」白黒豹柄男ルイ・カタルシス自じ称しよう小説家兼けんデザイナーは、肩かたの上にいるジュジの喉のどを撫なでながら、首を傾かしげて微笑ほほえんでみせた。でも、いつの間にこんな近くまで。背後から忍しのびよってきたわけでもないのに、ぜんぜん気配がしなかった。「ぼくもびっくりしましたよ。まさか籠手にそんな仕し掛かけがあるなんてね。すごいすごい。さすがエルデンだ。いろいろな人がいて、いろいろな物がある。小説のネタにしちゃってもいいですか？」

「いいわけないでしょ」

　口をとがらせつつ、マリアローズは胸がざわつくような、奇き妙みような不ふ愉ゆ快かいさを覚えていた。

　なんだろう、これ。

　ルイ・カタルシス。

　この男。

　いったい、どうして。

　どんどん近づいてくるんだ……？

「そうですか」

　ルイ・カタルシスはマリアローズの肩に手を置いて、目を細めた。

　片眼鏡モノクルの奥の目が、あやしい輝かがやきをたたえた。

　その口くち許もとに刻まれた微笑みが、まぎれもない笑みに変わる。

　満面の笑みに。

　もしや。

　──変態？

「残念ですが、しょうがないですね」

「……手、放して。あと、離はなれてくれない？」

「おっと、これは失礼。サンランドではこの距きょ離り、少々近すぎますかね。この国、とくにエルデンは久しぶりなもので、勝手がわからなくて、たまに常識外れなことをしてしまいます。他意はありませんので、許してください」

「べつに、許すとか許さないとか……」

「申し訳ありません」ルイ・カタルシスはマリアローズの肩からぱっと手を放してあとずさり、カタリ、ユリカ、ピンパーネルを見まわした。「ところで、先ほどの件ですが。漢道がどうとか、そのあたりはともかく、ファニー・フランクさんのすでに亡くなられているかもしれないお仲間の様子を見にいくという話のことです」

「勝手に行けばいいだろ。僕らにはぜんっぜん関係ないし」

「ですよね。いや、まったくそのとおりだと思いますよ。というより、ぼくも正直なところ、あまり見こみはないんじゃないかと──」ルイ・カタルシスは笑みを崩くずさずファニー・フランクに向きなおった。「というわけで、どうでしょう、ファニー・フランクさん。さぞかしご無念でしょうが、今日のところはあきらめて、いっ

たん地上に戻もどられては。あ、もちろん、報ほう酬しゆうはお支し払はらいさせていただきますよ。三千万ダラー。生き残った方々で山分けにされるといい」

　こいつ、言外に「頭数が減ったぶん、一人一人の取り分が増えたんだし、文句はないでしょう」と言っている。それはたしかにそうだろうし、もしかしたら言われる前から似たようなことを考えていた者だっていたかもしれないが、「はいそうですね」とはなかなか応じにくいだろう。

　とりわけ、そうした利己エゴイ主義的ステイツクな考えに反発したがる、無む駄だに熱い男がＺＯＯにいる。

「おい、お前じぶん」部外者のくせに、眉間に深い縦たて皺じわを刻んだカタリが、ルイ・カタルシスにつめよった。「そういう言い方はないやろ。そもそもお前じぶんが頼たのんだ仕事で出た犠ぎ牲せい者しややないか。もう見こみがないかなんか知らんけどな、それもちゃーんと確かめるトコまできっちりやるんが人の道っちゅーモンやで。物書きが、そないなこともわからんのかい」

「人の道、ですか」

「せや。そして、その人の道っちゅーのんをビシッと貫つらぬき通すのが漢おとこ道どうにつながるんや。そうやろ、ファニー・フランク！」

「お、おお……？　おおッ！」話を振ふられたファニー・フランクは、数秒間あたふたしてから、大おお汗あせをかきながら嘘うそっぽく呵か々か大たい笑しようした。「そッ、そのとおりだ！　まったくもって貴き殿でんは正しい！　ここは是ぜ非ひ、貴殿の名をお聞かせ願いたい！　同じ漢道を歩む同志として！」

「ふっ……名乗るほどのモンやないが──わしの名はカタリ。今はＺＯＯっちゅうクランにおる、一いつ介かいの風ふう来らい坊ぼうや」

「うおお！　ＺＯＯ！　銀の軍団ザ・シルバリイとともにＳｍＣを討ったという、あのＺＯＯかッ！」

「まあ、自分で言うのもなんやけど、わしがおらへんかったらＳＩＸは殺とれんかったやろな」

「なんとォォッ……！」

　というかんじで、ファニー・フランクとカタリの二馬ば鹿かは馬鹿同士、馬鹿盛りあがりしている。マリアローズはとてもついてゆけない。ついてゆきたくもない。むしろ、こいつらを存在ごと消去デリートしたい。もう、やつら以外の暗黒門ダークゲイトの前にいる者たちすべてが、マリアローズと同じように呆あきれかえっている──と思いきや、ルイ・カタルシスだけはジュジを撫でながら考えに沈しずんでいるようだった。

「……ＺＯＯ……なるほど。そういうこと……」

　と、ルイ・カタルシスがマリアローズを見た。

　目があった。

　なんだ、その目つき。

　顔は笑っているのに、目に表情がない。

　やっぱり。

　──変態？

「な、なんだよ」

「いえ。あなたもＺＯＯなんでしょう？　今、有名ですよね。そこかしこで話題になっているから、ぼくでも知っています。たしか、園長マスターは──トマトクン、でしたっけ」

「……それがどうかした？」

「興味があるんですよ。職業柄がら、でしょうかね。好こう奇き心しんが旺おう盛せいじゃないとやっていられない商売なもので。そうだ。ご迷めい惑わくでなければ、ルイ・カタルシスという者が会いたがっていたと、あなたの口から彼に伝えておいていただけませんか」

「超ちよう迷惑。絶対やだ」

「そうですか」

何が面おも白しろいのか、ルイ・カタルシスは喉のどの奥でくっくっと笑った。

この男、物ものの腰ごしは丁てい寧ねいなのだが、慇いん懃ぎん無礼というか、うさんくさいというか。とにかくいやなかんじだ。相あい性しようもよくないのかもしれない。ファニー・フランクにしても、口先だけで行動がともなっていない偽ぎ善ぜん野や郎ろうっぽいし、こんな連中に関かかわっていてもろくなことはなさそうだ。ユリカの医術式も終わったみたいなので、巻き添ぞえを食わないうちに早く帰ろう。「……って思ってるときに、きみは何をやってるわけ？」

「ほえ？」

ファニー・フランクとともに暗黒門ダークゲイトへと向かおうとしていたカタリが、立ち止まって振り返り、魚眼をぱちくりさせた。

「ほえ、じゃなくて……」

マリアローズは鼻び梁りようの付け根あたりを指でつまんで、グリグリしながら頭痛をこらえた。

「──きみはいったい、これからどこ行って何するつもりなのか僕は訊きいてるんだけど。もちろん現在の状じよう況きようからそれは十分推測可能だけど、僕としてはそんなどーしよーもなーく馬鹿げたことをしようとしてるきみの脳みそがイワシと比べてどっちが発達してるか知りたい気分でもあるんだよね。知りたいっていうか、確かめたい。答えはもうわかってるから」

「ダァホ、イワシはイワシなりに精せい一いつ杯ぱい日々を生きとるんやで。わしかて同じや。そう簡単に優ゆう劣れつつけられるモンちゃうわ」

「イワシのことなんかどうでもいいんだよ！」

「先にイワシのこと持ちだしたんはお前じぶんやろが！　だいたい、イワシは煮に干ぼしにしてうまい出だ汁しもとれるんやで！　イワシは偉い大だいなんや！　イワシを舐なめんなや！」

「あーイワシイワシイワシイワシうっさい。そんなにイワシが好きならイワシと結けつ婚こんでもしてろ腐くされ半魚人！」

「おーしたるわ。上等や。これからすぐイワシに求婚や。そしたらイワシの家族にも挨あい拶さつせんとな！　お父さん娘むすめさんをわしにください！　ちゅうてな！──って、アホか！　なんでわしがイワシと契ちぎり交かわして子宝に恵めぐまれて幸せな家庭築かなあかんねん！」

「……や、何もそこまで無理に膨ふくらませなくてもいいと思うんだけど……」

「せやな……我ながらがんばりすぎたわ……ものごっつう無駄にパワー使つこてもうた……が、とにかく！」カタリは鼻息を荒あらくして両足でふんばり、拳こぶしを振りあげた。「わしは行く！　行くっちゅうたら行く！　あの鋏はさみ使いの鋏を拝めるんやったらイヤちゃうちゃう今のはナシそうやない、ここで漢おとこ道どうの同志たるファニー・フランクの苦境を見て見ぬふりはできへん！　そないなことしてもうたら漢がすたるっちゅうもんや！」

「なんか、今、鋏がどうとか……」

　いくらカタリでも、ファニー・フランクごときにここまで肩かた入いれするのはおかしいと思っていたら、本当の目的はそれか。たしかに、音に聞く鋏使いの武器ともなれば、実際の性能以上に来歴でプレミアがついて、さぞかしいい値段がつくことだろう。とりわけマニアにとっては、金には換かえられない価値があるのかもしれないし、カタリの稀少物レア・蒐集家ハンター魂だましいがうずいても仕方ない。

　だが、そんな無意味に熱い魂に振ふりまわされるこっちは、たまったものではない。

「──あ、ちょっと、カタリ！」

　カタリはファニー・フランクの羽根飾かざりを引っぱって駆かけだした。どういうわけか、こういうときは脂羽蟲ゴキ並みに足が速い。暗黒門ダークゲイトはすぐそこだから、もう間もなくたどりついてしまいそうだ。マリアローズはすかさず追いかけようとしたが、見ればユリカも走りだそうとしていた。「カタリ、戻もどりなしゃい！」「あ──待って、ユリカはここで！　ピンプ、きて！」「はイ」「……マリア、カタリをお願い！」「了りよう解かい！……くそ、あのカラエアッポ頭ヘツド！」「おっと、何やら面白そうな展開ですね。ぼくもついていってみよう」「きみはこなく

て……あーもう勝手にしろ！　死んだって知らないからね！」

　マリアローズは、すでに暗黒門ダークゲイトのなかへと姿を消したカタリとファニー・フランクを全速力で追った。ピンパーネルが少し先行して、マリアローズ、それからジュジを連れたルイ・カタルシスの順番だ。創世の翼ジエネシスウイングの連中は一人も動こうとしなかった。べつにいいけど、薄はく情じようなやつらだと、そのときは思った。

　もっとも、彼らがとくに非人情だったわけではないのかもしれない。

　なんにせよ、マリアローズはまだ知らなかった。

　これから知ることになるのだった。

Omenage 897 10th revolution 7th day

サンランド無統治王国首都エルデン第六区
〝モリー・リップス・アサイラム〟

chapter.4

蜥蜴スリラー

「──というわけで、ダーナムレーンに入ったんだけど」マリアローズはそこでコーヒーを一口すすって喉をうるおした。もうずいぶん長い間、ほとんど一人で喋しやべりまくっている。ふと気になって壁かべ掛かけ時計を見たら、十三時半を回っていた。「あ。時間、大だい丈じよう夫ぶ？」

「えーと……」愛用の椅い子すに腰こしかけて足を組んでいるモリーは、煙草たばこの煙けむりを吐はきだしながら、かたわらのベアトリーチェをちらりと見た。ベアトリーチェはその視線だけで察し、大きめの手帳を広げて素す早ばやく予定を確かく認にんした。

「今日は夕方まで人と会う約束はないし、外来も珍めずらしく暇ひまみたいだからまだ平気だな。たまにはこういう日があってもいいだろう。でも、母様、煙草はその一本で終わりですよ。調子に乗って吸いすぎです」

「はいはい。リーチェに逆らうとあとが怖こわいしね」

「そうですよ。母様のスケジュールはわたしがぜんぶ握にぎってるんですから」

　ベアトリーチェは背もたれのない回かい転てん椅子に行ぎよう儀ぎよく座ったまま、手帳を抱だきしめるような仕草をして、ふふっと笑ってみせた。

　相変わらず、剣けんは常に持ち歩いているが、白い女性用ナース・医術士帽キヤツプ、女性用ナース・医術士服ユニ姿の彼女は、この短い期間でちょっと大人びて、女らしくなった。さすがに秩序の番人にいたころみたいな厳しい鍛たん錬れんはしていないので、筋肉が少し落ちて、体つきが若じやつ干かん丸みを帯びたせいかもしれない。さらには、笑え顔がおを見せることが多くなったのも、その原因の一つだろうか。

　マリアローズは今日、昼すぎにアサイラムを訪おとずれて、モリー、ベアトリーチェと一いつ緒しよに、モリーの診しん療りよう室で昼食をとった。メニューは、ベアトリーチェが作ってくれたミソ煮にこみウドン。小麦粉をこねてのばして細長く切った麵めんと、鶏とり肉にく、シイタケ、ネギなどをミソという調味料で味つけして煮こむだけの料理だが、これが美味だった。材料の形が少々

不ふ揃ぞろいで大きめだったのはご愛あい敬きようで、ミソの風味と出汁が渾こん然ぜん一体となって食欲をそそり、もっちりした麵の食感がたまらない。マリアローズはあっという間にミソ煮こみウドンを完食して、食後のコーヒーを飲みつつ、茶飲み話として昨日の出来事を喋っているうちに、止まらなくなったのだった。

「それから、どうなったんだ」ベアトリーチェが少しだけ上半身を乗りだしてきた。番人として毎日剣を振りまわしていただけあって、こういう活劇めいた話は大好きらしい。「ダーナムレーンに入って、それで？」

「うん……」マリアローズはモリーをーいち瞥べつした。モリーは侵入者クラツカー稼か業ぎようを「糞くそくだらないモグラごっこ」呼ばわりするくらいだから、話自体にはそれほど興味がないようだ。ただ、楽しそうなベアトリーチェを眺ながめているときのモリーの表情は、なんというか嬉うれしそうで、安あん堵どしているようでもあって——慈じ愛あいに満ちていた。お母さんの顔だった。

　僕のお母さんも、あんなふうに僕を見ていたんだろうか。

　ふとそんなことを思い、すぐに振り払はらって、マリアローズはつづきを語りだした。

「——うわ……」

　暗黒門ダークゲイトをくぐり、黒い岩石を削けずって造った螺ら旋せん状の階段を降りて、無数の火管シユ・ダが壁や天てん井じようを這はいまわっている通路を抜ぬけた先のダーナムレーンは、いきなり血の海だった。

　半魚人と極ごく彩さい色しき偽にせメリクルの二人組は、通路から出る寸前で立ちすくんでいた。ピンパーネルだけは平然とダーナムレーンに足を踏ふみ入れて左右を見まわしていたが、この砂色の元アッサシンを基準にすると世界が暗殺者色に染まってしまう。それがどんな色かはわからないが、わからないままでいたほうがきっと幸せに違ちがいない。

　で、マリアローズはといえば、カタリの後ろについて、その肩か

た越ごしにダーナムレーンをうかがっていた。

　これでも侵入者クラツカー歴は三年近く。ＺＯＯに加盟してからは、異界生物フリークス相手の戦せん闘とうだけでなく、泉里決戦など大規模な対人戦闘も経験した。むごたらしい死体だっていやというほど見てきたので、さすがに吐き気を催もよおしたりはしなかったが、頭のなかは「うわー。うわー。うわー」というかんじだった。

　食い散らかされちゃってる。

　通路から出てすぐの十五メーテル四方くらいの広場には、赤黒い血液だけではない。腕うでだの、脚だの、生首だの、人体の一部が散乱していて、しかも、その量というか数が、なんとも微び妙みようで――ようするに、それらが単なるバラバラ死体じゃないことは一いち目もく瞭りよう然ぜんだった。

　だって、腕が三本、脚が一本、頭が四つ、内臓入りの肋ろつ骨こつが一つなど、ぱっと見てわかる範はん囲いで数えてみても、計算があわない。あとは食べられてしまったのだろう。そんな結論を、なんのためらいもなく出してしまえたのにも、ちゃんと理由がある。

　鬱うつになるので、くわしい説明はちょっとさけたいところなのだが――つまり、故人のパーツたちには、かぶりつかれました、嚙かみ砕くだかれました、しゃぶられちゃいましたという痕こん跡せきが、残ざん酷こくなほどあからさまに残されていたのだ。

　何ものに食われたのか。

　やはり、超ちよう肥満の巨きよ大だい蜥蜴とかげ人（かもしれない）、デカブツ野や郎ろうの仕し業わざなのか。

「いやあ……これはすごい」マリアローズの横で、ルイ・カタルシスがファニー・フランクの背中に隠かくれて広場をのぞいている。「あれだけたんまり蜥蜴人を腹におさめたあとで、彼らも食べてしまうなんて。とはいえ、食べ方が少々雑ですね。お腹なかがいっぱいだったのかな」

「お前じぶん――」カタリが振ふり向いてルイ・カタルシスをにらみつけたが、「はい？　何か？」と笑顔で首を傾かしげられて、気を

そがれてしまったようだ。カタリは舌打ちをして前に向きなおり、腰からイノイチとロノニーを抜いた。「……せやけど、この有様やと、生存者どころか蘇そ生せいできそうなモンも……」

「うぬうう……ッ！」ファニー・フランクは全身を小刻みに震ふるわせて、何かに耐たえているようだ。仲間たちの無残な末路を目まのあたりにして、こみあげてくる口くち惜おしさや悲しさを抑おさえきれないのか。まあ、法ほ螺ら吹ふきで変人の中年臆病者チキンだが、根は悪い人間ではないのだろう。

　もっとも、善人の軽けい率そつさが、悪人の計算高さ以上の害を周りに与あたえることだってある。

「──私が……大金に目がくらんでこのような仕事を請うけ負ってしまったばかりにッ……だが、よりにもよって初めてのダーナムレーンで、こんな目に遭あうとは……」

「え？　初めて？」

「こ、今巡じゆん月げつに入って初めての……いや、今年に入って初めての……」

「初めて、ね」

　呆あきれた。

　行ったこともない場所に、非戦闘員を案内する仕事なんて、よくも引き受けたものだ。

　しかし、ファニー・フランクが自分のクランに加えて、七名もの侵入者クラツカーに誘さそいをかけたことも、これで納なつ得とくできる。ダーナムレーンを知らなければ、どの程度の戦力が必要で、どんな準備をすればいいのかだって、当然わからないだろう。

　そこで、かき集められるだけかき集め、ファニー・フランク自身をふくめて、十七名。

　この人数なら、きっと大だい丈じよう夫ぶに違いない、と、勇んで突とつ入にゆうした初めてのダーナムレーンで、運悪くやつらに出くわしてしまったわけだ。

　──〝鋏使いザ・チヨツパー〟。

　マリアローズは、いつだったか、鉄てつ鎖さの憩いこい場のある露ろ店てん主から、その名を聞いたことがある程度だ。だから正直、ピンとこない部分もあったが、すぐにピンどころかギュインギュインきた。信じられないことが起こったのだ。

「……ッ……！」

　広場の中央あたりにいたピンパーネルが、突然、右方向に跳ちよう躍やくした。何かが━垂直に、落ちてきた？　ピンパーネルはそれをかわそうとして、完全にはかわしきれなかったみたいだ。あのピンパーネルが！　風のように疾はやく、獣けもののように鋭えい敏びんな感覚で察知した敵を、超ちよう高こう速そくで解体してしとめる元アッサシンの反応が、遅おくれた。そして、マリアローズの鼓こ膜まくの奥には、おぞましいある音がこびりついていて、消えようとしなかった。

　ジョキン。

　鋏はさみ。

　そう、鋏で何かを断たち切るときの音だ。

　鋏は何を切ったのか。

　考えている場合ではなかった。そんな状じよう況きようじゃなかった。

　そいつは━広場の天井かどこかから落下してきたらしい何ものかは、着地するなりこっちに飛んできた。でかい。そして、速い。マリアローズは呆ぼう然ぜんとして、棒立ちになって目を見開いて、そいつを見ていた。動けなかった。まるでダメだった。前にカタリがいなかったら、マリアローズはなすすべなく、そいつが両手に持っている禍まが々まがしい得物の餌え食じきになっていただろう。だが、実際のところ、カタリもマリアローズよりはいくらかマシだったというだけで、まともに応戦できたわけではなかった。「━魚ぎよっ！」たぶん、無意識の防衛反応だろう。カタリが振りまわすでもなく前に突つきだした変形斧おのイノイチとロノニーは、ガッチンと挟はさまれた。

　やはり、鋏だった。

　刃は渡わたり六十サンチほどの、凶きよう猛もうそうな二枚のブ

レードと護拳付きの柄つかによってなる、形状はたしかに鋏っぽいが、生活用具としての鋏からはあまりにかけ離はなれた、それでもやっぱり鋏としかいいようがない凶器が、やつの右手と左手に一本ずつ握にぎられていた。

　蜥蜴人だ。

　二メーテル以上あるように見える。いや、かなり姿勢が悪くてそれだから、背筋をのばして立ったらもっと上背があるだろう。

　そいつの頭頂部には、馬みたいな白いたてがみがあって、全身グジャグジャメチャクチャの傷きず痕あとだらけで、青に近い緑色とおぼしき鱗うろこの色はもうよくわからなくて、身体からだ中に革帯をぐるぐる巻きまくっている。その色とりどりの革帯は、おそらく、だが──どうやら蜥蜴人の、やつの同族の皮ひ膚ふでできているようだ。

　瞳どう孔こうが縦筋状の目は、山やま吹ぶき色だった。

　少しだけ開かれた口には、無数の尖とがった歯がずらりと並んでいる。

　生なま臭ぐさくて、熱い、息。

　ヨダレというより、消化液といったほうがしっくりくる液体が、顎あごからしたたり落ちている。

　やばい。

　こいつはマジでやばすぎる。

　だって、怖こわい。怖くて、怖すぎて、何もできない。マリアローズの前で、自分の武器を鋏に封ふうじられているカタリさえ同じだった。カタリは声すらもらさない。

「Ｇｇｇｇｇ……Ｓｈｓｈｓｈｓｈｓｈｓｓｓｓｈ……」

　そうして怯おびえきっている人間どもを眺ながめて、鋏使いは、嗤わらった。たぶん、嗤ったのだと思う。表情なんかは人間と違ちがうのでちょっとわからないが、あの声は間違いない。鋏使いはカタリやマリアローズたちを嘲あざ笑わらった。かすかにカチンときた。でも、ほんの少しだった。それに、それどころではなかった。

鋏使いが両手の鋏に力を入れた。

　ジョキン。

　いや、そんな生やさしい音ではなかったが、現象としてはあっさりしたものだった。

　カタリのイノイチとロノニーが、紙きれとはいわないまでも、木材か何かのようにぶった切られてしまったのだ。

　無む銘めいとはいえ、魔ま導どう王おう時代に鍛きたえられた業わざ物ものの武器が。

「──お、お……なっ、わ……」カタリはようやく声を出して、手のなかに残ったイノイチとロノニーの柄と刃の三分の一くらいを見た。「あ、ああ……」自分の武器に名前までつけてかわいがっていたカタリにしてみれば、さぞかしショックだったのだろう。その声こわ音ねには悲ひ哀あいがにじんでいた。それと、絶望。この距きょ離りだ。鋏使いはすぐ目の前にいるのだ。ここですべてをあきらめ、瞳ひとみを閉じて死の訪おとずれを待ったとしても、誰だれがカタリを咎とがめられるだろう。文句をつけるのなら、同じ目に遭あってみればいいのだ。この状況で、いったい他ほかに何ができる……？

　そして、カタリがやられたら、その次か、次の次あたりはマリアローズの番だろう。

　ファニー・フランクとかルイ・カタルシスを盾たてにして、逃にげてしまおうか。

　一いつ瞬しゅん、そんなことも考えたが、できるはずがない。仲間がいる。カタリがいて、ピンパーネルが──そうだ、ピンパーネルは？　マリアローズが視線を横に動かそうとしたときだった。

「Ｆｕ……！」

　空気を切り裂さくような声だった。初めて聞いた。ピンパーネルの気合いの声だった。

　ピンパーネルは右方向から鋏使いに飛びかかって、右手に持った雄おすのグレアデを三度か四度、ひらめかせたが、ぜんぶかわされた。とっさに身をよじって初しょ撃げきを回かい避ひし、その次を

鋏で弾はじきかえした鋏使いは、さらに左へ転がり、飛び跳はねて、あっという間に距離をとった。

「ピンパーネル……！」「ピンプゥッ！」マリアローズはカタリと同時に叫さけんだ。しかし、ピンパーネルはこちらを見もせず、六、七メーテル先で二本の鋏をシャキンシャキンさせている鋏使いから目を離さない。膝ひざを曲げて、重心を低くして、脇わきをしめて雄のグレアデを隙すきなく構えている──雄のグレアデだけを。

　雌めすのリレッザは腰こしにつるしたままだ。

　マリアローズとカタリが、血相を変えてピンパーネルの名を呼んだ理由がそれだった。

　ピンパーネルは左手を失っていた。

　手首から先くらいがなくなっていて、切断面から鮮せん血けつが流れだしている。

　あの鋏はさみできれいに切り落とされたのだろうピンパーネルの左手は、石の床ゆかに転がっていた。

　──なんてことだ。

　しかも、一見、これ以上悪くなりようがなさそうなこの情勢は、まだまだ序の口らしい。

　マリアローズは背中から首、後頭部のあたりがビリビリして、眩暈めまいも覚えて、嘔おう吐とまで催もよおした。手や足の先が冷たくなって、足あし許もとがふらふらして、立っているのがつらくなった。口のなかがカラカラだ。泣きたい。泣いてしまいたい。でも、泣いたって何も解決しない。わかっている。現実を受けとめないといけない。そのうえでどうにかしないと。そうだ。結果的には無む駄だかもしれないけれど、何もできないってわけじゃない。

　マリアローズはベルトのホルダーをまさぐりながら、広場の奥のほうにある壮そう麗れいな建物に目をやった。その建物には、ひときわ大きな出入口がある。四メーテル四方はあるだろうか。ドアなどはない。もとからないのではなく、破は壊かいされてしまったようだ。そこからいささか強ごう引いんに出入りしたものがいるのだ。そして、今、のっそりと出てこようとしていた。

「〝超食漢スーパーイーター〟……」

　ぽつりとそうもらしたのは、ルイ・カタルシスだ。

　マリアローズは横目でルイ・カタルシスの顔をうかがったが、やつはなんと、この期ごに及およんで楽しそうだった。わくわくしている様子だった。何なんだ、こいつ。死ぬかもしれないってのに。そう思いはしたが、このわけのわからない男に毒づいている暇ひまはなかった。

　新手は、超食漢だけではなかったからだ。

　いきなり別の建物の扉とびらがバンッと外側に吹ふっ飛んで、そこから悠ゆう然ぜんと歩いて出てきた蜥蜴とかげ人。

　さらに別の建物の窓らしき部分から飛びだしてきて広場に着地した、やっぱりこれも蜥蜴人。

　一匹ぴきは、鱗うろこが暗い緑色と黒のまだらで、黒いたてがみを持ち、黒い鎧よろいを身にまとっていた。腰や背中に、剣けんやら槍やりやら、とにかく十本とか十五本とか、ひょっとしたらそれ以上の武器をジャラジャラつるしたり引っかけたりしている。こいつも普ふ通つうの蜥蜴人よりは、かなり大おお柄がらだ。ちなみに、こいつの額には、親指大の青と緑と黒が複雑に入り混じった色の宝石みたいな物体が埋うまっていて、キラキラ光っていた。

　もう一匹は、鋏使いや宝石野や郎ろうよりは少し小柄で、一いつ般ぱん的な蜥蜴人でもギリギリなんとかありえるくらいの背せ丈たけだった。鱗の色は、体の表側というか背中側が赤せき褐かつ色しょくで、喉のどや腹側に近づくにつれて白っぽくなっている。たてがみは、赤い。縦横に交こう錯さくする黒い直線模様が入った、鮮あざやかなピンク色のボディスーツを着ているのだが、もしかしてメスなのか。気のせいかもしれないが、胸が膨ふくらんでいるように見える。蜥蜴人は爬は虫ちゆう類るいや鳥類みたいに卵を産むものの、孵ふ化かした子に母乳を与あたえて育てるらしく、メスは乳ち房ぶさが発達しているのだ。

　ともあれ、これで敵は、鋏使いと、超食漢。それから、宝石野郎に、ピンク。

　こっちは、左手が使えない、いつ失血で動けなくなってしまって

もおかしくないピンパーネル。武器を失ったカタリ。ほとんど偽にせメリクルの彫ちよう像ぞうと化しているファニー・フランク。間ま違ちがいなく役に立たない、猫ねこ連れのルイ・カタルシス。それから、マリアローズ。



気が遠くなりそうだ。

勝負になるとかならないとか、それ以前の問題だ。

──逃げるしかない。

それはもうわかりきっていることだが、ただ闇やみ雲くもに逃げだしても、逃げきれるとは思えない。何か手を打つ必要があるけれど、しかし、こんなことならアドリアンの忠告を聞いておくべきだった。「まだ命が大事なら、回れ右して今すぐ帰れ」あのときアドリアンと一いつ緒しよに引き返せばよかったのだ。少なくとも、カタリの暴走を許すべきじゃなかった。カタリ！　ああ、くそ、カタリめ。糞くそカタリ……！　いつもこいつだ。この腐くされ半魚人のせいで、とんでもないことに巻きこまれるのは、もうまっぴらだ。

このうえは、絶対に生きて帰って、カタリを串くしに刺さして塩を振ふって焼き魚にして、自分で食べるのはやだから、髭ひげにでも食わせてやる。酒はやらないが、肉は喜んで食べる生なま臭ぐさ坊ぼう主ずだから、焼き半魚人くらいペロリだろう。

「……爆ばく弾だん使う。逃げるよ」マリアローズは小声でカタリに囁ささやいた。カタリは振り向かずに小さくうなずいたが、ピンパーネルに聞こえているかどうかは不明だ。だが、ピンパーネルならきっと大だい丈じよう夫ぶ。その点については心配していない。不安なのは──いや、考えても仕方ないだろう。猶ゆう予よもない。鋏使いがピンパーネルとの間合いを計っていて、超食漢の巨きよ体たいが建物の出入口にちょっと引っかかっていて、宝石野郎とピンクが物もの珍めずらしそうにこっちを観察している、この状じよう況きようがいつまでもつづくはずはない。ファニー・フランクとルイ・カタルシスのことは無視した。そこまで気を配ってはいられない。

マリアローズはホルダーのカバーを外して、爆薬液ハーレム・ゴードン入りの小こ瓶びん、爆弾を左右の手で三本ずつ、計六本抜ぬきとった。それらを人さし指と中指、中指と薬指、薬指と小指の間に挟はさんだ。知らずに呼吸が荒あらくなった。ぎゅうぎゅう押されているみたいに胸が痛い。心臓のあたりだ。失敗したらどうしよう。その失敗の内容さえも思い浮うかばない。

ああ──モリー。トマトクン。ユリカ。サフィニア。ベアトリーチェ。髭。アジアン。

いや、なんでアジアンのことなんか。

忘れろ。忘れろ。忘れろ、忘れろ、忘れてしまえ。また会える。きっと会える。会う。僕は死んだりなんかしない。もちろんピンパーネルも、カタリもだ。カウントダウンはしなかった。

「逃げてＲＵＮ……！」マリアローズは叫さけびながら体を少しのけぞらせた。前にいるカタリが、タイミングよくしゃがんだ。コースがあいた。腰こし。肩かた。腕うで。手首。力は一いつ切さいとどこおらず、流れる水のごとく伝わった。完かん璧ぺきだった。いける、と思った。指の力をかすかにゆるめて、投げた。ピンパーネルが自分の左手を拾ってこっちに向かって走ってくる姿が見えた。鋏使いも動いた。追ってくる。迫せまってくる。しかし、左手から放った三本のうち一本が、鋏使いに直ちよく撃げきするコースで飛んでいる。いくら鋏使いでも、爆弾をモロに食くらえば無傷ではすまないだろう。少なくとも、怯ひるませることくらいはできるはずだ—と思いたい。いずれにせよ、結果を見届けてから次の行動に移るのでは遅おそすぎる。マリアローズは身をひるがえした。その瞬しゆん間かんだった。

爆発が起こった。

ほとんど間を置かずに、ドドドンドドンドンと六連続だった。

マリアローズは足こそ止めなかったが、内臓が口から飛びだしてくるんじゃないかと思うくらい吃驚びつくり仰ぎよう天てんした。だって、早い。たぶん、一秒以下の誤差ではあるものの、予測では、爆発はもう少し遅いはずだった。このタイミングだと、空中で爆発したことになる。実際、覚かく悟ごしていたより閃せん光こうはまぶしくて爆風が強かった。おかしい。そんなはずがない。だが、今は考えるより足を動かさないと。

それでも気になって、マリアローズはちらっと振り返った。つんのめりそうになりながらついてきている半魚人。ピンパーネルは煙えん幕まくを背にしてそのすぐ後ろだ。ピンパーネルの斜ななめ後方にファニー・フランク。ルイ・カタルシスはマリアローズの横にいた。こいつ、意外とすばしっこいのか。まあ、カタリとピンパーネル以外はどうなったところで知ったことじゃないといっても、無事であればそれに越こしたことはない。爆発については計算どおりではなかったが、鋏使いたちを攪かく乱らんして、足止めすることはできたみたいだ。そう思いながらも、全力で走りつつ、さらに右

手で二本の爆弾を用意するあたりは、カタリのように楽観的にはなれないマリアローズの性しよう分ぶんのなせるわざだろう。でも、それが自分や他ほかの誰だれかを救うこともある。

「Ｓｙａａａａａａａａ……！」「□□ぬぐおうッ！」蜥蜴人の気合いとファニー・フランクの悲鳴だった。何かあったのか。かまうもんか。勝手に死んじゃえ──そこまで非情になりきれなかった、というわけでは決してない。状況をちゃんと確かく認にんして、しっかり対処しないと危険だ。その一心だった。怖こわかったし焦あせっていたが、マリアローズは振り向いた。

　ピンクだった。

　煙けむりを突つき破ってきたメスらしいあのピンクが、最さい後こう尾びのファニー・フランクに襲おそいかかっていた。正確にいえば、ファニー・フランクはピンクの飛び蹴げりを背中に食らって吹ふっ飛んだところだった。

　吹っ飛ばされただけに、ファニー・フランクとピンクとの間は二、三メーテル離はなれていたが、爆弾を使うには──あまりに近すぎる。

　ああ、哀あわれファニー・フランク！

　さようなら！

　きみのことは忘れない！

　三日間くらいは。

　きみの犠ぎ牲せい（？）を無む駄だにしないように、僕らは必ず逃げおおせてみせるから。

「く、くぬッ──」ところが、ファニー・フランクはしぶとかった。跳ちよう躍やくしたピンクに踏ふみつぶされる寸前だった。「まだまだァッ……！」

　ファニー・フランクは、剝けた。

　きっとそういう仕し掛かけが施ほどこしてあったのだろう。つまり、早着がえ対応？　馬ば鹿かな機能としかいいようがないが、この場合はそれがきわめて有効に働いた。うつぶせだったファニー・

フランクは、極ごく彩さい色しきの羽根飾かざりにまみれた兜かぶとやら鎧よろいやらをそっくり残して、信じられない速度で大脂羽蟲ゴツキーみたいにサササササササササと匍ほ匐ふく前進した。むろん、剣けんや盾たても置き去りにした。下着だけの身軽な恰かつ好こうになったファニー・フランクは、めちゃめちゃ素す早ばやかった。ファニー・フランクの抜け殻がらの上に両足で着地したピンクも、呆あつ気けにとられたようにしばらく動かず、やがて首を傾かしげた。その間に十分な距きょ離りは確保できた。できてしまったら、しょうがない。

「もう、大損だ、くそ……！」

　マリアローズはさまざまな恨うらみと憎にくしみをこめ、ピンクめがけて爆ばく弾だんを投とう擲てきした。通路のなかだったので、爆発音が反はん響きょうしてすごかった。あとはよくわからなかった。逃げた。何度かカタリやピンパーネルと声をかけあって無事を確認した。階段をひたすら上って上って上りきって、暗黒門ダークゲイトを出る前に叫んだ。「逃げて！　地上まで！」マリアローズだけではなく、カタリやファニー・フランクも同じようなことをさかんに言っていたような気がする。その声はユリカや創世の翼ジエネシスウイングの生き残りにちゃんと届いたらしい。暗黒門ダークゲイトを出ると、すでにユリカたちは走りだしていた。

　でも━地上までって。

　どれくらいあるんだ。

　何もかもがいやになりかけたが、後ろを見て追ってくるものがないことを確かめても、足をゆるめようとは思わなかった。こうなったら、体力が完全につきて倒たおれるまで駆かけてやる。苦しくても酸素が欲しくても、死ぬよりはマシだ。こんなところで死んだら━バカみたいじゃないか。せっかく久しぶりの実戦だっていうのに、訓練にもなっていない、稼かせいでもいない、はっきりいって何もしていない。変なやつのせいで、変なことに巻きこまれて。僕はまったく、まるっきり、何もできなくて。こうして逃にげるだけで。情けないったらない。とにかく、ユリカはちゃんと逃がさないと。懸けん命めいに走っているユリカの小さな後ろ姿を見ながら、とっくに息が切れている自分のことを棚たなにあげて、そんなことを思った。

「──で、まあ、どうにか生きて帰ってきたわけだけど」

「それはしかし……」ベアトリーチェは顔をしかめてため息をついた。「なんというか、災難だったな」

「まったくだよ。爆弾八本使っただけで儲もうけはゼロだから、完全に赤字だし」

「そうか。生活のことだって考えないといけないものな。切実な問題だ」

「や、さすがにそこまでキツキツなわけじゃないんだけどね。ＺＯＯに入ってから、何回か当たりも引いたしさ」

「当たり？」

「高い値段がつくものを手に入れたってこと。一人で侵入者クラッカーやってたころは、千ダラー単位で黒字になれば万ばん々ばん歳ざいってかんじだったから。だけど、よく考えると、最近ろくに稼いでなくて。金銭的には大だい丈じよう夫ぶなんだけど、なんか落ちつかないんだよね。貧びん乏ぼう性しようなのかな」

「堅けん実じつなんだろう。好ましい性質だと思うぞ、それは──あ」ベアトリーチェは急に赤面してマリアローズから目をそらした。「こ、好ましいっていうのは、あくまでお前の性質のことで、お前自身のことじゃないからな」

「え？　うん」

「いや……わかってるならいいんだ。で、でも、大事だし、美徳だと思うぞ、堅実さは。いや、その話はもうよくて……そうだ！　お前の仲間は無事だったのか。無事だったんだろうな。そうじゃなかったら、ここにくるどころの騒さわぎじゃないものな。あたりまえじゃないか！　ああ、もう……！」

　ベアトリーチェは自分の頭をかきむしった。モリーがそっと微笑ほほえんでその姿を見つめている。マリアローズにしてみればちょっと複雑な気持ちだが、気まずい雰ふん囲い気きになるのはいやだ。

　だから、気づかない──ふりをする。

　それがいいことだとは思わないけれど。

「お陰かげ様さまで、みんな大丈夫。ピンパーネルも、いつの間にか自分で肘ひじのあたりを縛しばって止血してて、地上に戻もどってユリカに治ち療りようしてもらったら、けろっとしてたし。結局、僕が無駄に爆弾使う羽目になって損して、カタリの武器が壊こわれちゃって、それくらいかな」

「ま、まあ、でも」ベアトリーチェは顔色をうかがうように上目づかいでマリアローズを見て、一つ咳せき払ばらいをした。「──とりあえず、なんともなくて、何よりだ。命あっての物種という言葉もある。生きてさえいれば、そのうち赤字を補ほ塡てんすることだってできるだろうしな」

「だといいんだけどね」

「なんだったら」モリーが舌先で唇くちびるをちろりと舐なめ、豊かな胸を持ちあげるように腕うで組みをして、妖よう艶えんな笑えみを浮うかべた。「わざわざ地下の肥だめお笑い劇場なんかに行かなくても、てっとりばやく稼ぐ方法があるわよ？　あいた時間にちょっとだけわたしにサービスしてくれれば、下のコースから千、五千、一万、十万……」

「肩かたもみくらいならいつでもするけど？　でも、手が滑すべって変なところさわったりとか、勢いで違ちがうところもんじゃったりとか、そういうことは絶対ないから」

「あら。ずいぶんドキドキ感のないマッサージね」

「うん。そういう商売はやってないもん」

　マリアローズがにっこり笑ってうなずいてみせると、突とつ然ぜん、モリーとベアトリーチェがそろって目を見開いた。その頰ほおがほんのりと赤らんでいる。あれ？　なんか、一昨日も同じようなことがあったような。そんな既視感デジヤヴを覚えて首をひねっていると、モリーがきまりが悪そうに自分の唇を指でつまんだり引っぱったりしながら、「君、まさか……」と言った。「そういう表情、誰だれ彼かまわず見せているわけじゃないでしょうね」

「へ？　表情……って、人前で笑ってないかってこと？　そりゃ、

僕だって笑うことくらいあるよ。ずっと仏ぶつ頂ちょう面づらでいるのも変でしょ」

「それはそうだけれど、わたしが言いたいのはそういうことじゃなくて──」モリーは助けを求めるようにベアトリーチェを見た。だが、ベアトリーチェもうつむき加減で困こん惑わく気味、というか、なぜだかもじもじしている。「……と、とにかく」モリーは珍めずらしく動どう揺ようしているようだった。「あまり無防備に笑わないほうがいいわよ。とくに、男の前では。君にそのつもりはなくても──というより、それほど自覚がないから余計、手に負えないのでしょうけれど、厄やっ介かい事を背負しょいこむことになってしまいかねないから」

「厄介事？　あー……」

　心当たりもないではない。最近だと、アジアン。そして、

刑ジン王ワン。モリーが言っているのはやつらのことだろうか。

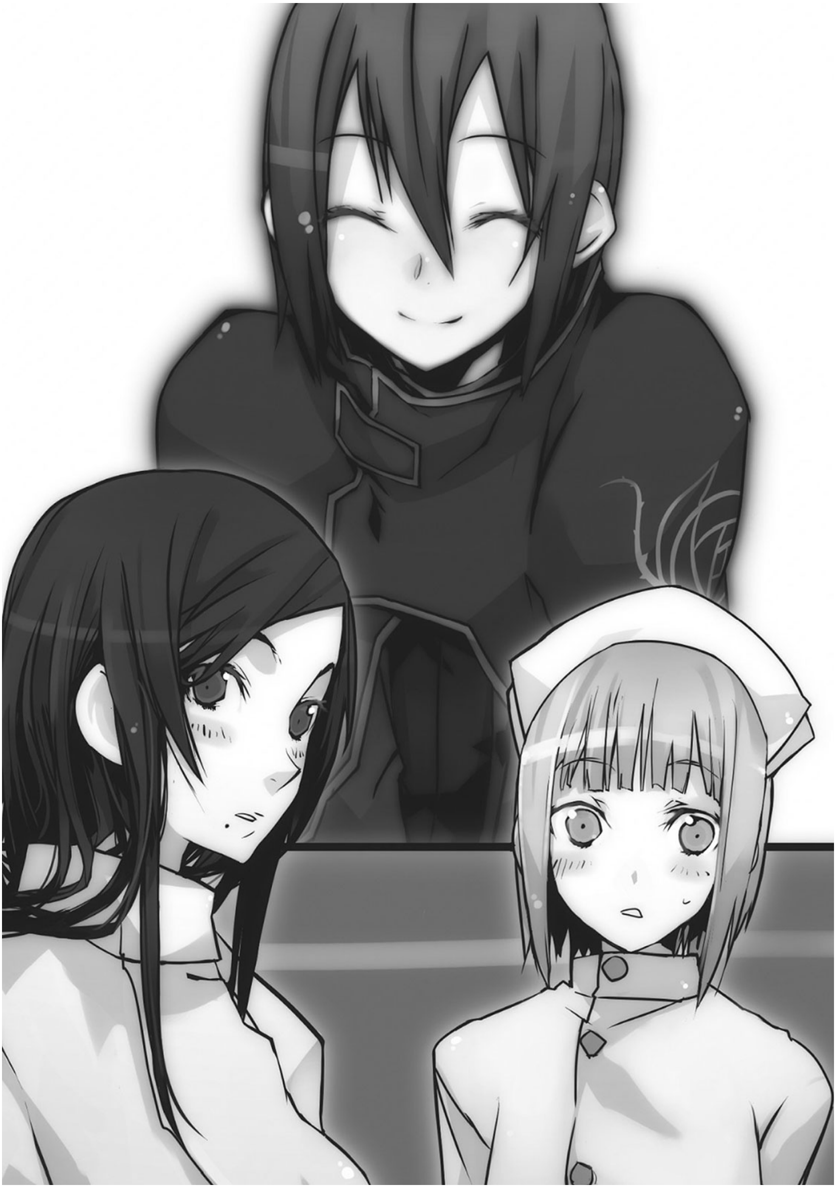
　そういえば、一昨日おとといだ。アジアンに新しいリアクションのパターンを試ためしてみたのだが、あの鬼き畜ちく外げ道どう変態は「かわいい」だの「やばいやばすぎる」だのと愚ぐにもつかないことをぬかしていたっけ──かわいい、だって？

　マリアローズは顔をしかめて、ほっぺたのあたりを両手でこするように撫なでまわした。自分がどういう顔をしているか、知ってはいるつもりだ。この顔が他人の目にどう映っているのか、考えたことがないわけでもない。だが、二目と見られないほど不細工に生まれつくよりはずっとマシだったと思いはしても、この容姿をありがたいと感じたことは一度もない。

　だって、似ていないからだ。

　僕はお父さんにも、お母さんにも、ちっとも似ていない。両親の顔はまだ覚えているし、忘れてしまわないようにときどき思い出し

てしっかり記き憶おくに刻みこみ、たまに鏡を見て共通点を探すのだが──ない。



目や鼻、口、耳の形から、髪かみや瞳ひとみの色にいたるまで、ぜんぜん似ていない。

成長するごとに似てくるのではないかと期待していたが、今のところはその兆きざしもない。

唯ゆい一いつの慰なぐさめは、両親がマリアローズの見目形を愛してくれて、好きだと言ってくれたことだ。マリアローズの名前は、真っ赤な薔ば薇らを思わせる髪の毛の色からつけてもらったのだし、母はこの真しん紅くの髪の毛を指で梳すくのが大好きだった。オレンジ色の目をきれいだきれいだと褒ほめそやしてくれた。父もさかんにマリアローズを抱だきしめて頰ずりをした。髭ひげが痛くて、文句を言ったりもしたけれど、愛されているという実感があった。つらいときも、ひもじいときも、その部分では満たされていた。

でも、今にして思えば、両親は片時もマリアローズを不安がらせまいと、絶えず気を配ってくれていたのかもしれない。

──不安。

そう。

深いところに埋うまって、普ふ段だんは顔を出すことのない不安が、マリアローズの胸の奥底に眠ねむっている。

小さいときは気にもとめなかった。けれども、この年になれば、さすがにわかる。いや、両親が健在だったころにも、本当は何度か疑問に思った。だが、口には出さなかった。出せなかった。両親とさっぱり似ていない。その事実が何を示すのか。考えたくなかった。考えなければ、答えにたどりつかずにすむと思っていた。でも、本当は違う。考える必要なんかない。ふとしたときに、不意の通り雨みたいに、答えは容よう赦しやなく降ってくる。

ひょっとしたら、僕は、違うのかもしれない。

もちろん、仮にそうだとしても、両親は両親だ。二人の記憶はマリアローズが死ぬまで消えないだろう。それは間違いない。

だけど、もし、そうだとしたら──

僕が信じてきて、信じようとしてきたものが嘘うそだったとしたら、僕は──

いったい僕は、誰なんだろう……？

「マリア？」

「え？」呼ばれた声で我に返ると、モリーとベアトリーチェが心配そうな面おも持もちでマリアローズの顔をのぞきこんでいた。「──あ、ごめん。ちょっと、考えごとしてて……幽ゆう体たい離り脱だつ気味だったかも」

「大だい丈じよう夫ぶ？　顔色悪いわよ」

　モリーが椅い子すから腰こしを浮かせて手をのばしてきた。肉体的接せつ触しよくは好きじゃないけれど、相手がモリーならさわられたって平気だ。でも、どういうわけか、今はいやだった。そうかといって、いきなり拒きよ絶ぜつ反応を示すようにはねのけたら、モリーを傷つけてしまうかもしれない。少なくとも、驚おどろいて不思議に思うだろう。

「ホントに大丈夫だから」

　マリアローズはモリーがのばしてきた手をそっと握にぎって、できるだけ自然に微笑ほほえんでみせた。

　そのつもりだったのだが、少し強こわ張ばってしまったかもしれない。

　モリーを欺あざむいたことが後ろめたかった。

　いや、それだけじゃない。

　あたたかくて、しっとりしたモリーの手の感かん触しよくを指で感じながら、気づいてしまったのだ。

　僕はモリーにさわられたくなかったんじゃない。

　逆だ。

　ふれて欲しかった。抱きしめてもらいたかった。この不安を消して欲しかった。甘えたかった。モリーなら甘えさせてくれるはずだった。

　だけれど、モリーは僕のお母さんじゃない。

　それに──と、マリアローズはベアトリーチェを見た。

　ここにはモリーだけじゃなくて、彼女もいる。

　マリアローズの視線のなかに、何かを察知したのかもしれない。ベアトリーチェが訝いぶかるように眉まゆをひそめた。

　彼女は何を感じとったのだろう。

　マリアローズは何を思ったのだろう。

　それがはっきりした形となって、お互たがいの胸に小さな棘とげを埋めこむ前に、診しん療りよう室のドアがスコココココンとノックされた。モリーが返事をするより早くドアが開いた。

　入ってきたのは、人間ではなかった。

　半魚人だった。

「まいど！」

「……まいど、じゃないだろ、なんだよいきなり！　診察中だったらどうするわけ！」

「ふふふん」カタリは得意げに目をつぶって左手を腰にあて、右手の人さし指を左右に振ふってみせた。「長めの昼休み中っちゅーことは受付で確かく認にんずみや。抜ぬかりはないで」

「きみの場合、生まれたときから頭ず蓋がい骨こつとかその外側とか中身とか、いろいろ抜かりまくってるんだ！　今さらそれくらい抜かりがなくたって最初から何もかもぜんぶ手て遅おくれ！　取り返しつかなすぎ！」

「ハッハッハッ。えらい言われようやなあ」

　カタリは明るく笑いながら、大陸東部で使われる紙と木でできた扇せん子すをどこからかとりだして、パタパタ扇あおいでいる。腐くされ半魚人のくせに、やけに鷹おう揚ようだ。おかしい。何か変な企たくらみでもあるのか。マリアローズが疑ぎ惑わくと殺気をこめた眼まな差ざしをそそいでも、カタリは気にする様子もない。上じよう機き嫌げんでモリーやベアトリーチェに「ナハハッ。まいどまいど」と挨あい拶さつしつつ、診療室の隅すみから回転椅い子すを持ってきてマリアローズの前に座り、閉じた扇子でパンと膝ひざを打った。

「ほんで、どや。調子のほうは」

「調子って……べつに、よくも悪くもないけど」

「そうかそうか。悪うないならバッチグーオッケーや。重ちよう畳じよう重畳。で、明日の予定やけど」

「明日？」

「せや」カタリはもう一度膝をピシャリと打ってから顔の横に扇子を広げ、とっておきの秘密でも打ち明けるように声をひそめた。「━━じつはな、ものごっつう儲もうけ話があるんや。どれくらいの儲け話かっちゅうと……ここだけの話やで、ええか、いっぺんきりしか言ゆわへんから、耳の穴かっぽじってよぉーく聞きさらせよ」

「ちゃんと聞いてるってば。どうせまたクッソくっだらない話だろうけど……」

　呆あきれ果てた表情を作りながらも、内心、マリアローズは興きよう味み津しん々しんだった。いや、そんなことはない。何しろ、カタリだ。どれほど素す晴ばらしい話に聞こえても、どんな落とし穴があるかわかったものではない。耳にした瞬しゆん間かんは、胸が躍おどって夢や希望が空の果てまで広がりまくったとしても、絶対に乗るべきじゃない。マリアローズもいいかげん学習して懲こりていた。だから心構えをしていた。決して、騙だまされたりしない。聞くだけだ。聞くだけならいいだろう。

　カタリはさんざんもったいぶったあげく、まず左手の指をゆっくりと一本立ててみせた。

　二本。

　三本。

　四本。

　五本。

　それから、立てた指を一本折って、二本折り、三本折った。

「この話━━うまくいったら、八億ダラーや」

「明日、何時にどこ集合？」

Omenage 897 10th revolution 7th day

サンランド無統治王国首都エルデン第一区

〝シャイニンググローリーパレス〟

chapter.5

王の実験場

一分の隙すきもなく鈍にび色いろの全身甲かつ冑ちゆうをまとった魔ま導どう兵へいが巨きよ大だいな扉とびらを開けると、その向こうは闇やみと光と静せい寂じやくと魔力とに彩いろどられた王の間だった。

直径七七・七メーテル。

完全な円形の部屋の床ゆか一いつ杯ぱいに、宝石や稀少金属レアメタルなどの触しよく媒ばいを用いて、魔法円が描えがかれている。

魔法円は、絶えることなく青とも紫むらさきとも緑ともいえそうな微び弱じやくな光を放ち、この王の間がいにしえの偉い大だいなる秘法の中ちゆう核かくとして機能しつづけていることを証明していた。

〝古代九頭竜の呪のろい〟。

その根幹は、かつて〝原子のアトミツク・極大マキシマム・魔術士ドレツドスター〟キング・グッダーが従えていた巨きよ竜りゆうノ・インの遺い骸がいである九頭竜レガシオス大骨格・ノ・インだが、この超大規模な古代封ふう印いん呪じゆ式しきを制せい御ぎよしている場は、間ま違ちがいなくここだった。

いや、もっと正確にいえば、首都エルデンのまさに中央に位置するこの王の間の中心こそが、すべてのかなめだ。

そこには玉座がある。

水晶様材クリスタリンで造られ、漆しつ黒こくに輝かがやく異界の真影石ネクロダイトや緋ひ色いろの液体金属ファガナグヌスなどで飾かざられた、高さ十メーテル以上の竜形の玉座〝天からカラミ災厄のテイジ時代を・エン告げる者ジエル〟だ。

それはサンランド無統治王国の君臨すれども統治せず、支配すれども関知しない王の御ぎよ座ざだ。

むろん、玉座には王が腰こしをうずめている。

キング・グッダー。

現王は、開祖キング・グッダーI世より数えて十九代目だとも、十七代目だとも、あるいは十一代目だとも、七代目だともいう。

無統治王国の王ゆえに、国くに民たみのほとんどはその程度のことさえ知らない。知るのは代々王に仕える王府の者たちと、王の個人的な知ち己きくらいだろう。

そもそも、王に目通りが叶かなうのは、そうしたごくごく一部のかぎられた人間だけだ。在位中は片時も〝天からカラミ災厄のテイジ時代を・エン告げる者ジエル〟から離はなれないという王の姿を拝むためには、シャイニンググローリーパレスの中央にあるこの王の間に足を踏ふみ入れるしかない。

ただ、この城は、数千の魔導兵と、一いつ般ぱんにはその存在すら知られていない近衛兵団ロイヤルガーズ〝スペースファング〟によって厳重に守られている。王の許しもなく王の間にたどりつくのは至難のわざだろう。

そして、〝古代九頭竜の呪い〟と魔導兵団ドレツドループスの統とう御ぎよとに持てる魔力のすべてをそそいでいる王は、滅めつ多たに謁えつ見けんを許可しない。王府の者たちでさえ、年に一度か二度、短い玉音を賜たまわる機会があるかどうかといったところらしい。

「キング・グッダー」

従って、今日、〝天からカラミ災厄のテイジ時代を・エン告げる者ジエル〟の前に立つことを許されたのは僥ぎよう倖こうだと思わねばなるまい。それに、いくら旧知の仲とはいえ、相手は一国の王だ。なけなしの敬意を最大限に表すべく、右足を左足の少し前に出して膝ひざと腰を曲げ、右手を床について左手は胸にあてるラフレシア第三帝てい国こく流の礼を、優ゆう雅がに、うやうやしく、ルイ・カタルシスがやってみせた。

だが、案の定、王に感かん銘めいを与あたえることはできなかったようだ。

キング・グッダーは身じろぎもせず、殷いん々いんと響ひびきわたる重く低い声を発した。

「久しいな。賢さかしき愚者よ」

「陛下におかれましては、お変わりなきご様子で、ご機き嫌げんうるわしく。長の御ご無ぶ沙さ汰た、何とぞご容よう赦しやください。しかしながら、ここしばらく、久方ぶりに陛下の御ご威い光こう隅すみ々ずみまで行き渡わたり永年平安の気配みなぎる御お国くにをとくと拝見し、僭せん越えつながら感心しきりです。まさにすべて陛下の御おん徳とくと御ご意い思しの賜たま物ものと──」

「わざわざ無む駄だ口ぐちをたたきにきたか」

「むろん、それも目的の一つではありますが」

　ルイ・カタルシスは肩かたをすくめて笑え顔がおを作り、かたわらに置いていた革かわ鞄かばんに腰を下ろした。

　その膝の上にジュジが跳とび乗った。

「さすがにそれだけではありませんよ。ぼくもそこまで暇ひまじゃない。というより、これでも結構忙いそがしいんです。〆しめ切きりもいくつか抱かかえていますしね。ああ、今はルイ・カタルシスの名で物書きをやっているんです。ラフレシアでは売れっ子なんですよ」

「承知しておる。ルイ・アデモンディオ」

「ルイ・カタルシスですよ。ペンネームはね」

　ジュジがルイの肩の上にのぼって、〝天からカラミ災厄のテイジ時代を・エン告げる者ジエル〟のキング・グッダーを振ふり仰あおいだ。

　王はその巨大な玉座のなかほどに腰かけている。

　天てん井じようから床に落ちている幾いく本もの光の柱は玉座をさけているため、王の姿は半ば闇につつまれて、はっきりとは見えない。

「グッダー。あれはもうできあがりましたか」

「擬似異界バラアウター内で最終調整中だ」

「そうですか。長かったですね。でも、ナ・インも本ほん望もうでしょう。いずれにしても、準備は整いつつあると思っていいようで

すね」

「汝なれはどうなのだ」

「いいかんじですよ。ついに、見つけてしまいましたし──」

　そう言った瞬しゅん間かんだった。

　これまで微び動どうだにしなかったグッダーが、右手をピクリと動かした。

　グッダーはその右手で長い髭ひげをゆっくりとしごいた。彼が何か考え事をするときの、昔からの癖くせだ。

　ルイの右手の人さし指が、椅い子すにしている革鞄をコツコツ叩たたいた。

「カードはそろってきています。とはいえ、まだいくつか大仕事が残っていますけどね。それに、確かめておきたいこともあります」

「なんだ」

「なんだと思いますか？」

「汝なれの戯たわぶれにつきあう気はない」

「ノリが悪いですね。やはり、玉座に座っているあなたは面おも白しろくない」

「汝なれが愉ゆ快かいであろうと不愉快であろうと余の知ったことではないわ」

「冷たいな」

　ルイはうつむいて革鞄を叩いていた指を止めた。

「──〝鋏使いザ・チヨツパー〟、〝圧搾魔ザ・コンプレツサー〟、〝拳姫フイストプリンセス〟、〝超食漢スーパーイーター〟。ちょっと思うところがあって、ダーナムレーンの最深部に幽ゆう閉へいされていたあの同族殺したちを自由にしちゃいましてね」

「姉御をおびきよせるためか」

「姉と同じことを仰る。まあ、身も蓋ふたもない言い方をすれば、そのとおりなんですが──とにかく、そういうことで、今、Ｄ13はたいへんなことになっていますよ。もともと彼らは度たび重かさなる仲間殺し、共食いにもかかわらず、Ｋｙｓｓｙｘｕｘｓ族の王族だということで死罪をまぬがれ、ずいぶん長い間、三食昼ひる寝ね付きの迷めい宮きゆう牢ろう獄ごくでおとなしくしていたみたいですけどね。ただ寝ていたわけではないらしい。すごいです。かつて最さい盛せい期きの魔導兵団を手こずらせた蜥蜴とかげ人たちの精せい鋭えい部隊〝黒き鱗ジヤシユギシユ〟の再来ではないかと思うくらい。もちろん、あなたも知っていると思いますが、蜥蜴人八王は〝黒き鱗ジヤシユギシユ〟の生き残りの血脈ですからね。代を重ねるごとに血は薄うすまってきているとはいえ、ああいった連中が先祖返り的に出現してもおかしくはない。いずれにしても、使える連中です」

「汝なれは何を言いたい」

「ですから、確かめたいんです」

　ルイの両手がパンと打ちあわせられた。

「先の大戦ではやつらの勢力をかなり削そぐことができました。でも、こっちだって無傷ではありませんでした。いや、やつら以上に消しよう耗もうしたといっても過言ではないでしょう。それをおぎなうための準備は進んでいるといっても、それだけではやはり足りない。ぼくたちは駒こまをそろえなければいけません。グッダー。この国はそのための実験場だ。あなたなりの、ね。で、個人的に試ためさせていただきました。おそらく、この国の標準か標準以下の人間を見つくろって、連中にぶつけてみたんです。結果は──」ルイは両手を広げて首を横に振った。「さんざんでした。面白いものは見られましたが、正直、落らく胆たんしなかったといえば嘘うそになります。ただ、あれだけで判断するのは早計でしょう。ぼくが把は握あくしているだけでも、見こみのありそうな駒はすでにいくつかあるんです。割合と確率の問題もあります。あたりが悪すぎただけかもしれない。ぼくはもう一度試してみたい。ですが、それにあたって、この街が致ち命めい的てきな欠点を抱えていることに気づきました。それが何かわかりますか、グッダー」

　キング・グッダーは無言だった。

　ルイの右手が前に突つきだされ、人さし指が下に向けられた。

「面白くないんですよ。切せつ迫ぱく感が絶望的に不足している。ぬるすぎるんです。火事場の馬ば鹿か力という言葉があるでしょう。あれは、でも、違ちがいますよね。あなたならわかるはずです。それが本来の力なんですよ。人間はそうならないと本来の力を発揮できない、弱くて、情けなくて、ちっぽけで哀あわれな生き物なんだと、あなたは知っている。当然、ぼくも知っている。姉さんもね。少なくとも、ぼくたち七人は知っている。否いや応おうなく思い知らされた。ですが、グッダー、あなたの民たみの多くは、おそらくまだ理解していない。あなたの庇ひ護ごのもと、大いなる古き力に守られてのうのうと生きてきた彼らには知るすべがないんです。つまり、ある意味、それは彼らの責任ではない。そこで、どうです。一度だけです。ほんの少しだけでいい。一日、いや、半日、その半分でいい。どうせまだ時は満ちていません。彼らも不用意に動いたりはしないはずです。いいでしょう？」

「汝なれの話はそれだけか」

　グッダーの声こわ音ねが変わった。

　先ほどまでは、高圧的で他をよせつけない冷厳さに満ちていたが、今は違う。傲ごう慢まんで、横おう柄へいで、どこかぞんざいですらあった。声の調子だけではない。態度もだ。

　グッダーは王というより山さん賊ぞくの首領のように玉座の上でふんぞり返り、行ぎよう儀ぎ悪く足を組んでゆっくりと首を回した。

「ルイ・アシュモダイ・アデモンディオ。余に頼たのみ事をするのならば、もっと面白い話をせい。余を楽しませる話をな。汝なれのことだ。ネタなど腐くさるほどあろう。余は退たい屈くつなのだ」

「ルイ・カタルシス、ですよ、グッダー。今はまだ、ね。そう──」

　ルイの肩かたの上にいるジュジが、青玉サフアイヤの瞳ひとみを輝かがやかせた。

「ネタはたくさんあります。あなたと話しておかなければならないことが、いくらでも……」

Omenage 897 10th revolution 7th day

サンランド無統治王国首都エルデン第九区・第十区境

〝闇市〟

chapter.6

もうお前しか見えない

闇やみ市いちを掌しよう握あくしたといったって、これで龍州連合の地位が安あん泰たいだなんて考えるのは早すぎる。ここで商売をしている連中は、ようするに風かざ見み鶏どりと同じだ。風向きが変われば、それになびくだけ。今のところ、ＳｍＣの残党を皆みな殺ごろしにして、所場代を今までの八割にすると宣言した龍州連合に従うそぶりを見せてはいるものの、新しい支配者がまた別の誰だれかに討たれれば、ためらいなくそっちに頭こうべを垂れるだろう。それが楽に安全に生きのびられる道だと、やつらは知っているのだ。ケチな生き方だとは思うが、誰もが他人をねじ伏ふせる腕わん力りよくや出し抜ぬく狡こう知ちを持ちあわせているわけじゃない。それでも、人は生きてゆかねばならない。死んでしまえば屑くず同然。死んだという事実ごと、いつかそっくり忘れ去られる。忘れられてしまえば、最初からいなかったのと変わらない。

媚メイ婁ルー。呉ウー戒ジエ。

風の噂うわさでは、ＳＩＸに逆らって殺されたとか。くわしいことはわからないが、消息不明だ。その直後にＳｍＣは壊かい滅めつ。そんな好機を虎こ視し眈たん々たんと狙ねらっていた王おう龍りゆうとＳ＊Ｋシリアル・キラーズは、こうして闇市を手に入れた。本当に馬ば鹿かなやつらだ。賢かしこく立ちまわろうとしていたくせに、要領が悪くて、どこか抜けていて、間が悪すぎて──正直、哀れに思わないでもない。

だが、それもそのうち忘れる。死んでいったやつは忘れられるだけだ。げんに、俺はあの女の死に顔さえすでに覚えていない。

記き憶おくってやつは、どうしようもなく欠けつ陥かんだらけなのか。それとも、よっぽどよくできているのか。死があらゆる喪そう失しつに直結する現実は、諸行無常なんていう気どった言葉よりも、俺たち人間がいかにくだらない存在なのかを端たん的てきに表しているように思える。

それでも人は、生存本能に突き動かされて、生きてゆかざるをえない。

だが、皆みな、いつかは死んで忘れ去られる。

誰も彼も初めから何もなかったかのように、消えてなくなる。

結局、死んで無になる。

とすれば、すべては自己満足か。

──むなしい。

俺の心はずっと空くう虚きょだった。

餓が鬼きのころから女を商品に仕立てあげる仕事をやっていて、彼女らをモノとして扱あつかい、ときに痛めつけ、服従させることに快感を覚えはした。年長のハヤ九ク三ザどもに殴なぐられ搾さく取しゆされ戯たわむれに奉ほう仕しさせられ辱はずかしめられる三サン下シタの餓鬼は、女を虐ぎやく待たいして鬱うつ憤ぷんを晴らすのがあの世界の常識だった。

そうして女を商品化する技術を習得する。技術は地位を向上させる。我が慢まんしていればそのうち体も成長する。腕力も強くなる。目め端はしが利きくやつはもっと上にとりいることもできる。そうすればもう三サン下シタ扱いされることもなくなる。いつか立場が逆転する。示しをつけるために復ふく讐しゆうする。恐おそれられ、陥おとしいれられ、やり返し、殺して、のしあがる。

しかし、そんなふうに生きてきた男が、自分で歯を抜いて商品にした女に、哀れまれて愛されて狂くるおしくその女を抱だいたところで、最初から外れていた歯車がもとに戻もどるはずもない。

愛などわからなかった。

この心臓をわしづかみにするのは、怯おびえ震ふるえ泣き叫さけぶ顔だけだ。

それが快楽だ。

糞ふん尿にようまみれの裏街で物心がついたばかりの子供を生きのびさせた、生の衝しよう動どうに似たものだ。

そんな俺に、あの女はなんて言った……？

あなたが好きよ。

でも、あなたに愛されたいなんて望まない。

わたしはあなたがかわいそうなだけ。

自分をかわいそうだと思うこともできないあなたがかわいそう。

……わたしもかわいそう。

ねえ、殺して。壊こわして。わたしを、壊して。

　あの女は━貧しい父母が端はした金がねを手にするために身売りさせられ、商品になった。反はん抗こう的な女だったから、この手で歯をぜんぶ抜いてやった。それでも、従順にはならなかった。女は無表情で言われるがままに仕事をこなすだけの最下級の商品になった。豚ぶた小屋に近い最低の環かん境きようで、不潔で下品な最低の客。女は定められたように性病にかかって客をとれなくなり、新しい商品の世話をする下女の仕事をさせられた。女はそこでたまたま再会した男に、会心の笑えみを浮うかべて言ってのけた。

　あなたたちの思いどおりになんかならない。年をとって用済みになるまであなたたちのために下げ衆すの一物銜くわえて金を稼かせぐなんて冗じよう談だんじゃない。でも、わたしは生きたい。死にたくない。死んでたまるものですか。だからこうして溝どぶ水みず啜すすって生きているの。生きて、生きて、いつか必ず逃にげだして、自由になってやるから。

　男はそれから女と会うようになった。理由は判然としない。このしぶとい女を屈くつ服ぷくさせることができたなら、その快楽はなかなかのものだろうとでも思ったのか。この空虚な心をいくらかでも満たすことができるかもしれないと、浅はかな期待でも抱いだいたのか。ただの気まぐれか。

　だが、女の病やまいは重かった。女は次し第だいに衰すい弱じやくしていった。女はひどく苦しむようになった。女は絶望の虜とりことなった。男は口くち惜おしかった。弱ってゆく女を見ていると苛いら立だった。所しよ詮せん、口先だけか。いつか逃げるんじゃなかったのか。やがてもう死を待つのみとなった女は裏街に打ち捨てられた。男が育った街に。

　男は女を見つけて囲った。

　なぜそんなことをしたのか。

　理由を探して、男は女に愚ぐにもつかない話をした。

　生おい立ち。生きのびるために犯おかした罪の数々。年長のハヤ九ク三ザどもの仕打ち。冷めた復讐。

　女はいつも黙だまって聞いていた。ときに男の手を痩やせた指でそっと握にぎった。ときには涙なみだを流した。男は一度だけ女の涙をぬぐって舐なめた。塩しお辛からかった。

　そして、ある日、女が言った。

　殺して。壊して。わたしを、壊して。

　男は女が息絶えるまで何度も抱いた。

　最後の最後に死を望んだ女がいなくなると、男の心はやはり空虚なままだった。以前と変わらぬ日々だった。跡あと目め争あらそいの末に王龍の頭になって、龍州統一をなしとげた齊家キ・チアが風紀粛しゅく正せい、黒社会撲ぼく滅めつを掲かかげてハヤ九ク三ザ一いつ掃そうに乗りだし、手下どもを率いて大陸に逃のがれ、エルデンに流れついて、骨こつ龍りゅうやＳ＊Ｋとつるむようになっても、男は快楽の欲求に従い、また、組織の長としての義務を果たすだけの坦たん々たんとした毎日を送っていた。

　あのときまでは。

「お。ジン」

　ドアを開けて部屋に入ってきたのは、子供みたいな背せ丈たけの男だった。顔も餓鬼みたいだ。よく動く目が小動物めいていて、表情もくるくる変わる。普ふ段だんはやたらと厚着で、真夏でもフード付きのコートを身につけているが、今はタンクトップにトランクスという恰かっ好こうだ。タオルでまだ半分濡ぬれたままの頭をゴシゴシふいている。風ふ呂ろ上がりらしい。闇やみ市いちのまんなかあたりにあるこのアジトは、小さいが設備はひととおりそろっている。

「一人っきしで飲ンでたのかよ」

「ああ」

　そう答えたものの、掌てのひらの上で揺ゆらしたグラスの中身は、たいして減りもせずにまずそうなウィスキーの水割りと化していた。氷が溶とけきってからだいぶ経たっているようだ。

刑ジン王ワンは一秒間だけ迷ってから、それを一気に飲み干した。案の定、まずかった。泥どろ水みずのほうがまだマシだとさえ思えるが、おかげでさしたる感傷も伴ともなわない中ちゆう途と半はん端ぱな追想を追い払はらうことはできた。

「えーッとォ……麦酒ビア、麦酒ビアッと……」

　餓鬼みたいな男は部屋の隅すみの冷蔵庫を開けて、麦酒ビアを探している。

刑ジン王ワンは腰こしかけているソファの前に配置されたソファテーブルに空のグラスを置いて、かわりに手にとった色眼鏡サングラスをかけた。

「一番下の段だ」

「下ァ？　あ。あった。ジン、テメーも一本飲やっか？」

「俺はいい」

「遠えん慮りよすンなよ。それとも、麦酒ビア嫌きらいだったっけテメー」

「そういうわけじゃない」

「ンじゃ、つきあえよ」

「飛燕フエイヤン」

「あ？」

「何か着ろ」

「ン……」

　飛燕フエイヤンは自分の体を眺ながめてから冷蔵庫を閉めて、すでにとりだしていた二本の麦酒ビア瓶びんをいったん床ゆかに置くと、そこらに丸めてあったジャージー地の上下を着たうえにコートをはおった。それから麦酒ビア瓶を持ってきて指で軽々と栓を抜き、一本を刑ジン王ワンに手て渡わたしてからもう一本に口をつけて顔をゆがめた。「ニゲェッ……」だったら飲まなければいい。飛燕フエイヤンにそんな理り屈くつは通用しない。刑ジン王ワンは飛燕フエイヤンから目をそらして色眼鏡サングラスのブリッジを中指で押しあげ、麦酒ビアを一口だけ飲んだ。よく冷えていたが、それだけだった。

「あ、そーィえばよォ」飛燕フエイヤンは刑ジン王ワンの隣となりに腰を下ろした。三人掛がけのソファだが、

刑ジン王ワンは背が高いので二人でも余よ裕ゆうがあるとはいいがたい。それでもこの男と向かいあうよりはいい。外へ出るときのように目深にフードをかぶっているのならまだしも、飛燕フエイヤンのやたらとまっすぐな眼まな差ざしを正面から受けとめていると、なんとも落ちつかない気分になる。「なんか鬼おにスゲェことになってンらしーぜ。アンダグランドだよアンダグランド。テメー知ってっかよ、ジン」

「鋏使いのことか」

「それ。ショーキン出るってよ。一ピキ二億で四ピキだから八億かァ。ま、ビッグマニーだよな。ンでよォ。ンな金出すなァどんなイカレクラ野郎ツクかと思ったら、ラフリィースィアの小説家らしーぜ。小説ってンなラヴリィ儲もうかんの？」

「さあな。知人に小説家がいないから俺にもわからない」

「キャハハハハ！　小説家のダチなんかいねーとか知ってるッツーのンなこたァよォ！」

　飛燕フエイヤンは何が面おも白しろいのかいきなりケタケタ笑いだして、そのうちソファの上で丸くなって腹まで抱かかえる始末だった。あまりに暴れるものだから、飛燕フエイヤンの体が、コート越ごしに、軽くだが、あたる。そのたびに、刑ジン王ワンは表現しづらい居い心ごこ地ちの悪さを味わった。席を立とうとも思ったが、こらえた。こう見えて飛燕フエイヤンは子供と呼べる年ではないし、なぜかそれなりに人望もあるＳ＊Ｋの頭だ。龍州連合の中ちゆう核かくは王龍とＳ＊Ｋで、

荊ジン王ワンにとって飛燕フエイヤンはまだまだ利用価値がある。やや情じよう緒ちよ不安定で、利害よりも気分で動く飛燕フエイヤンの機き嫌げんを些さ細さいなことで損そこねるのは得策ではない。

　王龍の頭として。

　それだけか。

　ひとしきり笑った飛燕フエイヤンが、苦そうな顔で麦酒ビアを飲み干してソファテーブルに瓶を置いた。

「最近さァ……つまンねーんだよ」

　ハアアァァァァという深いため息がつづいた。

　こうして急に話題や口調が変わるのも、いつものことだ。

「なーンつの？　燃えねーッつーか。敵敵敵。テキテキテキテキがいねンだよ。オレァ飢うえてンの。あー超ちようバトりてー。バトりまくりてー。バトバトしてー。熱血してー。どっかに鬼強つえェヤツァいねェーかなァ」

「それなら鋏使いにでも挑いどんでみたらどうだ」

「ヤツらァ所しよ詮せんは畜ちく生しようだろォ？　畜生はどこまでいったって畜生だぜ」

「蜥蜴とかげ人の知能は人間と変わらないらしいが」

「ヘェ。そォなン？　ジン、くわしィーなァ──て、うううッ、寒ッ……」不意に飛燕フエイヤンがブルッと震ふるえて両りよう腕うでで自分の体をきつく抱だきしめた。風呂上がりに麦酒ビアなど飲むからだ。飛燕フエイヤンは普ふ通つうの人間よりかなり体温が高いという病気──かどうか知らないが、とにかくそういう体質で、少し気を抜くと寒気や頭痛腹痛関節痛、吐はき気等々、風か邪ぜみたい

な症しょう状じょうに見み舞まわれる。医術士に診みてもらっても原因は不明で、これといった治ち癒ゆ法もなく、解げ熱ねつ剤ざいや鎮ちん痛つう剤ざいにはとうに耐たい性せいができていて、唯ゆい一いつ、経験的に体を冷やさないほうが調子がいいことはわかっているらしい。

それで、飛燕フエイヤンは年中厚着をしているのだが、困ったことに本人がたまにそのことを失念する。

あるいは、風邪をひいているのに寝ね床どこから抜けだす餓が鬼きのように、意図的に無視するのか。

いずれにしても、生まれつきだというこの体質を抱かかえたまま、よくも今まで生きながらえたものだと思う。しかも、ただ生きているだけでなく、飛燕フエイヤンは龍州の歴史の裏で脈々と受け継つがれてきた裏武術〝八十四散乱打〟の達人級の使い手でもあるのだ。

そういえば、呉ウー戒ジエも同門だったが、彼らは無む手て勝かつ流りゅうの喧けん嘩か殺法しか知らない荆ジン王ワンとは違ちがう。理に適かなっていて、極限まで練りこまれた多た彩さいな技わざが体に染しみついているし、それらを的確に用いるすべが脳にしっかりと刻みこまれている。そのために、気が遠くなるような鍛たん錬れんを積んだということだ。早々に成長も止まってしまい、背せ丈たけは標準以下で、無理をすれば火にあぶられたように発熱するあの体で。

だが、飛燕フエイヤンがそのことを気に病やむそぶりを見せたことは一度もない。おのれの運命を呪のろったりもしていないようだ。何か気に入らないことがあると、烈れつ火かのごとく怒おこってむちゃくちゃなこともするが、その激げき怒どはあくまでまっすぐで曇くもりがない。何か飛燕フエイヤンなりに面白いことがあると、転げまわって馬ば鹿か笑いする。そんなときは心底から楽しそうだ。

　飛燕フエイヤンの黒々とした目に見つめられると、この空くう虚きょな心に無理やり手を突つっこまれて引っかきまわされるような、そんな心地がする。

　━俺は、この男が苦手だ。

　そう決めつけて、目をあわせないようにすることさえ、逃にげているみたいな気持ちにさせられる。

　飛燕フエイヤンはそんな荆ジン王ワンに平然と麦酒ビアをすすめて、隣に座り、たわいもない雑談をして、近づいてこようとする。龍州連合の統制を任せっきりにしておきながら、荆ジン王ワンが要よう請せいすればただちに動いてやることはちゃんとやり、「テメーと組んで正解だな。なーンも考えなくていーから楽で楽で……」と背せ伸のびをして肩かたを叩たたいてくる。まるで、友のように。

荆ジン王ワンは飛燕フエイヤンのほうを見ずに麦酒ビアを一息で飲み干して、ソファテーブルの上に瓶びんを置いた。

「大だい丈じよう夫ぶか」

「──ンー……あー、まァな」飛燕フエイヤンはそう答えてからもしばらく黙だまっていたが、突とつ然ぜん、跳とびあがってソファの背もたれと肘ひじ掛かけを足場にして立ちあがった。「そォォォーだァッ！　あンだけショーキンかかってるッツーことは腕うでっこきの侵入者クラツカーウジャウジャメニメニィあつまってきやがンだろ！　なァ！　だろォ、ジンよォ！」

「そうかもしれないな」

「ンじゃＺＯＯもくッかもなァ！　ミスター・ピンパーとかよォ、トメィトォとかもなァ！」

「……そうだな」

　意表をつかれた。そうか。そういうこともありうる。

　ＺＯＯが──ということは、あいつも。

　もちろん、それは単なる可能性だ。確実ではない。だが、飛燕フエイヤンにはなんでもかんでも自分の都合のいいほうへ、自分にとって面白いほうへ、望ましいほうへと考えたがる癖へきがある。

「いやァでもやっぱピンパーだよなァ。ピンパーはウルトラスゲェよ。オレの〝微み塵じん〟あんなふーにヤスヤスかわしたヤツァ初めてだ。マジありえねェ。ノンストップ断頭台ギロチンレベルだぜありャァ。あー殺ヤりてェ！　ピンパーぶちのめしてー。ギッタングッチョンにしてェー。おーッ燃えてきたァァッ！　おいジン、テメーも行こーぜーいつ緒しよによォ！」

「いや、俺は──」

「ンだよつッきあい悪わりィなァ！　たまにゃいーだろォ？　遊ぼーぜバトろーぜバトラッシュしよーぜフィーバーしよーぜ楽しーッてゼッテー！」

「だが……」

　出し抜ぬけにあいつの顔が脳のう裏りをよぎった。

　真しん紅くの髪かみ。

　あきらめない口くち許もと。

　強気な唇くちびる。

　細くても意志の強そうな顎あご。

　素す晴ばらしい、極ごく上じようの、歯並び。

　そして何より──オレンジ色の瞳ひとみ。運命にあらがう眼まな差ざし。死んでたまるか。生きてやる。生きて、生きて、生きて、生き抜いてやる。

　あの眼差しが俺を灼やいた。それからあいつは俺を実際に焼いた。俺は死ぬ寸前だった。動ける気がしなかった。だが、敵が迫せまってきていることはわかっていた。逃げないと。逃げなければ殺される。死ぬ。無になる。忘れ去られる。存在しなかったことになる。いやだ。死にたくない。忘れられるのは──いや、違う。そうじゃない。それだけじゃなかった。

　忘れるのはいやだと、たしかに俺は思った。

　俺は生きたい。

　覚えていたい。

　俺を愛した馬ば鹿かな女がいたことを。

　もう誰だれも覚えていないだろう、ちっぽけで、みじめで、すべてに見捨てられても懸けん命めいに強がっていたが、最後には結局、死を望むしかなかった弱い女を。そんな女がいたということを、俺だけは覚えていたい。無残な死に顔ではなく、あの女がまだ美しかったころの顔を。

　本当は、俺の心は、空虚などではなかったのかもしれない。

　きっと俺は弱かっただけだ。

　空虚だと、何も感じないと思いこまなければ生きのびられないくらい、俺の心は脆もろかった。

　愚おろかなことに、今、気づいた。はっきりと自覚した。

　あのとき俺は弱さと向きあって、対決し、どうにか勝って、こうして生きのびた。

　俺が飛燕フエイヤンを苦手だと思うのは、おそらくやつが強いからだろう。

　俺は生きのびるために弱さを押し隠かくしてきた。

　飛燕フエイヤンは強くあらねば生きられなかった。

　飛燕フエイヤンの揺ゆるがない黒い目に真正面から見つめられると、おのれの情けない脆ぜい弱じやくさを暴あばかれてしまいそうで、俺は怖こわいのだ。

「ＺＯＯ、か」

　じつのところ、荆ジン王ワンは自分が何を求め、何を欲ほつしているのか、完全にわかっているわけではなかった。もののはずみで口をついて出た言葉をそのまま信じこむほど、初心うぶでもない。

　ただ、あの鮮せん烈れつな瞳の輝かがやきを思い浮うかべると、胸の奥底がほのかに熱をもって、柄がらにもなく口許がゆるみそうになる。

　色眼鏡サングラスの奥の瞼まぶたを閉じると、もうお前しか見えない。

Omenage 897 10th revolution 8th day

サンランド無統治王国首都エルデン第十三区

〝彷徨える魂区(RSW)〟

chapter.7

揺りかごの中

「ぞわっ……」とした。なんだろう、この悪お寒かん。どこかの鬼き畜ちく外げ道どう変態にじっと見つめられているかのような、不純で不潔で不ふ埒らちな呪のろいのターゲットにされているかのような、とにかくものすごくイヤーなかんじがする。

　近くに変態もしくは呪じゆ術じゆつ師しがいないか、あたりを見まわしてみたが、たまに誰かと目があっても、寒気を覚えるほどの粘ねばっこい視線をマリアローズにそそいでいる者はいなかった。気のせいか。でも、鳥とり肌はだまで立っている。気のせいなんかじゃない。本能がそう告げている。

　そわそわしていると、隣となりのユリカが愛らしく小首を傾かしげて顔をのぞきこんできた。

「どうかしたの？」

「あ、や、なんでもないよ」答えた直後にまた悪寒がきた。「……たぶん」

「大だい丈じよう夫ぶ？　具合が悪いとか──」

「それはないと思うんだけど。体調の変化には敏びん感かんなほうだし。無理するのとか嫌きらいだし」

「しょう。でも、何かあったら遠えん慮りよしぇじゅに言ってね？」

「うん」

　マリアローズがうなずいてみせると、ユリカは百万ダラーの微笑ほほえみを返して前に向きなおった。マリアローズもユリカにならう。前にはカタリがいる。後ろにはピンパーネル。トマトクンは相変わらず引きこもりで、サフィニアは修しゆ行ぎよう中、髭ひげはいつものごとく研究だか実験だか探究だかなんだか知らないが、祭さい壇だんに閉じこもってごちゃごちゃやっているのだろう。そんなわけで、最近のパターンどおり、今日のＺＯＯは四人だ。

　しかし、ここ第十三区Ｄ13出入口前には、四人以外にも大勢の侵入者クラッカーや侵入者クラッカーモドキやニワカ侵入者クラッカーや見物人などが集結していた。

「──えー、と、いうことで……」

　そうした欲望や好こう奇き心や興奮で目がギンギラギン状態の人間の群れを前にして、革かわ鞄かばんの上に立っている一人の男が、コホンと咳せき払ばらいをした。

　男は襟えりの大きな暗紫色ワインレッドのシャツと白黒豹ひよう柄がらのスーツを着ていて、七三にわけたまだらのプラチナブロンドと黒くろ髪かみは、遠くからだとやはり白黒に見える。片眼鏡モノクルをあやしく光らせて、灰色の猫ねこを肩かたの上にのせ、この企き画かくの主しゆ旨しと概がい要ようとやらを説明する姿は、よくてペテン師、悪ければ詐さ欺ぎ師しといったところだ。

　もっとも、結局、役立たずに等しかった創世の翼ジエネシスウイングのファニー・フランクたちにも、約束していた報ほう酬しゆうをポンと払はらったみたいだし、金持ちであることは間ま違ちがいないようだ。

　ルイ・カタルシスというペンネームの作家が、ラフレシア第三帝てい国こくで娯ご楽らく小説の巨匠マエストロと呼ばれていることも、どうやら事実らしい。

　なんでも、かの国の第三皇子はルイ・カタルシスの熱ねつ狂きよう的なファンで、彼を自身の後見団セコンダンテの一員に加えたうえ、皇帝に上奏して、士爵シユヴアリエの爵しやく位いまで与あたえてしまったとのことだ。士爵とは、古くは戦場で大いに手て柄がらを立てて、名めい誉よある帝国騎き士しとして認められた者に与えられた称しよう号ごうで、貴族でこそないが、それに準じる存在とみなされている。現在は、主に帝国の政治的軍事的文化的発展に寄き与よして、皇帝に終生の忠誠を誓ちかった者に授じゆ与よされる爵位だ。つまり、ルイ・カタルシスは、作家でありデザイナーであり準貴族でもあるのだ。

　そのルイ・カタルシスとあのルイ・カタルシスが同一人物かどうかは定さだかではない。

　だが、まあ、考えてみればそんなことはどうだっていいのだ。

　あの男が巨きよ匠しようだろうが、拒きよ食しよく症しようだろうが、漁色家だろうが、漁師だろうが、半漁半農だろうが、半魚人だろうが、カタリだろうが、なんでもかまわない。

「〝鋏使いザ・チヨツパー〟、〝圧搾魔ザ・コンプレッサー〟、〝拳姫フイストプリンセス〟、〝超食漢スーパーイーター〟、それぞれの首につき二億ダラー、しめて八億ダラーということになりますね。本日、急な募ぼ集しゆうにもかかわらず、こうしてお集まりいただいた皆みなさんに、賞金の独どく占せんを目指して争うもよし、共きよう闘とうするもよし──とにかく、彼ら蜥蜴とかげ四兄妹きようだいを討とう伐ばつしていただこうというのが、当企画『蜥蜴狩り』の主旨であり概要です」

　──そのお金さえ本当にもらえるのであれば。

　だって、うまくいったら八億ダラーだ。八億といったら、一生遊んで暮らせるどころか、ちょっとやそっとのことでは使い果たせないくらいの額だ。いや、金持ちにとってはそうでもないのかもしれないが、マリアローズのような庶しよ民みんにとっては天文学的数字だ。いつだったか、三億ダラーに目がくらんで痛い目に遭あったこともあったけれど、八億はその倍以上なのだ。

　もちろん、首一個で二億×四＝八億なので、全額ゲットできるとはかぎらない。が、二億でも十分すごい。二億をＺＯＯの四人で山分けしても五千万ダラー。いや、マリアローズのぶんはマリアローズのぶんで、カタリのぶんはマリアローズのぶんだから、マリアローズの取りぶんは一億ダラー。最高で四億ダラー。

　粋ＣＯＯＬだ。

　まさしく、一いつ攫かく千せん金きん。一昨日この目で見て、蜥蜴四兄妹の恐おそろしさは身にしみてわかっているが、この誘ゆう惑わくには抗こうしがたい。

　当然、やつらの首をゲットすることが、たやすい仕事ではないことはわかっている。市内の何箇か所しよかに掲けい示じされた貼はり紙と口コミで集まってきた鼻の利きく者たちは、ＺＯＯをふくめて総勢七十余名。見るからに腕うでの立ちそうな連中もいるし、戦力的には心強いが、競争率も高い。

　それでも、挑ちよう戦せんしてみる価値はある。何せ、こっちには神速のピンパーネルがいるのだ。場合によっては、彼に頼たのんでおいて、おいしいところをさらってもらうという、ほんのちょっとだけずるい手を使ってもいい。最初は後方に位置取りをして慎しん重ちように様子をうかがい、これはどうも危ないと思ったら、地

上に逃にげればいいわけだし。

「なお、この『蜥蜴狩り』の模様については──」

　マリアローズが双そう眸ぼうに野心の火をともして忍しのび笑いをもらしている間も、ルイ・カタルシスが説明をつづけている。

「後日、拙せつ著ちよで紹しよう介かいさせていただくことになると思います。募集要よう項こうにも記しておきましたとおり、その際、氏名年ねん齢れい身分容姿などのプロフィールもあわせて書かせていただきますので、それがおいやな方の参加は、申し訳ありませんがお断りさせていただきます。それから、なるたけ足手まといにならないよう注意して、ぼくとジュジも同行します。その点もご了りよう承しようください。当然、運悪くぼくが完全に死んでしまったら、賞金は出ません。というより、出せません。ですから、賞金が欲しい方はぼくとジュジをしっかり守ってくださいね。何かご質問は？」

「いくつか確かく認にんさせてもらおう」

　と、集団のまんなかあたりで、長めの黒い巻き毛に褐かつ色しよくの肌はだの偉い丈じよう夫ふが手をあげた。

　マリアローズから見ると、後ろ姿なので顔はわからないが、暗色系の軽そうな防具は最小限といったかんじなのに、腰こしや背中に長ちよう剣けん、短剣、投げ斧おの、小型の弩いしゆみなど、武器はじつにたくさん携けい帯たいしている。それでいて、手当たり次し第だいという印象はない。動きを妨さまたげないようにかなり工く夫ふうしているようだ。野太い声も落ちついている。きっとひとかどの人物なのだろう。名のある男か。

　そんなことを考えていたら、カタリが魚顔だけこちらに向けて教えてくれた。「鉄のアイアン心臓ハーツ協会ソサエテイの会長マスター、ロドリゴ・ファルコーネや」

「……ああ、あの人がそうなんだ」

「せや。エルデンに数あまたおる現場主義の稀少物レア・蒐集家ハンターのなかでも、ファルコーネのオッサンは五本の指に入る凄すご腕うでや。オッサン、今回はクランをあげて参加しよるみたいやし、一番のライバルやろな」

「ふうん……なるほどね」

　鉄のアイアン心臓ハーツ協会ソサエテイといえば、かなり硬こう派はなアンダーグラウンド攻こう略りやく専門のクランだ。その名もずばり「鉄の心臓アイアンハート」というゴツイ指輪をつけた協会員メンバーたちは皆、もぐって探して殺してゲットしてのハードでタフな毎日を送っているという。

　会長マスターのロドリゴ・ファルコーネは、たしか三十七歳の男盛ざかり。侵入者クラツカー歴二十年以上の大ベテランで、これまで手に入れた財宝は数知れず。話によると、焼きつバーニくし刺しングレ貫く剣イピア〝劫ごう火か〟の姉し妹まい剣、凍てつフローかせ刺しズンレ貫く剣イピア〝凍とう甚じん〟の発見者であり、所有者でもあるらしい。

　そのファルコーネは、この場に集まった侵入者クラツカーたちの代表者のような態度でルイ・カタルシスに質問を浴びせた。

「まず首のことだ。首一つにつき二億とあんたは言ったが、たまたま首がまっぷたつになって、別々のやつがそれを持ち帰ったらどうなる。まあ大金だしな。人数も結構いる。そういう事故が起こっちまうことだってありうるだろう」

「その場合は」ルイ・カタルシスは指先で自分の顎あごをつまんだ。「より原形に近いものをお持ちの方に、ぼくがそれを確認した時点で賞金の権利をさしあげようと思います。具体的には重量ということにしましょうか。万が一、完全に等分されていたら、しょうがないので権利者の人数で割って、端は数すうが出たらそのぶんはジュジのご飯代にさせていただきます」

「しとめ方が悪くて、どうしても首がとれなかった場合は？」

「これは一種のゲームＺだと考えてください。蜥蜴とかげ四兄妹きようだいの首をとるというのがこのゲームの勝利条件です。勝利した方にはご褒ほう美びがあります。かつてぼくの祖国であるラフレシア第三帝てい国こくでは、敵兵の首一つにつきいくらいくらと報ほう奨しよう金きんが決められていて、腰にたくさんの生首をぶら下げた兵士たちが最前線でろくに動けなくなって敵の的になって嬲なぶり殺されたというお話があるんです。勝利条件についてはいろいろ考えたんですが、その面おも白しろおかしい話を思い出して、こういうふうに決めさせていただきました。不満がおありの方は、

まだ間に合いますのでお帰りになってください」

　少しだけざわめきが起こったものの、帰ろうとする者は一人もいなかった。

　ファルコーネは頭とう髪はつを引っかきまわしながら、ぐるりと周囲に視線をめぐらせた。

「──わかった。じゃあ、あともう一つ。首以外のことだ。今、あんた自身が言ったように、このゲームとやらの勝利条件はあくまでやつらの首で、他ほかのものはどうでもいい、興味がない。そう思っていいいか」

　その瞬しゆん間かん、前にいるカタリの肩かたがぴくりと震ふるえた。「……やっぱりライバルや」

　やっぱり？　他のもの……？

　マリアローズが不思議に思って首を傾かしげると、ルイ・カタルシスもそれとそっくり同じ仕草をしてみせた。

「はい？　ああ……いえ、そのご質問に対する回答はイエスです。ぼくは彼らの首以外のものに興味はない。正確にいえば、あなたがたが彼らを見事討ち果たすことができるかどうか、その成否、その過程を、ぼくはこの目で見たいのです。そして、やがて刊行される旅行記全十巻のうち一冊のまるまる一章を使って、この出来事の顚てん末まつを物語ることになるでしょう」

「たかだか一章のために八億ダラーかよ」ファルコーネは笑ったようだ。

「エルデンは物価が高いですからね」ルイ・カタルシスも笑い返した。

「酔すい狂きようだな。嫌きらいじゃねぇが」

「それは嬉うれしい。ぼくはよく嫌われるんです」

「だろうさ。あんたは人が悪い。おそらく、きわめつけにな。だが、男の価値を決めるのは性格なんぞじゃねぇ、心意気だ。たとえ親兄弟にうとまれ、友を裏切り、女を捨て、世界中の人間にそっぽを向かれても、これと決めた道にすべてをそそぎこむ。ためらわず

恐おそれずにそいつができる男こそ本物だ。あんたは一見なよなよしてて、センスもひでぇもんだが、どうやら本物の男のようだな。気に入ったぜ」

　なんというか、マリアローズにとっては理解しがたい思想だが、カタリはいたく感かん銘めいを受けたらしく、「くぅぅ――――ッ！」と目をつぶり歯を食いしばって拳こぶしを握にぎりしめ、高速で足あし踏ぶみしている。でも、カタリは少なくとも、友だちを裏切ったりできないだろうし、恋こい人びと（がいたら、という、太陽が西から昇のぼって東に沈しずむのと同程度のありえない仮定だが）も捨てられないだろう。せいぜい、これと決めた道に突つき進もうとして、仲間にさんざん迷めい惑わくをかけるくらいが関の山だ。以後もせめて、それくらいにとどめておいて欲しい。ファルコーネの言う「本物の男」なんかになられでもしたら、かなりいやだ。

　いずれにせよ、鉄のアイアン心臓ハーツ協会ソサエテイは人の出入りが激しいものの、三、四十名の規模を常時維い持じしているという。すごく大きいわけではないが、ＺＯＯみたいに小所帯でもない。しかも、かなり活動的で、侵入者クラツカーの間では名も知られている。そうしたクランを統とう率そつしているだけあって、ファルコーネには貫かん禄ろくがあるし、人を惹ひきつける磁力みたいなものも、なんとなく感じた。

　当面は、ロドリゴ・ファルコーネがこの七十余名をリードしてゆく流れになりそうだ。

　だとしたら、しばらくはファルコーネと鉄のアイアン心臓ハーツ協会ソサエテイの動向をうかがいつつ、全体のなかでの位置取りなどを考えてゆくべきか。いや、「べきか」じゃダメだ。決めないといけない。トマトクンがいないとき、ＺＯＯの舵かじ取とり役はマリアローズだ。

　でも――僕なんかでいいんだろうか。

　そう思わなくもないが、他に適任者がいないし、マリアローズには泉里での実績もある。内心、この役割なら、そこそこできるんじゃないかと思いはじめてもいた。純じゆん粋すいな戦せん闘とう能力は間ま違ちがいなく二流以下でも、やりようによっては十分貢こう献けんできるのだ。昨日は不ふ慮りよの事故というか災難というか、とにかく逃にげて逃げて逃げるしかなかったが、今日はちゃ

んと心構えをしている。同じ轍てつは踏まない。きっと、絶対に、うまくやってみせる。

「えー、では、他に何かご質問は……」

　ファルコーネとの質疑応答が終わったあとも、何人か手をあげる者がいて、ルイ・カタルシスはどうでもよさそうな問いにもいちいち丁てい寧ねいに回答を与あたえている。

　一方、マリアローズは、ファルコーネにちらちら目をやりながら、腕うで組ぐみをして思案中だ。

　とりあえず、ユリカにカタリをつけて、ピンパーネルには主戦力として前に出てもらい、僕は――自分の身くらい自分で守りたいところだけど、正直、心こころ許もとないので、ＺＯＯ以外の連中を盾たてにするとして。とにかく、時機だけは絶対に読み間違えないようにしないと。勝負所はどこか。そもそも、首一個、二個、三個、四個、どのラインで勝負するのか。欲張りすぎは禁物だ。ただ、慎しん重ちようになりすぎれば、何もえられないかもしれない。

　どうもカタリにうまくのせられたような気がしてならないけれど、せっかくきたのだ。手ぶらで帰りたくはない。もちろん、生命の安全を最優先にするとしても、多少なりとも危ない目に遭あうことは間違いないのだ。リスクをことごとく回かい避ひしようとするのなら、家のなかでじっとしているのが一番いい。すでにそれ以外の選せん択たくをしてしまった以上、リスクを冒おかして行動を起こすべき瞬しゆん間かんがいつかやってくるはずで、その妥だ当とう性を判断するために、ある程度の基準を設定しておくのがベターだと思い、二億、四億、六億、八億、うーん――と、頭のなかに蜥蜴人の首を思い浮うかべながら唸うなっている最中だった。

　突とつ然ぜん、すぐそばで砂色の旋つむじ風かぜが起こった。

　それより少し早かったか、遅おそかったか。どちらにしてもほぼ同時に、パシィン……と地面を叩たたく大きな音がした。

　近かった。マリアローズはとっさに飛びのきながら見た。一瞬だけだったが、それは静止画のようだった。

　ピンパーネルが空中で砂色の衣ころもをはためかせ、雄おすのグレアデと雌めすのリレッザを抜ぬいて視線を下に向けていた。

黄褐色オークルと濃紺色ネイビー、灰色グレイの分厚いコートに、同じく厚手のパンツ、ブーツ、グローブをつけ、目深にフードをかぶった、かなり厚着の──こども（？）が、ピンパーネルを見上げている。

その右足に踏まれている石いし畳だたみが、蜘く蛛もの巣状にひび割れていた。

割ったのか。

踏んづけただけで。

さっきのあれはその音だったのか。

──だけど、こいつ。

シリアルキラーの衣服。

現在は龍州連合として、あの刑ジン王ワンの王おう龍りゆうと一いつ緒しよに闇やみ市いちを支配しているらしい、龍州系クランのシリアル・キラーズ。

Ｓ＊Ｋ。

その頭の──飛燕フエイヤン。

なんでこんなところに？

だが、そんな疑問はすぐに吹ふっ飛んだ。

「ミスター・ピンパァァァ……！」飛燕フエイヤンの声はどういうわけか嬉き々きとしていた。この時がくるのをずっと待っていた。やっと機会が訪おとずれた。そんなかんじだった。それはべつにどうでもいい。理解不能だが、この世には不可解なことなんていくらでもある。わけのわからないことを無理やり理解しようとも思わない。

　ただ、飛燕フエイヤンがいきなりピンパーネルに襲おそいかかってきたらしいことは、ちょっと問題だった。それで空中に逃のがれたピンパーネルを、地上の飛燕フエイヤンが迎むかえ撃うつ気満々といった構えでいる。これもやはり少々問題だろう。さらに、そう見せかけておいて、飛燕フエイヤンが急に体の向きを変えたことにいたっては、ゆゆしき問題だ。

　だって、飛燕フエイヤンが方向転てん換かんした先にいるのは、他ほかの誰だれでもない。

　マリアローズだった。

「……嘘うそ」

　動けない。飛燕フエイヤンからマリアローズは五メーテルと離はなれていないのだ。あっという間だ。絶対、無理。殺やられる？　なんで？　僕、何か悪いことした？──まったくしてないとは言えないけど。でも、理り不ふ尽じんだ。まあ、死なんてたいがい理不尽なものなのかもしれないが、さいわい今回は容よう赦しゃのない死神の鎌かまからどうにか免まぬかれることができた。

　といっても、マリアローズがそのために何かしたわけではない。

　ピンパーネルが雄のグレアデと雌のリレッザを投じて、飛燕フエイヤンがそれをよけるために横へ体を投げだしたことで、マリアローズは命拾いしたのだ。

「──かぁ～さすがァァ……！」周囲の侵入者クラツカーたちが逃にげ散るなか、横転、バック転、バック宙で少し距きょ離りをとった飛燕フエイヤンは、両の拳こぶしを打ちあわせてキャハハッと笑った。「ミスター・ピンパー！　テメーやっぱヤヴァすぎだぜ……！」そして、マリアローズの前に着地したピンパーネルに突つっかかってくる。ピンパーネルは地面に突き刺さっている雌し雄ゆう一いつ対ついの短たん剣けんをまだ回収していない。飛燕フエイヤンは無手のピンパーネルにまず右のローキック、立てつづけに左のローから右の回転後ろ蹴げり、間かん髪はつを入れず左の前蹴りを繰くりだして、ぜんぶきれいによけられた。ピンパーネルはたとえ武器を持たなくても巧たくみな戦士だった。息をつく間もない飛燕フエイヤンの攻せめを回避しながら、ちゃんとマリアローズやユリカから離れている。

だが、マリアローズが雄のグレアデと雌のリレッザを地面から引き抜いている間も、飛燕フエイヤンは攻こう撃げきの手をゆるめない。拳。手刀。親指人さし指中指親指小指。肘ひじ。肩かた。背中。膝ひざ。脛すね。爪つま先さき。踵かかと。足刀。頭。身体からだ中のさまざまな部位を凶きよう器きに変えて、飛んだり跳はねたりくるくる回転したりしながら、なんとあのピンパーネルを防戦一方に追いこんでいる。

いや、そうとも言い切れないか。

よく見れば、飛燕フエイヤンはピンパーネルの体にほとんどふれることができていない。ピンパーネルはまだ余よ裕ゆうがある。追いつめられてはいない。とはいえ、ピンパーネルが手加減をしているとも思えない。手心を加える理由がない。

飛燕フエイヤンは圧あつ倒とう的な手数でピンパーネルの反撃を封ふうじているのだ。並外れた筋力と柔じゆう軟なん性、瞬発力、それから普ふ通つうに考えればハンディキャップであるはずの小さな体が、かえって利点になっている。小こ柄がらゆえに、とんでもなく小回りがきくのだ。パンチのスピードそのものが速いうえ、腕うでが短いために、突きだして戻もどすまでの時間も短くなる。攻撃と攻撃の間かん隔かくが恐おそろしいほど短い。標準体型の人間なら隙すきになってしまいそうな大きい動作が、飛燕フエイヤンの場合はそうはならない。

速い。

目が回りそうだ。

マリアローズは雌雄一対の短剣をピンパーネルに投げ渡わたす機会をうかがっていた。

でも、できっこない。

ピンパーネルと飛燕フエイヤンは、マリアローズをふくめた侵入者クラッカーたちにぐるりと取り囲まれて、まるで苛か烈れつな舞ぶ踏とうのごときタイマン素手喧嘩ステゴロを繰り広げている。もちろん、これは舞踏なんかではない。それなのにそんなふうに思ってしまうのは、二人の技わざがあまりに研とぎ澄すまされていて、ある種の美さえ感じさせる高みに達しているからだろう。

　だから、他をよせつけない。

　一級の芸術品のように、手をふれてはいけないのではないかと思わせる。

　というか、実際問題、超ちよう高速で互たがいの場所を入れかえながら移動しつつ激しく戦っている二人にふれるなんて、危なくってできるものか。当然、ピンパーネルに武器を渡すこともできない。マリアローズとしては、固かた唾ずをのんで見守っているしか──ないのだろうか？　本当に？

「……あ」

　思いついたことがあった。そうだ。手がないわけじゃない。どうせ使いどころは限定されているブツだ。しばらく携けい帯たいしていなかったが、大人数の集団戦せん闘とうだと爆ばく弾だんは投げづらい。泉里決戦でそのことを学習したし、ストックがあったので一本持ってきてはみたものの、具体的な用よう途とが頭にあったわけではなかった。過去、ちょっぴり役立ったこともあるから、状じよう況きようによっては何かに使えるんじゃないか。そのくらいの気持ちだったのだが、まさかこんなに早くホムニアス・カーヴの出番がくるなんて。

「カタリ、これお願い」

「……ひょ？　あ、おお……」

　マリアローズは隣となりで飛燕フエイヤンとピンパーネルの戦いに見入っていたカタリに雌雄一対の短剣を押しつけ、ベルトのホルダーに手をのばした。カバーを外し、ほんの少し黄みがかった透とう明めいの液体で満たされた小こ瓶びんを一本抜ぬきとった。投げる前に、ちょっと振ふってみた。たぶん、劣れつ化かはしていないはずだ。

「──おい、お前じぶん、それ……」

「みんな下がって！」

　カタリは爆弾だと思ったのかもしれないが、いくらなんでもそこまで乱暴な真ま似ねはしない。ホムニアス・カーヴだったら、たとえ被ひ害がいをこうむったところで、死んだり怪け我がをしたりするわけじゃないし。

そんなわけで、ホムニアス・カーヴの効果範はん囲い、半径約七メーテルの半球状空間のなかに、飛燕フエイヤンとピンパーネル以外が入っていてもかまわずに──って、七メーテル？

ということは、直径十四メーテル？

「やば」

遅おそかった。

投げてしまった。

マリアローズの声を聞き、その手から放たれた小瓶を見て、不ふ穏おんな気配を察知して後退した賢けん明めいな者もなかにはいた。でも、わりと無む駄だだった。

なぜなら、ここは幅はば十メーテル、長さ二十五メーテルほどの坂道の途と中ちゆうで、この先には半径約五メーテルの半円状のＤ13出入口が、ぽっかり口をあけている。坂道を挟はさむ両側の壁かべや出入口の周りには、意味ありげでじつは無意味な魔ま法ほう陣じんや魔法円などが刻印され、焼きつけられて、描えがかれているのだが、それはどうでもよくて──道幅が十メーテルということは、たとえ壁際ぎわぎりぎりまで逃げても、ホムニアス・カーヴの範囲に入ってしまう。

すると、どうなるか。

飛燕フエイヤンとピンパーネルは、侵入者クラツカーたちが人ひと垣がきになって囲った縦横六、七メーテルくらいの空間でタイマン勝負を演じていた。

小瓶はその中心あたりの地面に落ちて、割れた。

液体のホムニアス・カーヴは、一いつ瞬しゆんでクリーミィな白い泡あわと化した。

そのマシュマロみたいな泡が、ものすごい速度でどんどん膨ぼう張ちようしてゆく。

当然、距きよ離り的に、いち早くマシュマロに取りこまれたのは飛燕フエイヤンとピンパーネルだった。が、マシュマロの猛もう威いは、たった二人の犠ぎ牲せいでおさまるような、なまやさしいも

のではない。逃にげ惑まどう人々。しかし、マシュマロの膨張速度にはとうてい勝てない。無力な人間どもが次々とマシュマロに襲おそわれてのみこまれてゆく。悲鳴があがる。「━なっ……」「うお！」「なななななななんだ」「ひぃ」「うげっ！」「おわぁっ……！」マリアローズはせめて自分も甘んじてマシュマロを受けいれることで罪を償つぐなおうと思った。「おぴょっ！」「ダメ」もちろん、逃とう走そうしようとするカタリの腕はがっちりつかんで放さない。仲間なんだから地獄ヘルまでつきあうべきだ。
「きゃっ！」「ごめんユリカ」「え……？」申し訳ないが、ユリカの手もつかまえた。マシュマロ内の混乱で転んだり誰だれかとぶつかったりするよりは、じっとしているほうが安全だと思った。その間、数秒。白いマシュマロの壁がすごい勢いで迫せまってくる。マリアローズは目をつぶってその時を待った。すぐだった。「━ぶっ」



　自分で味わったのは、じつは初めてだ。

　このマシュマロ、本物のマシュマロじゃないだけあって、やっぱりさっぱり甘くない。

　てゆうか、めちゃくちゃ苦いよ……。

　十数分後、固体化したホムニアス・カーヴは、かきわけられ、ちぎられて、放ほうり投げられ、風に飛ばされて、そこかしこに残ざん骸がいがこびりついて転がっているものの、大部分はどうにか撤てつ去きよされつつあった。

　その作業に嫌いや気けが差して帰ってしまった者が、現在のところ三名ほど。

　甘くないマシュマロで衣類防具類髪かみの毛や顔が汚よごれて、不ふ機き嫌げんそうな者は──数十名ほとんど。

　あまり気にしている様子のない奇き特とくな者は、若じやつ干かん名。

　その若干名のなかに飛燕フエイヤンがふくまれていることを、幸運と考えるべきかどうか。

「いやマジビビッたっつーの。いきなしアレだもんありえねーキャハハハハ」

　飛燕フエイヤンは甲かん高だかい笑い声を立てながら、マリアローズとピンパーネルの肩かたをバシバシ叩たたいている。ピンパーネルはいつものごとく無表情だが、どことなく迷めい惑わくそうだ。マリアローズも飛燕フエイヤンの馬ば鹿か力のせいで肩が痛いのだが、抗こう議ぎする気にはちょっとなれない。というか、肩以上に周りの冷たい視線が痛くて、口を開くのもはばかられる。

　だから、カタリが「せやけどな、お前じぶん──」と飛燕フエイヤンをにらみつけたときは、珍めずらしくこの半魚人を心のなかで応おう援えんした。がんばれ。多少殺されてもいいから、がんばれ。

「フツーに考えたらめっちゃおかしいで。突とつ然ぜんウチのピンプに襲いかかってきよったお前じぶんが、なんで平気なツラしてここにおられんねや」

「あン？　ンだテメー？　オレァべつにナンも悪わりィことしてねーから平気なツラしてっけど、テメーなんか人間じゃねーカジカみてーなツラしてやがンじゃねェか」

「カジカ……？　なんやそれ」

「知ンねーのカジカ、無知だなテメー。食ったらうめーけどメタクソ不細工な魚だよ」

「魚かいな！　しかも不細工かい！　ついでに無知呼ばわりかいな！　でも、ま、うまいんやったらええか──って、ええわけあるかボケ！　わしのボデーは大事なボデーや、わしの生存に関かかわりまくっとるんや！　誰にもよう食わせんわい！」

「キャハハハハ。テメーのノリ超ちようウゼェー。な、な、殺してイー？　スゲェむかつくから殺してもいーだろァ？」

「ええわけないやろ！　自分の殺害了りよう承しようするほど世をはかなんどらんっちゅうねん！」

「つまんねーキャハハハハ」

「見たかんじめっちゃ楽しそうやけどな！」

「気のせーだっつのカジカ。キャハハハハ。す、スゲェ、死ぬほどつまんねーキャハハハハ」

「カジカはやめいや！」

　カジカ、いや、カタリは顔を真っ赤にして怒おこっているが、飛燕フエイヤンは腹を抱かかえて笑っている。期待なんかしていなかったけれど、やっぱりダメか。仕方ない。このまま半カジカ人がからかわれる光景を眺ながめていても、埒らちがあかないだろう。マリアローズは周囲の目を気にしながら一つ咳せき払ばらいをして、小声で飛燕フエイヤンに訊きいた。

「──で、いったいどういうつもりなの。僕の記き憶おくが間ま違ちがってなきゃ、たしか、きみ、あとで借りは返すとかって僕らに言ってたような気がするんだけど。前に、第六区で」

「カリィ……？」飛燕フエイヤンはきょとんとしている。「何それ食えンの？」

「さあ。あんまり食べないと思うけどね。てゆうか、借り云うんぬんはきみが言ったんだよ」

「いつ？」

「えーと、九巡じゆん月げつの……あれは、九番日かな」

「キャハハハ。一巡月も前のことなんざイチーチ覚えてねーって。細ッけーなテメー。あんま細けーと胃ィ悪くなって口臭くさくなンぞキャハハハハ」

「僕の口は臭くない！　胃も悪くないし健康体だっ！」

「マジかァ？　じゃーハーッてやってみ。ハーッて」

「ハー」

「オー。いちごのハミガキ？」

「──って、何やらせるんだよ！」

　いけない。完全に飛燕フエイヤンのペースに巻きこまれている。マリアローズはスーハー深呼吸をして気持ちを落ちつけようとしたが、うまくゆかないので頭にきて、カタリの左脛すねを蹴けった。「ふだっ」「だいたい、きみがいけないんだ！　カジカって呼ばれたくらいなんだ！　生まれてこの方ずっと魚魚魚魚って言われつづけてきたんでしょ。カジカくらいどーだっていうんだよ、カジカ！」「お前じぶんな、言うてることめちゃくちゃやぞ！」「うん、わかってる。でも、これでちょっとすっきりして落ちついた。ごめん。ありがと」「単なる八つ当たりとストレス解消かい！」「悪い？」「悪いわ！　極ごく悪あくや！」

　悪かろうがなんだろうが、とにかくこれで冷静さをとりもどすことはできた。マリアローズはとりすました顔で飛燕フエイヤンに向きなおった。

「とりあえず、ここにいるってことは、きみも『蜥蜴とかげ狩がり』に参加するつもりなんだよね」

「まーな。なんかよォ最初はミスター・ピンパーとバトれッかなーとかって思ってきたんだけどよォ。途と中ちゆうで水差されてチョイ冷めちまったかんじだから、テンション上げなおすためにも畜ちく生しようとやンのもいーンじゃん？　とか思ってさァ。またあとでやろーなミスター・ピンパー」

「………………」

　ピンパーネルは飛燕フエイヤンに肩を叩かれても返事をしない。できないのかもしれない。マリアローズにとっても、飛燕フエイヤンみたいな相手はやりづらいというか、どう対応していいのかよくわからないので、ピンパーネルは余計そうだろう。こういうやつとはできるだけ関わりあいになりたくないものだが、飛燕フエイヤンも同じように考えてくれるとはかぎらない。

「まッ、そーゆーわけでヨロシク頼たのまァー」

「は？」

「だってテメーら以外ダチはいねーしよォ。手下ども連れてきたってあいつらじゃ役に立たねーし、結局ジンもこねーみてーだし、身軽なのはイーけど寂さびしーだろやっぱ一人っつーのも」

「ダチ……？　僕らが？　きみと？　なんで？　いつから？」

「いつからっつーかなんとなくそンなフィーンキだろ。なァ、ミスター・ピンパー」

　爪つま先さき立ちの飛燕フエイヤンに馴なれ馴れしく肩を抱だかれたピンパーネルは、さすがに無表情でいる限界を超こえたのか、眉まゆをひそめている。カタリやユリカも呆あつ気けにとられている様子だ。マリアローズだって啞あ然ぜんとしている。いったい、こいつの頭のなかってどうなってるんだ？　一度、解かい剖ぼうして脳みそを徹てつ底てい的に調べてみてから叩き壊こわして処分してしまいたい。そうしたいのはやまやまだけれど、何しろ飛燕フエイヤンは、素す手でならピンパーネルと互ご角かくに戦えてしまう、かなりの猛も者さだ。侮あなどれない、この男。男といっても、マリアローズより背が低いし、ぱっと見たかんじでは、こどもみたいなのだが。

「オ！　なァなァ、テメー医術士？」

「え？　しょ、しょうだけど……」

　なんの前まえ触ぶれもなく、ユリカの前にぴょんと移動して声をかけたりするあたりの落ちつきのなさも、やけにこどもっぽいし。

　そういう折りに見せる笑え顔がおも、やたらと無む邪じゃ気きで

屈くつ託たくがない。なんとも傍はた迷めい惑わくなやつだが、どこか憎にくめない。というか、憎みづらい。こんなやつを憎むなんて大人げないと思ってしまう。

「ふーん……」飛燕フエイヤンは腕うで組ぐみをしてユリカの周りをぐるぐる回った。「へー……」回りながらさまざまな角度でユリカをしげしげ見ている。好こう奇きの視線というわけではなく、しきりと何かに感心しつつ観察しているふうだが、ユリカは居い心ごこ地ちが悪そうだ。「医術士ねェー。テメー年いくつ？」

　答える前に、ユリカは少しだけ唇くちびるを嚙かんで心持ち顎あごを上げ、飛燕フエイヤンをしっかりと見み据すえた。

「二に十じゆう三しやんよ」

「──そっ……か……」飛燕フエイヤンはユリカのまん前にしゃがみこんでうつむき、「そっか……」もう一度そう呟つぶやいたあと、顔を上げてユリカに笑いかけた。「オレと同い年かァ。ヨシ。テメーのことはオレが守ってやっから安心しろよ。オレァ強つえェーからな。ミスター・ピンパーには勝てっかどーかわかんねーけどよォ。カジカよりはゼッテー強ェーぞ」

「……べ、べちゅに、あなたに守ってもらわなくても、自分の身くらい自分で……」

「遠えん慮りよすンなって」

「遠慮とかじゃなくて……」

「せや！　ユリカはわしらの仲間やで！　なーんでお前じぶんみたいなわけのわからんチビクソガキに──れ？　ユリカとタメっちゅうことは……わしより年上？」

「ンだテメーカジカ野や郎ろう、オレよっか生きてねーのかよ。チャッチャと長生きしろよバーカ。まァいーか。オレァ上とか下とかにこだわってるわけじゃねーンだ。とにかくよォ医術士、テメーがどう思おーと関係ねー。そばにいるかぎりテメーのこたァ守るってオレァ決めた。オレが勝手にやるンだから気にすンなよ。ちなみにオレァ他人の言うことなんざ聞かねーから。止めよーってもムダな」

　そんな言い方をされると、ユリカとしても打つ手がないだろう。

以後、完全に無視するという選せん択たく肢しはあるが、ユリカ好みの態度ではない気がする。

　それに──同い年。

　ユリカと飛燕フエイヤン、どちらも二十三歳には見えない。ユリカについては、マリアローズも事情を知っているが、もしかしたら飛燕フエイヤンにも何かあるのかもしれない。二人には共通点がある。飛燕フエイヤンが突とつ然ぜんユリカを守るなんて言いだしたのは、ひょっとしてそのせいか。なんとなく、そんなことを思った。そして、ユリカもまた、飛燕フエイヤンに対して何かを感じたのかもしれない。

「じゃあ、どうじょご自由に」

　ため息のあとにユリカが浮うかべた表情は、半分呆あきれているようではあったが、怒おこってはいなかったし、いやがっているふうでもなかった。それはむしろ、微び笑しように近かった。

「おー自由にやンぜ」飛燕フエイヤンは嬉うれしそうに鼻をこすった。「医術士、テメー名前は？」

「ユリカよ。ユリカ・白雪しゆノーホワイト」

「ンじゃ、ユリィだな」

「ユ・リ・カ。おかしな呼び方しないで」

「へーへー。わーッたよ、ユリカ。あーオレのこたァ、フェイでいーぜ。テメーらもな」

「……まあ、いきなりツレとは思われへんけど、わしもいい大人やし、根っからの平和主義者やからな。せいぜい邪じや魔まにならんように気ィつけるんやで、フェイ」

「テメーこそ足引っぱンじゃねーぞカジカ」

「カタリや！」

「キャハハハハ。カジカーカジカーカジカカジカカジカーキャハハハハ」

　―なんだか妙みようなことになった。

　というか、この飛燕フエイヤンという男が変なのだ。ＺＯＯとＳ＊Ｋの間にはろくな経いき緯さつがないわけで、その頭の飛燕フエイヤンとマリアローズたちが仲よくするなんておかしい。が、それを言ったら、王龍の㓝ジン王ワンだって同じだ。

　龍州連合。

　その中ちゆう核かくだという二つのクランの頭が、そろいもそろってこんなことでいいのか。

　余よ所そ様さまのことだし、本来であればマリアローズの知ったことではないのだが、実害があるので無関係を決めこんでもいられない。

　とはいえ、ホムニアス・カーヴがらみの騒そう動どうもようやく一段落して、他ほかの侵入者クラツカー連中も出発の準備が整ったようだ。またここで一ひと悶もん着ちやく起こしたら、今度こそどうかお帰りくださいということになるだろう。それはさけたい。マリアローズが極力目立たないように―まあ、無む駄だな努力だが、ピンパーネルやカタリの陰かげに隠かくれて体をちぢこまらせていると、ルイ・カタルシスがまた革かわ鞄かばんの上に立ってパンパパンと手を叩たたいた。

「はい、はい、はい。では、そろそろよろしいようなので、『蜥蜴とかげ狩がり』、只ただ今いまをもって開始ということにしたいと思います。時刻は……おっと、想定外のアクシデントもありましたから、予定より少々遅おくれ気味ですね。十二時十三分。さあ皆みなさん、はりきって行きましょう」

　その声を合図にして、まずロドリゴ・ファルコーネ率いる鉄のアイアン心臓ハーツ協会ソサエテイ三十余名がＤ13出入口へ向かって行進しはじめた。鉄のアイアン心臓ハーツ協会ソサエテイの全員が身につけている「鉄の心臓アイアンハート」は、大ぶりとはいえ、

指輪だけにそれほど目立たない。ただ、秩序モラルの番人・キーパーズほど整然としてはいないものの、かなり統とう率そつがとれているので、一目でそれとわかる。実績を考えれば、なかには手て練だれもいるだろうし、彼らならきっといい前列になってくれるはずだ。

　その鉄のアイアン心臓ハーツ協会ソサエテイ以外では、まとまった戦力といっても、五、六人のグループがいくつかあるくらいか。

　こうした連中は、おそらくいつも一いつ緒しょにアンダーグラウンドにもぐっている者同士だろう。だから、仲間内ではそれなりに連れん携けいもとれているに違ちがいないが、他の人間と協調するつもりはなさそうだ。もしあったとしても、うまくできはしない。

まがりなりにも秩序の番人VS.ＳｍＣの大規模戦せん闘とうに参加したマリアローズにしてみると、それほど簡単なものではないと思う。全体が一人のリーダーに指揮統率されているのではない、今回のようなケースではなおさらだ。彼らをアテにすることは当然できないし、利用するにしても、その方法はかなり限定的なものにならざるをえないだろう。

　で、ＺＯＯは四人（＋一人）。

　質は低くないとはいえ、はっきりいって少人数だ。

　狙ねらうとしたら、漁夫の利。

　そのためにはある程度、計算できる戦力のそばにいなければならない。

「僕らはファルコーネさんたちの後ろに」

「おう」「わかったわ」「はイ」「あンだよ前行こーぜイッチャン前」

　飛燕フエイヤンが何かのたまっているような気がするけれど、マ

リアローズは無視スルーした。戦意が旺おう盛せいなのは結構だが、こっちはちゃんと考えているのだ。しばらく、いや、できれば永遠に黙だまっていて欲しい。

「前行こーぜ前によォー前前前ーマ・エ・ニー行こーぜェー楽しーって前のほうがゼッテー」

「……こいつ、うっさいんだけど。マジで」

　マリアローズはカタリと並んで自分の前を歩いている飛燕フエイヤンの声をさえぎるため、人さし指で耳に栓せんをした。横を見ると、目のあったユリカがやれやれといった表情で肩かたをすくめた。ピンパーネルは今のところ最さい後こう尾びで、状じよう況きように応じて前に出てもらう。これで、鉄のアイアン心臓ハーツ協会ソサエテイが先頭集団を形成し、その次にＺＯＯ（＋一名）、それから他の侵入者クラツカーたちがばらばらとつづく形になった。そして、猫のジュジを肩にのせて革鞄を持ったルイ・カタルシスは──

「どうも。先日はお世話になりました」

「……なんで僕の隣となり？」

「いやあ。だって、いくらなんでも最前列はおっかないですよ。かといって後ろに引っこんでいては状況が把は握あくできませんし。で、このあたりがベストポジションなのではないかと。あなたがたもそうお思いになったのではありませんか」

「さあね」

　マリアローズはルイ・カタルシスから目をそらした。

　なんだろう。どうも、この男の視線は苦手だ。うまく説明できないのだが、不ふ愉ゆ快かいになる、というより──不安になる。ルイ・カタルシスの黒い瞳ひとみは、やけに瞳どう孔こうが大きくて、光こう沢たくがなくて、どこか無機的なのだ。そんな瞳で見つめられていると、こっちまで人じゃなく物になったみたいな気がしてくる。そのせいだろうか。

「でも──」

　ルイ・カタルシスは、マリアローズが敬遠するそぶりを見せて

も、おかまいなしだった。

「昨日、今日と見ていて、あなたは本当に面おも白しろい。やっていることにオリジナリティーがある。こういうこともあるんですね。初めてですよ。ぼくはあなたに興味がある」

　そう言われた瞬しゅん間かんだった。

　脳の隅すみのほうで、何かがチカチカまたたいた。

　興味がある。

　たしか、誰だれかにもそんなことを言われたような。

「興味……？」

　それで、あのときも同じように問い返して。

「好きになれるかもしれないということですよ。ええと……マリアさん、でしたっけ」

　彼女も同じように答えた。

　──りりぃ。

「きみ……」

「はい？　どうかしましたか？」

「あ、や……べつに」マリアローズは頭を振ふった。偶ぐう然ぜん。そう、単なる偶然だ。とりたてて特別な台詞せりふではないし、考えようによっては口説かれているのだと受けとることもできる。もちろん、それはそれでいやすぎるのだが。「──マリアローズ、だよ。あと、念のために言っておくけど、僕、女の子じゃないからね」

「わかっていますよ」

　ルイはジュジの喉のどを人さし指で撫なでながら目を細めた。

「ご心配なく。そういう好きではありませんから」

「……それならいいけど」

　そう返事をしたものの、本当はまだ釈しやく然ぜんとしていなかった。けれども、何が腑ふに落ちないのか、自分でもよくわからない。考えつづけてその正体が判明する保証はないし、今はそんなことをやっている場合でもなかった。

　切りかえよう。

　マリアローズは胸に手をあてて深く息を吸いこみ、吐はきだすと同時にまばたきをした。

　行く手には、Ｄ13出入口が半円状の口をあけている。

　もうすぐだ。

　足を踏ふみ入れる。

　慣れ親しんだアンダーグラウンドの空気に変わる。

　地上とは異なる湿しつ度ど。

　地上とは異なる温度。

　地上とは異なる匂におい。

　だが。

　何かが、違う。

「──気のせい、かな……」

　マリアローズは小声で呟つぶやいて、右手で左の上じよう腕わん部のあたりをつかんだ。意識してそうしたわけではない。体が勝手に動いた。ふとユリカに目をやると、まったく同じような仕草をしていた。いや、ユリカだけではなかった。周りを見たら、怪け訝げんそうな顔できょろきょろしている者が何人もいた。ただ、平然としている者もいたし、それを何かの根こん拠きよとするにはあまりにも漠ばく然ぜんとしすぎていた。ぜんぜん気にならないといえば嘘うそになるが、気にしつづけるほどのことだとも思えない。それが大きな間ま違ちがいだったなんて、想像もしなかった。

　結局のところ、マリアローズたちは知らなかったのだ。

大穴メガボロス。エルデン。九頭竜レガシオス大骨格・ノ・イン。〝古代九頭竜の呪のろい〟。アンダーグラウンド。

何も知らなかった。

マリアローズたちは、何一つ知らないままに、すべてを当然のことのように受けいれている、揺ゆりかごの中の赤子にすぎなかった。

そのことに気づいてさえいなかった。

Omenage 897 10th revolution 8th day

サンランド無統治王国首都エルデン・アンダーグラウンドD13上層

〝デトルアープ〟

chapter.8

みそっかす

　とはいえ、蜥蜴とかげ人たちの居住地であるＤ13下層ダーナムレーンには、下等蜥蜴人どもの巣そう窟くつ、上層テトルアープを抜ぬけなければ行くことができないわけだし、まだまだ猶ゆう予よはあった。

　あるはずだったのだが、なかった。

　坂道を下ってテトルアープに出た一行は、酸鼻をきわめる光景をまのあたりにして立ちすくむ羽目になった。

　いつもテトルアープをあかあかと照らしている篝かがり火びが、ぜんぶとはいわないまでも半分ほど消えていて、かなり暗い。そのせいで、被ひ害がいの状じよう況きようをはっきりとは確かく認にんできないものの、見える範はん囲いだけでも十分だ。

　見み渡わたすかぎり──といってしまったら大おお袈げ裟さだが、そうとう広い範囲にわたって区画もへったくれもなく建ちならぶ石造りの家屋と、その合間の均ならされただけの道が、ついさっき大きな戦いくさでも行われたかのように傷いたんで、汚よごれている。

　そこらじゅうにまきちらされているのは、蜥蜴の血と、蜥蜴の肉と、蜥蜴の骨と、蜥蜴の鱗うろこ状の皮ひ膚ふと、蜥蜴の臓物と、それらのかたまりである生命の残ざん骸がいと、原形をとどめていたりとどめていなかったりする金属と、削けずれた石のかけらだ。

　なまぐさい。

　ひどい臭しゆう気きだ。

　Ｄ13と隣となりあっているＤ11のフリアウ逆密林は年中風が吹ふいている場所なので、ここテトルアープも無風ではないのだが、この臭においは簡単には消えないだろう。

　殺さつ戮りくのあとだった。

　そして、それは今もどこかでつづいているらしい。

　聞こえる。

　ＳｙｙｙＧｇｇｙｙｙｙｙｙｙｓｈ……ＧｙｙｙｙｙｙｙＳｙｙｙｙｙｙｙｙｈｙｙ……。

　ＡｈｈｈｈｈＳｙｙｙｙｙ……ＨｙｙｙｙｙＧｙｙｙｙ……Ｓｙｇｙｙｙｙｙｙｓｈ……。

　下等蜥蜴人どもの悲鳴のようだ。

「……用心しろ」

　先頭にいるロドリゴ・ファルコーネの声がやけに低く響ひびいた。用心しろなんて言われるまでもない。皆みなそう思っていただろうが、誰だれも口を開こうとしない。それほど衝しよう撃げき的な情景だったし、この状況が意味するところは明らかすぎるくらい明らかだった。

　標的の蜥蜴四兄妹きようだいはテトルアープにいるのだ。

　問題は、どこにいるか、だが。

　少なくとも、近くにはいない──ような気がする。

　ただ、一昨日は、あのピンパーネルが直上から落下してきた〝鋏使いザ・チヨツパー〟に手首から先を切り落とされた。たぶん天てん井じようにでもへばりついていたのだろうが、蜥蜴のくせに気配を消すのがやたらと上手うまいのだ。図ずう体たいのでかい〝超食漢スーパーイーター〟はともかく、〝圧搾魔ザ・コンプレッサー〟、〝拳姫フイストプリンセス〟についても、甘く見るのは危険だろう。その存在を察知できないからといって、すぐそばにいないとはかぎらない。

　まあ、察知できなければ、いつ出てきてもいいように備えておくくらいしかできることはないのだが、考えてみれば「いつ出てきてもいい」なんてことがあるはずもなかった。

　どんなふうに出てきても、かなり超最低ＳＵＣＫな登場シーンになる。

　それはもう間違いない。

　あとは、鉄のアイアン心臓ハーツ協会ソサエテイという分厚い盾たてがあることと、一度やつらをこの目で見ていることが、どの程

度のアドバンテージになるか。

「じっとしてたって仕方ねぇな。進むか」

　ファルコーネが鉄のアイアン心臓ハーツ協会ソサエテイに前進を指示した。彼らはとりあえず一番幅はばの広い道を選んで進むようだ。『蜥蜴狩り』はみんなで仲よく蜥蜴四兄妹を倒たおしましょうという企き画かくではないので、参加者は自由バラバラに動いてもいいのだが、現時点では鉄のアイアン心臓ハーツ協会ソサエテイと別行動をとる者はいないらしい。

　もちろん、マリアローズたちＺＯＯ（＋一名）も、鉄のアイアン心臓ハーツ協会ソサエテイにぴったりついてゆく。彼らと別れるとしたら、彼らを出し抜くチャンスがめぐってきたときか、彼らを犠ぎ牲せいにして逃にげるときだ。薄うす汚ぎたない根こん性じようだと嘲さげすまれようが、卑ひ怯きようだと罵ののしられようが、この少人数で事をなしとげようと思ったら、きれいごとなんか言っていられない。なんだか、単独で侵入者クラツカーをやっていたころのハングリー精神が蘇よみがえってきたみたいだ。だんだん目つきが悪くなってきているのが自分でもわかる。それでいい、と思う。多少ガツガツしていないとお金は貯たまらない。お金が貯まらないと、精神も不安定になる。精神が不安定になれば、ついつい、くだらない、余計なことを考えてしまう。

　僕はもっと満たされていたい。

　せっかくＺＯＯという居場所を見つけて、しあわせなはずなんだから。

　そのために、僕はもっとみんなの役に立ちたい。

　劣れつ等とう感なんてもうたくさんだ。自分の力不足は承知しているけれど、それでも工く夫ふうして何かできるはずだ。実際、そうしてきたし、これからもやらないといけない。仲間に頼たよってばかりじゃなくて、頼られるくらいになりたい。僕がいないと困る。そう思ってもらえる人間になりたい。ならないといけない。ほんの何回かの貢こう献けんじゃなくて、僕という存在をしっかりと刻みつけたい。みんなに認められたい。僕はここにいたいから、いてもいい人間になりたい。僕はもう一人になりたくない。一人きりで、僕は誰なんだろう──なんて、答えが見つからない問いを繰くりかえしたくはない。

　前みたいに、自分だけで自分を支えられる自信が、今の僕にはない。

　すでにこの世にいない、二度と会うことのできない人たちとのたいせつな思い出は、たった数巡じゆん月げつの間に、とりかえしがつかないくらい薄うすれてしまった。

　過去にしがみついて。呼吸をして食べて寝ねることだけに執しゆう着ちやくして。意地になって。

　あの日々はいったいなんだったんだろう。自分でも驚おどろくほど価値を見いだせない。ただ生きるためだけに生きていた。それだけが真実だと思っていた。いや、実際、それが真実だったあの日々には──もう、戻もどれない。

　僕が手に入れたのは、僕にはすぎたタカラモノだ。

　僕はそれを持っていても恥はずかしくない、それにふさわしい人間になりたい。

　早く、なりたい。

　そうしないと、僕は息苦しくて、胸が痛くて、生きていけない。

「……だけど」

　生きていけないどころか、その前にあっさり死んじゃったりして。

　かれこれ五十メーテルは歩いただろうか。そんなことがちらりと頭をよぎった。左前方約十五メーテルの開けた場所に、小山のような動く何かを見つけてしまったのだ。

　そいつは広場にしゃがみこんで、バリバリギュチョギュチョ何かを咀そ嚼しやくしていた。

　と思ったら、意外に素す早ばやい動作でこっちを向いた。

　で、跳ちよう躍やくした。

「──嘘うそ」「ひぎょっ」「きゃっ」「…………！」「キャハッ！」「すごい！」飛燕フエイヤンとルイもふくめて六者六様の

反応を示しながら、一目散に逃げだしたのはマリアローズたちだけではなかった。一行の全員だった。だって、逃げないわけにはゆかなかった。身の丈たけ四、五メーテルもの巨きよ体たいを誇ほこる超食漢は、その常識外のサイズだけでなく、たいがいスリムな蜥蜴とかげ人の標準体型を完全に逸いつ脱だつして肥満しているくせに、冗じよう談だんみたいに身軽だった。十五メーテルをひとっ飛びだった。

落ちてくる。

というか、もう落ちた。

マリアローズは必死になって逃げていたから、その瞬しゆん間かん、何がどうなったのか目もく撃げきしたわけではない。ただ、背中を向けていてもズガドドドドガッシャンという音と衝しよう撃げきは伝わってきたし、「うわ」だの「ああっ」だの「グボアッ」だのといった悲鳴とか苦鳴は聞こえたので、規模は不明だが被ひ害がい者しやが出たことは疑いえなかった。でも、まあ、なんとか近くにあった家屋の陰かげに滑すべりこむことができた。見れば、すぐそばにユリカとカタリ、それから飛燕フエイヤンとルイにジュジもいるし、ピンパーネルは屋根の上か。皆みな、無事みたいだ。
ちょっとだけ安あん堵どした。そう。ちょっとだけだった。ほっとしている場合じゃない。

「あー、やなかんじ……」どうなっているのか、何が起こっているか、だいたい予想はついている。見たくないけれど、被ひ害がい状じよう況きようを確かく認にんしないわけにはゆかない。マリアローズは仲間たちを押しのけて家屋の陰から顔を出した。「おえっ……」思ったとおりだった。

超食漢は豪ごう快かいに食事中だ。

グシャ。

ボキ。

ゴギャ。

やつが大きな顎あごを動かすたびに、おぞましい怪かい音おんがする。口からはみだしているのは、人間の下半身だ。だが、それもすぐにやつの腹のなかに収まってしまった。やつは手も口も休めな

かった。右手にぶら下げていた別の侵入者クラツカーをガブッとやって噛かみ砕くだいて嚥えん下かして、今度は左手で足をつかんで床ゆかに叩たたきつけて息の根を止めた新しん鮮せんな死体をぺろりと平らげた。やつは好き嫌きらいがないようだった。いちいち防具だの服だのを外したり剝はがしたりしない。金属もいけるクチみたいだ。骨とか内臓なんかは、きっと好物の部類に入るに違ちがいない。これならじつに多種多様な栄養をまんべんなく摂せつ取しゅできるだろう。なんでも食べて、それでこれほどまでに大きく育ったのか。そんな馬ば鹿かな。

「超でけェーなァ……！」と、飛燕フエイヤンがマリアローズと家屋の間に無理やり割りこんできた。外側に回ればいいのに、なんでまたわざわざ狭せまいほうに。ユリカとは大違いで、飛燕フエイヤンは精神構造まですっかり餓が鬼きだ。「━ちょっ、押さないでよ！」「スゲェ人間食いまくってら！　キャハハハ！」

　ぜんぜん聞いてないし。

　しかも、そんなことをやっている間にカタリが外側に出てきて、マリアローズは二人に挟はさまれる恰かつ好こうになった。

「うわぼっ……こないなモン見てもうたら、しばらくようメシ食われへんな……」「く、苦しいっての！」「オッシャーッ！　カジカそっちからも押せ！　潰つぶしちまえキャハハハ！」「んほ？　おお？　おーっ！」「おーっじゃない！　この腐ふ乱らん魚……！　もう！」マリアローズはドタマにきてカタリの臀でん部ぶに渾こん身しんの力をこめた膝ひざ蹴げりを見み舞まった。「ぎひっ」そうして両手で尻しりを押さえた半魚人の背中にもう一撃、右足で会心の回し蹴りを食くらわせ、前に突つき飛ばすなり屋根の上にいるピンパーネルに声をかけた。「ピンパーネル、前に……！」

　ピンパーネルは無言でうなずき、カタリのすぐ前あたりに着地して雌し雄ゆう一いつ対ついの短たん剣けんを抜ぬいた。マリアローズのありがたい教育的指導によって無様にすっ転んだカタリも、「おわたた」と奇き声せいを発しながらも立ちあがって、腰こしから二本の変形斧おのを━あれ？　イノイチとロノニーって、鋏使いに壊こわされたんじゃなかったっけ？

「その斧……どうしたの」「そういえば紹しよう介かいがまだやったな。イノイチとロノニーの兄弟っちゅーかまったく同じ型のハノサンとニノシーや。イノイチとロノニーの仇かたきはこいつらで

とったるで！」「同じの持ってたんだ……」「あと三本しかないけどな」「まだ三本も……」

そんな無む駄だ口をたたいているうちに、右にカタリ、左にピンパーネル、その後ろにマリアローズ、ユリカと飛燕フエイヤン、最さい後こう尾びにルイとジュジという隊列が組みあがった。ルイとジュジをのぞけばいつでも戦せん闘とうに入ることのできる態勢だが、マリアローズは若じやつ干かん迷っていた。

「囲め！　かたまるな……！」

ファルコーネが鉄のアイアン心臓ハーツ協会ソサエテイの協会員メンバーたちに超食漢を包囲させつつあったからだ。

位置から考えて、さっき超食漢のジャンプ＆暴食でやられたのは、ほとんどが鉄のアイアン心臓ハーツ協会ソサエテイだろう。仲間を殺されて、そのうえ食べられてしまった彼らの戦意は旺おう盛せいだった。それでいて、むやみに超食漢に突っかかっていったりせず、ある程度の距きよ離りをとって、今はこの恐おそるべき敵の出方をうかがっているようだ。

だが、食べられるものは食べてしまった超食漢のほうも、口の周りをぬぐいながら人間どもを見まわすだけで、動こうとしない。

「いいか！　焦あせるな！　よく見ろ！」

ファルコーネの声に、言葉の内容とは裏腹な焦しよう燥そうが見え隠かくれしている。超食漢だって、そうは見えないが、内心ではもっと食欲を満たしたくてうずうずしているのかもしれない。

この均きん衡こうはすぐに破れる。

どっちが先に手を出すのか。

当面、問題はそれだけだと思っていた。いずれにせよ、何か行動を起こすにしても、そのあとだ。おそらく、鉄のアイアン心臓ハーツ協会ソサエテイ以外のほぼ全員がそう考えていたに違いないし、実際、ほんの少しの間だが、奇き妙みような静せい寂じやくがあたりを押しつつんだ。誰だれかが固かた唾ずをのむ音が聞こえたような気さえした。静かだった。集中していた。次の一瞬に何が起こるか、決して見み逃のがすまい。そしてその何かは、鉄のアイアン心臓ハーツ協会ソサエテイと超食漢の間で起こるはずだ。それ以外は

頭になかった。愚おろかだった。だが、さいわいなことにそうじゃない者もいた。

　不意に、ピンパーネルが超食漢から目をそらして、別の方向へ顔を向けた。

　飛燕フエイヤンがククッと喉のどの奥で笑って両の拳こぶしを打ちあわせたのも、それとほとんど同時だった。

「こりゃきてヨカッタっぽいなァ」

「……鋏使い」

　だけではなかった。

　鉄のアイアン心臓ハーツ協会ソサエテイと超食漢がにらみあっている地点に、三方から嫌いや味みなほどゆったりした足どりで近づいてくるものたちがいる。

　超食漢とやつらとの距離は、だいたい二十メーテルから三十メーテルといったところか。

　一体は、マリアローズから見て正面、十二時の方向。

　全身傷きず痕あとだらけで、その名の由来である鋏に似た得物を両手に持った白いたてがみの鋏使い。

　もう一体は、三時の方向。

　黒い鎧よろいを身にまとい、額に宝石みたいな物体を埋うめこんだ、黒いたてがみの圧搾魔。

　さらにもう一体は、十時の方向。

　ピンク色に黒線模様のボディスーツを着ている、赤いたてがみの拳姫。

　どいつもこいつも危険な雰ふん囲い気きを漂ただよわせているどころか、やつらは明々白々に危険そのものだった。とりわけ、今、もっともやばそうなのは圧搾魔だった。何しろ、やつの脅きよう威いは目に見える形ではっきり示された。そうなると、マリアローズとしても静観していることはできなくなった。というか、とにかく

仰ぎよう天てんしていったい何事かと訝いぶかり、それが圧搾魔の仕し業わざだと確信する前に思わず叫さけんでしまった。「──剣けんが……！」

　その光景を目にして、それ以外に何を言えるだろう。

　圧搾魔の背中や腰にくくりつけられたり、引っかけられたりしていた剣が、槍やりが──いや、それだけではない、もとは下等蜥蜴とかげ人たちの物だったのだろう、そこらへんに転がっていたとおぼしき武器の数々が、一いつ斉せいにふわりと浮うきあがって、圧搾魔の頭上で静止した。

「念動力テレキネシス……」ユリカのあとを受けてカタリがつづけた。「あれは……あの額の宝ほう珠じゆや！　魔ま導どう王おう時代の秘宝、〝守護者〟系統の──」「原理なんて！」マリアローズは吐はき捨てるように怒ど鳴なってから、超食漢を取り囲んでいる鉄のアイアン心臓ハーツ協会ソサエテイの連中に、とくにファルコーネに聞こえることを祈いのって声を張りあげた。「逃にげて！　危ない、後ろ……！」

　ファルコーネはマリアローズが注意をうながす直前か、その直後に後方を振ふり返った。しかし、そのときにはもう、圧搾魔の剣や槍は再び動きだそうとしていた。「──チィッ！　総員散開……！」ファルコーネは即そく座ざに命令を下して、鉄のアイアン心臓ハーツ協会ソサエテイの協会員メンバーたちの多くもこれによくこたえたが、退きはじめた彼らを超食漢が見すごすはずはなかった。超食漢は自分に背中を見せた数名を右みぎ腕うでで薙なぎ払はらって左手で一人をつかまえて、すぐさま口へと運んだ。剣と槍も横よこ殴なぐりに降ってきた。むろん、その刺すような雨は、鉄のアイアン心臓ハーツ協会ソサエテイだけではなく超食漢をも襲おそった。が、やつの肥満体は伊だ達てではないというかなんというか、蜥蜴人の皮ひ膚ふ自体かなり硬かたいが、それに加えて、やつはぶあつい脂し肪ぼうの鎧を身にまとっていた。何本か、両りよう刃ばの剣だの短たん槍そうだのが超食漢の巨きよ体たいに突つき刺さったものの、やつはぜんぜん平気そうだった。痛がるそぶりすら見せなかった。やつにとってはそんなことより食欲のほうが大事らしかった。

　圧搾魔の念動力テレキネシスによって操作された剣、槍に貫つらぬかれた人間たちは、超食漢の餌えさになった。

　かろうじてやつらの魔手から逃れた者たちに、拳姫が襲いかかった。

　鋏使いはなぜか足を止めて自じ慢まんの鋏をシャキンシャキンやりながら見ているだけだが、とりもなおさずそれはこの惨さん劇げきがまだ序の口だということを示していた。

　すでに鉄のアイアン心臓ハーツ協会ソサエテイは潰かい走そうと表現するしかない無残な状態に陥おちいっている。「──逃げろ！　バーンズ、そっちはダメだ！　スティーブ、こっちにこい！　カール、トマス、セオドアを！　畜生ダアム、逃げろ逃げろ逃げろ……！」そんななかでも仲間に声をかけつづけているファルコーネはさすがだが、それだってあくまで一人でも多く生存させようというギリギリの叱しつ咤た激げき励れいで、逃とう走そうを誘ゆう導どうしているだけにすぎない。そうなると、鉄のアイアン心臓ハーツ協会ソサエテイをアテにしていた他ほかの侵入者クラツカー連中が尻尾しつぽを巻いて逃げだすのも道理だった。だって、仕方のないことだ。その場にとどまれば、押しよせてくる鉄のアイアン心臓ハーツ協会ソサエテイと、暴力の象しよう徴ちようのような蜥蜴四兄妹きようだいの波にのみこまれてしまう。それはたいへん悲しくて痛みをともなう結果に違ちがいない。十中八九、破は滅めつだ。ぼけーっと突っ立ってその悲運を甘かん受じゆする間ま抜ぬけな運命論者が、たまたまいなかった。それだけのことだ。

　当然、マリアローズもこんなところで死ぬつもりはない。ＺＯＯの皆みなに総員転進を告げようとしたが、場違いなのんびりした声に先を越こされた。

　ルイだった。

「うーん。どうやらこれは、いったん地上に戻もどって態勢を整えなおしたほうがよさそうな情勢ですね」

「──それは僕も賛成、だけど……」どうしてこいつはこんなに悠ゆう然ぜんとしているのか。当事者意識が欠けつ如じよしているとしか思えないルイの態度は癇かんにさわったが、腹を立てて抗こう議ぎしたところで時間をロスするだけだ。マリアローズは憤ふん懣まんを押し殺して仲間たちを見まわした。「一回地上に戻ろう」

「えー」不満そうな声を出したのは飛燕フエイヤンだけだった。それだったら問題ない。飛燕フエイヤンはＺＯＯではないわけだし、

どうしても戦いたいのなら一人で気のすむまで戦えばいいのだ。それでどうなろうと、マリアローズの知ったことではない。

「悪いけど、ピンパーネルとカタリ、しんがりお願い！　そんなに遠くまできてないから、慌あわてないで、転んだりしないように、そのあとのことはそのあと考えるってことで、とにかく地上まで走って！　はい、よーいドン！」

「ンだよォ、楽しーのはこれからだっつーのに……」

「じゃ、きみは勝手に目めーいつ杯ぱい楽しめば？　さよなら！　もう会うこともないと思うけど！」

「わーったよォ」

　そんなこんなで、結局、飛燕フエイヤンも渋しぶ々しぶついてきたのだが、早い決断が功を奏した。混乱のさなかで秩ちつ序じよを維い持じできていたことも大きかった。人数の少なさもプラスに作用した。たまに逃とう亡ぼう中の他の侵入者クラツカーが邪じや魔まだったりはしたが、マリアローズたちの撤てつ退たいはわりあい順調に進んだ。たびたび振り返って、やつらとの距きよ離りを測る余よ裕ゆうさえあった。

　食事をしながらなので、前進の速度はさして速くないものの、つかまえた獲え物ものはすべて胃い袋ぶくろという名の完全な死に追いやってしまう、恐おそるべき超食漢。

　マリアローズたちとは別方向に逃げた一団を、両手両足だけでなく、尻尾まで駆く使しした鮮あざやかといってもいい洗練された体術で駆く逐ちくしてゆく拳姫。

　圧搾魔は見えない力で一人の侵入者クラツカーを持ちあげた。それから間もなく、必死に前へ進もうと空中で足をバタバタ動かす侵入者クラツカーの頭がグゴボグッとゆがんだ。眼球が飛びだして鼻や口や耳から血が噴ふきだし、それと一いつ緒しよに手足が関節の可動範はん囲いを超こえた角度に折れ曲がって、彼は死んだようだった。なるほど。それで、圧搾魔。納なつ得とくだ。いや、納得してどうするというかんじだが、その圧搾魔も約十五メーテル後方にいる。やつは大おお股またとはいえ歩いていて、こっちは走っているから、距離は開く一方だ。

依い然ぜんとして屋根の上にたたずんだまま、動こうとしない鋏使いは不気味だが。

やつは、そこかしこで繰くり広げられている惨劇にすら興味がないようで、鋏を開いたり閉じたりしながら天てん井じようを見上げている。

まあ、気味が悪くてもなんでもいい。願わくば、そのままそこで立派な蜥蜴の彫ちよう像ぞうにでもなってくれると助かる。しかし、期待はたいてい裏切られるのが世の常だ。

マリアローズたちがＤ13の出入口に通じる坂道まで、あと約十メーテルの地点にさしかかったときだった。

突とつ如じよ、鋏使いが走りだした。

屋根の上から跳とんだ。

道に降りたって、駆かけた。

速い。

体が大きいぶん歩ほ幅はばが広いし、尋じん常じようじゃない脚きやく力りよくで一歩ごとに稼かせぐ距離が半はん端ぱじゃない。

鋏使いは、追いついた侵入者クラツカーたちの腕うでや耳や首を、手当たり次し第だいに両手の鋏でジャキジョキジャキンして血肉の花道を飾かざりつつ、グングングングン近づいてくる。

猛もう追ついしてくる。

坂道までの最短ルートをたどっている、マリアローズたちを。

──って。

なんで？

どうして？

なぜ僕らを？

やつを惹ひきつけるような何かが僕らにあるのか？　よくわからないけれど、僕らがいかにもいい獲物というふうに見えたり？　僕

らってそんなに見み栄ばえがいいのか？　それほどまでに目立つんだろうか？　なんで？　ピンパーネルが強いから？　それとも、ユリカが絶世の美少女だから？　カタリが魚だから？　僕が偉えらいから？（←錯さく乱らん気味）

「くっ……！」マリアローズは前を向いて、またちらりと後ろに目をやって、怖こわくなって、すぐさま視線を前に戻した。やばい。鋏使い。足速すぎ。やつの姿が一秒前よりもかなり大きく見えた。めちゃくちゃな勢いで距離が縮まってきている。マリアローズとしても、やつに対たい抗こうしてもっともっともっと足を動かしてスピードの限界を超えたいところだが、これ以上、速度を上げることはできない。じつは、マリアローズはまだほんの少しだけ余裕があったりするのだけれど、前を行くユリカが一いつ杯ぱい一杯だった。それもやむをえない。体格を考えれば、ユリカは十分がんばっている。がんばりすぎているといってもいい。しかし、鵺ぬえ流古式戦せん闘とう術独自の武器、極限クライマックス九手棍ナインポールで屈くつ強きような男をぶっ飛ばすことはできても、脚あしの長さを伸のばすことはできない。努力ではいかんともしがたいことだってあるのだ。ピンパーネルがどうしても共通語に慣れることができないように、誰だれにだって欠点、短所がある。だいたい、そういう部分を互たがいにおぎないあうのが、仲間ってものだし――とか柄がらにもないことを考えて、ピンパーネルあたりにユリカを担かついでもらおうか。そう思っていた矢先だった。

　ひょい、と飛燕フエイヤンが横からかっさらうようにユリカを抱だきかかえた。ユリカに抵てい抗こうする間も与あたえない、鮮やかな手並みだった。しかも、飛燕フエイヤンは小さな体にでっかいパワーを秘ひめていた。ユリカをお姫ひめ様さまだっこしながらも、速度が落ちないどころか逆に上がった。一気にマリアローズを置き去りにして、目の前にいたルイ＆ジュジを追い越こして突つき放した。「――ちょっ……お、下ろして！」「ヤーダね！　キャハハハハ！」

「……あいつ……！」

　まあ、でも、ユリカはびっくりしたり戸と惑まどったり怒おこったりだろうが、正直、これは助かった。飛燕フエイヤンがユリカを抱かかえて先行してくれたおかげで、マリアローズたち全体の速度は一割か二割は増したし、坂道はもう目前だ。これなら鋏使いに追いつかれる前に、なんとか地上に出られるんじゃないか。少なくとも、その可能性が高まったことは間ま違ちがいない。あとは何も考

えずに足を動かして、ひたすら逃にげるのみだ。

「もう少しだから……！」マリアローズは自分にとも、仲間にともつかずそう言って、もう一度、後ろを見やった。ドキッとした。覚かく悟ごしていたより、鋏使いが近くに迫せまっていたからだ。いや、超食漢ほどではないものの、やつも体がでかいので、実際以上に近く見えたのか。

　どっちにしても、いざというときは、最さい後こう尾びにピンパーネルがいる。ピンパーネルが止められなければ、このメンツのなかでは誰も止められないだろうし、距きょ離り的にも、生死は微び妙みようながら他ほかの侵入者クラツカーが周りにいる状じよう況きようからしても、爆ばく弾だんを使うという選せん択たく肢しはない。

　つまり、何もできそうもない。

　結局、いつものことだけど、僕は━やっぱり、仲間に頼たよることしかできない。

　もちろん、悔くやしい。でも、死んでしまったら、悔しがることさえできない。うつむくことも、上を見ることも、前を向いて進むことも、あたりまえのことだが、生きているからこそできることだ。

　明日、明後日あさつて、明明後日しあさつて、一サンチでも、一ミルでも今より前にいて、過去の自分を振ふり返って恥はずかしいと思いながらも、笑えるように。

　そうして僕は少しずつ進んできたはずだ。ちょっとずつ、自分の活いかし方がわかってきた。僕はもうみんなの足を引っぱったりしない。その程度の自信はある。以前の自分よりも、今の自分のほうがいい、もっとよくなる、よくなってみせる。そのためには、たとえみっともなくても、汚お辱じよくにまみれても、今を生き抜ぬかないと……！

　マリアローズは思いきり手を振って力強く両足で地面を蹴けった。とうとう坂道だった。あとは地上まで一息に駆け抜けるつもりで、ぐっと息をつめた。九頭竜レガシオス大骨格・ノ・インの隙すき間まを狙ねらって、地上からアンダーグラウンドめがけて掘ほり進められたトンネルは、現在、エルデンにぜんぶで十四あるが、一

様ではない。Ｄ13出入口とＤ13を結ぶ坂道は、十五度くらいの勾こう配ばいを維い持じしつつ、急角度で三度折れ曲がる。十五度といったら、数字から受ける印象よりもきつい傾けい斜しやだけれど、これが最後のひとふんばりだと思えばきつくなんかない。それどころか、ああ……！　足に羽が生えたみたいだ！　嘘うそみたいに体が軽い！　軽い──ような気がする！　軽いと思っていたい！　盛せい大だいにぶっ倒たおれて、大の字になって、たいして美お味いしくもないけれど大切な空気を好きなだけ吸うのは地上に出てからでいい。今は風を切って走るためだけに生まれた風の子ウィンディーみたいに、走れ！　走れ！　とにかく走れ！　てゆうか、ウィンディーって何もの？　知るもんか！

　でも、とにかく、マリアローズは空想生物、風の子ウィンディーそのものと化し、十五度の坂道を駆けのぼって三度角を曲がって前方に燦さん々さんと降りそそぐ太陽の光を見た。今日はあまり天気がよくなかったはずだが、そのときは本当にそう見えたのだ。

　助かった……！

　心の底からそう思った。

　しかし、胸の奥底からわきあがってくる「生きてるって素す晴ばらしい！」的な、分類するとしたら人間にとって根源的な種類の歓かん喜きをひとまず抑おさえて、マリアローズはいちだんと足を速めた。まあ、物理的に速まったのかどうかはあやしいところだが、心理的にはそのつもりだった。後ろを振り返ったりはしなかった。何か異常があったらピンパーネルやカタリがしらせてくれるはずだし、そんなことを気にするより地上に出てしまったほうが早い。だって、もうすぐなのだ。あと七メーテル六メーテル五メーテル四メーテル三メーテル二メーテル一メーテル──

「ぷはあっ！」

　マリアローズは射出されたように地上に出た勢いで、しばらく足を進めたあと、石いし畳だたみの上に倒れこみながら思いきり二酸化炭素を吐はきだした。そのまま転がった。仰あお向むけになって、そのときちょうど雲の切れ間から顔をのぞかせた太陽がくれた贈おくり物を、あたたかい日ひ射ざしを浴びて、解放感と多幸感に襲おそわれながらハアハア荒あらい息をした。喉のどや胸やお腹なかが痛かったけれど、いかにも「僕、やったんだ」というかんじがして、それもまた悪くなかった。たしかに、マリアローズはやりと

げたはずだった。目を疑った。

　飛んでいった。

　飛び越えていった。

　やつが。

　幅はば十メーテルくらいの道のまんなかに寝ね転ころんでいるマリアローズの上を。

　マリアローズは、もちろんやつの姿を目で追った。

　仰向けで寝ねたままだから、石畳に後頭部をゴリゴリ押しつけて、ポカンと口を開けて、見上げる恰かつ好こうになった。

　鋏使いは、間違いなく、そこにいた。

　異界生物フリークスのくせに。

「──なんで……」

　ありえない。そんなこと、あっていいはずがない。異界生物フリークスはアンダーグラウンドにいるものだ。初代キング・グッダーが混沌とエルデ恐怖の巷エイニオンを制圧して、異界の扉とびらだらけの大穴メガボロスに首都エルデンという名の蓋ふたをして、九頭竜レガシオス大骨格・ノ・インを触しよく媒ばいに〝古代九頭竜の呪のろい〟を施ほどこして以来、それは絶対不変の事実だったはずだ。

　そもそも、どこかの馬ば鹿かがエルデンの地面に穴を掘って、かつての大穴メガボロスに入りこんだりしなければ、そして、かのイディオット・デイモンがアンダーグラウンドと名付けたその場所の大規模な探たん索さくを進め、区分けをしたり地図を作ったりしなければ、ひょっとしたら異界生物フリークスは伝説上の存在と化していたかもしれない。

　むろん、地上にだって、悪あく魔まと人間の混血だという鬼人オーガみたいな半異界生物フリークスや、夜ナイト魔メア・犬ハウンド、巨人族ギガントのような異界生物フリークスめいた生き物も棲せい息そくしている。世界のどこかには、まだ開いたままの異界の扉が存在するともいう。ある地域では〝竜界ドラガンド〟の竜り

ゆうたちが繁はん殖しよくしているとの噂うわさも聞く。蘇そ生せい式の総本山であるＭ．Ｔ．Ｄ．の守護者が、魔導王時代から生存している巨きよ竜りゆうだという話はつとに有名だ。

　だが、少なくとも、アンダーグラウンドの異界生物フリークスどもは地上に出てこられない。

　キング・グッダーによる、いにしえの偉い大だいな魔術によって。

　──そのはずなのに。

　昨日まではそうだったのに。

　どうして鋏使いは、お天てん道とう様の下で平然と鋏をシャキンシャキンやっているのか。

　わからない。さっぱり理解できない。もしかしたらこれは夢かもしれない。そんなわけがない。それはわかる。それくらいのことは今のマリアローズにもわかっているが、やっぱり一種の忘ぼう我が状態というか、何もできない時間が数秒あった。鋏使いのごとき凶きよう悪あく凶きよう猛もうな敵を前にして、仰向けで無防備に寝転んでいたのだ。それはもう「鋏使い様、鋏使い様！　どうかわたくしめを殺してくださいお願いします！」と泣いて頼たのんでいるのに等しい行こう為いだった。

　マリアローズだって、ほどなくそのことに気づいた。

　やばい。

　とりあえず、起きないと。

　それでも悠ゆう長ちようすぎるといわざるをえないが、どうしようもなかった。本当に、まずは立ちあがらないとお話にならない。マリアローズはごろんと横に転がって、うつぶせになって、両手を石畳について、その反動で体を起こした。目は鋏使いから離はなさなかった。というよりも、離れなかった。おかげで周りの様子なんてまるでわからなかった。視野に入っていても、認にん識しきすることはできなかった。

　鋏使いが近づいてくる。

何か聞こえた。

誰だれかがマリアローズの名を呼ぶ声。

カタリと、ユリカか。

ユリカはともかく、カタリはさっきまですぐ近くにいたはずなのに、どうして僕はこんなにひとりぼっちなんだろう。

なぜ、ここには僕と鋏使いしかいないんだろう。

「……そ──」

マリアローズは何を言おうとしたのか。

永遠の謎なぞだ。

つづきを口にする前に、一いち陣じんの砂風が目の前を横切った。何かが陽光を反射してきらめいた。金属同士が激しくふれあう音がした。次の瞬しゅん間かん、体が勝手に動いた。思考はあとからついてきた。そうだ。この場所から離れるんだ。彼が作ってくれた時間を無む駄だにしちゃいけない。

「ＫｙＳｈａａａａａａａＳｙｙｙｙ……！」「□□ッ……！」ピンパーネルは雄おすのグレアデと雌めすのリレッザを駆く使しして、鋏使いが左右から繰くりだす鋏を弾はじきかえし、受け流して、ときに絶ぜつ妙みようの体捌さばきでよけているが、優勢には見えない。余よ裕ゆうもなさそうだ。柔じゆう軟なん性、反射神経、肉体制せい御ぎよの正確さでは決して劣おとっていない、むしろピンパーネルのほうがまさっていると思うが、明らかに力負けしている。ただ、ピンパーネルがその気になれば、もっと自分の利点をいかした戦い方を選せん択たくすることだってできるに違ちがいない。

にもかかわらず、ピンパーネルはほとんど足を止めた状態で鋏使いとやりあわざるをえない。

ピンパーネルはマリアローズと鋏使いの間に割りこんで、壁かべ役になってくれている。

だから、どうしても動きに制約が多いのだ。

「──ごめん、ピンパーネル……！」その言葉しか出てこなかった。感謝よりも申し訳なさで一いつ杯ぱいだった。何が自信だ！　どこが以前の自分よりマシなんだ！　同じだ。ぜんぜん変わってない。僕は相変わらず足を引っぱりまくってる。ピンパーネルの邪じゃ魔まをして、負担になっている。早くここから離れないと。マリアローズは後退しかけて、周囲を見て、このまま下がればそれまで背を向けていたＤ13出入口に向かうことになると知って、そっちはダメだと思った。

　だって、ギャーヒーわめきつつ出入口から飛びだしてくる侵入者クラッカーたちの向こうに、ピンク色がちらりと見えたのだ。目にも鮮あざやかな、じつにまがまがしいピンク色だった。

　となれば、マリアローズはピンパーネルと鋏使いを迂う回かいして、Ｄ13出入口から離れなければならない。見れば、カタリとユリカと飛燕フエイヤンが右前方にいる。マリアローズはまず彼らと合流すべく、右手の壁際ぎわを目指して走った。その途と中ちゆうだった。「マリアローズ！」カタリが駆かけよってくる。「──マリア！」その後ろからユリカも。「バカ、テメーは……！」ユリカを止めようとして、飛燕フエイヤンも。彼らの様子と、「ぐあ」「ぼっ」「あがっ」といったかんじの声ともいえない声、それから、ガゴンボゴッバキザシュッバシッというすさまじい音を至近に聞いて、マリアローズは悟さとった。

　拳姫がすぐ後ろまで迫せまっていることを。

　だが、マリアローズが振ふり返って拳姫を確認するより、カタリがハノサンを投とう擲てきするほうが早かった。投げる寸前のアイコンタクトによる合図を察知できなかったら、ハノサンはマリアローズを直ちよく撃げきしていただろう。さいわい、それとわかったので、つんのめってどうにかよけることができた。目と目で半魚人と通じあうなんて気持ち悪い話だが、危急の場合なのでよしとする。ただし、高速でんぐり返しを決めて振り向いたマリアローズの目に飛びこんできたのは、体のどこかに斧おのが刺さって痛がっている拳姫の姿なんかではなかった。なんと、右手の指二本で挟はさんで止めたハノサンを、そのまま手首のスナップをきかせて投げ返す拳姫の勇姿だった。

「──ぉわたっ……！」カタリはニノシーでかろうじてハノサンを打ち落とした。そのハノサンがマリアローズの頭のすぐ上を飛んでいった。「あ、あぶな──」「破はぁぁぁ……！」間かん髪はつを入

れず、今度はマリアローズのすぐ脇わきをユリカが通りすぎてゆく。その手に握にぎられた極限クライマツクス九手棍ナインポールは、先せん端たんが幾いく股またにも分かれて、真の姿を現している。魔ま獣じゆつ〝鵺ヌエ〟の可変骨格から削けずりだして製作したこの棍こんは、達人の手によれば斬ざん、砕さい、掛か、抉けつ、突とつ、払ふつ、打、流、弾の九種類に及およぶ攻こう撃げき方法が実現可能だという。ユリカの師である髭ひげの破は戒かい僧そう曰いわく、彼女の棍の腕うで前まえはあと十年習練を積めば達人級マスタークラスに到とう達たつするであろうとのことだが、鵺流古式戦闘術の達人マスターといえば、山を動かし海を割って竜たつ巻まきを生みだす超ちよう人じんらしい。たった十年でそうなってしまうということは、裏を返せば現時点でもそうとうのものだと考えてもよさそうだ。

　そのユリカが下段、上段、中段、中段、薙なぎ払いから下段、跳はねあげて上段──と、流れるように繰りだした極限クライマツクス九手棍ナインポールを、拳姫はすべて紙一ひと重えで見切って最小限の動作で回かい避ひし、あるいは掌てのひらでそっと押しだすように受け流した。ついには半身でぐっと踏ふみこんできて、棍のなかほどを右手であっさりつかんでしまった。

「──離りゃぁぁ！」

　それでも、ユリカは慌あわてずにすぐさま次の手を打った。足を開いて体全体で螺ら旋せんの力を作りだし、それを棍に伝えたのだ。

　鵺流古式戦闘術棍法奥おう義ぎ〝旋セン気キ〟。

　ユリカの体格、筋力では体に負担が大きすぎるので、濫らん用ようは禁物らしいが、いつだったかこれを応用して、道化のジエステル・大公爵ハイヴエリオンファッルーカの巨大な使い魔、魂集めを転てん倒とうさせたこともある。魂集めと比べれば、拳姫は遥はるかに小さい。拳姫は螺旋の力によって弾かれたように吹ふっ飛ぶはずだった。普ふ通つうに考えれば、そうなるはずだったのに。

　一いつ瞬しゆん、体が浮うきあがりかけた拳姫は、すかさずあいていた左手を棍にそえて、肩かた幅はばくらいに足を開いた。その姿勢は、奇くしくもユリカが〝旋セン気キ〟を使ったときとそっくりだった。まさか、と思う間もなかった。

「ＪｙＳｙｙｙｙｙｙｙｈ……！」「□□きゃっ！」

　独楽コマみたいに回転しながら吹っ飛んだのはユリカだった。

　その結果に満足したのか、拳姫は極限クライマツクス九手棍ナインポールを放ほうり投げながら、笑えみを浮かべたように見えた。

「ユリィ！」「おンどれぇ……！」飛燕フエイヤンはユリカを助け起こして、ハノサンを拾ったカタリが拳姫に突っかかっていった。しかし、拳姫は揺ゆるがなかった。「──うげっ」カタリはいったい何をしようとしたのかと思ってしまうくらい、拳姫の前蹴げり一発で簡単にひっくり返った。それでも、カタリはまだマシだった。

　最悪だったのはマリアローズだ。

　だって、何をしていた？

　僕は、何を……？

　──なんにもしていなかった。

　とっさに体が動かなかったとか、疲ひ労ろうのせいで集中が途と切ぎれていたとか、いくら理由を並べても言い訳にはならない。何もしなかった。その結果がすべてだ。僕は、超最低ＳＵＣＫだ。

　拳姫が近づいてくる。

　一歩。

　二歩。

　あっという間だった。拳姫が拳こぶしを振りあげる。その動作はあまりにも無む駄だが多い。完全に舐なめられている。それなのに、動けない。それでも、よけられない。ダメだ。やられる。その間際だった。カタリが寝ね転ころんだままの体勢から、ハノサンで拳姫の足を狙ねらった。「──お前じぶんの相手はわしじゃ、ボケ……！」これは、だが、やすやすとかわされただけでない。拳姫はカタリの腹部に蹴りを見み舞まった。重くて鈍にぶい音がした。「……ぐ、ぶぉ……」痛い。あれは痛い。カタリはハノサンとニノシーを取り落とし、丸くなって腹を抱かかえた。でも、すぐにまた這はうようにして二本の変形斧を拾い、立ちあがろうとしている。「だ、ダァホ……こっち、向けや……そいつは──」そして、カタリ

はしぼりだすように叫さけんだ。

「みそっかすやて、ゆうとるやろが……！」

　頭のなかが真っ白になった。

　みそっかす？

　誰だれが？

　━━僕、が？

　そっか。

　そうだ。

　その……とおりだ。

　妙みように、納なつ得とくしてしまった。

　だけど、もちろん、納得している場合じゃなかった。何かが、きた。それはおそらく、拳姫の尻尾しつぽだった。「━━あ……」マリアローズはとっさに腕うでを出した。どうやら、顔とか首とか、そのあたりを庇かばおうとしたらしい。うまくいったのかどうか、わからない。食くらった。すごい音がした。どこをやられたんだろう。かなりいいかんじで脳が揺れた。意識が飛びかけた。

　ブラックアウト。

　闇やみ。

　といえば、夜。

　だから、おやすみ──いや、いけない。

　目を開ける。視界がゆがんでいる。何もかもがぐにょぐにょだ。頭のなかでヒヨコが泣いているような音がして、自分がヒヨコになってしまったかのような心ここ地ちさえする。僕は無力な、みそっかすの、ヒヨコだ。でも、ヒヨコだって生きている。生きていれば、死にたくないと思う。「……うう、くぅぁ……！」マリアローズはどうにかして態勢を立てなおそうとした。とはいえ、正直、立てなおそうにも、自分がどんな姿勢でいて、どんな状態なのか判然としない。拳姫が迫せまっていることは、なんとなく感じていた。このままではたぶん死ぬ。殺される。やだ。怖こわい。死ぬのは怖い。でも、いったいぜんたい、何をどうすればいい……？

　とにかく、逃にげないと。

　そのためには、自分と敵がどこにいるか、正確に知らないと。

　近づいてくる拳姫に命いのち乞ごいでもするかのように、石いし畳だたみの上に這いつくばっている、みじめな生物。これがマリアローズだ。

　見上げると、拳姫が首をポキポキ鳴らしながら、マリアローズを見下していた。

　なんていうか、この生き物は、異質ではあるけど、決して醜みにくくはないんだ。ふと、そんなことを思った。拳姫は女性みたいだし、「美人だね」と褒ほめたら、見み逃のがしてくれたりしないだろうか。くれないか。あたりまえだ。何を考えてるんだろ。バカじゃないの、僕？　まったく、しょうもない。カタリにみそっかす呼ばわりされるわけだ。頭はぐらぐらしまくってるし。鼻の奥がつんとして。なんだか息が苦しくて。体はどうにか動かせるものの、機き敏びんな動作はまだちょっと無理そうだ。脳のう震しん盪とう？　そうかもしれない。

　やがて、拳姫が右足を上げた。

　踏ふみつぶす気らしい。

　どうしよう。

どうしたらいい？

ああ──僕は、自分の生死の瀬せ戸と際ぎわなのに、どうしよう、とか。どうしたらいい、とか。

本当に、ダメだ。ダメだ。ダメだ。ダメだ。ダメ人間だ……！ダメすぎて、いやになる。いやになりすぎて、何もかもがどうでもよくなってしまう前に、マリアローズは両手をベルトのホルダーにのばした。カバーを外して、爆ばく弾だんを抜ぬきとろうとしたところで、拳姫が動いた。

でも、残念でした。きみに頭を潰つぶされるより早く、爆弾を石畳に押しつけて割るくらいのことはできる。それで殺やれるかどうかはわからないけれど、いくらなんでも無傷ではすまないはずだ。「……死んじゃえ」誰に向けて言ったのか。実際、声に出して言ったのかどうか。それさえもわからないままに、マリアローズの指がホルダーから爆弾を抜こうとして、止まった。

拳姫の足が止まったからだ。

いや、止まったのではなくて、妨ぼう害がいされたのだ。

マリアローズは見た。

向かって右から、背の高い、ひょろ長い印象の男が、拳姫の左頬ほおに豪ごう快かいな飛びジヤンプ横蹴りサイドキツクをぶちかましているさまを。

そして、同じく向かって左からも、黒くろ髪かみ黒衣の男が、拳姫の右頬に華か麗れいな飛び膝フライング蹴り・ニーをぶちこんでいた。

「□□Ｂｕ……」だが、拳姫はタフだった。すこぶる顎あごが強いようだった。拳姫はぶっ倒たおれるどころかふらつきもせず、即そく座ざに両りよう腕うでを振ふりまわした。「Ｓｙａａａａａａａｈ……！」それで二人の妨害者は追い散らされてしまったものの、時間ができた。短いが、貴重な時間だった。その間に、マリアローズはホルダーのカバーを閉めて飛び起き、走るというよりほとんど転がるようにして拳姫から離はなれることができた。助かった。

助けられてしまった。

またか。

しかも、今回は一人じゃない。

二人だ。

「フッ……！　愛の使者、満を持して只ただ今いま参上！　愛してるヨ、マリア！」

着地するなり前髪をパサリとかきあげて、マリアローズをちらりと見た途と端たん、無む駄だに端たん整せいな顔に気き障ざったらしい微笑ほほえみを浮うかべた馬ば鹿か一号。

「愛は言葉に宿るものじゃない。口にすればするだけ嘘うそくさくなる」

何度かのバック転の果てに、腰こしをぐっと低めて構え、色眼鏡サングラスのブリッジを中指で押しあげつつ、腰から双節棍らしき武器を抜いた馬鹿二号。

「──てゆうか、満を持して、って……」いつものごとく、この機会をうかがってやがったのかこの変態下げ衆す外げ道どう鬼き畜ちくめ。それも二人して──と、マリアローズが罵ば声せいを浴びせるより早く、一号と二号の間でくだらない口論が始まっていた。

「嘘くさく……？　へえ。それってボクに喧けん嘩かを売っていると受けとっていいのかな？」「どうとでもとればいい。俺は思ったことをそのまま言っているだけだ」「この前は尻尾を巻いて逃げたくせにネ」「確実に勝てるとは思えなかったからな。だが、その気になれば相討ちに持ちこむくらいのことはできる」「相討ちだって？　笑わせるなヨ。思いあがりも甚はなはだしいネ。ボクがほんの少しだけ本気を出したら、キミはボクに指一本ふれられない。それが現実サ。いいかい、キミなんか──」

「あのー……」マリアローズは馬鹿一号二号の不毛ないさかいに横よこ槍やりを入れようとしたが、先を越こされた。拳姫の横槍はマリアローズよりちょっぴり、いや、だいぶ過激だった。何しろ暴力的というか暴力そのものだった。それに、一号二号は拳姫を挟はさんで言い争っていたから、正確には横槍とすらいえないかもしれない。

拳姫は、自分を無視してどうでもいいようなことをわめく馬鹿一

号に激しく抗こう議ぎするかのように、すすっと距きょ離りをつめて右の裏うら拳けん打ちから左のフック、一回転して右のバックエルボーと右の裏拳をつなげて、左の強きょう烈れつな斜め打ちデイセン下ろしデイング肘打ちエルボーでしめた。しかし、馬鹿一号はとにかくすばしっこい。これらをすべてきれいにかわしたうえ、その場にしゃがんで拳姫の左足を刈かりにいった。タイミングといい、速度といい、角度といい、たとえ巨人族ギガントでも転んでしまいそうな右足一いつ閃せんだったが、拳姫はこらえた。インパクトの瞬しゅん間かん、全身を縮ませるように強こわ張ばらせて、ちょっと驚おどろくほど大きく一気に「Ｆｕｈ！」と息を吐はきだした拳姫の左足は、地面に根を下ろした鋼鉄の樹木みたいにアジアンの右足を弾はじきかえしてしまった。

「──くっ、蜥蜴とかげのくせに……！」それでも、アジアンは左足一本で巧こう妙みょうにバランスをとり、左手で腰の鞘さやから抜いた泣き叫ぶスクリーミング短剣・ダガーで再び拳姫の左足を狙ねらった。拳姫もこれは受けとめようとはしなかった。下がる拳姫。アジアンは右手に泣き叫ぶスクリーミング短剣・ダガーを持ちかえて立ちあがり、これを追うそぶりを見せて、さっと後退した。何のつもりかと思ったら、マリアローズに駆かけよってきて、「マリアァァァ──ッ！　大だい丈じょう夫ぶだったかい！」うさんくさい泣きそうな笑顔で抱だきついてこようとしたので、十分引きつけてカウンターの右ストレートを繰くりだしたのだが、ひらりとかわされて懐ふところに入られた。

　もっとも、これも読みどおりだった。マリアローズは入ってきたアジアンに左の膝ひざをあわせた。「──う……」鳩みぞ尾おちに膝を食くらったアジアンは、しかし、めげなかった。この馬鹿一号は、事もなげに一歩下がって髪をかきあげ、微び苦く笑しょうを浮かべてかすかに首を振ってみせた。

「相変わらず照れ屋さんだネ？」

「すごい誤解だけど、いちいち訂てい正せいするのもめんどくさいから、失うせろ」

「その棘とげのある言葉もキミなりの不器用な愛情表現だって、ボクはちゃんとわかってるから」

「へー……あ。きみの耳から何か出てるよ。ほら、腐くさって液状化した脳みそじゃない？」

「フフッ」

　アジアンはやれやれといった感じで肩かたをすくめながらも、さりげなく右手で自分の耳のあたりをさっとさわった。脳が腐ふ乱らんしている自覚はあるということか。

　それはそうと、そんなことをしている間に、拳姫は新しい標的を見つけて楽しげに戦いはじめていた。彼女が目をつけたのは、馬鹿二号こと荆ジン王ワンだった。

荆ジン王ワンは短めの金属棒二本を鎖くさりでつなげた双節棍を操あやつって、応戦しているというよりも、なんとか間合いをとって逃にげまわっている。

　それでいて、腰がひけている印象はない。色眼鏡サングラスで表情がわかりづらいせいか。いや、事実、荆ジン王ワンは決してまっすぐ下がらず、円を描えがくように足を運ぶことで、逃げながらも圧あつ倒とうされてはいない。むしろ、少しずつ少しずつ、距離を狭せばめている。虎こ視し眈たん々たんと、反はん撃げきに転じる機会をうかがっているのか。両者の身長がだいたい同じくらいだということもあって、互ご角かくに近い勝負を演じているようにも見えなくはない。

　また、ピンパーネルと鋏使いも、まだ熱ねつ闘とうを繰り広げている。

　こちらは荆ジン王ワンvs.拳姫とは対照的だ。二人が動きまわる範はん囲いはかなり広く、両者の軌き道どうは予測不能で、しばしば激しく衝しよう突とつする。二ふた振ふりの鋏と雌し雄ゆう一いつ対ついの短剣が絡からみあうように激突して火花を散らせるさまは、とにかく恐おそろしく、美しくて、鳥とり肌はだモノだ。

　やっぱり、ピンパーネルはすごい。膂りよ力りよくでは完全に負けているのに、飛んだり、跳はねたり、転がったり、のけぞったり、体を倒たおしたり、信じられない体勢から目にもとまらぬ斬ざん撃げきを次々と放ち、手数の多さで鋏使いに対たい抗こうしている。それでも、鋏使いはほとんど無傷のようだが、ピンパーネルだって砂色の衣ころもがあちこち切り裂さかれてはいるものの、出血は見られない。見た目は派手な一いつ騎き討うちでも、じつは膠こう着ちやくしているようだ。これが二度目の対戦で、お互たがいを知ってもいるし、この均きん衡こうはそう簡単には破れない──だろう、と思う。たぶん。

　というわけで、荆ジン王ワンとピンパーネルがそれぞれ危険で厄やつ介かいな蜥蜴を引きつけてくれているおかげで、Ｄ13出入口前には平和が戻もどってきた──かというと、当然、そんなことはない。

　出入口から、黄色っぽい巨きよ大だいな物体がゴロゴロゴロゴロ転がりでてきて、そのあたりにいた侵入者クラッカーを何人か轢ひ

き殺した。

　そいつはすかさず自ら製造した轢れき死し体たいをつかみあげ、顎あごが外れそうなくらい大きく開けた口に放ほうりこみ、バリグシャグシャバリ嚙かんで砕くだいてこぼれ落ちた部分にはかまわず、ゴックンとのみくだした。

「──あれ、絶対おかしいよ……だって、いくら体が大きくたって、胃い袋ぶくろの大きさなんてたかが知れてるはずでしょ……」

「たしかにネ。まあ、個人的には、他ほかの蜥蜴ならともかく、あいつとだけはやりあいたくないヨ。脂し肪ぼうがたっぷりついていそうだから、斬きったら刃はがひどく汚よごれそうだ」

「てゆうか──」

　あんなやつ、相手にしたい馬ば鹿かがいるのか。

　いた。

　馬鹿三号。

「キャハハハハハ超ちようでけェーッ！　ぶっ殺ォォォ────スッ！　オラァッ……！」

　超食漢に突進していったのは馬鹿三号の飛燕フエイヤンだった。

　だが、この馬鹿は同じ馬鹿でも馬鹿の種類がちょっと違ちがう。物は試ためしとばかりに、超食漢の太たい鼓こ腹ばらに飛び両ドロ足そろツプえ蹴りキツクを食らわせてビヨーンとはねかえされ、両手で着地して一回転、即そく時じ再度の突撃を敢かん行こうしようとしている飛燕フエイヤンは、愛だのなんだのとクソたわけたことは一いつ切さい言わないまっすぐな馬鹿だった。戦闘馬鹿バトル野郎だった。一号二号と比ひ較かくして、どっちがマシかと考えてみた場合、まあ、どっちもどっちとしかいいようがない、結局のところは同じ馬鹿だった。

「キャハハウラァ！　ゥラァ！　ラァラァラァラァラァラァァ……ッ！」

　とはいえ、コマネズミみたいにこちゃこちゃ動きまわって足や腹にパンチとキックをあててくる飛燕フエイヤンには、超食漢もやや

辟へき易えきしている様子が見てとれる。打撃はあまり効いていないようだが、蠅はえや蚊かでも目の前を飛びまわられるといやなものだ。超食漢はときに驚きよう異い的な身軽さを披ひ露ろうするものの、基本的には体が大きいぶん小回りがきかないし、さして器用でもないだろうから、飛燕フエイヤンのような相手とは相あい性しようが悪いのかもしれない。

　というわけで、刑ジン王ワンとピンパーネルと飛燕フエイヤンがそれぞれ危険で厄介な蜥蜴とかげを引きつけてくれているおかげで、今度こそＤ13出入口前には平和が戻ってきた——といいたいところだが、そうは問屋が卸おろさなかった。

「——ムッ……！」突然、アジアンが超食漢の後ろというか上に目をやった。マリアローズもつられて見た。剣けん。槍やり。鎧よろいの破は片へんみたいな物もある。浮ういている。ここからだと超食漢の巨きよ体たいが邪じや魔までよく見えないが、ようやくやつも追いついてきたということか。

　蜥蜴四兄妹きようだい最後の一体。

　圧搾魔。

「マリア、こっちに！」アジアンに手を引かれて、振り払はらう暇ひまもなく走りだそうとしたら、不意に足あし許もとがおぼつかなくなった。「……あ……ん……」頭のなかの、中央、やや前のあたりがキューンと鳴って、焦しよう点てんがぶれる。物が二重に見える。吐はき気がする。まさか、拳姫の尻尾しつぽで殴おう打だされて、おそらくは頭を打ったときの影えい響きようがこんなときに……？　でも、こういうダメージって、我が慢まんしてどうにかなるものではないから、タチが悪い。マリアローズは酔よっぱらいみたいな足どりでこの場から離はなれようとしたが、さて、どっちに行けば？

　あれ？

まずい──と、思った瞬しゅん間かん、黒衣の馬鹿一号にさっと抱かかえあげられた。

今日流行のお姫ひめ様さまだっこだった。

「つかまれるようなら、しっかりつかまって！」

「……やだ……」

口ではそう言いながらも、生存本能がマリアローズの体を勝手に動かした。

マリアローズは目をつぶり、両りよう腕うでをアジアンの首にまわして、落ちないように、離れないように、しがみつく恰かつ好こうになった。もちろん、かなり不本意だったが、しょうがない。目を開けていると、世界がぐるんぐるん回転して嘔おう吐とを催もよおすような状態なのだ。気持ち悪い。吐きそう。それをこらえるために、赤ん坊ぼうみたいに全身を丸めるようにして、力を入れて、すがった。すがることしかできなかった。だって、揺ゆれて、ガクンガクン揺れて、何かがこみあげてきそうで、頭がガンガン痛んで、何がどうなっているのか、ぜんぜんわからなくて。

僕は、無力で。

役に立たなくて。

所しよ詮せん、みそっかすだから。

そんな、僕を。

「──くっ！　乱戦になったら、いくらボクでも……！　マリア、いったん逃にげるヨ……！」

僕を、抱えて走っている。

「大だい丈じよう夫ぶ、ボクがいる……！」

僕を、守ろうとしている、なんて。

バカだ。

Omenage 897 10th revolution 8th day

サンランド無統治王国首都エルデン

"here and there"

chapter.9

異変に萌ゆる恋心

-Underground D5　Melicle's 2nd

Labyrinth -

「……そうだな。まったく、お前を信じた俺が馬ば鹿かだったよ。ああ、馬鹿だったさ。馬鹿すぎて笑えねえよ。笑ってる場合でもねえよ、実際。でもな、もちろんお前も馬鹿だ！　この馬鹿が！　なんでちょっと用足したいとか言って、一人じゃねえと恥はずかしいとかもう大丈夫いいかげん慣れてきて道もきちんと覚えてるからとかぬかした馬鹿が、奥のほうまで迷いこんでメリクルの大群引き連れて戻もどってきやがるんだ馬鹿！　だいたい、便所はアンダーグラウンドもぐる前にしっかり行っとけって、いっつもいっつも口すっぱくして言ってるだろうが！　何回言った？　ああ？　俺が何回同じこと言ったか数えてみやがれ！　それとも数もかぞえられねえか。そうだよな、お前は馬鹿だものな！　この馬鹿！　大馬鹿！　馬鹿コロナ……！」

　レニィは走っていた。怒ど鳴なりながら懸けん命めいに走っていた。息は切れているが、これくらいで足が止まったりはしない。体力はあるほうだ。故郷では独どく立りつ剽ひよう騎き士し団だんの教練所でだいぶ鍛きたえられたし、何しろ体が資本の商売だ。頭を働かせるより体を動かさないと話にならない。かといって、頭が鈍にぶすぎても困る。たまにマジで困ったことになる。

　たまに？

　いや、しょっちゅうだ。隣となりで首をすくめたままぴょこぴょ

こ走っている馬鹿が、毎度毎度飽あきずに懲こりずに厄やつ介かい事を起こしてくれやがる。いろいろあってそうなのはわかっているから仕方ない部分もあると知っているが、それならそれで決して自分を過信するなと言いたい。俺も俺で、さすがにコロナの馬鹿も少しは進歩してるだろうと甘い期待なんかするんじゃねえと自分に言いたい。強く言いたい。こんな馬鹿、いいかげん見捨ててほっぽって、次にもし出くわすことがあっても、見知らぬ他人を装よそおったほうがいいと思う。何度そう思ったことか。

　それなのにレニィは、コロナの馬鹿がまたぞろ何か面めん倒どうを──いや、すぐにわかった、たくさんのメリクルをお持ち帰りしちまいやがったと悟さとったとき、他ほかの仲間にはここから少し離れてじっとして、ほとぼりが冷めてから逃げるように言って、自分はコロナと合流する道を選んだ。とっさに選んでしまった。深く考えずに、気がついたらそうしていた。

「畜生シツト……！　コロナ！　お前、まだ走れそうか！」

「……は、はいっ！　コ──わたしは、まだたぶん、大丈夫ではないかとっ！」

「たぶんはよせ！　走れるのか走れねえのか、どっちだ！」

「は、は、走れます！　コロ──わ、わたし、こう見えて、息つぎは上手です！」

「馬鹿！　息つぎは水泳だろうが！」

「な、なんとーっ……！　み、水は沈しずんでしまうので怖こわいです！　コロナはきっと生まれたときから陸りく棲せい生物ですので、陸上のほうが、何かと！」

「安心しろ、俺も陸棲生物だ、くそったれ！」

　もうわけがわからない。

　しかし、ちらりと後ろを振ふり返って見ると、二十羽から三十羽の間とおぼしきメリクルの群れの先頭までは、十メーテルとはいわないまでも、七、八メーテルはある。魔ま術じゆつ士しのくせに肝かん心じんの魔術が「（さっぱり）×10」のコロナも、体こそ小さいが、意外と持久力はあるし、わりと足だって速かったりする。もともと、他の仲間数名とメリクル狩がりをしていた場所も、それほ

ど深部ではなかった。ずいぶん走ってきたし、地上への坂道もそう遠くない。このままでゆけば、どうにか逃げきれるだろう。だが、油断は禁物だ。何せ、コロナだ。

「コロナ……！　頼たのむから、ここまできて転ぶんじゃねえぞ！　ここですっ転んだらつつかれ死じぬからな！」

「任せてくださいっ！　コロナ、まだ思い残すことがありますので！　素す敵てきな、こっ、恋こいもしたいですし！　けっ、結けつ婚こんも！　したいですし！　新婚旅行としあわせな家庭生活も……」

「妄もう想そうふくらませるのはあとにしろ、馬鹿！」

　そうだ。あとにしろ。もうすぐなんだから──と、飛びこんだＤ５の坂道は、雑に造った石段といった風ふ情ぜいで、踊おどり場を四回経由すれば地上に出られる。ここからさらに石段登りを敢かん行こうするなんて鬱うつだが、鶏にわとりどもについばまれて穴だらけになってダラダラ血を流して痛い思いをして死ぬのはそれより一万倍鬱だ。レニィは「しゃあ！」と気合いを入れなおして力強く一段目に左足をかけた。一段飛ばして三段目に右足をかけた。いい調子だ。次だ。レニィはさらに足を速めようとした。その矢先だった。「──ら゛っ」コロナの声。「ぐあ！」背中に衝しよう撃げき。思わずつんのめりそうになったが、どうにかこらえ、石段につまずいた勢いで他人ひと様さまの背中に突とつ撃げきしてきた馬鹿コロナの手を引っぱった。「だああ、糞くそッ！　こい！」「あ、あふっ……！」

　そのまま走る。

　手をつないで、というより、引きずって走る。

　駆かけあがる。

　コロナもコロナなりに必死でついてくる。

　それにしても、小さい手だ。こいつの手、どうしてこんなに小さいんだ？

　━━強く握にぎりすぎると、壊こわれてしまいそうで。

「もうちょいだ……！」

　レニィは行く手に地上の光を見た。本日の天候は曇くもりだが、暗視鏡をつけたままだ。まぶしいというか、視界が蒼そう白はくに塗ぬりつぶされて、何がなんだかよくわからない。「はわわ目がっ！　目ぇ～がぁぁ～！　れ、れ、れれレニィさん━━」「暗視鏡！」言いながら、レニィは自分でも暗視鏡をずりあげた。足を止めず後ろに目をやると、メリクルどもが「キウウウゥゥエエエェェ」とやかましく鳴きながら猛たけっている。やつらは光に過か剰じよう反応して興奮する習性があるらしいから、そのせいだろう。こころなしか、だんだん距きよ離りが縮まってきているような。

　だが、もうすぐだ。地上に出てしまえば安全だ。逃にげきれる。最後のひとふんばりだ。そう思うと途と端たんに体が軽くなった。まるで見えない何かに背中を押されているみたいだ。実際、そうなのかもしれないが、それはまあいい。どうでもいい。レニィは走った。コロナの手を引いて、駆けて、最後の石段をのぼった。駆け抜ぬけた。地上！　風が心ここ地ちよくて、しばらく立ち止まることを忘れていた。「れ、レニィさん……！」「あ？」コロナに呼ばれて、ようやく気づいた。異状に。変だ。だって。キウウウゥゥエエエェェェェェ━━って、この声は。後ろから迫せまってくる足音は。

　でかい鶏？

　━━の、大群……？

　メリクルどもが、なんで地上に？

　さっぱりわからない。しかし、どうしなければならないかは明白だった。

「に、にげっ、逃げるぞ、コロナ……！」「は、は、はいっ」「手ぇ放すな！」「はい！　放しませんっ！　絶対に……！」「超最低ＳＵＣＫ！　なんだってこんな……！」

　だが、異変はＤ５メリクル第二迷めい宮きゆうだけで起こってい

たのではなかった。エルデン各所で異常事態が発生していた。そのことをレニィとコロナは知らない。知るよしもない。仮にそのことを知ったところで、何か感想を抱いだく余よ裕ゆうさえなかっただろうが。

“-The 4th ward　　　　　　　Silvery Hold”

-

「いったいどういうことだ」

　ヨハン・サンライズは銀の砦シルバリイホールド主しゆ塔とう五階の総長室で低く呟つぶやいた。執しつ務む机の前で、豪ごう刀とう「日にち輪りん」の柄つか頭がしらに両手をかけている羅ラ叉サも、いつもどおりの剣けん呑のんな表情だが、眉まゆのあたりに戸と惑まどいが見え隠かくれしている。琺瑠フオール副長や、最年長幹部の実直なマシュー・シュナイデル副長は、ぞくぞくと集まってくる情報への対応に忙ぼう殺さつされている状じよう況きようだ。

　今もまた、もはや開けっ放しにしている扉とびらから、二十六番無名隊の者が駆けこんできた。

「報告します……！　クァラナドのアンダーグラウンド出入口付近にて半死者ハーフデッドが多数目もく撃げきされ、現在、複数の侵入者クラツカーがこれと交戦中！　すでに女性、子供など、死者も出ている模様！」

「これで、第五区、第六区、第七区に、クァラナド━第九区か。異界生物フリークス……」ヨハンが顔をあげると、琺瑠フオールと目があった。シュナイデルが十六番守護隊の派は遣けんを指示して無名隊の隊士を走らせ、それと入れかわりに現れた二番親衛隊の李イ童ドウ晏アン隊長が、総動員態勢の準備完かん了りようを短く告げ

た。ヨハンは琺瑠フオールとうなずきあってから、羅ラ叉サに向きなおった。「総長、私と琺瑠フオール副長は下へ降ります。統とう括かつと銀の砦屯所の防衛はシュナイデル副長が──」

「俺も出る」

「……総長、それは」

「ここにいて、義の剣たる俺に何かやることがあると思うか」

「むろん、あります。総長が山のごとく動かぬことで、むしろ我々は──」

「糞食らえだ」羅ラ叉サは鞘さやごとの日輪を左手で持ちあげて、口くち許もとだけで薄うすく笑った。「剣は飾かざり物ではない。斬きるものだろう。ヨハン副長、貴様が俺に示すべきは、斬るべき相手だ」

「しかし、秩序の番人の総長が、異界生物フリークスごときに……」

「無む辜この民たみを傷つけるなら、やつらも悪だ。悪に貴き賤せんはない。種別もない。貴様にかつがれて立場は変わったが、俺のやることは同じだ。亡なきデニス・サンライズの教えどおり、悪なれば即すなわちこれを斬る。即ち、だ。ヨハン副長」

　ヨハンは舌打ちをしたい気分だったが、あえて無表情をつらぬいた。だが、内心では、このわからず屋め、と思っている。いかに異常事態とはいえ、この段階で総長が自ら動くとなれば、同志たちへの心理的な影えい響きようが大きい。ただでさえ、大勢の新規入団者を抱かかえて、整然とした動きがとりづらい特とく殊しゅな時期なのだ。また、この際いい機会だから、玉ぎよく石せき混こん淆こうの新入りどもを、いろいろな側面からふるいにかけたい。そんな思おも惑わくもヨハンにはあった。それを、この戦せん闘とう狂きようめ。おまえが出ていって、その日輪で斬りまくってしまえば、あとには残ざん骸がいしか残らない。おまえが斬るのは悪だけでない。おれの目もく論ろ見みもだ。ぜんぶ台無しだ。少しは考えろ。悪を斬るだけで組織が回るのなら、おれがこれほど苦労することはないはずではないか。

「わかりました」

しかし、ヨハンはすべてを胸のうちにおさめてうなずいてみせた。日輪を継ついだ羅ラ叉サは剣。月げつ明みようを継いだおれがそれを振ふるう。剣は血を求めるものだ。その剣が斬れれば斬れるほど、多くの血を。最初から承知していたことだ。いちいち目くじらを立てていては――胃がもたない。

「異界生物フリークスが地上に出てきている。信じがたいことですが、この事実から導きだされる解答は一つです。我らが王キング・グッダーの〝古代九頭竜の呪のろい〟がとけた。そう考えるしかありません。永遠にとけたままなのか、あるいは一時的なものなのか、それは不明ですが、このうえは対たい症しよう療りよう法ほう的てきにではなく、先手を打ってアンダーグラウンドの出入口各所に人員を配置し、偵てい察さつ、そして鎮ちん圧あつに乗りだすべきでしょう。とりあえず、総長には、直属隊と親衛隊を率いて第七区で確かく認にんされている亜人ボーグどもの殲せん滅めつにあたっていただきたい」

「よし。李イ童ドウ晏アン、こい」

羅ラ叉サはさも当然といった態度で、二番親衛隊の李イ童ドウ晏アン隊長をともなってさっさと総長室から出ていった。さすがに表情には出していなかったが、足どりがやけに軽かった。莫ば迦かが。浮うかれている場合か。ヨハンは一つ小さなため息をついて、シュナイデルに頭を下げた。

「すまない、シュナイデル副長。一人で貧びん乏ぼうくじだ」

「なんの」シュナイデルは謹きん厳げんそのものといった顔に珍めずらしく微笑ほほえみを浮かべ、少しだけ肩かたをすくめてみせた。この男はもう十五年以上、義に剣を捧ささげてきた古ふる強つわ者もので、三十なかばにして、今の秩序の番人においては生き字引的な存在だ。目立たない男だが、信に篤あつく、鋼はがねの意志を持ち、裏切りや変節といった言葉とは無む縁えんで、おのれを知り、他人をよく理解する。いぶし銀とはまさしく彼のことだろう。「総長もご自身の確固たる道を歩もうとしておられるのです。あの方はやはり前線で剣を振るうべきでしょう。そもそも、我が団の総長は、まず義の体現者であり、悪を討つ義の剣であらねばならぬのではありませんか。先代もそうでした」

「先代の真ま似ねは誰だれにもできない」

　思わずもれた本音だった。相手がシュナイデルだったからかもしれない。それは幼よう稚ちな反はん駁ばくで、恥はずべきことに追つい慕ぼの発はつ露ろですらあったが、シュナイデルは正面から受けとめながらも、うまく見み逃のがしてくれた。

「もちろんです。ですが、我々も我々なりに進まねばなりません。義を立てねば」

「……そうだな」

「私も、いつか再び先代にまみえることが叶かなう日まで、微び力りよくながら力をつくします」

　ヨハンはそれには答えなかった。シュナイデルは入団以来、先代の直属としてそのかたわらにはべり、親衛隊の隊長に任命されてからも、先代の手足となって働いた。先代とともにあり、先代に仕え、先代のために戦うことが彼の人生だった。先代も彼を深く信しん頼らいしていた。先代の死後、副長就任を要よう請せいしたヨハンに、彼は言った。「総長が逝ゆかれた今、私に残っているのは義への忠誠のみです。それすらも失えば、もはや私はまともに死ぬことすら許されず、未み来らい永えい劫ごう地上をさまよう亡もう者じゃと成り果てるよりほかにないでしょう。総長が奉ほうじた義のために、私ごときにできることがあるのならば、なんなりと──」

　そうだ。そのとおりだ、マシュー・シュナイデル。

　おれも失うわけにはゆかない。先代が遺のこした秩序の番人は、おれのすべてだ。

「私と琺瑠フオール副長は各隊を動かしつつ、直属隊を率いてＤ４出入口に向かう。あとを頼たのむ、シュナイデル副長」

「承知」

「行こう、琺瑠フオール副長」

「ええ」

　ヨハンは琺瑠フオールと並んで総長室を出た。早歩きで廊ろう下かを進み、階段を降りていると、琺瑠フオールがまんなかできっちりわけた黒絹の髪かみをかきあげながら口を開いた。少し離はなれてついてくる無名隊の者たちに聞こえぬくらいの、囁ささやくよう

な声だった。「──あなたはよくやっているわ。羅ラ叉サもね。だからわたしたちは戦える。立っていられる。先代も、きっとわたしたちを守ってくれるはずよ」

「それは違ちがう」ヨハンは琺瑠フオールを見なかった。だが、即そく座ざに否定されて、琺瑠フオールが息をのむ気配は伝わってきた。「死者は何ものかを守ったりしない。琺瑠フオール副長、そうではない。我々が生きて戦い悪を討ち、死者の名めい誉よを守るのだ。巨きよ大だいな傘かさを失った我々が、脆ぜい弱じやくと惰だ弱じやくを捨てて今度は傘とならねばならない」

「ヨハン……」

「頼むから」ヨハンは声をひそめた。琺瑠フオールにさえ聞こえなくてもいいと思った。「君まで先代を持ちだすのはよしてくれ。言わずもがなのことを言うな。言わなくとも、忘れるはずがない。そうだろう、琺瑠フオール──副長。だが、おれたちは、ただひたすら前を向いて進むしかない。失われてしまったものは二度と還かえらないからだ。それが唯ゆい一いつ絶対の覆くつがえせぬ真実だ。違うか」



琺瑠フオールは返事をしなかった。ヨハンも期待していなかった。思えば、むなしい関かかわりだ。琺瑠フオールはいつもつきあいの長さに義理立てするようにヨハンを気づかい、ヨハンは当然のごとくそれを拒きよ絶ぜつする。互たがいをよく知っているはずなのに、肝かん心じんな部分でいつもすれ違っている。おそらく、そのことをおれも琺瑠フオールもわかっている。結局、おれたちは相

通じることがない。時間だけが流れる。しかし、おれはその時間を無む駄だにしたりはしない。この義があるかぎり、決して。

　ヨハンはすでに頭を切りかえていた。アンダーグラウンド。異界生物フリークス。そして、〝古代九頭竜の呪い〟。もし本当に、あの偉い大だいなる魔ま術じゆつがとけてしまったとして、その状態が永続するとしたら──かつての混沌とエルデ恐怖の巷エイニオンが再現される。それは現実主義者であるヨハンの想像力が及およばない事態だった。非現実的だ。だが、それが現実らしい。ヨハンが現実だと信じていたものは、本物の現実ではなかった。そういうことだろう。

　だいたい、考えてみれば、おれたちは何を知っているというのか。信じるほど、知っているのか。

　知らない。知らないまま、常識やあたりまえの日常の上に築かれた「現実」を、なんの疑いもなく受けいれていただけだ。

　おれたちは、〝古代九頭竜の呪い〟の実体も知らなければ、それを維い持じしている──いや、していたはずのキング・グッダーの姿形さえ知らない。

　もしかしたら、おれたちはとんでもない間違いを犯おかしているのかもしれない。

-A certain place in Underground-

──グッダー。

　何を血迷ったのか。それとも、やつにたぶらかされたか。もしくは、共きよう謀ぼうか。

　どれもありうる。

　無数の用よう途と不明の玩具おもちやや、異様で不ふ愉ゆ快かいな彫ちよう刻こくや、馬ば鹿か馬鹿しい絵画等々が左右に並ぶ長い長い廊下を、彼女は歩いている。

　造りは豪ごう奢しやといってもいい。しかし、趣しゆ味みが悪い。美術品とは思えない品々だけでなく、天てん井じようには性交する男女や獣けものを模したとしか思えない形状のシャンデリアがぶら下がり、大理石の床ゆかに敷しかれた絨じゆう毯たんは上質だが、赤と白の水玉模様だ。こうした不統一、突とつ拍ぴよう子しのなさ、珍ちん妙みようさ、卑ひ猥わいさは間違いなく意図的だろう。この広大な──ところが、外からだとごく普ふ通つうの一いつ軒けん家や程度の大きさにしか見えない奇き妙みような建物の主は、他人を小馬鹿にしておちょくるのが好きなのだ。

　彼女は、その主に会うためにやってきた。

　そのために、このお伽の国ネヴアーランドの城パレスに入り、廊下を歩いている。

　鏡を磨みがきたる者。力と技わざの卓たく越えつ者。いたわり偽り欺あざむく者。蝶ちようの星。穢けがれの象しよう徴ちよう。その他、くだらない、さして意味のない、たわむれにつけたとしか思えない異名を、百も、二百も、ひょっとしたら千単位で持っている、ジルマイヤ酒しゆ血けつ湖こ及びハ・マーン淫いん楽らく街の領主。

　だが、彼は長らく自らの領地を留守にして、このような辺へん鄙ぴな場所にとどまっている。

　どういうつもりかは知らない。

哀あわれな双ふた子ごとの約定に従って、墓はか守もりをつづけることが彼の本意なのか。単なる暇ひまつぶしか。気まぐれか。

不明だ。

いずれにしても、彼女は幾いく度どとなく彼と会っている。好都合だからだ。彼は、彼の力によって悲しき双子が創出したこの閉へい鎖さ世界のなかで、ほぼ万ばん能のうの王として振ふる舞まうことができる。彼はお伽の国ネヴアーランドの城パレスの主であるだけではない。この世界の主だ。彼はこの世界を自在にゆがめて、改変する。だから、本来はある限定魔術を用いなければ立ち入ることのできないはずのこの世界に、彼女は自由に足を踏ふみ入れる。彼女は招き入れられる。彼女と彼は古い知ち己きだ。友、ではない。彼女は友を必要としない。彼女は強さを身につけるために何もかも捨てたのだ。捨てざるをえなかった。

後こう悔かいはない。

遺い恨こんはある。

あたしを裏切った者を、あたしは忘れない。あたしを殺しかけた者を、あたしは憎にくむ。

だが、それらの感情も、普段はどこか深い場所に沈しずんで浮うかびあがってこなかった。

彼女の心は静せい寂じやくのなかで強さだけを求めて戦い、戦って、戦い、戦いつづけ、戦うことを望んだ。彼女は敵を欲ほつした。強い敵を欲した。かつて大穴メガボロスと呼ばれた地下をさまよい歩いた。地上にはもう彼女を満たすだけの強者がほとんどいなかった。彼女は捜さがしていた。彼女は━あのとき、単身、大穴メガボロスの奥底へと乗りこんで戻もどらなかった怨おん敵てきの匂においを求めていた。あの男は生きている。死ぬはずがない。あたしはあの男を殺す。必ず殺す。そのために強くなる。どこまでもどこまでも強くなる。だが、容易には見つからなかった。

あの男と再会したのは地上でだった。

拍子抜けした。あの男は、昔とは違ちがっていた。変わり果てていた。大量の死の上に立つ者。そう呼ばれて、自らもそう名乗っていたころの男とは、まるで別人だった。それでも、あたしはこのア

ルティメットブレイド・〝ギャラクシー〟・ダブルオーセブンティーエイト・メタルデス〝緋ノ魂滅〟で貴様を八つ裂ざきにする。貴様を殺す。そう念じて斬きり結び、幾度もあの男を圧あつ倒とうしかけ、そのたびに間かん一いつ髪ぱつでかわされ、だが、勝てる。弱い。弱くなった。弱くなってしまった。弱くなったこの男を殺して、どうする？　あたしは満足なのか。そう自問したときだった。あの男が言った。「──りりぃ、もうよせ。俺にはお前とやりあう理由がない」

　理由が……！

　理由がない、などと！

　あの男は変わった。弱くなった。もはやあたしの敵ではない。本当に？　わからない。長い間、あの男はどこにいたのか。何をしていたのか。どうなったのか。わからない。あの男は今、何を考えているのか。あの男は何を失い、何を手に入れたのか。

　この間、久々に会ったあの男は、一人ではなかった。何ものをも必要とせず、孤こ高こうを保ち、守るべきものなど持たず、すべてを敵にしても退ひかず、立ち向かい、打ち倒たおし、殺し、殺して、殺しつくした、あの男が──一人じゃなかった。あの男は、連れ立っていた人間たちを見まわして、言ったのだ。「ここでお前に殺されてやるわけにはいかんな」と。あたしは、あの男を殺すために、ぜんぶ捨てたというのに。強くなるために。それが強さだと信じて。

　なぜか、いつもあの男に先を越こされているような気がする。

　あたしはあの男を追いかけているのか。

　──いや。

　あたしはあたしのやり方で、強くなる。もっと、もっと、強くなる。そして、勝つ。それ以外のことはどうでもいい。眼中にない。すでに、研とぎ澄すますことで到とう達たつできる限界にはとうに達している。伸のびしろはない。それでもさらなる高みを目指してあがく。一巡じゅん月げつで進めなければ一年で。一年で無理なら十年で。歩みは遅おそい。しかし、倦うむことなく進みつづける。彼女は知っている。この境地に至れば、早道はない。あきらめれば即そく、停てい滞たいする。あたしは負けない。最大の敵は自分

だ。あたし自身だ。

　そのために、ここはじつは好都合だ。

　彼女は果てしなく感じるほど長い廊ろう下かの端はしにたどりついた。

　扉とびらはない。突つきあたりの壁かべは一面鏡張りだ。当然、鏡には彼女の姿が映っている。頭頂部から踵かかとまで二メーテル七サンチ。紅色の、ザイエン繊せん維いとゲドマイト特とく殊しゆ鋼の複合外装甲で全身を覆おおった、人間に似ているが、人間とはさまざまな部分が異なる、戦せん闘とうに特化した姿の、何か。そう。何か、としかいえない。あたしを表す言葉はない。あたしは自ら選んで、そうなった。もちろん、あたしにも名前がある。人は好きなようにあたしを呼ぶ。だが、こうなってしまったあたしは、もうそのどれでもないのかもしれない。きっとあたしは、自分自身を相手に終わりのない戦いに明け暮れる何かにすぎない。

　不意に、鏡のなかの何かが、ゆっくりと後退しはじめた。

　鏡の前にいる何かは――彼女は、一ミルたりとも動いていないのに。

　彼女は、下がるそれを追って、滑すべるような足どりで前に出た。

　鏡へ。

　通り抜ぬけた。

　鏡を。

　その先は、円形の闘技場だった。熱ねつ狂きようする声。雄お叫たけび。奇き声せい。足あし踏ぶみ。それらで空気が揺ゆれている。闘技場に一番近い一階席、それから二階席、最上段の三階席まで、客席は満員だ。

　ただし、客は人ではない。

　人と変わらない姿のものもいるが、青い肌はだのものがいて、赤い肌のものがいて、緑色の肌のものや、黒い肌のものもいて、多頭のものがいる。多た肢しのものもいる。牛頭のものもいた。山や羊

ぎの頭を持つものがいれば、猿さるそっくりなやつもいて、羽を持つものがいる。やたらと大きいやつがいる。小さいやつもいる。獣けものとしかいえないやつもいる。分類不可能なものが大勢いる。

　悪魔デビルだ。

　ここは悪魔たちがつどう闘技場だった。いや、そのようにゆがめられ、創つくられた場所だった。

　──地じ獄ごくの大公爵ハイヴエリオンの手によって。

　彼は、だが、その仰ぎよう々ぎようしい称しよう号ごうにそぐわないふざけた恰かつ好こうで、大きさで、闘技場のまんなかに出現した。

　ちょうど、彼女と、彼女とうり二つの何かの中間に。

　彼は真っ白い顔に青と赤で奇き怪かいな紋もん様ようを描えがいて、金銀をあしらった貴族服に、先が幾股にもわかれた帽ぼう子しをかぶって尖せん頭とう靴ぐつを履はき、手には黒と黄色の横よこ縞じま模様のステッキを持っている。

　小さい。

　身長はせいぜい三十サンチ程度だ。

　精せい巧こうな人形のようだが、なめらかに、生き物のように、動いている。

　彼女に向かって、礼をした。

　優ゆう雅がな動作なのに、どこか猥みだらな、高貴にして下品な、敬意と侮ぶ嘲べつがこめられた礼だった。

「ようこそ、りりぃ。このジェンバジェンガ・フルミネンセ・パルートルメイヒヨーケンデール・クライストリスト・オーラル・ド・リリカル・ラーヴィア・カント・ヴ・アギナ・スーペルファルシャワード・カムイヨラセナイムクロミ・ダイ・アマント・グランド・セクスィ・マスター・アウトルマ・ファッルーカの宮きゆう殿でんへ、ようこそ、りりぃ」

「ああ」

　彼女はファッルーカにはーいち瞥べつもくれず、両手から緋ノ魂滅を出した。禍まが々まがしく反り返ったこの双そう剣けんは、神しん霊れいジャニス・イデルと悪魔大公グランヴエリオンアーマンの息むす子こ、半神半魔の〝見捨てフオーセられ子イカン〟ヨヴィ・イデルが単たん為い生せい殖しよくで残した子孫の末まつ裔えい、〝鍛冶鬼マツドスミス〟シニ・イデルが彼女のために創りあげた唯ゆい一いつ最上の凶きよう器きだ。

「ＦＡＦＡ……」ファッルーカがくるりと一回転して、ステッキで地面を叩たたいた。「相変わらずつれないお方だ、りりぃ。いつもあなたは私の宮殿を訪おとずれておいて、私には目もくれない。このファッルーカにはなんの興味もないといった態度だ。私はとーっても悲スィー。りりぃ、ですが、よいでしょう、私はあなたと七百二十時間耐たい久きゅうファックしたいくらい、あなたが好きだ。あなたの望みはできるだけ叶かなえてさしあげたい。ですから、りりぃ、さあ！　ショウの始まりだ！　あなたはあなたと戦う！　そのストイーックな姿勢が私の前ぜん立りつ腺せんを刺し激げきする！　さあ、行け、行くのだ、りりぃ13、りりぃと戦え！　激しく！　美しく！　犯おかしあうように！　ぶち抜くように、かきまわすように、貪むさぼるように……！」

　ファッルーカがステッキを振ふりあげて、小さな体に似合わない大音声でそう叫さけぶと、歓かん声せいが爆ばく発はつした。それが合図だった。

　彼女とうり二つの何か──りりぃ13が両手から緋ノ魂滅を出すなり、突とつ進しんしてきた。

　彼女も前進する。

　接近する。ふれあう。殺気が。闘気が。互たがいに知っている。ここだ。この距きよ離りだ。双剣を振るう。斬。否いな。違ちがう。りりぃ13はそうだったが、彼女は違った。彼女はすでに、その場所にはいなかった。今や彼女の距離はりりぃ13のそれと同じではなかったのだ。なぜなら、りりぃ13は前にここへきたときの彼女をもとに創られている。微び妙みような差ではあった。だが、その僅きん差さが勝敗をわける。しかも、一いつ瞬しゆんですべてが終わる。だが、彼女とりりぃ13のぜんぶが溶とけだして形作った、これ以上ないくらい濃のう密みつな、永遠にも等しい一瞬だった。

　彼女は緋ノ魂滅を繰くりださずに直進した。

　りりぃ13の緋ノ魂滅が、はっきりと見えた。体を傾かたむけてくぐり抜けた。かすることもなかった。彼女はりりぃ13の真ん前で、跳とんだ。垂直に跳びながら、右の緋ノ魂滅で斬り下ろして、左の緋ノ魂滅で斬り上げた。拍はく手しゆと声で闘技場が割れそうだった。りりぃ13は実際に割れた。彼女の緋ノ魂滅によって、三つに分割された。

　そして━

　視界が暗転した。

　着地すると、そこは広々とした瀟しよう洒しやな白い露台バルコニーの上だった。

　空は紫むらさき色いろと青と赤がまぜこぜになっている。

　夜ではないが、昼でもない。だが、暗い空に、色とりどりの五つの月が浮うかんでいる。

　露台には、立派だが過か剰じように華か美びではない椅い子す二脚きやくとテーブル、それにパラソルのセットがしつらえられていて、一脚の椅子には一人の男が足を組んで腰こしかけ、どす赤い色の茶を上品な仕草で飲んでいた。

「りりぃ」

　男の顔は、暗視をもさえぎる地獄の闇やみのせいでよく見えない。服装はかろうじてわかる。白と赤と黒のジャケットに、細身のズボン、それから、フリルをあしらったブラウス。髪かみの毛は白はく髪はつ、もしくは白にかぎりなく近い金髪だ。姿形はきわめて人間に近い。だが、当然、彼は人間などではない。

「りりぃ……座らないのかい、りりぃ。あなたのためのお茶も、ほら、見てごらん、ちゃんと用意してあるのだよ」

「不要だ」

「そう━ああ、べつにかまわない。私はその程度のことで気を悪くするような心の狭せまい悪魔ニンゲンではないし」

「貴様の機き嫌げんなどあたしの知ったことじゃない」

「あなたはかわいいひとだな」

「気色の悪いことを言うな」

「本音なのだがね。あなたはかわいらしい。あなたの心ハートが、精神マインドが、魂アニマが。私はそう思うのだよ。あなたは信じないかもしれないが、私とて私にとっての真実を口にすることもあるのだ」

「その姿で言っても説得力がない」

「これは擬ぎ態たいではないよ、りりぃ。あなたと話すのにふさわしい姿を、吟ぎん味みして、選んだのだ。私は千の名を持ち、千の姿を持つ者だ、りりぃ。ある意味、そのすべてが偽いつわりであるとも言えるが、すべてそうではないとも言える。私は善であり悪であり美しくも醜みにくく猥みだらにして高潔な、もっとも悪魔ニンゲンらしい悪魔ニンゲンなのだよ、りりぃ」

「知っている、アウトルマ・ファッルーカ。その悪魔たる貴様に尋たずねる」

　彼女は強くあること、強くなること、それ以外のことに興味がないはずだった。そのためにすべてを捨てたはずだった。この体こそがその証明だ。そのはずだったのだが。

「貴様らは動かないのか」

「──私は」ファッルーカはティーカップをテーブルのソーサーに置いて、両手を膝ひざの上で組みあわせた。「しばらく本土に帰っていないのでね。帝てい王おう陛下にもずいぶんお会いしていない。陛下の御み心はうかがうべくもないよ。まあ、大公爵ハイヴエリオンたる私は、本土では独立した君主に近いのだが、その私個人としては動くつもりはないね。私の個人的な見解では、これは意図的で、一時的なものだ。時はまだ満ちていない。前兆のオーメ時代ネイジは終わっていないのだよ、りりぃ」

「時が満ちれば貴様は動くのか」

「気分次し第だいだな。もしあなたが私の花はな嫁よめになってくれるのであれば、いつまでも甘かん美びな新しん婚こん生活にひたっていたくて、それどころではないかもしれない」

「貴様は悪あく趣しゆ味みだ」

「そうかい？　あなたはかわいいよ、本当に」

「貴様の花嫁とやらになるつもりはない」

「それが本心だとしても、それだけではとても気の長い私は悲しまないが、もしあなたに意中の相手でもいるのであれば──あなたは意志強固で、千年の片かた恋こいに耐たえ、それに殉じゆんじることもいとわない気高いひとだ。私の恋は永遠に破れ、その痛みでこの胸が張はり裂さけてしまうかもしれないな」

「そんなもの、いるはずがないだろう」

　彼女は吐はき捨てるようにそう言ってファッルーカに背を向けた。そうだ。そんなものはいない。意中の相手どころか、かつての肉親も、肩かたを並べて戦った仲間たちも、今のあたしにとっては単なる過去だ。やつらの企たくらみにも賛同しない。共感もしない。やつらにはやつらの考えがあるように、あたしにもあたしの考えがある。動くとしたら、あたしはあたしの意思で、あたしが正しいと思うことを行う。あたしは一人でいい。強くある。強くなる。あたしはそれでいい。あたしのなかに棲すんでいるものがいるとすれば、それは殺すべき相手、殺したい男、仇きゆう敵てきだけだ。だが、あの男も──

「りりぃ」

　ファッルーカの声は愉ゆ悦えつで揺ゆれていた。

「あなたの愛は壊こわれているが、とてもかわいらしい。いつかあなたは私を殺そうとするだろう。それこそがあなたの愛の形だ。そのときこそ、あなたは真に私を愛するのだ、りりぃ」

「そのときは」

　りりぃは振ふり向かなかった。

「あたしより弱ければ貴様は滅ほろびる。それだけのことだ」

　愛、などと。

　弱くなったあの男には、殺す価値さえないというのに。

-The 12th ward 〝 Tomatokun's 〟

residence -

――きて……しまった。

あの人のところに、きてしまった。

弁解すると、ここしばらく、特殊なチヤネ精神集中リングや、閃せん光こうの魔ま女じよと呼ばれるマチルダお姉様独自の魔力の編み方（という言い方をお姉様がよくしていた）の練習、初等魔術の精密制せい御ぎよなどの基き礎そを納なつ得とくいくまで繰くりかえし、ずいぶん手をつけていなかった原始魔術学、召しよう喚かん魔術学、古典派魔術学、実証主義魔術学、超ちよう越えつ者しや思想学、オーバラーツ応用学、古代呪じゆ式しき学や七天占せん星せい術のおさらいをして、とにかく魔術士としての自分を見つめなおすために時間を費ついやしていた。

それは久しぶりに魔術士として全潜せん在ざい能力を出しきるつもりで集中した日々だった。お姉様がよく仰おつしやっていた、「わたくしたち魔術士は時を超こえることさえできるのよ」――あの言葉を胸に刻んで、一秒を一分に、一分を一時間に、一時間を一日に感じた。気がついたら数日経たっていて、体のどこにも力が入らなくて、倒たおれてしまったこともあった。

正直、きつかった。

目の前に何か障害があって、それをどうにかするために魔術を使うのなら、ある意味、楽なのだ。ひたすら自分を高めるために、担たんﾀﾞたんと、粛しゆくﾀﾞしゆくと、鍛たん錬れんを積む。そのほうがずっと苦しい。覚えたてならまだしも、もう短期間でめざましく進歩する段階ではないから、余計につらい。自分が進んでいるのか、同じところをぐるぐる回っているだけなのか、もしくは後あと戻もどりしているのか、それさえもわからない。だから、たまらない。

でも、そうした修しゆ行ぎようを怠おこたっていた。そのことがそもそも問題だ。ベティに言われた。「もう少し上手に魔力を使うすべを覚えなさい」「せっかく才能があるんだから、それに溺おぼれずに精しよう進じんなさいな」と。才能があるかどうかなんて、よくわからない。ただ、状じよう況きように甘えていたことはたしかなのだろう。なんとかなっていたから、それでいいと思っていた。ごまかしのような基礎訓練くらいでは、力や技術を維い持じすることはできても、向上させることはできない。そんなことは百も承知で、それ以上のことはしようとしなかった。魔術士としての自分のためだけに時間を使わなかった。

ＺＯＯのみんながいて、彼らと一いつ緒しよにすごす時が、楽しくて、楽しすぎて、大事だったから。

そして──少しでも、あの人のそばにいたかったから。

だけれど、わたしは魔術士。「わたし」と「魔術士」は決して切り離はなせない。わたしの半分は「わたし」でできていて、もう半分は「魔術士」の成分でできている。魔術士はその養成過程で作りかえられ、人間以外のものと化す。それが魔術士で、わたし。わたしは一生、死ぬまで、魔術士。魔術士とは高みを目指すもの。どこまでも高く。人間ひとを超えて。時間ときを超えて。わたしは立ち止まっていた。のぼりつづけなければ、魔術士ではいられないのに。わたしは魔術士なのに。

たとえば、お姉様に天才と称しようされ、若くして魔導士ウイザードを名乗っているベティは、並みの魔術士なら発はつ狂きようするような思考訓練の末に第三脳サード・ブレインを作りだし、そこで特殊なチヤネ精神集中リング状態を保持している。また、ショック死してもおかしくない激痛に耐えて全身の骨に魔ま法ほう紋もんを刻みつけ、体内に三百十九の触しよく媒ばいを埋うめこむことで、短距離シヨート瞬間移動テレポートの魔術さえも実現し

た。それが魔術士本来の姿だ。恐怖のドレツド操り手スター。常に自分の限界に挑ちよう戦せんしつづける。それこそが魔術士の道だ。

　わたしは道から外れかけていた。愚おろかだった。思い知らされた。

　──わたしは、ベティに勝てない。

　その気になれば、彼女はわたしを圧あつ倒とうできる。

　それはしょうがないことかもしれない。ベティは天才だ。わたしなんか彼女の足あし許もとにも及およばない。でも、それでいいの？　わたしが負けて、そのせいでみんなが、あの人が、傷つくかもしれないのに。仕方ないって、あきらめてしまっていいの……？

　この先、ベティとまた敵対することになるかどうか、それはわからない。わからないけれど、絶対にないとはいえない。

　それに、ベティ以外にも、すぐれた魔術士はいる。お姉様がいる。お姉様と褒つながっているＯＭＥＧＡの幹部連は実力者ぞろいだ。〝地獄帰エリオツトりのエ・ザ・ヘルリオットリターニー〟もいる。〝踊り羊ダンシングシープ〟と呼ばれる山野の魔導士ウイザードも有名だ。最近では〝紫しのヴェロニカ〟という名もよく耳にする。憑ひよう依い魔術を生みだしたという〝魔人アモン〟ルヴィー・ブルームや、〝超賢者メガセイジ〟モーグ、〝巫女神シビリリス〟阿ア麼マ李リ姫にも生存説がある。おそらく他ほかにもたくさんいるだろう。悪魔などの異界生物フリークスにだって、強力な魔術の使い手はいるに違ちがいない。

　このままじゃ、だめだ。

　わたしはいつもうつむいてばかりで、でも、それじゃいけない。

　忘れるわけにはいかない。わたしは凶きよう星せいのもとにいる。今は破天万ばん象しよう七星の一に──あの人に中和されている、お姉様でも祓はらうことができなかった凶運が、わたしにはつきまとっている。

　わたしは怖こわい。

　また失ってしまうんじゃないか、とか。

　それはわたしのせいなんじゃないか、とか。

　けれど、いつか、あの人が言ってくれた。「もしそうだとしても、俺にくっついていれば平気なんだろう」それは、くっついていてもいいということ？　そばにいてもいいの？　そう尋たずねたら、あの人はうなずくだろう。「あたりまえだろう。何言ってるんだ、お前」と、少し首を傾かしげて。少しだけ笑って。そして、付け加える。「──仲間なんだからな」

　それでも、いい。

　わたしはこの気持ちがなんなのか、自分でもよくわからない。

　でも、いい。そばにいられれば、それでいい。

　だけど、わたしがそばにいることで、あの人が、みんなが傷ついたら──それはいやだ。わたしは、もっと高いところへ行きたい。魔術士として高みに達して、みんなを守りたい。力になりたい。そうすれば、きっと、わたしはあの人のそばにずっといられるはずだから。

　そう思って、みんなに断ったうえで、自分の甘さと弱さとだらしなさに向きあい、自分をいじめ抜ぬいた日々から、ふと抜けだしたのは──何やら漠ばく然ぜんとした不安、違い和わ感かん、それらが身体感覚となって表出したものにさいなまれたことがきっかけだった。

　何かが起こる。そう思えて仕方なかった。

　それで昼前、久しぶりに第二王立銀行内の動物園事務所に顔を出した。でも、誰だれもいなくて、メタルフォレストに帰って修行に戻ろうかとも考えたけれど、結局、迷っているうちにここまで足をのばしてしまった。

　だって、あの人は最近、外に出たがらないみたいだから、きっと家にいる。べつに、あの人に会いたくてたまらないわけじゃなくて──本当に、決して、言い訳じゃなくて、ＺＯＯの誰かに、この不安を伝えたかった。伝えないといけないような気がした。漠としてはいたものの、じつはそれくらい重大な何かだと、自分のなかのどこかが感じていた。あの人の家にたどりつくまでの間に、それはもっと明確な形として認にん識しきされた。

　この街全体の魔術的な力場に、異常が生じている。

　一大事、かもしれない。

　ＺＯＯのなかで、魔術士は自分だけだ。ユリカにも魔術の素養はあるけれど、医術式に特化され調整されているし、作りかえられてはいないので、やっぱり魔術士とは違う。髭ひげさんも同じだ。わたしがしらせないと。あの人に――じゃなくて、ＺＯＯの誰かに。

　そうしてあの人の家までくると、きゅーに出で迎むかえられた。

　白い、ふかふかした毛で全身が覆おおわれているきゅーは、あの人に拾われてここに連れてこられた。人語を解すが、人間の言葉を喋しやべることはできず、他の手段で自分の出自を語ったりもしないため、いろいろと謎なぞの多い生き物だが、あの人はそんなことに頓とん着ちやくしない。あの人は敵と味方を鋭するどく嗅かぎわける。あの人がきゅーをここに置いているということは、きゅーは危険ではないということだ。

「あの……トマトクンは……あ、いないなら、髭さんか、ピンパーネルでも……」

「きゅう」

　きゅーはなかのほうを示して、ついてこい、といったかんじの仕草をしてみせた。拒こばむ理由はないので、きゅーに従って門をくぐり、前庭を突つっ切って玄げん関かんに足を踏ふみ入れ、天てん井じようの高い、五十平方メーテル以上ある居間に入った。そこはＺＯＯのみんなが集まって食事をするときにも使うし、カタリなどは隅すみのほうで毛布にくるまって寝ねたりもする。窓がたくさんあって、大きなダイニングテーブルと椅い子すのセットがあって、ソファがあり、ソファテーブルがあって、さりげなく絵や置物が飾かざられていて、鉢はち植うえもある。広いけれども、仰ぎよう々ぎようしくなく、落ちついた雰ふん囲い気きの部屋だ。

「きゅう」

　きゅーはその居間の、壁かべ一面が窓になっている一角を指さした。

　あの人は、床ゆかに寝ていた。

　窓に背を向けて、自分の左ひだり腕うでを枕まくらにしているから、顔も見える。目を閉じて、少し眉まゆがひそめられ、唇くちびるはゆがめられていた。ちょっと苦しそうだが、眠ねむっているようだ。

　寝顔だ。

　浅黒い肌はだにはしみ一つなくて、皺しわもなくて、鼻筋が通っていて、整っていて、睫まつ毛げなんかも意外と長くて、眉毛が男らしくて、すごくきれいな、あの人の、寝顔だ。

　胸が、どくん、と鳴った。

　あの人は、家ではジーンズを穿はいていることが多くて、今もそうだ。

　なんということもない、でも、清潔感のある白いシャツを着ていて、その胸が、大きくはだけている。

　なんだか、見てはいけないものを見ているような気がした。

　胸むねもとを手で押さえても、胸の高鳴りがおさまらない。

　頭がぼうっとする。

　勝手に足が動く。

　歩く。

　歩いて、近づいてゆく。

　あの人のすぐそばまで歩いていって、どうしていいかわからなくなって、すとん、とその場に座りこんだ。

　眺ながめる。あの人を見ている。この距きょ離りで。こんなに近くで。あの人は眠っていて、手をのばせば、届く。ふれられる。ふれて、どうするの……？　わたしの右手は、何をしようとしているの……？　だめ。いけない。でも──だけど、髪かみの毛に、さわるくらいなら。それくらいなら、目を覚ましたりはしないだろうし。勇気を出して。さあ。手を。指を。

「──ん……」

　心臓が裏返るかと思った。慌あわてて手を引っこめた。あの人が、顔をゆがめて右手で顎あごとか首のあたりをこすっている。かゆいの？　でも、瞳ひとみは閉じたままだ。起きていない。寝ている、みたいだ。安心する。同時に、我に返った。わたし、いったい何を……？

　寝ている人を、至近距離で、じっと見ているなんて、悪あく趣しゅ味みだ。

　よくない──ことだ。

　バカ、みたいだ。

「ト……トマト……クン……」

　だから、あの人の名前を呼んでみる。

　起きて。目を開けて、わたしを見て。起きないで。もう少し、このままでいさせて。起きて。起きないで。起きて。

「トマト……クン」

　もう一度、呼ぶ。

　そして、ごく自然の動作で、やましいことは何もなく、そっと肩かたに手をふれる。

　揺ゆさぶって、起こす。ふれ──ようとする。

　大だい丈じよう夫ぶ。ふれたっていいはず。ただの仲間、でも。それくらい、する。しても、変じゃない。ふれる。ふれかける。ああ。でも。

　できない。

　両手を自分のうすべったい胸に押しつけるようにして、下唇を噛かんで、天井を見上げた。

　本当に、バカ、みたい。

　泣いてしまいそうだ。

　なんだか、近くにいるのに、遠すぎて。今、少しだけ体がふれ

あったとしても、何も変わらないとわかっているから。そばにいられるだけでよかったはずなのに。さもしい。いやしい。本音では、それ以上を求めている。求めても、どうにもならないって、知っているのに。何を求めているのかも、よくわかっていないくせに。

「──で」

　また心臓が裏返りそうになった。いや、今回は絶対に本当に裏返った。

　後ろからの声だった。

　振ふり向くと、右手に茶ちや碗わんを持った髭の巨きよ漢かんが、きゅーと並んでダイニングテーブルの近くに立っていた。きゅーはいいとしても、いつの間に髭さんが。

「今日はどうしたのだ、サフィニア。修しゆ行ぎよう中ではなかったのか」

「……み、み、み……見て……たんですか……」

「うむ。しかし、心配するでない。拙せつ僧そうは口が堅かたいゆえ、他人ひとの秘ひめ事を言いふらしたりはせぬ。もとより、きゅーは喋しやべらぬしな。そうであろう、きゅー」

「くう」

「ひ、秘め事……なんて……そ、そういうことは、わたし……何も……」

「さようか。まあ、それならばそれでもよいが、寝こみを襲おそうのなら、昼間より夜がよいと老ろう婆ば心しんながら忠告しておこう」

「ね、寝こみなんか……襲ってません！　あ──」思わず声を荒あらげてしまい、あの人を起こしてしまったのではないかと見てみたら、「むーん……」と唸うなりながら頭をかいたりはしているが、まだ眠っているようだった。ほっとして、でも、起こそうとしていたのに、と思い、どうしよう？　どうしたらいい？　わからない。もう、頭のなかがぐちゃぐちゃだ。ぜんぶ髭ひげさんのせいだ。髭さんが悪い。

「そ、そうにらむな、サフィニア。お前の視線は、なんと申せばよいか……たまに、とてつもなく恐おそろしいぞ。まさか、邪眼のごとき特とく殊しゆな魔ま術じゆつでも体得しておるのか」

「……知りません……」

「だから、そうむくれるなというのに」

「……誰だれの……せいだと思ってるんですか……だいたい、髭さんが……」

「わかった、わかった。あいすまぬ。許せ」

　そう言いながらも、頭も下げないし、反省している様子は微み塵じんもない。それどころか、うっすらと笑えみさえ浮うかべて、悠ゆう然ぜんとお茶を飲んでいる。それで、真しん剣けんに怒おこっているのが馬ば鹿か馬鹿しくなって、気が抜ぬけてしまった。途と端たんに、本来の用件を思い出した。

「……あ、あの……今日、他ほかの皆みなさんは……？」

「さて。くわしいことはわからぬが、アンダーグラウンドではないか」

「そう、ですか……」

　ぞくり、と背筋が冷たくなった。いやな予感がする。いや、予感というより、それは予測に近い。考えていることが正しければ、たいへんな事態に発展する可能性もある。というより、この状態がつづけば、間ま違ちがいなくこの街は大混乱に陥おちいるだろう。

「──髭さんは……何か感じませんか。今朝から……いいえ、はっきりそれと感じられるようになったのは……先ほどからですが……」

「なるほど。そのことか」髭さんは茶碗をきゅーに手て渡わたし、腕うで組ぐみをして髭をしごいた。「うむ。拙僧も、どうも今朝方より胸むな騒さわぎがしてな。昼頃ごろであろうか。祭さい壇だんで作業をしておったのだが、空気が一変したように感じて、思わず手が止まった」

「……やっぱり……」

「これは、もしや──」髭さんはその先を言わずに、あの人に目をやった。あの人は、寝ねてはいるものの、すごく寝苦しそうにしている。悪夢にうなされているようにも見える。「トマトも、何か感じておるのかもしれぬな」

「……大丈夫、でしょうか……起こさなくても……」

「うむ。だが、わずかな気配で目を覚ますときもあれば、耳みみ許もとで叫さけぼうと頬ほおを引っぱたこうと目覚めぬときもある男だからな。おお。意外と、今がまたとない好機かもしれぬぞ。拙僧はどこぞへと去いぬゆえ、これより夜よ這ばいならぬ昼這いとしゃれこんでみてはどうだ」

「……し、しません……」

　このナマグサ破は戒かい僧そう。

　でも、気がかりだ。

　ユリカ。カタリ。ピンパーネル。マリアさん。

　みんなは、無事だろうか……？

Omenage 897 10th revolution 8th day

サンランド無統治王国首都エルデン第十三区
〝彷徨える魂区〟（RSW）

chapter.10

愛と殺戮の摩天楼

1

「大だい丈じよう夫ぶかい」

背中をさすられている。それをはねのけることさえできなかった。みっともない。こんな姿、見られたくないのに。こいつにかぎらず、誰にも見せたくない。頭を打ったせいか何かで、ゲーゲーやっているところなんて。

でも、どっか行けとか、離はなれてとか、そんなことを言う余よ裕ゆうもなかった。

それに、冷静な部分もなかったわけじゃない。吐はいてしまったほうが、楽になる。早く持ちなおさないと、動けない。動けないと、いつまでもこいつに世話を焼かれつづける。

マリアローズは、だから喉のどの奥に指をつっこんで、さっさと嘔おう吐としようとした。

苦くて、いやな臭においがして、肋ろつ骨こつが軋きしんで、ピシャピシャ音が鳴って、涙なみだも出そうになったけれど、とにかく吐いた。ある程度吐いて、背負い袋ぶくろから小さな水すい筒とうを出し、口をゆすごうとしたら、また吐き気が襲ってきた。我が慢まんできず、我慢しても仕方ないので、また吐いた。アジアンが背中をさすりはじめたのはそのころだった。

恥はずかしかった。やめて欲しかった。でも、アジアンがちょうど胃のあたりをちょっと強めに押すようにしてさすると、いい具合に──つまり、すごく気持ち悪くなって、出るものはすっかり出てしまった。

きっと、こいつに馴なれ馴れしい手つきでさわられて、体が拒きょ否ひ反応を示したんだろう。

そうだ。そうに違いない。

マリアローズは今度こそ水筒の水で口をゆすぎ、口の周りを少しきれいにして、指を洗った。軽く頭を振ふってみた。どうやら平気

みたいだ。ちゃんと見えるし、ちゃんと聞こえる。かがめていた体をのばすと、アジアンの手が背中から離れた。

「……もう、大丈夫。たぶん」

「そう」

　アジアンは短く答えて、小さく息をついた。それから、足音。マリアローズも、この場所からは早く、少しでも遠ざかりたかったので、踵きびすを返してゆっくりとアジアンを追った。足が、きちんと動いている。足許がふらつくこともない。まだ気分がすぐれないというか、すっきりしないというか、血の巡めぐりが悪いかんじだが、自力で移動することはできそうだ。

　しかし、脳のう震しん盪とう、恐るべし。まさか、後こう遺い症しようとか残らないよね……？

　不安だが、今のところはどうしようもない。ただ、あとでモリーか誰だれかに診みてもらったほうがいいかもしれない。そんなことを考えていると、前に出したマリアローズの右足に絡からみつくようように身をすりよせてくる生き物がいた。

　その生き物には、尻尾しっぽがある。目は青玉サファイヤみたいだ。灰色の被毛は長めで、赤い首輪をつけている。

　猫ねこだ。

　ルイ・カタルシスの飼い猫ジュジが、どういうわけかついてきてしまったらしく、気がつくとここにいた。

「……きっと、心配してるよ、きみの御ご主人様」

　にゃー。

「きみはそうでもないのかな。でも、肩かたにのってたよね」

「猫は特定の人間に懐なつくし、意外と寂さびしがりなんだヨ」

　アジアンは階段へ向かおうとしているようだ。ここはとある高層建築の十階だが、合成骨材コンクリート打ちっぱなしの壁かべや床ゆかはところどころヒビが入り、あるいは破損していて、天てん井じようを這いまわっているさまざまな管もめちゃくちゃに壊こわれ

ている。なかには、床まで垂れさがっている管もある。全体的に結構損傷が激しい建物なので、寺院としては使えそうもない。それで、打ち捨てられているのだろう。もしかしたら、夜、ここを寝ね床どこにしている者はいるかもしれないけれど、少なくとも今は無人だった。

「下に……降りるつもり？」

「そうだネ……」

　アジアンは階段の手前で立ち止まり、しゃがんで床に手をあてた。沈ちん黙もくは一いつ瞬しゆんだった。

「──いや、屋上に出よう。少し急げるかい、マリア？」

「急ぐって」

「無理そうなら、ボクがだっこして運んであげるヨ」

　アジアンは口くち許もとや頬を微笑ほほえませてはいるものの、薄うす青あお色の目があまり笑っていなかった。いくら調子が万ばん全ぜんじゃないといっても、それで察することができないほどボケボケしてはいないつもりだ。

「行けるよ。行けるに決まってるでしょ。ばかにしないでよ」

「そう？　それは残念。だけど、まあ、ボクはもう決してキミから目を離したりはしないから、キミの様子が少しでもおかしかったら、ためらわずに最善と思う手段に訴うつたえるヨ。そのときは拒こばんでも無む駄だだ。それだけは覚えておいて」

「勝手にすればいいだろ。拒んでも無駄だってきみがいうなら、僕にはどうしようもないじゃないか」

　思わず、感情的になってしまった。しかも、かなりいやな感情だ。たぶん、それが言葉にだけではなく、声にも、顔にも出たはずだ。

　だが、アジアンはほんの少し眉まゆを動かし、視線を斜ななめ下に落としただけで、何も言わずにマリアローズに背を向けて階段をのぼりはじめた。おそらく、マリアローズに気をつかっているのだろう。たいした速さではない。アジアンにしてみれば、歩いている

のとさして変わらない速度かもしれない。おかげで、なんだか余計に自分がノロマに思える。猫のジュジさえ、マリアローズに足並みをそろえて、「こいつ、ホントに大丈夫なの？」みたいな表情でたまにちらりとこちらを見上げるものだから、たまらない。

ああ。

わかっていることだけど。

わかりすぎているくらいだけど。

━━弱いなあ、僕。

体力はそれなりにあるはずなのに、脆もろい。いざとなると、貧ひん弱じやくさを露ろ呈ていしてしまう。鍛きたえているのに。筋トレして。体をやわらかくして。瞬発力を向上させる運動なんかもして。できることは結構やってきたつもりなのに。まだ背だって伸のびるはずだと思って、ご飯もたくさん食べて。極力、栄養のバランスにも気をつけて。

でも、ダメだった。

僕の体は僕の意思に抵てい抗こうするかのように、大きくなることを、頑がん丈じようになることを、強くなることをかたくなに拒む。

決して、虚きよ弱じやく体質とか、そういうわけじゃない。健康体といえば健康体だ。風か邪ぜだって滅めつ多たにひかない。あたりまえだ。ちゃんとケアしている。とくに、一人で侵入者クラッカーをやっていたころは、一日休めば即そく、収入に響ひびいた。だから、体調管理には人一倍気を配った。そうしなければ、すぐに参ってしまう。僕の弱い体はすぐに音を上げる。何日か前にできていた動きができなくなる。そのぶんを頭でおぎなおうとする。体のコンディションを上げて、維い持じするのが、とてつもなく難しくて、つらいからだ。それで、体を怠なまけさせる。僕は少しずつ少しずつ退化する。小こ狡ずるいだけの、とるにたらない雑兵以下になりさがる。

やればやるほど、つきつめてゆけばつきつめてゆくほど、はっきりする。

僕は、ダメだ。

　才能がない。適性がない。見こみがない。そんなことない、と思いたい。実際、泉里決戦でも、それなりに働いたじゃないか。みんなを指揮して、戦果をあげたじゃないか。トマトクンは褒ほめてくれたじゃないか。僕にだって、できることがある。僕は、無用の長物なんかじゃない。僕だって役に立つ。いくらかは、役に立てる。

　たとえ、弱くても。

　みんなに支えてもらって。助けられて。みんなを利用して。

　──僕は、かろうじて、立っている。

「マリア」

　そんな僕に。

　アジアン。

　きみは、背中を向けたまま、言うんだ。

「……さっきは、助けに入るのが遅おくれて──」

「ねえ」

　言うな。言わせない。最後まで、言われてたまるか。きみは身勝手な罪悪感から逃のがれるために謝ろうとしているだけなのかもしれない。でも、僕はどうなるんだ。

　僕は。僕は──ただでさえ痛感しているのに、これ以上、思い知れっていうのか。

　知っているのに。

　弱いって。

　所しよ詮せん、僕なんか、みそっかすにすぎなくて、誰だれかに助けてもらわないと立っていられないほど、弱いって。

　弱いから、なぶられて、おとしめられて、屈くつ辱じよくを受けて、奪うばわれてきた。僕の心はすっかりねじくれてしまった。せっかく仲間ができたのに、彼らを信じることもできないわけじゃないのに、僕は不安なんだ。怖こわいんだ。怖くてたまらないん

だ。カタリだって、本気で言ったんじゃない。わかってる。「そいつはみそっかすやて、ゆうとるやろが」あれは、敵の目を自分に引きつけようとして言っただけで。蜥蜴とかげ人に共通語が通じるのかどうかはおいておくとしても、おそらく、たぶん、本心からそう思っているわけじゃなくて。悪気はぜんぜんなくて。

　でも、痛い。

　カタリが、仲間がそう思っていなかったとしても、実際、僕は弱い。役立たずだ。

　わかってはいるけれど、誰かに──アジアンなんかに、保護者面されたくない。

「たしか前にも言ったと思うけど、僕を助ける義務なんて、きみにはないよ」

　だから、僕は冷たく、嘲あざ笑わらうように、言う。

　それでも足りない気がして、言いなおす。

「──てゆうか、やめてくれない？　助ける、とかさ……正直、いやなんだ。そんな義理もないのに、そういうことしてもらっても、気持ち悪いだけだし」

「ボクに助けられるくらいなら」アジアンは足をゆるめない。声こわ音ねも変わらない。揺ゆるがない。憎にくたらしいほどに。
「いっそ、死んだほうがマシかい？」

「そうだね」

「ボクはいやだ」

　もう少しで屋上だった。屋上にはドアがない。壊こわれて、外れてしまったのだろう。照明設備のない階段室に、外から光が射しこんでいる。

　アジアンはそこで足を止めて振ふり向いた。

　逆光だった。

　アジアンの顔はよく見えなかった。

「キミはボクの太陽だ。闇やみ夜よを照らす月で、夜空を彩いろどる輝かがやく星だ。すべてをつつみこむ空だ。母なる大地で、地上をうるおす水だ。ボクの胸を焦こがす炎ほのおだ。キミはボクのすべてだ。キミがいない世界なんて、意味も価値もない。ボクはキミが拒きょ否ひしようと、たとえキミがボクを憎もうと、何度でも、何度でも、その機会があれば必ず救うヨ」

「……なんで……」

　どうして？

　理解できない。なぜこいつは、こんなふうに断言できるのか。何がそう思わせるのか。仰ぎょう々ぎょうしくて、馬ば鹿か馬鹿しい言葉を選んで、それなのにまっすぐで、目をそらすことができないくらいまっすぐすぎて、胸に、深く、深く、突つき刺さささる。

　けれども、届かない。この胸には緩かん衝しょう材ざいが埋うめこまれている。それは、厚い、とても厚い、厚くて、何ものをも通さない。

　だから、その問いをぶつけることもなく、ごまかそうとする。

「なんで、きみは、そんなに──変なことばっかり言って。頭、おかしいよ。一度、診みてもらったほうがいいんじゃないの」

「人は恋こいに落ちれば皆みな、愚おろかになる。でも、誰か一人に恋しつづければ、いつか何が本当に大切かを知るときがくる。そうして人は少しだけ賢かしこくなって、恋は愛へと変わる」

「きみはその状態にいるって言いたいわけ」

「と、ボクは思っているけどネ」

「思い違ちがいだよ」

　マリアローズはその根こん拠きょも示さずに、アジアンを突き飛ばすようにして屋上へ出た。ジュジがついてくる。アジアンはそのあとだった。

　もちろん、どうして階段を降りずにのぼって屋上まできたのか、ある程度、察しはついている。さっきから、その気配というか、音も聞こえていた。ただ、屋上に出て、具体的にどうするのか。そこ

のところはわからない。とりあえず、ジュジと一いつ緒しょに屋上のへりのほうへ歩いていって、ちらりと下をのぞきこんでみたが、思わず「うわ」と声がもれた。まあ、地上三十数メーテルのこの屋上にも、悲鳴やら物音やらが届いてきていたので、だいたい予想はついていたけれど、やはり目で見るとインパクトが違う。

第十三区は、小さなリトル・混沌とエルデ恐怖の巷エイニオンと化していた。

彷徨Ｒえる＄魂区Ｗの異名にふさわしく、人間たちが互たがいにぶつかりながら、押しのけながら、こけつまろびつつ、あっちへ、こっちへと、アスファルト合成骨材コンクリートと血肉で舗ほ装そうされた道をでたらめに逃にげまわっている。

その半分くらいは、僧そう服ふくを着た高層寺院の坊ぼう主ずどもだ。見たところ、高層寺院の扉とびらは固く閉とざされているから、外で客寄せをしていて閉めだされた下僧や見習い僧なのだろう。高層寺院一つにつき、祭さい壇だんは一つか、せいぜいあっても二つ。その祭壇一つにつき、蘇そ生せい式に必要な僧そう侶りょは十数名。こいつらが上級僧で、その下に補ほ佐さ役の僧侶がいて、さらに蘇生式を学んでいる最中の学僧がいて、それから下僧、雑僧、見習い僧などと呼ばれる有象無象が大勢いる。第十三区には信じられないくらい多くの坊主がいるのだ。その大半は残飯食くらいのろくでなしだが、そいつらが、今、「蘇生式いりませんかー高いッスけど生き返れますよー」と客引きをするときの百倍、否いな、千倍、いや、一万倍以上の必死さで逃げている。すごい勢いで走っている。

それから、本来、彼らにとって客だったとおぼしき連中。キャスター付きの棺ひつぎを引っぱっている侵入者クラツカー。その仲間らしいやつらが、剣けんを抜ぬいて威い嚇かくして、邪じゃ魔まくさい坊主どもに道をあけさせようとしている。途と中ちゆうで面めん倒どうくさくなったのか、棺をうっちゃって逃げようとして、坊主と正面衝しよう突とつして、殴なぐりあっているクソ野郎モウフオもいる。ただ第十三区を通りかかっただけなのかもしれない、女子供も見うけられる。どさくさにまぎれて、そいつらに襲おそいかかろうとしている腐くされ外げ道どうもいる。

だが、マリアローズたちのいる建物の近辺は人が少ない。皆、この建物から遠ざかろうとしているようだ。そりゃそうだ。だって、どす黒い人間の残ざん骸がい製の道は、この建物の入口までつづい

て、そこで途と切ぎれている。

「……僕たちを、追ってきたってこと……？」

「匂いでわかるのかもしれないネ」アジアンはのぼってきた階段に視線を固定したまま、ゆっくりとマリアローズに近づいてくる。「その点については──ごめん、ひょっとしたらボクのせいかな。蜥蜴とかげとはちょっと縁えんがあるんだ」

「縁……？」

　アジアンはそれには答えず、ジュジを一いち瞥べつして眉まゆをひそめ、「しかし、その猫ねこ──」そこまで言ったときだった。

　きた。

　やつだ。

　両手の武器をシャキンシャキンさせながら、悠ゆう然ぜんと階段を上がってきた。

　ただ、背筋をのばせば二・三、四メーテルくらいはありそうなその体たい軀くに、人間用の階段室は少々窮きゅう屈くつそうだった。

　傷きず痕あとだらけで、色とりどりの革帯でぐるぐる巻き状態の全身が、鮮せん血けつの豪ごう雨うに見み舞まわれたように赤く濡ぬれている。白かったたてがみも、今は赤黒い。

　階段をのぼりきると、やつは首を傾かしげて細長い舌で口の周りをペロペロ舐なめた。

「Ｓｙｙｙｙｙｙｙｙ Ｓｈｈｈｈ……」

〝鋏使いザ・チヨツパー〟。

　やつはまばたきをしてから、まずアジアンに目をやって、それからマリアローズを見た。よくわからないが、両方とも自分の獲え物ものだと認にん識しきしたらしい。むろん、それはあくまでやつの主観であって、マリアローズたちの主観とは相あい容いれないが、すごい威圧感プレツシヤーだ。十メーテル以上離はなれていて、これなのだ。もっと接近されたら、金かな縛しばり状態になって、ろ

くな抵てい抗こうもできずに殺されてしまうかもしれない。

　当然、マリアローズ個人としては、勝てる気がまったくしない。けれども、ここは屋上で、やつは階段の前にいるわけで、逃げ場はない。さっきはおそらく頭がポーっとしていたせいで、さして疑問を抱いだかずアジアンに従って屋上まできてしまったのだが、もしかして、間違いだった？　でも、下に降りたら降りたで、どこかで鋏使いと鉢はち合あわせしていただろう。それも困る。大いに困る。そうなったら、上に、上に逃げて、屋上へ──ということは、結局、同じことか。つまり、これが運命？

　いやすぎる運命だ。

　やっぱり、人任せで。

　その相手が、よりにもよってこいつだなんて。

「最初に言っておくヨ」

　アジアンは恰かつ好こうをつけているつもりなのか、芝しば居いじみた動作で腰こしの鞘さやから泣き叫ぶスクリーミング短剣・ダガーを抜いて半身立ちになり、その切っ先を鋏使いに向けた。

「蜥蜴にしてはなかなかやるようだが、相手が悪すぎる。キミにはボクを殺すことはできない。キミが勝てない勝負はしない賢かしこい蜥蜴なら、即そつ刻こくこの場から立ち去ることをオススメするネ」

「……や、賢いとかってより、共通語通じてないと思うんだけど」

「…………フッ」

　アジアンは前まえ髪がみをパサリとかきあげた。

「そこまで言うのならしょうがない」

「あいつは何も言ってないよね？」

「口で言ってもわからなければ、体にわからせるしか──っと」アジアンが馬ば鹿か丸出しの前口上を述べ立てている間に、痺しびれを切らせたのか、鋏使いが突とつ進しんしてきた。「無ぶ粋すいだな！　さすが蜥蜴……！」それに対して、後ろに下がらず、横にも

逃にげず、前に出たアジアンはさすがに並みじゃない。だって、すごい迫はく力りよくだった。速度もそうだが、質量自体もでかいし、なおかつあの鋏はさみが怖こわすぎる。刃は渡わたり六十サンチ程度の重量感のあるブレードが二枚×二で合計四枚、その見た目だけでも十分威い圧あつ的なのに、加えてあの音だ。もう何度も聞いたあの音が、いつの間にか、条件反射的に恐きよう怖ふを呼び起こすようになりつつある。そういえば、前に鋏使いの話をしてくれた露ろ店てん主も言っていたっけ。今でも闇やみのなかにいると、鋏の音がシャキンシャキン聞こえてくるって。

　だが、アジアンはその鋏に真正面から向かっていった。もちろん、そのまま突つっこんでいったりはしない。右の鋏を、紙一ひと重えでよけた。次の瞬しゆん間かん、左の鋏がアジアンの頭をぶち抜いたように見えたが、錯さつ覚かくだった。残像……！　実物のアジアンは急に加速して、鋏使いの右みぎ脇わきを駆かけ抜けざま、すくいあげるように泣き叫ぶスクリーミング短剣・ダガーを振ふるっていた。これは鋏使いの脇腹の皮ひ膚ふを少し抉えぐり、革帯を数本断たち切っただけだったが、アジアンはそこから鋭するどく反転した。これでアジアンが鋏使いの背後をとったことになる。圧倒的にアジアンが有利だ。なんだ、鋏使いもたいしたことないじゃないか。それとも、アジアンがすごすぎるのか。アジアンは泣き叫ぶスクリーミング短剣・ダガーを胸むなもとに引きつけて、しとめにかかろうとした。が、途中でやめた。「──くっ……！」どうして？　不明だが、とにかくアジアンはその場では泣き叫ぶスクリーミング短剣・ダガーを振り下ろすことも突きだすこともせずに跳ちよう躍やくして、鋏使いの肩かたに着地し、ここでようやく振り下ろそうとした。

　狙ねらうは、鋏使いの頭頂部か。

　だが、左右から鋏がきた。アジアンはとっさに前へ転がる。前方宙返り。でんぐり返し。そして──鋏使いの前に立ちふさがる恰好になった。

　マリアローズに背中を向けて。

　マリアローズのまん前で。

　そっか。

　もし、アジアンが背中をとった体勢から鋏使いをしとめそこなっ

ていたら──何しろタフそうなやつだから、急所を突いても即そく死しさせられない可能性は結構ありそうだ。そうなったら、鋏使いの進行方向にいたのは、他ほかの誰だれでもない。

　マリアローズだ。

　僕は、あの凶きよう猛もうな鋏の射程におさめられようとしていたのに。

　それなのに、逃げもしないで、黙だまって見ていた。

　あまりにも速すぎて。

　反応なんかできるはずがなくて。

　いや、そんなのはぜんぶ言い訳にすぎない。

　──僕は、すごく、足を引っぱってる。

　相手のレベルを考えれば仕方ないのかもしれないが、マリアローズの存在がアジアンの足あし枷かせになっていることは事実だ。

　アジアンは、しかし、低く笑った。

「存外、馬鹿じゃないみたいだネ」

「Ｇｇｇｇｇ……」

　鋏使いも笑うように喉のどの奥を鳴らしながら、鋏をシャキンシャキンさせた。

　両者の距きよ離りは約五メーテル。

　マリアローズは、依い然ぜんとして何もできない。頭の芯しんがぼうっとしている。何か考えているような、考えていないような、考えられないようなかんじで、呼吸が乱れる。胸が苦しい。どうすればいいんだろう。どうするべきなのか。守られて、足手まといで、じっとしていることしかできなくて、でも、じっとしていられる気分でもない。気分！　そう。ぜんぶ気分でしかない。気持ちは一人前のつもりでも、体はぜんぜんついてこない。何もできないくせに、頭でっかちで、口ばかり達者で、少しでも自分を高く見せようと、冗じよう談だんにまぎらして僕は他人を罵ののしる。カタリ

を馬鹿にする。暴言を吐はく。アジアンを傷つける。あげく──いいよ、嫌きらえば？　べつに平気だよ、嫌いになってくれたっていいよ、痛くもかゆくもないよ、僕は誰のことも好きじゃないし、どうせそんなの無理だし、慣れてるから、いちいち傷ついたりしないし──そんな態度で、だけどそれだって嘘うそだ。わかってる。

　カタリにしろ、アジアンにしろ、多少ひどいことを言っても結局は許してくれる。

　すごく、よく、わかってる。

　足が、手が、震ふるえる。

　やばい。

　自分が嫌いになりそうだ。もう、かなり嫌いだ。

　マリアローズはあとずさった。このまま後退したらどうなるか。むろん、理解していた。けれども、マリアローズは逃げたかったのだ。いや、マリアローズがいなければ、アジアンはなんの気き兼がねもしないで、鋏使いとの戦いに集中できるだろう。そうだ。理由はそれだ。僕は重荷にしかならない。重い荷物はいざとなったら捨てればいい。荷物のほうでも、どうか捨ててくださいと思うに決まっている。

　いいんです。捨てて、それであなたが軽くなるのなら、僕はただの荷物なんですから、どうぞ捨ててしまってください。

　それでもいい。

　なんでもいい。

　もう一歩。さらに一歩。

　だが、無価値なマリアローズの後ろ歩きは、笑ってしまうくらい歩ほ幅はばが狭せまかった。

　すごい、と自分でも思った。

　僕ってものすごい──臆病者チキンだ。

「マリア」

　と、不意に。

　ふわり──と、やさしく、だが、力強く、つつまれた。

　抱だきすくめられたのだ。

　振ふり返ったアジアンに。

「──へ……？」

　マリアローズは、走り去ってゆくジュジの姿を視界の隅すみでとらえた。鋏使いの注意が、一いつ瞬しゅん、そっちに向いた。その隙すきを利用したのか。あるいは、アジアンがこの所業に及およんだあと、小さいとはいえ、ある部分は人間よりも遥はるかに鋭えい敏びんなはずの獣けものの感覚で何かを察知したジュジが、この場を離はなれたのか。

「大だい丈じよう夫ぶ。ボクを信じて」

「……や、信じるって──」何を？　どうして？　なぜ？　そもそも、何をしようとしているわけ？　僕を抱きしめたりして？　こんなことをされて、どうして僕は黙っているわけ？

　何も言えなかった。

　つづきを言う前に、アジアンはダイヴした。

　地上三十数メーテル。

　第十三区のとある高層建築の屋上から。

　マリアローズとアジアンは飛んだ。落下する。落ちてゆく。速度が見る間に上がってゆく。マリアローズの髪かみが、アジアンの黒衣がバタバタはためく。「うわわぁっ」思わず声が出た。あたりまえだ。いきなりだ。突とつ然ぜん、こんなことに──三十数メーテルの高さから、飛び降りるなんて。意味不明だ。いや、意味っていうか、これってもしかして、自殺？　道連れ？　第十三区心中？　嘘。マジで？　本当に？　僕、死んじゃうの？　アジアンと？　アジアンなんかと？　このまま地面に叩たたきつけられてプチグシャッと潰つぶれて、二人で仲よく二目と見られないような肉に塊かいになりはてて、混ざりあったりなんかして？　それが唯ゆい一いつ、マリアローズと結ばれる道だとか、めちゃくちゃ早まりま

くって、そんな馬鹿なことを──まさか、いくらなんでも、それはない、よね……？

　ないと言って欲しい。

　誰だれかないと言ってくれ。

　いずれにしても、落ちてゆく。僕らはまっすぐ、落ちてゆく。

　不覚にも、マリアローズはアジアンにしがみついていた。いざとなったら、アジアンをクッションにして自分だけでも、とか、そういうたくましいことを考えられるほどの余よ裕ゆうはなかった。ほとんど無意識の防衛反応だった。自分がどこを見ているのかさえわからなかった。ああ、落ちてるんだということしか。

「チィッ……！」

　アジアンの舌打ちを聞くまでは。

「──舌を嚙かまないように！」

　マリアローズは反射的に舌を口こう腔こうの奥に引っこめ、歯を食いしばって、そして、見た。

　アジアンの右の掌てのひらと手首の間くらいだろうか。

　それが、飛びだした。

　黒い。紐ひも？　細長い。かなり長い。伸のびてゆく。すごい勢いで、どんどん伸びてゆく。

　あれは──そうだ、あのときの。

　Ｄ７地中砦とりでアヴァシーで、ＳｍＣのクソ野郎モウフオどもに襲おそわれていたところを、アジアンに助けられた。五分刈がりのＳｍＣの額に、それは突つき刺ささって、その男を殺したのだ。まるで、生きているみたいに。生き物みたいに。たしか、あのときマリアローズは、こんな印象を受けたのだった。

　それは、彼に、飼われている。

　わからない。

なんだ？

飼うって、いったい？

どういうこと……？

そんな疑問が、すさまじい速度でマリアローズの頭のなかをぐるぐる回っている間にも、黒いそれは、アジアンの右手が指し示した方向へ伸びて、伸びまくった。ついには、向かいの高層寺院の壁かべに突き刺さった。「──ッ！」いきなり落下が止まった。その瞬間、マリアローズの全体重がアジアンの右みぎ腕うで一本にかかった。それって──痛くないの？　そう思っているうちに、今度は向かいの高層寺院が迫せまってくる。違ちがう。逆だ。移動しているのはこっちだ。壁。壁だ。壁に、ぶつかる。「──爬は虫ちゆう類るいの分際で……！」爬虫類？　蜥蜴とかげ人？　鋏使い？　そんなのどうだっていい。ぶつかる。ぶつかっちゃう。だが、どうしてか、体が上に引っぱりあげられているような感覚もある。もう、何がなんだかわからない。どのみち、できることもない。アジアンにしがみついていることくらいしか。それしか、僕にはできない。

マリアローズは目を閉じた。

激げき突とつ。

覚かく悟ごしていたほどの衝しよう撃げきじゃなかった。

それから、今度は間違いなく上へ。上へ。上へ。壁の上を飛び跳はねるようにして、上へ。

マリアローズは途と中ちゆうで目を開けた。空。高層寺院の壁。この状じよう況きよう。なんだかリアリティーがない。だって、僕は何もしていない。危機も、そこからの脱だつ出しゆつも、当事者なのに、第三者だ。僕は見事なまでに蚊か帳やの外にいる。

ただ、マリアローズをきつく抱いているアジアンの腕の力だけは、どうやら本物らしいと思えた。

力が強すぎて、少し痛いからだ。

もっとも、時はちゃんと流れていて、現実は進行している。

だから、あっという間に高層寺院の屋上にたどりつき、アジアン

は腕の力をゆるめて、マリアローズを解放する。マリアローズは、向かいの建物、つまり、さっきまで自分たちがいた建物の外がい壁へきにへばりついてこっちを見上げている鋏使いを見つける。

　敵、なんだ、と思う。あれが、敵。

　あいつから逃にげてきたんだ。

　そうじゃない。アジアンに連れてきてもらった。僕は一人じゃ、逃げることもできない。

　すでにあの黒い何かをどこかに引っこめたアジアンが、やや険しい表情で、マリアローズに言う。

「マリア！　キミはここにいて！」

「でも──」

　何？　でも？　なんだって？　でも、なんて言う資格が僕にあるのか？

　どうせ、何もできないのに。

　役立たずで。

　不用品で。

　不良品で。

　──できそこないのくせに。

　かくん、と、膝ひざや腰こしから力が抜ぬけて、その場に座りこみそうになり、寸前でどうにか持ちなおした。

　マリアローズはあえてアジアンの目を見て答えようと思ったが、それは無理だった。顔が引きつる。下を向かないと、ばれる。むかむかする。いやなことを口走ってしまいそうだ。でも、我が慢まんしないと。いくらなんでも、八つ当たりなんかしている場合じゃない。

「……わかった。僕は邪じや魔まだね」わかった？　ぜんぜんわかっていなかった。口をついて出た言葉はうざったい自じ嘲ちよう

と卑ひ下げと皮肉にまみれていた。はっとして、マリアローズは焦あせった。とりつくろうために、気づかうふりをしようとした。
「気を──」

「その先は言わなくていい」

　だが、さえぎられた。

　アジアンは前まえ髪がみをかきあげて、気き障ざったらしい微び笑しようを浮うかべてみせた。

「気づかいは無用サ。ここで見ていてくれ。一秒たりともキミを心配させたりしない」

「だ、誰だれが心配なんか！」

　違う。

　そうじゃない。

「照れることはないヨ？」

「照れてない！」

「フフッ」

　違う。

　本当に、違う。

　恥はじているんだ。恥じ入っているんだ。

　だけれど、気づかないアジアンが鈍にぶいわけじゃない。

　アジアンはもう、身をひるがえして鋏使いに目を向けている。鋏使いは鋏を壁に突つき刺さしながら、やけにゆっくりと地上に降りている最中だ。アジアンが屋上のへりに片足をかけた。これから鋏使いに一対一の勝負を挑いどむつもりなのだろう。マリアローズみたいにくだらないことをごちゃごちゃ考えている暇ひまなんか、アジアンにはないのだ。というか、こんなときに──僕は、何をやっているんだろう？　こんな事態のさなかに、こんな阿あ呆ほうなことしかできない時点で、ダメだ。ダメダメだ。ダメすぎる。どうしよ

うもない。まったく、ろくでもない。

　だから、一人で屋上から身を投げたアジアンに何か声をかけることもできず、へりに両手をかけて、身を乗りだして、ただ見送った。

　アジアンは落ちていった。途中で、さっきみたいに黒く細長い何かを右手から出した。それが向かいの高層建築の外壁に突き刺さって、アジアンの体は地面めがけて斜ななめに振ふり下ろされた。地面までもうすぐだった。黒い何かが引っこんだ。支えを失ったアジアンは空中に投げだされた。猫ねこみたいに体を丸めて、一回転、二回転。アジアンは、だが、着地するやいなや飛び下がった。向かいの高層建築の外壁をゆっくりと伝い降りていた鋏使いが、残りの五メーテルほどを一気に飛び降りて、しかも、着地するアジアンに狙ねらいを定めて襲おそいかかったのだ。

　奇き襲しゅうをかわされた鋏使いが立ちあがった。

　アジアンはすでに泣き叫ぶスクリーミング短剣・ダガーを抜いていた。

　マリアローズはただ見下ろしている。

　もし何かあっても、何もできない距きょ離りをへだてて、安全な場所で、ただ傍ぼう観かんしている。

　これが、僕だ。僕の現実だ。今こそわかった。

　──僕は、いい気になっていた。

　泉里決戦で一仕事やりとげて、トマトクンに褒ほめられて、皆みなに認められて──少なくともそう思いこんで、僕は調子に乗っていた。やれる。僕にだって、やれることがある。僕は少しずつ進歩している。思いあがっていたつもりはない。舞まいあがってはいなかった。冷静だった。自分の限界や未熟さは謙けん虚きよに受けとめていた。そのつもりだった。

　でも、手をのばせば、ひょっとしたら届くかもしれない。

　ずっと見上げるばかりだった夜空の宝石に、いつか、いつの日か、指先でふれることくらいはできるかもしれない。

　そんな期待が、希望が、この胸の奥底に芽生えはじめていた。

　──バカげてる。

　げんに、ほら、見てみるといい。仲間がそばにいないと、このザマだ。ようするに、こういうことだ。

　変わったのは、僕じゃない。僕の周りだ。助けてくれる、力のある仲間たちがいるから、なんとなく自分まで向上したかのように錯さつ覚かくしただけ。それだけのことだ。単なる勘かん違ちがいだ。

　僕は、いなくていい。

　使えない人間なんて、不要だ。

　できそこないは、いらない。

「……何、やってるんだろ、僕……」

　こんな場所で。

　鋏使い。アジアン。ＺＯＯ。なんだか、素す敵てきな夢から覚めたときみたいな気持ちだ。

　でも、これは夢なんかじゃない。

　わかってる。わかっているから余計に、場違いだと強く思う。僕がこんなところにいるなんて、なんかおかしい。結局、メリクルあたりをプチプチ狩かる毎日が、僕にはお似合いなんじゃないのか。「そんなことない」と言ってくれる人も、今はいない。誰もいない。一人だ。一人きりだ。以前は、一人でいることが普ふ通つうで、なんともなかったはずなのに。

　にゃー。

「え」

　驚おどろいて振り返ると、赤い首輪をした灰色の猫がすぐそばで尻尾しっぽを立てていた。

「──嘘うそ。だって、きみ……向かいの建物に……」

　にゃー。

「や、にゃー、じゃなくて」

　ジュジはおかまいなしに、目を細めてマリアローズの足に体をこすりつけてくる。さらに、それだけでは不満らしく、どうも抱だきあげろと要求されているような気がしてならない。べつに、猫は嫌きらいじゃないし、猫アレルギーとかでもないのでいいのだが、そんなことをやっている場合なのだろうか。地上の小さなリトル・混沌とエルデ恐怖の巷エイニオンぶりを後しり目めに、高層寺院の屋上で猫を抱く。シュールだ。というか、滑こつ稽けいだ。だが、気がつくとマリアローズは、屋上の端はじっこに座った姿勢のまま、ジュジに向かって両手をさしのべていた。

「おいで」

　そして、警けい戒かいする様子もなく近づいてきたジュジを、抱きしめる。

　目を閉じて、ふわふわした灰色の長い被毛に、顔をうずめた。

　ジュジは抵てい抗こうしない。おとなしくしている。

　息を深く吸いこむと、少し埃ほこりっぽいような、懐なつかしいひなたの匂においがした。



　やけに、落ちつく。

　何も考えず、こうしてずっと何かのぬくもりにうもれていられれば、楽なのに。

　なぜだか、少しだけ涙なみだが出た。

マリアローズはジュジを抱いたまま立ちあがって、曇くもり空を振り仰あおいだ。

空はいつだって高い。そこには見果てぬ夢が浮うかんでいた。どうせ届くはずがない。それなのに、僕はどうして見上げてしまうんだろう。なんで、僕は歩くんだろう。どこへ、歩こうとしているんだろう。

わからない。

ただ、マリアローズの足はまだ動く。腕うではしっかりとジュジを抱いている。心のなかにも抱いているものがある。いつからそれを抱いて、あたためているのか。知りはしないが、失うことのつらさはよく知っていた。その痛みはいまだに残っている。消えない。いつまでもいつまでもこびりついている。

だから、なくしたくない。

そのために、どうすればいいのか。

マリアローズは答えを探して歩いていた。

──ごめん、ジュジ。ちょっとつきあって。

一人じゃ歩くことさえ苦しいんだ、今は。

2

本当だ。本当に、苦しい。せつないくらい、苦しすぎる。

「──どっ」カタリは右へ跳とんだ。そこから左へ跳んで、さらに前に転がって右へ跳び、左に跳んで右へ身を投げだしてすぐさま起きあがって全力疾しつ走そうした。「ひゃ──────ッ！」

だが、逃にげても逃げても、剣けんやら槍やりやら硝子ガラス片へんやら合成骨材コンクリート片やら鉄骨片やら何やらが次々と降ってくる。耳みみ許もとを何かが通りすぎる。足許に何かが落ちる。体のどこかを何かがかすめてゆく。たまに痛い。ホンマに痛

い。自分がまだ生きてピンピンしているのは、奇き跡せきなんやないかという気もする。だが、なんとか重傷はまぬがれている。きっと、わしには幸運の神さんがついとるんや。なんとなーく女め神がみやないとは思うけど、せやから大だい丈じよう夫ぶや。わしの超絶幸運ウルトララツキーの前に敵は茄な子す！　こう、紫むらさき色いろでな、つやがあってな、漬つけ物ものとかにするとうまくてな、それがガーッと襲おそいかかってくるて、ちゃうがな！　何が悲しゅうて茄子とバトルせなあかんねん！　それゆうなら「無し」やろ！　うひっ、超寒さぶッ！　ともかく、行ける！　まだまだ行けるで！

「い、息は、め、めちゃめちゃ、あ、あがっとる、けど……な……！」

　正直、しんどい。けれども、カタリは走る。破損したアスファルトにつまずいてこけそうになる。そこに剣・槍・破片の雨がきた。「──もわっ」頭より体が反応して、右へ側転。ヒュンヒュンダダダダ。いろいろなものが地面に激げき突とつしたが、死んでいない。生きている。それなら、また走る。いや、さらに側転。側転に次ぐ側転。都合四回連続で側転をして、おそらく三度死線をくぐり抜ぬけ、鷹たかのごときカタリの目はそれを発見した。「きらーん☆」高層寺院と高層寺院の間の、かなり狭せまい、路地ともいえないような隙すき間まだ。カタリは、そこに飛びこんだ。予想以上に狭かった。正面を向いたままでは入れない。それなら、横を向いてカニ走りだ。もちろん、入ってきた方向から目を離はなさなかった。

　くるな、と念じた。

　こなくていい。どうか追ってこないで欲しい。できれば忘れてもらいたい。どうせ、いい思い出なんか一つもない。悪い記き憶おくは忘れてしまったほうがいい。せやから、わしのことはもう、きれいズッポリスッパリ忘れてくれ……！

　しかし、相手はよっぽどカタリを気に入っているらしい。

「□□あ゛ークソタレェッ！　そうは問屋がおろさへんってか、ボケ……！」

　やつだ。

　高層寺院と高層寺院のクソ狭い隙間に顔だけ突つっこんで、やつがこっちを見ている。

　暗緑色と黒の鱗うろこ。黒いたてがみ。額にマニア垂すい涎ぜん、〝守護者〟系の宝ほう珠しゆ。蜥蜴とかげのくせに、生意気にも黒い立派な鎧よろいを着ている。

〝圧搾魔ザ・コンプレッサー〟。

　なんの因果か、めぐりあわせか、カタリはやつに狙ねらわれて追いかけられているうちに、仲間ともすっかりはぐれてしまった。途と中ちゆう、外で客引きをしていた柄がらの悪い見習い僧そうどもや通りすがりを、いったい何人巻きこんだだろう。銭ぜに勘かん定じようは苦手じゃないが、自分のせいで迷めい惑わくをこうむった人間の数をかぞえるのは得意じゃない。そういう細かいことをいちいち気にしているようでは、真の稀少物レア・蒐集家ハンターにはなれないのだ。それに、逃げながら大声で注意を呼びかけるなど、できるかぎりのことはしたわけだし、まさか異界生物フリークスが地上に出てくるなんて誰だれも想像していなかっただろうから、カタリの責任はそれほど大きくない──はずだ、と思いたい。

　また、もし責任重大だとしても、その罰ばつは十分受けている。

「ひぃぃぃやっ……！」

　罰が飛んでくる。

　人間が横を向かないと通り抜けられないような隙間を、みすぼらしい安そうな長ちよう剣けんが。

　はっきりいって、これは本日一番のピンチだ。長剣の軌き道どうからすると、しゃがめばどうにかかわせそうだが、尻しりや膝ひざがつかえて思うようにしゃがめない。どないしよ、とか、考えている余よ裕ゆうはなかった。カタリは絶体絶命の危機に直面しておのれの肉体に従った。

「ふん──ゴッ！」

　開かい脚きゃくした。

　もちろん（？）、百八十度開脚だ。

　股こ関かん節せつがグゴギッと鳴ったが、長剣は頭上すれすれを通りすぎていった。助かった。いや、まだだ。第二弾だんがくる。今度は、開脚しているカタリの頭部あたりを狙って、槍だ。アホダラ、これ以上、どないせえーちゅうねん！　内心で毒づきながら、カタリは再び肉体が動くままに任せて、思いっきり上体を右に倒たおした。

　ボギボギッ！

　腰こしィッ！

　脇わき腹ばらァッ！

　百八十度開脚したうえ、さらにこの体勢をとるのは、声にならない悲鳴がもれるくらいそうとうきつかったが、どうにか槍はやりすごした。

「──って、ダジャレ考えとる場合か、ダァホ……！」あまりにも笑えない下の下のダジャレを思いついてしまったせいで、カタリの頭のなかの何かがプチっと切れた。「おおッ！」それでひらめいた。考えてみたら、カニ走りなんかするよりも、こっちのほうが断然速い。「うっしゃァァ────ッ！」開脚上体右倒しの状態から両手を地面につき、反動をつけて体を起こし、そのまま側転して側転して側転して側転。「があーっはっはっはっはっ……！」カタリは車輪のように回転して颯さつ爽そうと隙間を駆かけ抜け、そこでもう側転はやめてもいいのに、あえてそのまま左折して、さらに右前方の路地に突とつ入にゅうした。こうなったらもう、進め、進め、進め！　地の果てまでも！　ところが、しばらく行ったところで目が回りすぎて気分が悪くなり、体力も限界にきて制せい御ぎょ不能、

とうとう、脱だつ輪りん──というかんじできれいに吹ふっ飛び、ゴロゴロ転がって壁かべか何かにぶつかったあげく、パタッとうつぶせに倒れて止まった。

「……む……むぅ～ん……」

　だが、こういうときこそ気合いだ。根こん性じようだ。ド根性だ。「フン！　フンガ！　フゴッ！」カタリは額をガスガス地面に打ちつけて自らに活を入れ、飛び起きてその場でふらふら回転して再び倒れそうになったが、両足でふんばってなんとか耐たえた。

　勝った！

　どうやら生きているし、勢いで「我が流りゆう猛もう虎こ（？）大車輪」の秘技も生みだすことができたし、ある意味、これは大勝利、いや圧勝、というかむしろ完勝といってもいいだろう。カタリは心ここ地ちよい満足感にひたりながら、安心して──盛せい大だいに、今度は仰あお向むけにぶっ倒れた。

「……一つ訊きいていいか」

　声が聞こえた。

　低い、人間の声だ。

　カタリは声の方向に目を向けた。ただ頭を動かして右上のほうへ視線を移すだけなのに、たいへんな重労働だった。おまけに、視界がゆがんでよく見えない。頭も回りすぎのクルクルパーで、いろいろな能力がものすごく低下している。

　おかげで、路地に面した高層寺院の外がい壁へきに背をもたれさせ、片かた膝ひざを立てて地面に腰かけている男に、見覚えはあるものの、そいつが誰か思い出せない。

「お前は元気なのか、死にそうなのか。どっちだ」

「……ほえ」カタリは何度かまばたきをして頭を振ふり、両手で顔をゴシゴシこすった。ほんのちょっとだけすっきりした。「──まあ、わりかし元気、やけど……」

「そうか」

男は、少し乱れているが、黒くろ髪かみを逆立てるようにセットしていて、金色の龍りゅうが刺し繍しゅうされたファー付きの黒い皮革製のジャケットを着ている。座っていても、かなり上背があることは一いち目もく瞭りよう然ぜんだ。しかし、何かが欠けているように思えてならない。

それは。

──色眼鏡サングラス……？

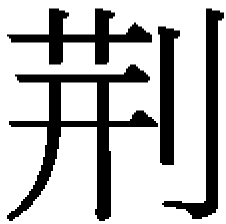
「お前は一人か」

「あ、ああ……なんやようわからんくなって、はぐれてもうて……それより、お前じぶん」

「なんだ」

「怪け我が、しとるんか」

「たいしたことはない。ピンク色のやつとやりあっている最中に、鋏はさみ野や郎ろうに邪じや魔まされて少し削けずられただけだ」



男は──龍州連合の主流派である王龍の頭、ジン王ワンは、左手で右の脇腹を押さえていた。ぱっと見ただけでは、ジャケットが破れていること、出血していることくらいしかわからないが、一応、布のようなものを腹に巻いて応急処置は施ほどこしてあるようだ。顔面蒼そう白はくだとか、そういうことはないので、それほど深刻な負傷ではないのか。いずれにしても、



ジン王ワンの口調は淡たん々たんとしていた

し、東部系のやたらとすっきりした顔もあくまで無表情だった。

「お前の仲間は無事なのか」

　で、唐とう突とつにそんなことを尋たずねてくるから、面食くらう。

　なんというか、「元気・勇気・本気」の三気と「正直・素す直なお・率そつ直ちょく」の三直をモットーとしている（今考えついたのだが）カタリにしてみれば、不気味というか、どうしても警けい戒かいしてしまうタイプの男だ。カタリは慎しん重ちように荊ジン王ワンの様子をうかがいながら起きあがった。

「なんでお前じぶんが、そないなこと」

「お前、ＺＯＯだろう」

「そ、それがどないしたん」

　一いつ瞬しゅん、過去、ＺＯＯと王龍との間に起こった事故がカタリの頭をよぎったが、荊ジン王ワンはあの件を気にしているふうでもなかった。

「やつらが地上に出てきた以上、どのみちしとめないとならない。そのためには戦力がいる。俺の知るかぎりでは、ＺＯＯお前らはいくらか使えそうだ。で、仲間は無事なのか」

「……わからん。わしのほうが知りたいくらいや。まあ、ピンプが

おるし、たしか、どっからか出てきよったアジアンがマリアローズを連れて逃にげよったはずやし、大だい丈じよう夫ぶとは思うねんけど……」

㓝

「ミスター・ピンパーに、アジアン、か……」
ジン王ワンの頬ほおが少しだけゆがんだ。とくに、アジアン、と発音したところで。「そいつらはあてになりそうだな。あとは飛燕フエイヤンか。問題は━」

「問題は？」

「俺とお前が使いものになるかどうかだ」

㓝

ジン王ワンがそう言った瞬間だった。カタリの体は言葉の意味を理解するより早く反応した。理り屈くつ抜ぬきで感じたのだ。

　上。上だ。上に、何かいる。いや。

　━くる。

㓝

　カタリは飛びのいた。ジン王ワンも素早かっ

た。座っている体勢から、四足獣じゆうみたいな獰どう猛もうな身

のこなしで壁伝いにその場を離はなれた刑ジン王ワンは、腰こしから右手で双節棍を、左手で十字棍こんを抜ぬきとって構えた。カタリのほうは構える暇ひまもなかった。「ちょわっ！」バックステップを踏ふんでさらに下がりつつ、頭上から垂直に落下してくる短刀やら曲刀やらを、ハノサンとニノシーではね返して、弾はじいて、叩たたき落とした。そうこうしているうちに、やがて大おお粒つぶすぎる危険きわまりない雨はやんだ。

　だが、一難去ってまた一難、というより、この恐おそろしい手品には当然、仕し掛かけ人がいる。

　やつがゆったりとした足どりで路地に進入してきた。

　圧搾魔だ。

　今は丸腰だが、たぶん〝守護者〟系の宝ほう珠じゆによってもたらされているのだろうやつの念動力テレキネシスは、それ自体が強力な武器となる。

「……もしかして、めっちゃ好かれとんのか、わし」

「理解しがたい好みだな」

「やかましいわ、ダァホ。こんなわしかて、蜥蜴人的にはえらい美男子かもしれへんやろ」

「そうだとしたら嬉うれしいか」

「悲しいわ！　しかも、どう見ても相手はオスやないか！」

「らしいな。だが、せっかくだから試ためしてみるのも悪くないだろう」

「へ？」

いきなりだった。べつに刑ジン王ワンとの間に友情が芽生えたとは思っていなかったが、こうくるとは予想外だった。

「―どごッ」

背中を蹴け飛とばされたのだ。いや、蹴られたというよりは、でかい足で強く押されたといったほうが正確かもしれない。

どちらにしても、カタリは前につんのめって転びそうになり、その結果、ゆっくりといっても大おお股またで歩いてくる圧搾魔に、自分から近づいてゆく形になった。もちろん、自分の意思では決してないのだが、そのあたりの事情をくみとってくれるほど、圧搾魔も親切ではないだろう。となれば、カタリとしても、腹をくくって態勢を整えるしかない。圧搾魔はもうすぐそこにいるのだ。やるしかない。やってやる。やれるはずだ。この気合いがあれば！

「おお！　おおおぅッ……！」

カタリは吠ほえて、重心を低くしたまま姿勢を安定させ、ハノサンとニノシーを振ふりかぶった。あと三歩、いや、二歩だ。圧搾魔は鎧よろいを身にまとっているとはいえ、得物は持っていない。ハノサンとニノシーは同型品がたくさん見つかっているが、れっきとした魔ま導どう王おう時代の品物で、頑がん丈じような刃はの切れ味は抜ばつ群ぐんだ。踏みこみもまずまず。むろん、気力は充じゆう溢いつしている。あてることさえできれば、やれる。あたれば、だが。

実際には、あてるどころか、残り二歩の距きよ離りを縮めることさえできなかった。

動けない。

全・身・硬こう・直。

　たった今、「正直・素直・率直」の三直に、もう一つ新しい直が。

　これで四直だ。ぜんぜん嬉しくない。それどころか、ものすごく怖こわい。

　だって、動けないだけではない。呼吸もできないし、痛い。筋肉がプチプチ、骨がミシミシいっている。目玉が飛びだしそうだ。「は……かッ……かッ、かッ……」変な声、というより音が口からもれる。両手からハノサンとニノシーがこぼれ落ち、それと入れかわりに足が地面から離れてゆく。関節が。喉のどが。鼻が。舌が。このままでは、体が裏返しにでもなってしまうのではないか。それは、だが、おそらくさして大おお袈げ裟さな想像ではない。ようするに、圧搾魔の名は伊だ達てじゃないというだけの話だ。

「Ｎｎｎｎｎｎｇｇ……」

　その圧搾魔は、首を右に、左に傾かたむけながら、蜥蜴とかげの目を見開いて歯を食いしばっている。

　青と緑と黒が複雑に入り乱れた額の宝珠がぼんやりと輝かがやいて、その光は徐じよ々じよに強まってゆく。

　まずい。

　かなり痛い。

　気が遠くなる。

　黄色い、青い、赤い、白い、無数の花々――

　遥はるか遠くに、きれいな、お花畑が見える。

　そこで誰だれかがやさしく手招きしている。

　ほんだら、行きまっか。

　――って。

　行ってもうたら、やばいんちゃう？

　ひょっとして、死ちぬ……？

　だが、引き返せない。どうやっても踵きびすを返すことができない。

　もうすぐ頭がポンッと弾ける。

　そうしたら、おしまいだ。

　さいなら、さいなら、さいなら——と、この世に別れを告げる寸前だった。

「どぷらはぁっ！」

　カタリは崩くずれ落ちるようにその場に倒たおれた。ほっとするような肉体的精神的状じよう況きようではとうていなかったが、死なずにすんだことはたしかなようだ。自分がどうして命拾いしたのかもわかっていた。見たのだ。

　音もなくカタリの脇わきをすり抜ぬけて前に出た刑ジン王ワンが、圧搾魔の左右の頬ほおを双節棍でしたたかに殴おう打だし、下から突つき上げた十字棍を顎あごに叩たたきこむ場面を。

「Ｇａｈａ……」圧搾魔はたまらずよろめいた。ひょろ長い印象だが、上背はトマトクンと同じくらいありそうな刑ジン王ワンよりも一回り以上でかいくせに、意外と脆もろいのか。

刑ジン王ワンもこの好機を見み逃のがさず、かさにかかって攻せめ立てた。双節棍を縦じゆう横おう無む尽じんに振りまわして、主に防具をつけていない頭部にダダダンダダンダンダダダンと浴びせまくり、十字棍こんを膝ひざに引っかけて転てん倒とうさせ、絶対的に有利な態勢に持ちこんで、とどめを刺さす。そうしようとしたのだろうが。

「―く……！」「ふおっ」

　風だ！　突とつ風ぷうがきた！　いや、これも〝守護者〟系宝珠の力か。刑ジン王ワンは一歩だけあとずさりして、だらしなく転がっていたカタリは思わず地面にしがみつこうとした。ただし、風は一いつ瞬しゆんでやんだ。人間を吹ふき飛ばすような風圧でもなかった。直接の被ひ害がいはなかった。だが、

刑ジン王ワンの手が止まった。圧搾魔にとってはそれだけで十分だったのだ。

　圧搾魔が跳はね起きた。

　背中を向けた。

　逃にげだした。

「逃げ足、速ッ！」

「畜生チユーシエン……！」荆ジン王ワンはすぐさま圧搾魔を追いかけようとしたが、不意に十字棍を持ったままの左手で脇わき腹ばらを押さえて、足が止まりかけた。ほどなくまた走りだしたものの、圧搾魔との距離は少々広がった。カタリもようやく立ちあがったところだ。逃げられる。取り逃がしてしまう。いや、そうじゃない。違ちがった。

　圧搾魔は、路地の出口あたりで立ち止まって振り返った。

　まずい。

　カタリと荆ジン王ワンの周りには、さっき圧搾魔が降らせた剣けんやら槍やりやらガラクタやらが散乱している。圧搾魔は、それらを操あやつろうとするだろう。それらでカタリと荆ジン王ワンを傷つけ、殺そうとするに違いない。実際、カタリは硬い物同士がカチャカチャふれあう音を聞いた。でも、見なかった。考えた、と表現してはちょっと語ご弊へいがあるか。たしかに、さまざまな思考がカタリの脳内を駆かけめぐりはした――念動力テレキネシス・宝ほう珠じゆ・〝守護者〟系・

荆　荆
ジン王ワンのしたこと・　ジ
ン王ワンはわしを囮おとりに使った・わしを盾たてにした・圧搾魔
荆
はわしを殺そうとした・その間集中していた・
ジン王ワンの接近に気づかなかった・集中するあまり他ほかに注意
荆
を向けることができなくなる・無防備になる・
ジン王ワンはおそらくそれを見破ってあんな真ま似ねを・確信が
あったか？・わからへん・じつは確信なんてなかったんかもしら
ん・「試ためしてみるのも悪くないだろう」とゆうた・あれはそな
荆
いな意味だったのかもしれん・　ジン王ワンは実
験した・わしは実験台かい！・せやけど無む駄だにはならん・わし
が無駄にせえへん・今活いかしたる・わしを実験に使つこうたんや
わしがその実験結果にもとづいて圧搾魔に目に物見せてくれる・そ
れくらいやったってええやろ・細かい条件はわからへん・どれくら
い制せい御ぎょ可能なんか・どれくらいの重量どれくらいの数どれ
くらいの速度のものを一度に動かせるんか・はっきりしたことはわ

からへん・けどな──結局、ぐだぐだ考えたところで、やるしかない！　やるしかないやろ……！

　おそらく、タイミングを違たがえたら、ろくでもないことになる。

　だが、カタリは恐おそれなかった。ためらわなかった。これと決めたら決して迷わない。突き進む。誰がなんと言おうと貫つらぬきとおす。それが漢おとこ道どうや。文句があるかい。

　狙ねらうは、圧搾魔の額。

　カタリは息を吸って、吐はいて、吐ききった。

　圧搾魔はおそらくカタリと荆ジン王ワンを殺傷するために集中している。

　カタリも負けじと集中している。

　静かや。

　世界にわしとやつしかおれへんみたいや。

　──もろたで。

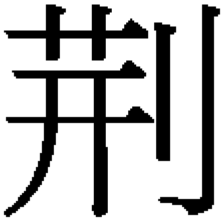
　まず右手でハノサンを投とう擲てきし、左手でニノシーを投げた。余分な力を抜いて。スナップを十分きかせて。自分的には史上最高のフォームで。外れるなんて露つゆとも思わなかった。実際、外れなかった。ハノサンは見事、圧搾魔の額にうまっている〝守護者〟系の宝珠をとらえ、まっぷたつにして、そのまま頭ず蓋がいにめりこみ──なんと、その柄つかにニノシーが命中して、はじきとばされ、地面に落ちた。ということは、ハノサンとニノシーはほとんど同じ場所に飛んでいったのだ。我ながら、ものすごい正確さだ。

　で、それと同時に、いろいろな物体がバラバラと地面に落下した。

なかには、カタリの肩かたくらいの高さまで上じよう昇しようしていた物もあったので、まさしく間かん一いつ髪ぱつだったわけだ。

そして、仕上げは刑ジン王ワンが行った。

額にハノサンを生やしたまま棒立ちになっている圧搾魔を追い越こした刑ジン王ワンは、やつと背中あわせになり、双節棍の棍と棍を連結している鎖くさりをその首に絡からめた。それから棍を交差させるようにして、あとはしっかりと絞しめるだけだった。刑ジン王ワンは驚きよう異い的な腕わん力りよくでぎゅうぎゅう絞めて、絞めまくった。「……ｈｈ……！」圧搾魔は断だん末まつ魔まの叫さけびをあげることさえできず、鎖に手をやったが振ふりほどくこともできずに、そのうちぐったりして動かなくなった。刑ジン王ワンはそ

こでいったん圧搾魔から離はなれたが、この男は念には念を入れるタチらしい。もうたぶん、ほとんど死んでいる圧搾魔の右目に十字棍を突つき入れて、その横棒に両手をかけると、思いきり体重をかけた。おそらく、脳まで達した。こうしていかにも作業的に最後の処置を終えたジン王ワンは、カタリに顔を向けてほんの少しだけ笑ってみせた。

「意外と使えるみたいだな、お前」

「当たり前やろ、ボケ。わしを誰だれやと思──」

　あ。

　カタリは得意の絶頂から突き落とされて、猛もう然ぜんと圧搾魔に駆けより、ジン王ワンを押しのけて、とりあえず私物を回収した。

　目め頭がしらが熱くなった。

　ハノサン。

　柄が。柄が。柄が。柄が、柄が、柄が。

「……わ、わしの腕うでが……よすぎるばっかりに……すまん、ハノサン……」

　無残にも、ハノサンの柄は二ふた股またになっていた。やったのはニノシーだ。というか、ニノシーを投げたカタリ自身だ。ただ、仕方なかった。こうするしかなかった。そういうわけなので、ここ

はニノシーだけでも無事だったことを喜ぶべきか。いや。だが。しかし。もう一つ、とてつもなくショックなことがあった。

　カタリはおそるおそる圧搾魔の額に視線を向けた。

　即そく座ざに目をそらした。

　痛ましくて、とてもではないが直視できない。

　――こないなことを……こないに恐ろしいことを、わしがやったっちゅうんか。

　信じられなかった。

　信じたくなかった。

　だって、魔導王時代の秘宝だ。〝守護者〟系統の宝珠といえば、金額にして億単位の価値があるだけではない。秘ひめている力も非常に強力で有用だし、何しろ種類がたくさんあるので、コレクター心をくすぐる。カタリは稀少物レア・蒐集家ハンターのなかでは少数派で、所有すること、集めること自体にはさして興味がないのだが、宝珠のいいところは、とにかくコレクターに自じ慢まんできることだ。威い張ばれることだ。金なんかどうでもいいが、値段をつりあげて、つりあげて、相手が泣いて「どうか売ってくれ」と土下座して頼たのんできた瞬しゅん間かん、「――ま、そこまで欲しいっちゅうんなら、ええやろ。この値でどや」と、一気に値下げしてやる。そのときの、相手の嬉うれしそうな顔。そういうやりとりがたまらない。もちろん、ちゃんと稀少物レア帳に詳しよう細さいな情報を書きとめておくことは忘れない。稀少物レア・蒐集家ハンター同士で互たがいの稀少物レア帳を見せあって、厚さと内容の濃こさを自慢しあう。そして、勝った、負けた、悔くやしい、今度こそ、また勝った、負けた。くだらないと言うなら言え。誰がどう言おうと、それこそが漢の浪ろう漫まんなのだ。それなのに。

　しょうがなかったとはいえ。

　そうしないと、死んでいたかもしれないとはいえ。

　カタリは噴ふん水すいのように涙なみだをほとばしらせながら、頭を抱かかえて絶ぜつ叫きようした。

「やってもうたアアァァ――――――――――――――――ッ

……！」

3

「──カタリ……？」

　気のせいだろうか。今、カタリの声が聞こえたような。幻げん聴ちよう？

　たしかに、この場にいない仲間たちのことは心配だ。でも、きっと大だい丈じよう夫ぶ。カタリはああ見えて土ど壇たん場ばで底力を発揮できるこだし、マリアだって最近、目に見えて成長してきている。ちょっと考えすぎるきらいがあって、浮うき沈しずみはあるものの、まだ若いのだし、それはしょうがないだろう。たぶんいろいろとつらい目に遭あってきて、素す直なおになれなくて、自分を肯定することができなくて、それでも必死に前を向こうとしている。マリアはそういうこだ。そうしたすこやかな心の力を、ユリカは信じている。マリアを、カタリを、仲間を信じている。

　だから、今はとにかく目の前のことをなんとかしないといけない。

「ロリーしゃん、こっちの人をお願い！　応急処置はしておいたから、もう命の危険はないはじゅよ！　ジェイミーしゃんはしょっちの人を！　慌あわてないで、丁てい寧ねいにね！」

　ユリカは高層寺院フォーギブスの一階フロントホールで、鉄のアイアン心臓ハーツ協会ソサエテイ所属の医術士二名とともに負傷者の治ち療りようにあたっていた。

　といっても、ロリーという女医術士ナースはおっとりしすぎていて仕事が遅おそいし、ジェイミーはまだ若くて経験が浅く、いちいち指示を出してやらないと、バタバタしているだけで何もできない。結果的に、ユリカが負傷者全員の状態を確かく認にんして、重傷者にはてきぱき医術式を施ほどこし、軽傷者は二人に割り振って──等々、さまざまな仕事をこなさなければならず、負担はかなり大きかったが、それもようやく一段落ついた。あとは二人だけでもなんとかなるだろう。

　しかし、この第十三区に、怪け我が人を収容してくれるような慈じ善ぜん的な高層寺院があったなんて。

　声を張りあげて扉とびらを叩たたいたのはユリカだが、正直、あまり期待はしていなかった。ところが、意外にも扉が開いたと思ったら、いかにも好こう々こう爺やといったかんじの老ろう僧そうが顔を出した。しかも、手短に事情を話すと、老僧は大だい僧そう正じようペドローヴィチと名乗ってユリカたちを招き入れてくれただけでなく、他ほかの僧そう侶りよたちに指図して負傷者の搬はん送そうまで手伝ってくれた。

　悪名高い〝彷徨Ｒえるｓ魂区Ｗ〟の僧侶といえば、強こわ面もてで、ごうつくばりで、人を人とも思わない、命を金としか考えていない、そんなイメージが一いつ般ぱん的だ。

　もちろん、何事にも例外はある。百人の僧侶がいれば、一人くらいは良心的な「いいお坊ぼうさん」が混じっていてもおかしくはない。この第十三区で「いいお坊さん」の話なんて聞いたことがないけれど、まあ、探さがせばいないことはないだろう。

　その「いいお坊さん」に、こうして都合よくめぐりあうことができたのだ。幸運だった。たいていの医術士は無む信しん仰こうだが、この高層寺院が崇あがめる神には感謝するべきだろう。ユリカはフロントホールの隅すみに腰こしを下ろしている大僧正ペドローヴィチに近づいて、深々と頭を下げた。

「こころよくお寺を使ちゆかわしぇていただいて、どうもありがとうごじゃいましゅ」

「なんの、なんの」

　禿とく頭とうのペドローヴィチはホ・ホ・ホと笑いながら胸まで届く白しろ髭ひげを撫なでた。紫むらさき色いろと黒の僧服に赤い数珠じゆずと、ちょっと毒々しいいでたちだが、笑うと人がよさそうに顔がくしゃっとなる。

「誰だれであろうと、おぬしのような愛らしい嬢じようちゃんに必死に頼まれれば断れまいて。我らが崇める偽ぎ善ぜん神チャタレイ・ズズもこう仰おつしやっておられる。かわいいこには水かけろ、と、のう」

「……はい？」

「おぬしが身にまとうておるがごとき白いべべは、水をかければス

ケスケであろうが。ヒョ・ヒョ・ヒョ・ヒョ・ヒョ・ヒョ・ヒョ・ヒョ」

　──ひょっとしたら、何かものすごい勘かん違ちがいをしていたのかもしれない。

　さっきまでは人ひと柄がらのよさがにじみでているように思えていたペドローヴィチの顔が、今は単なるスケベ面づらにしか見えない。ユリカは不ふ吉きつな予感に駆かられて一歩あとずさった。勘はあたった。ペドローヴィチが枯かれ木みたいな手をのばしてきて、ユリカの女性用ナース・医術士服ユニの裾すそをつかもうとしたのだ。が、相手が悪い。ユリカはとっさに極限クライマツクス九手棍ナインポールを繰くりだして、ペドローヴィチの手を払はらった。

「──ヒョゴッ！　ヒュー……ヒョ・ヒョ・ヒョ・ヒョ。なかなかにイキのいい嬢ちゃんだのう。気にいったぞ。だが──」ペドローヴィチは叩かれた右手首を左手で押さえながら、外見に似つかわしくない身軽な動作で立ちあがり、しわしわの唇くちびるを舌先でチロチロ舐なめた。「感謝しておるのならば礼の仕方というものがあろうし、何より少しばかり老人を敬う心が足りん。正しい敬老精神なくして、若人わこうどの未来はないと知れ！　よいか、嬢ちゃん。若者は老人の杖つえとなるのだ椅い子すとなるのだ寝ね床どことなるのだ便器となるのだ！　そして老人の等身ラ大代ヴ用ド女性ー人形ルとなるのが若者の正しい姿なのだ……！　わかるか？　嬢ちゃんよ」

「わからないわ。わかりたいとも思わない」

　ユリカは極限クライマツクス九手棍ナインポールを構えてペドローヴィチを正面に見み据すえたまま、周辺視野で周りの状じよう況きようをうかがった。広々としたフロントホールには、十数名の怪我人のほか、屈くつ強きような体格の僧侶が十人以上いる。今の今まで、壁かべ際ぎわや礼拝堂へと通じる扉の前に黙だまって立っているだけだったが、老僧が汚けがらわしい牙きばを剝むいた途と端たん、彼らもにわかに殺気立ちはじめた。

　あの体の開き方。足の置き方。いくらか心得があるようだ。

　また、僧侶の半数ほどは、杖の頭に小さな環わがいくつもついた錫しやく杖じようを持っている。錫杖といえば、本来、武器ではな

くて法具だが、金属製だし、先端は尖とがっているし、彼らが手にしているものは一般的な錫杖よりごつい。殺傷力はそれなりにあるだろう。フロントホールの中央に固まっていた負傷者たちは、そんな僧侶どもにすっかり包囲されてしまっている恰かつ好こうだ。

　ざわめきが起こる。

　ロリーとジェイミーも治療の手を止めた。

　ペドローヴィチは片方の目を大きく見開き、首を回してボキボキ骨を鳴らした。

「さようか。わからんか。それは残念無念。では、やむをえん。近ごろ常識のない若者が増えてきておることは憂うれうべき事態だと儂わしなどは思うが、時は流れーる、時代も変わーる、常識も変化するのであろう。しかしながら、不変のものもあーる。それは感謝の心、誠意ィ……！」

　と、そこで僧侶たちがーいつ斉せいに錫杖の石いし突づきで床ゆかを叩いた。シャン、と錫杖頭の環が鳴った。

「誠意を表す形ィィ！」

　また、シャン。

「価値ある形ィッ！」

　さらに、シャン。

　大僧正ペドローヴィチは両手の人さし指と親指で輪を作ってみせた。

「金！」

　シャン。

　大僧正が跳とびあがって右足一本で立った。「金！」シャン。

　それから、ジャンプして左足で一本立ちをした。「金！」シャン。

　さらには、両足を床につき、指で輪を作った左右の手を顔のとこ

ろにもってきて、眼鏡めがねに見立てたそれをかけるような仕草をした。「──金！」シャン。

　大だい僧そう正じようは右手を前に突きだした。「金！」シャン。次は、左手。「金！」シャン。そして、右手。「金！」シャン。左手。「金！」シャン。右手。「金！」シャン。左手。「金！」シャン。右手。「金！」シャン。こうして交こう互ごに前へ突きだした両手を、今度は額のところに持ってきて、指で作った輪を重ねた。「金ェェェェェェェェッ！　キ・ヒョ・ヒョ・ヒョ・ヒョ・ヒョォォォォォォォォォ……！」シャシャシャシャシャシャシャシャシャシャシャシャン。

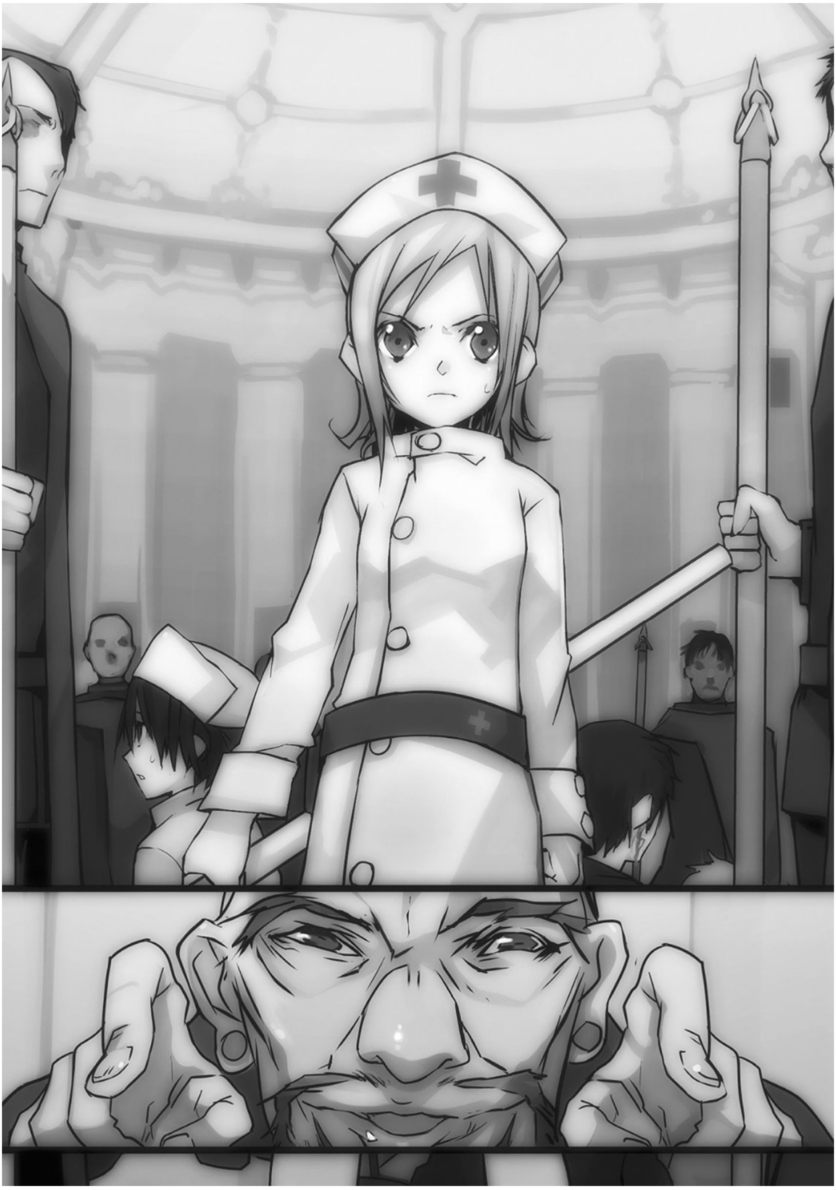
　ひとしきり踊おどりながら笑った大僧正は、一つ咳せき払ばらいをしてやけに厳おごそかな表情を作り、ユリカの前に掌てのひらをさしだした。

「──というわけで、我らが偽善神チャタレイ・ズズに寄進せよ。そうだの、おおまけにまけて、たったの一億ダラーぽっちでよいぞ」

「一億……」

　呆あきれた。やっぱり、第十三区は第十三区だったということか。

　まあ、ペドローヴィチの外見や物もの腰ごしに騙だまされて、勝手に善意を期待したユリカがまだまだ世間知らずだったのだろう。ただし、唯い々い諾だく々だくとそんな馬ば鹿かげた要求をのむほど甘くはない。いざというときに命を張って戦うことのできない者は、結局、踏ふみにじられるだけ。それがエルデンの現実だということは身にしみてわかっているし、ここで生きている以上、ユリカも覚かく悟ごはできている。覚悟だけでは暴ぼう虐ぎやくな力に対たい抗こうできないから、トワニングに鶫流古式戦闘術を習いもした。



　それに、個人的な感情として、このペドローヴィチのごとき、人の弱みにつけこんで金かね儲もうけを企たくらむような欲深な悪人は許しがたい。

　殺してしまえ。

誇こ張ちようではなくて、本当にそう思う。

医術式の精神と技術を師ナタリア・ヴィーから学び、癒いやし手、救い手として、博愛主義、平和主義の実じつ践せん者たろうとしたユリカ・白雪スノーホワイトは、もはや過去のものだった。

師はこんな自分を見たら、悲しむだろうか。

きっと、泣くだろう。

でも、師のもとで修しゅ行ぎように励はげんだ日々、わたしは何も知らなかった。本物の悪意を知らなかった。欲望のために人は人をたやすく傷つけるのだと、知識として頭では理解していても、実感はしていなかった。罪を憎にくんで人を憎まずと教えられ、なるほどそのとおりだと納なつ得とくしていた。けれど、殴なぐられ、蹴けられ、盗ぬすまれ、犯おかされ、尊厳も持ち物もすべて奪うばわれ、殺された者の気持ちなんて想像していなかった。いや、したつもりになって、それでもわたしは人を憎むことはないと思っていた。とんでもない勘かん違ちがいだった。

憎ぞう悪おはどこからか発生するものではない。初めからそこにあるものだ。

そして、何かのきっかけで、育ちはじめる。そうなってしまったら、もう無理だ。抑おさえつけることなんてできない。決して消えない。誰だれかを憎まずにはいられない。少しの間、忘れても、この体を見るたびに思い出す。憎悪に振ふりまわされそうになる。

それでも、人が悪いのではない、と誰かが言う。人の本ほん性しようは善だが、社会が文化が環かん境きようが悪を芽め吹ぶかせるのだ、と。それは？　つまり、こういうこと？

この世界は、憎悪を育てるようにできている。

わたしの心臓をとりだしたら、きっと憎悪で真っ黒に染まっているだろう。

それが、必然だということ……？

──お師様。ごめんなさい。

ユリカは人を殺しながら人を癒します。矛む盾じゆんです。わ

かっています。だから、お師様が属するアーヘンホルド派だけでなく、医術士はだいたいどの流派でも「不殺」を戒かい律りつに取り入れているのでしょう。

　でも、残念だけれど、それはきれいごとです。わたしが殺さなくても、誰かが殺す。悪意と憎悪が渦うず巻まく世界に、自分だけ無関係を決めこんで涼すずしげな顔をしていることなんて、わたしにはできない。

　わたしは汚よごれています。汚れていると自覚することは、つらい。きれいでいたい。美しくありたい。醜みにくいことは苦しいことです。だけれど、現実にそういう人がたくさんいます。わたしはときに彼らと戦い、殺しあい、ときに手をとり、わかりあって、汚れたままで、きれいになりたいと願いながら、ありのままに生きてゆきます。死ぬまで生きてゆきます。

　とりあえず、個人的な信条に従って、この助平強ごう欲よく大僧正を懲こらしめてやる。

　ユリカは極限クライマックス九手棍ナインポールに殺意をこめた。もっとも、ただ怒いかりに身を任せてペドローヴィチを撲ぼく殺さつするつもりはない。冷静な計算もある。大僧正という肩かた書がき。それから、さっきの奇き矯きような踊りを見ても、ペドローヴィチがこの場にいる僧そう侶りよたちの親玉だということは間違いない。まずは頭を潰つぶす。それが喧けん嘩かの大原則だし、そこまでやらなくても、痛めつけて人ひと質じちにとってもいい。

　ペドローヴィチも、ユリカの本気度を感じとったのか、顔色を変えた。

　怯ひるませた。

　勝てる、と思った。

　ユリカはペドローヴィチをにらみつけたままで微笑ほほえんだ。

「寄進はしないわ。悪いけど、下心の中身がわかっても感謝しちゅぢゅけるほど初心な小こ娘むしゆめじゃないの。しょれより、ちょっとだけ時間をあげるから、あなたの神に祈いのりなしゃい。死んだあと天国に行けるように。まあ、しょんなに力のある神かみ

様しやまだとは思えないけど」

「ま……待て、嬢じょうちゃん、ぢ、ヂスカウント！　ヂスカーウントする、な？　一億はちょーっと高すぎちゃったかなーと儂わしも思わんでもない、だから……」

　ペドローヴィチは両手を振ってあとずさったが、後ろは壁かべだし、まだよくわかっていないようだ。問題は金額の多た寡かではない。人から金をしぼりとろうとしておいて、殺気を突つきつけられた途と端たん、前言をひるがえす、その腐くさった性根が問題なのだ。

「きゅ、九千万！　これで、どうだ！　ダメ？　それなら、九千五百万！　九千七百万！」

　──しかも、一回みみっちく値下げしたあと、なぜかまた値上げしているし。

　さすがに馬ば鹿か馬鹿しくなって、命までとる気は失うせた。だが、まだフロントホールのなかに怪け我が人が大勢いる。彼らの安全も考えると、ある程度の脅おどしは必要だろう。ユリカは指に力をこめようとした。そのときだった。

　心臓が、ドクン、と跳はねて肋あばら骨ぼねを叩たたいた。

　後ろから誰かに肩を叩かれた。

　思わず振り向いてしまった。

「まあまあ、お二方とも、落ちついて。冷静に。仲よくいきましょうよ、ね？」

　そう言いながらユリカとペドローヴィチの間に割りこんできたのは、白黒豹柄のスーツを着て、片眼鏡モノクルをつけ、白黒まだらに見える頭とう髪はつを七三わけにしたルイ・カタルシスだった。怪我もしていないくせに、これも取材だとかなんだかとか言って、ユリカたちにくっついてこの高層寺院フォーギブスにきていたのだ。

　ルイ・カタルシスは床ゆかに置いた革かわ鞄かばんを開けて、何かとりだすと、それをペドローヴィチに手て渡わたした。

「はい、どうぞ」

「……ぬう？　『スナコンタオ島十六少年漂ひよう流りゆう戦記』、とは……？」

「ははは。じつは、恥はずかしながらぼくの処女作です。しかも、ほら、見てください」ルイ・カタルシスはペドローヴィチの手のなかにおさまっている本の表表紙をめくってみせた。「ここ。これです。ぼくのサインですよ。直筆です。ルイ・カタルシス。ね？」さらに、ひっくり返して裏表紙と最後の一ページを一いつ緒しよにめくった。「で、初版です。わかります？　このころはまだ無名でしたからね。部数の少ない処女作の初版、しかもサイン本ときたら、稀き少しよう価値があるので、結構な値段がつきますよ。あ――まあ、この国ではそうでもないかもしれませんが、ラフレシアでは押しも押されもしない人気作家なんですから。いや、本当に、マニアなら二十万、いや、三十万ダラーくらい出すんじゃないかな？」

「ほう……」ペドローヴィチは感心したように『スナコンタオ島十六少年漂流戦記』を眺ながめていたが、それも数秒だった。哀あわれ『スナコンタオ島十六少年漂流戦記』初版サイン本は床に叩きつけられた。「――って、人を虚こ仮けにするでないわ、うつけめ！　なーにが三十万だ！　そんなはした金でこの儂が満足すると思うか！　こんなもの、ケツをふく紙にもならんわい！」

「えー。ちゃんと一ページずつちぎってよくもみほぐせば、おしりをふくくらいはできると思うんですがねえ……」ルイ・カタルシスは不満そうに『スナコンタオ島十六少年漂流戦記』を拾いあげて鞄のなかに戻もどすと、「――じゃあ」と、自分の左手首につけていた腕うで時計を外し、うやうやしい手つきでペドローヴィチの右手に握にぎらせた。「しょうがない。これをお納めください。今度はきっと気に入っていただけると思いますよ」

「むう？　これは――」

「見てのとおり、腕時計ですけどね。ただの腕時計じゃありません。野生ワイルド・の王朝ダイナスティーのオーダーメイド。まあ、ぼくがデザイナーをやっているので、デザインしたのはぼく自身だったりするのですが、それだけにずいぶん手間とお金をかけました。見ていただければわかりますよね。キラッキラのたいへん珍めずらしいイエローダイヤモンドを、ほら、すっごーくたくさん使っているでしょう」

「おお。た、たしかに……」

「もともと売り物ではありませんから、ぼくだけの腕時計、プライスレス、と言いたいところですが──そうですね、あえて値段をつけるとしたら」

「したら？」

「七、八千万ダラーはくだらないでしょうね」

「……なんと！」

　ペドローヴィチは目玉が飛びだしかねない勢いで腕時計を凝ぎよう視ししながら、左手の甲こうで口の周りをぬぐった。だが、あとからあとからよだれが垂れてくる。ペドローヴィチはもう気にせず腕時計を左手首につけると、満面に笑えみをたたえ、小こ躍おどりして喜んだ。

「ヒョ・ヒョ・ヒョ！　いい時計！　いい腕時計だ！　よいのか？　これをもらってしまって本当によいのか？　ヒョ・ホ・ホ・ホ……！」

「いいですよ。さしあげます。まあ、ご所しよ望もうの金額には少々足りませんが──」

「いや！　いやいや！　そこはほれ、ヂスカーウント、ヂスカーウント！　ヒョ・ホッ！　そうと決まれば、こら、馬鹿弟で子しども！　白さ湯ゆなり茶なり用意してやらんか！　まだ手当ての終わっておらぬ怪我人もおるのだぞ！　本当に気のきかぬ連中だ！　ああ、嬢じようちゃん、さっきはすまなかったのう、これ、このとおり！　ぜんぶ何もかも、この老人のただのお茶目な冗じよう談だんであるからして」

「……冗談、でしゅか。あれが」

「ニョ・ヒョ・ヒョ！　そう怖こわい顔をするでない。柔じゆう軟なんに、柔軟にな、うまく世渡りしてゆくのが長生きのコツなのだぞ。その甲か斐いあって、儂わしゃもう百二十年も生きておる！」

「……………………」

　見た目からしても、せいぜい七十かそこらだと思っていたのだ

が。

　ユリカがくらくらする頭を振ふっていると、またルイ・カタルシスに肩かたを叩かれた。

「さて──と、いうことで、いいかんじに丸くおさまったので、そろそろ行きましょうか」

「え？　行くって……」

「さっさと行きましょう。さっさと。急いだほうがいいでしょう？　ほらほら」ルイ・カタルシスはユリカの背中を押しはじめた。顔はにこにこ笑っているが、なんとなく焦あせっているような。不ふ審しんに思ったが、たしかに早くここを出て、皆みなの無事を確かく認にんしたい。掩えん護ごできそうなら、掩護したい。これ以上、ペドローヴィチなんかにかまっている場合ではないことは事実だ。ユリカはロリーとジェイミー、二人の医術士に「あとをお願い」と声をかけて、ルイ・カタルシスとともに高層寺院フォーギブスの大きな鉄てつ扉ぴを開けて外に出た。

「でも、あなたまでこなくてもよかったのに。少しゆくなくとも、あしょこは安あん全じえんだったわ」

「いやあ、そうもいかないわけがありましてね」

　周囲を見まわし、耳を澄すまして音を拾おうとしているユリカの横で、ルイ・カタルシスは地面に置いた鞄かばんを開けて、何やらごそごそやっている。はっきりいって、うるさい。

「あなたね……」

「ほら」

　そう言ってルイ・カタルシスが革かわ鞄からとりだしてみせたものを見て、ユリカは唖あ然ぜんとした。

　それは、腕時計だった。

　ルイ・カタルシスが大だい僧そう正じようペドローヴィチに献けん上じようしたあの腕時計と、まったく同じ物に見える。しかも、一つではない。

二つ。三つ――ぜんぶで、五つ。

「ああ、まだなかに入っていますよ。いくつあるかな。十本はあると思いますが」

「……しょれ、オーダーメイドって」

「あれはね、嘘うそです」ルイ・カタルシスは「ははは」と軽く笑って、腕時計のダイヤモンドを指さしてみせた。「これ、黄色いでしょう？　イエローダイヤモンドなんて言いましたけど、じつは天然物じゃなくて人工なんです。ある錬れん金きん士しが製造法をあみだして、がんばってはいるんですが、透とう明めいなものはなかなか難しくて。どうしても不純物が混入して黄色くなってしまうらしいんですよね。だから、失敗作の人工ダイヤということになるんですが、ぼくがその錬金士に資金援えん助じょしている関係で、仕入れはただです。それでも、この腕時計自体は二十四万八千ダラーだったかな。ラフレシアでは、それくらいの値段で市し販はんしていますけどね。ひょっとしたら、あの初版サイン本のほうが高いかもしれない。まあ、あの老人の目が節穴で助かりましたけど、見る人が見ればすぐわかるので、そのうちばれるでしょうね。実際、ハラハラドキドキでしたよ。あ、そうだ、一つ、記念にどうです？」

「……いりましぇん」

「そうですか」ルイ・カタルシスは腕うで時計をしまいなおし、革鞄を持って立ちあがった。「それじゃあ、行きましょう。いや、本音を言うと、離はなればなれになったジュジのことも心配なんです」

「みーちゃ――あ……猫ねこは、危ないところから遠じゃかろうとするんじゃないかしら」

「普ふ通つうの猫ならね。うちのジュジはちょっと変わっているので。好きなんですよ、スリルが。ぼくより勇ゆう敢かんなくらいです」

「ジュジちゃんのことは別べちゆとしても、あなたの場合は勇敢なんじゃなくて、無む思し慮りょで無む謀ぼうなだけだと思うわ」

「ははは。これでも考えて動いているつもりなんですが」

どうやら〝古代九頭竜の呪のろい〟がとけているらしいことはおいておくとしても、もとはといえばこの男が蒔まいた種といえなくもない。それなのに、反省の色がまったくないどころか、いちいち楽しそうで、緊きん迫ぱく感かんが皆かい無むだ。この男には自分が当事者だという意識がないのか。ないのだろう。そのせいだろうか。間ま違ちがいなく変人だし、恰かつ好こうも派手なのに、なんだかそばにいても近くにいないような、得体の知れない存在感の軽さがこの男にはある。

ユリカは一つため息をついた。

「しょれじょれ目的のあるマリアやカタリには悪いけど、今、わたしの頭のなかにあるのは仲間の無事だけよ。だから、あなたがどうなろうと関係ないの。ちゅいてくるなら、自分の身は自分で守りなしゃい」

「もちろんです。ぼくのことは気にしないでください」

とはいうものの、やっぱり少しは気にしてしまう。それはもう、自分の性格だから仕方ない。だが、本当にいいかげん、のんびりしていられる気分ではなかった。ユリカは走りはじめた。西へ。すでにこのあたりには逃にげ惑まどう人々もいない。そのかわり、そこかしこに死体や死体の断だん片ぺんが転がっているけれども、ユリカは唇くちびるを噛かんでそれらから目をそむけた。とにかく、足を動かした。ただ、そう遠くない。そんなふうに感じていた。勘かんではない。音とか、道や建物の傷つき方とか。それくらいわかる。もうすぐだ。直進すれば、シャイニンググローリーパレスと北ほく斗と門もんを結ぶマキシマムＡＭドラゴン・ストリートに出る。十字路を、左へ。

いた。

──大きい。

すごく大きな黄色っぽい鱗うろこの蜥蜴とかげ人に、群がろうとしているのだろうが、なかなか近づけず、遠巻きにしている、約十人。あれはたぶん、ロドリゴ・ファルコーネ率いる鉄のアイアン心臓ハーツ協会ソサエテイの一隊だろう。ただ見ているだけにかぎりなく近いとはいえ、あんなに頭数が減ってもなお瓦が解かいしない鉄のアイアン心臓ハーツ協会ソサエテイは、さすがに性しよう根ねがすわっている。

　しかし、彼らがそうしていられるのも、結局のところ、彼がいるからだった。

　彼は、巨きよ大だいな蜥蜴人の周りを、ときに建物の外がい壁へきまで利用してさかんに動きまわり、やつの両手や尻尾しつぽをかいくぐって斬きりかかっては、少しずつ少しずつ手傷を負わせていた。

　右手には刺し突とつ斬ざん撃げき両用短たん剣けん、雄おすのグレアデ。まっすぐのびた頑がん丈じような剣身は約三十五サンチ。

　左手には斬撃兼解体用短剣、雌めすのリレッザ。鋭するどく湾わん曲きよくした剣身はおよそ四十サンチ。

　瑠璃繁縷ピンパーネルの名を持ち、砂色の衣ころもを身にまとったラハン大陸出身の元アッサシンは、少なくとも〝超食漢スーパーイーター〟を足止めすることには成功していた。

　もっとも、やつの両りよう腕うで、両足、尻尾、背中などに刻まれた無数の傷は、残念ながら、はたから見てもさして深くない。やつの体があんなに大きくなければ、どれもこれも致ち命めい傷しようだろうが、何しろスケールが違う。違いすぎる。

　違いすぎて、おかしい。

　なんだか、変だ。目をこする。錯さつ覚かくではないみたいだ。ということは。

「……あの大きい蜥蜴人、ましゃか──最しやい初しよよりも大きくなってる……？」

「うーん」

　ルイ・カタルシスは四十メーテルほど先にいる超食漢に向けて、左手の人さし指と親指を広げた。距きよ離りと指の長さの関係から、だいたいの背せ丈たけを計測しようとしているらしい。

「──そう、ですね……六、七メーテルはありそうです。初対面のときの倍まではいかないかもしれませんが。もしかしたら、成長期なんでしょうかね。それにしたって、いきなり育ちすぎのような気がしますけど。ぼくも好き嫌きらいせずにいっぱい食べれば、今からでも伸のびますかね、身長」

「いくら背しえが欲しくても、あんなものを食べる気にはとてもなれないわ」

　ちょうどユリカの視線の先で、逃げるピンパーネルを追いかけてとある高層寺院に激突した超食漢が、自分で破は砕さいした合成骨材コンクリートをバリバリモシャモシャ食べながら振ふり返ったところだった。

　どうやら、本当に好き嫌いなく、なんでもよく食べるみたいだ。

　しかも、食べすぎて、満腹になって、胃がもたれて、動けなくなることもないらしい。

　それどころか、ユリカの見たところでは、超食漢の動きの質はよくなっている。さすがにピンパーネルをつかまえるところまではいっていないが、鈍にぶいという印象は微み塵じんもなく、身のこなしにキレがある。

　鉄のアイアン心臓ハーツ協会ソサエテイが近づけないのも、うなずけるというものだ。今はピンパーネルに注意が向いているからいいが、まともな人間が超食漢に狙ねらわれたら、ひとたまりもないだろう。

　不用意に接近すれば、かえってピンパーネルの邪じや魔まになる。

　だからといって、ここで黙だまって見ているわけにはゆかない。

　自分にもできること、やるべきことが、きっと、必ずあるはずだ。

「あ――」

　そう考えて四囲に視線をめぐらせていたら、見つけた。

　位置的には、ユリカから見て、鉄のアイアン心臓ハーツ協会ソサエテイの一隊がいて、その向こうにピンパーネルと超食漢、さらにその先で、彼らはくんずほぐれつしていた。ピンパーネルと超食漢の一いつ騎き討うちが壮そう大だいすぎて、目立たなかったのだ。

　ただ、彼らも十分すぎるほど派手にやりあっていた。「ちゅいてこないで！」ルイ・カタルシスを置いて走りはじめたユリカも、ま

だ未熟とはいえ、武術の心得があるのでわかる。彼らが演じている死し闘とうは、そうとうハイレベルだ。ピンパーネルと超食漢ほどではないにしろ、体格差はある。お互たがい無手だが、片方には尻尾がある。飛燕フエイヤンは──ユリカも人のことはいえないが、あのこどもみたいな体つきの男は、そうしたハンディキャップを、極限まで無む駄だを削そぎ落とした技わざの冴さえと、敏びん捷しよう性せい、それにトリッキーな動作でおぎなっていた。

　すごい。

　鉄のアイアン心臓ハーツ協会ソサエテイの一隊の外側を回って、道の端はじっこを駆かけてゆきながら、ユリカは素す直なおに感心していた。

　あれは、素質や実戦経験だけではできない。そのベースに、血のにじむような鍛たん錬れんが絶対にある。壮絶なまでの努力がある。くじけない精神力がある。そのすべてが、ユリカには見える。伝わってくる。知らずに、胸が熱くなる。万が一にも超食漢に見つからないように、ピンパーネルをわずらわせないように、建物の軒のき先さきを走りながら、声を出して応おう援えんしたくなる。

　もちろん、我が慢まんだ。声なんか出したら、超食漢の注意を引いてしまうかもしれない。あのこの気が散るかもしれない。あのこの戦いを邪魔したくない。

　それにしても、本当に、すごい。

　ユリカにとって、今まで見たなかでもっともすぐれた武闘家は師し匠しようのトワニングだが、彼にはめぐまれた体たい軀くがある。おそらく天性のものだろう筋力が保証する身体能力がある。比べるのもおこがましいが、ユリカとは何から何まで差がありすぎて、基本の技一つをとってみても、いつになっても並ぶことなんかできない。たとえ百年修しゆ行ぎようしたところで、どうにもならない。そう思っていた。たぶん、心のどこかであきらめていたのだ。でも、あのこは、男の子にしてはかなり小こ柄がらなのにもかかわらず、違ちがう。

　戦っている。

　飛燕フエイヤンは〝拳姫フイストプリンセス〟と互ご角かく以上にわたりあっている。

拳こぶしで。肘ひじで。足で。膝ひざで。頭で。肩かたで。背中で。

全身を駆く使しして、怯ひるむことなく拳姫と真っ向から勝負している。

今も、飛燕フエイヤンの剃かみ刀そりのごとき左の下段後ろ回し蹴げりが、ものの見事に拳姫の足首をとらえた。それでバランスを崩くずした拳姫のアキレス腱けん（人間だったら）あたりを、間かん髪はつを入れず、今度は右の下段前回し蹴りが刈かった。この連続技に耐たえるためには、いったいどれくらいの体重が必要だろう。拳姫はそれに満たなかった。ひっくり返った。いや、とっさに手を出した。かろうじて両手で体を支えて転てん倒とうをまぬがれて、人間だったらそれで終わりだろうが、あいにく拳姫は蜥蜴とかげ人だった。尻尾だ。拳姫は尻尾を振りあげ、アッパーカットのような要領で、飛燕フエイヤンの顎あごを狙った。これがちょうどカウンター気味になった。飛燕フエイヤンは拳姫を追つい撃げきしようと前がかりになっていたのだ。

「──ダァッ……！」

飛燕フエイヤンは交差させた両りよう腕うでで防ぼう御ぎよするのがやっとだった。

吹ふっ飛ばされた。

そこに態勢を立てなおした拳姫が襲おそいかかる。

前方宙返りで距きよ離りをつめて、唸うなりをあげ、突つき下ろすような右のコルクコークス抜きクリユーパンチが。

「Ｓｈ……！」「グ──ハッ！」

命中した。腰こし、肩、肘、手首、いや、拳姫の身体からだ全体から生みだされた力自体もそうだが、加えられたひねりによって、飛燕フエイヤンのガードが弾はじきとばされてしまった。頰ほおと顎の中間あたりに、ねじりこむように拳が入った。

それでも飛燕フエイヤンは、インパクトの瞬しゆん間かん、少しでもダメージを逃にがそうとして、あえて自ら飛んだ──ようにユリカには見えた。

　そうであって欲しい。そうでなかったら、くるくる横に回転しながら地面に叩たたきつけられた飛燕フエイヤンは、起きあがれまい。当然、拳姫もこの機を見み逃のがさない。飛びかかってゆく。踏ふみつけるつもりだ。一・九メーテルはあるあの身体に、踏まれたら。

　ユリカは今度こそ声を出しそうになった。

　ただし、悲鳴ではない。歓かん声せいだった。

「━殊シユッ！」飛燕フエイヤンは拳姫の足を紙かみ一ひと重えでかわすなり、独楽コマみたいに回転して足あし払ばらいを繰くりだした。これは拳姫が右足を上げてやりすごしたが、まだだった。
「咆ポオォォォ……ッ！」飛燕フエイヤンは蛙かえるみたいに跳とびあがった。あまりスマートではないものの、全身のバネを使った跳ちよう躍やくだ。速かった。タイミングも完かん璧ぺきだった。よけられない。よけられるものか。ガツン！　すごい音がした。顎に直撃だった。頭突きだ。体重がのった頭突きは、拳よりも威い力りよくがある。拳姫はそれをまともに食くらった。なんともないはずがない。よろめいた。だが、倒たおれなかった。倒れはしなかったが、すぐさま戦闘のフアイテイング構えポーズをとれるような状態ではなかった。

「キャハ爬ハ爬ハ爬ハ爬ハッ……！」

　飛燕フエイヤンは、その拳姫の腹部にダダダンと連続で正拳突きを叩きこんだ。たまらず拳姫は飛燕フエイヤンにつかみかかろうとしたが、そんなものは苦しまぎれにすぎない。拳姫は目もく論ろ見みを果たせなかった。それどころか、逆に飛燕フエイヤンが次の手に打って出た。ここで飛燕フエイヤンは自分の体の小ささをうまく活用した。「━ヒャハ！」拳姫の股の間をくぐり、あっという間に背後をとって尻尾しつぽを握にぎったのだ。いや、両腕で抱かかえた、といったほうが正確だろう。なんのために？

　飛燕フエイヤンは小さな体に似合わない怪かい力りきぶりを発揮して、拳姫を豪ごう快かいに振ふりまわした。

「おりゃあっ！　回れ回れ蜥蜴女ァァァーッ！　キャハハハハハ……！」

　そして、手を放した。

投げると同時に、飛びかかった。

空中で蹴り下ろした。

蹴り上げた。

蹴ったくって、蹴って、蹴って、蹴りまくった。

あたりまえのことだが、飛燕フエイヤンは容よう赦しやがない。狙ねらうのは顔面、関節、急所ばかりだ。拳姫は見る間に口、鼻からダボダボ出血した。とくに口の周りは血まみれになった。その血が飛散した。飛燕フエイヤンも汚よごれた。飛燕フエイヤンは血を見て興奮してきたみたいだ。「ヒャハハハハハ……！」そのせいか、腰、膝の回転がさらに速度を増して、飛燕フエイヤンの蹴りはますます猛もう威いをふるいだしたように見えたが、あるいはそれが落とし穴だったのかもしれない。また、拳姫が亀かめみたいに身をちぢめて、防戦一方どころか、なすすべなしといった態度をとったことが、わずかに飛燕フエイヤンを油断させたのかもしれない。単に、拳姫が想像を絶してタフだったのかもしれないし、思った以上に技ぎ巧こう派だったのかもしれない。

「拿ダ羅ラ羅ラァァッ！　拿羅羅羅―あ……？」

一瞬だった。

形勢が逆転した。

ユリカの目には、拳姫の右手がひょいと飛燕フエイヤンの軸じく足あしをすくっただけのように見えたが、もちろんそれほど簡単な芸当ではないはずだ。調子に乗っていたとはいえ、飛燕フエイヤンだって気を抜いていたわけではないだろう。しかし、隙すきはあったのだ。それにしても、絶ぜつ妙みようだった。おそらく、息もつかせず蹴りを繰りだしていた飛燕フエイヤンの軸足が、ほんの少し浮うきかけた、そのまばたきほどの時間につけこんだのに違いない。

飛燕フエイヤンの体が宙に浮いた。

回る。

すかさず起きあがった顔面血みどろの拳姫が、無防備な飛燕フエイヤンを血祭りにあげようとする。

　だが。

　──そうはさせない。

　誰だれが？

　ユリカ・白雪スノーホワイトが、だ。

　たぶん、拳姫だけでなく、飛燕フエイヤンも気づいていなかっただろう。ユリカは飛燕フエイヤンの戦いぶりに感かん嘆たんしていたが、傍ぼう観かん者に徹てつするつもりはなかった。このときのために、低い姿勢で背後から拳姫に接近していたのだ。むろん、近づくだけではない。

「破はっ……！」

　ユリカは裂れつ帛ぱくの気合いとともに、極限クライマツクス九手棍ナインポールを叩きこんだ。

　巨きよ岩がんをもぶち割りそうな踵かかと落としを飛燕フエイヤンに見み舞まおうとしていた拳姫の、後頭部と首の間くらいの位置だった。

「Ｇａ……」

　それで、どの程度のダメージを与あたえることができたのかはわからない。いずれにせよ、拳姫が飛燕フエイヤンをしとめる絶好の機会を逸いつしたことはたしかだ。拳姫は高々と上げた右足を飛燕フエイヤンに向けて振りおろすことはできなかったし、それればかりか、前のめりになって倒れそうになり、あやういところで踏みとどまった。踏みとどまったということは、完全にグロッキーだったわけではないのだろうが、まあ、結果的には似たようなものだった。

「──喝カアッッ！」

　受け身をとってすぐに跳びあがった飛燕フエイヤンが、拳姫の顎あごに飛び膝フライング蹴り・ニーをぶちかました。

　しかも、それで終わりではない。

　というより、飛燕フエイヤンは終わらせるつもりのようだ。

飛燕フエイヤンは、膝蹴りから拳姫の頭を全身で抱えこむような体勢に素す早ばやく移行すると、腕うでと足を巧たくみに使って、思いきりひねった。

倒れかかってゆく拳姫の首を、右に。

左に。

ひねって、ひねって、ひねりまくった。

ボキゴキ音がした。

折れて、砕くだける音だった。

拳姫の首は、すでにあらぬ方向を向いていた。それでも飛燕フエイヤンは手をゆるめなかった。拳姫の体が地面にぶっ倒れる瞬しゅん間かんだった。飛燕フエイヤンはとどめとばかりに、拳姫の頭頂部に肘ひじをぶちこんだ。

最後に、ボグッ、と鈍にぶい音がした。

「……ふううぅぅ……」

やがて、飛燕フエイヤンは地面に寝ね転ころんで大の字になり、コートのフードをめくりあげた。

その顔はひどく紅潮している。呼吸も荒あらい。だいぶ汗あせもかいている。苦しそうだが、浮かんでいる表情は突つき抜ぬけたような会心の笑えみだった。

「だあああァァッ！　勝っ、たっ……！　でも！　でもよォ、ケダモノもバカにならねーなァ超ちよう強つえェーヤツもいるんだなァー。やッべェーオレ、すげー世間知らずじゃん？　井いのなかのカワウソじゃん？　ありゃ。なンか違ったっけ。井の中のカワセミ？　ケジラミ？　ま、なんでもいーかァ。ウヒャヒャヒャ！　けど──」と、飛燕フエイヤンはユリカを見て、照れくさそうに指の先で鼻の頭をかいた。「オレ一人でも勝てたのによォ」

「何言ってるのよ」ユリカは思わずくすりと笑ってしまった。「わたしが出ていってなかったら、あぶなかったじゃないの」

「ンなこたァねーよォ！」飛燕フエイヤンは頬ほおをふくらませ

て、だだっこみたいに両手両足をバタバタさせた。「勝てたって
ゼッテー！　マジで！　オレ全開じゃーなかったし！　いざってと
きは奥の手だってあったしよォ！　勝ーてーたー、勝ーてーたー、
勝ーてーたーってェエー！」

「はいはい」

「あ、信じてねェーだろ？　信じてねーなァ？　クソッ、ホントに
ホントのマジなのによォ」

「信じるから。しゃあ、立って。まだ──」

　そう。

　拳姫の息の根を止めることはできたが、まだ舞ぶ台たいの幕は下
りていなかった。

　ユリカは何かものすごい威圧感プレツシヤーを感じて振ふり向い
た。いや、それは威圧感プレツシヤーなんて曖あい昧まいなもので
はなかった。ものすごい音であり、空気の流れだった。「──ユリィ
……！」手を引かれた。跳はね起きた飛燕フエイヤンだった。ユリ
カは拒こばまなかった。手をつないで、一いつ緒しよに逃にげた。
逃げるしかなかった。だって、逃げないと、轢かれてしまう。

　超食漢だった。

　やつの巨きよ体たいが迫せまってきたのだ。

　でも、もしやつの狙ねらいがユリカと飛燕フエイヤンだったとし
たら、いくらがんばって必死で逃げたところで、無む駄だだったか
もしれない。そう思ってしまうくらい、やつのスピードと迫はく力
りよくはすさまじかったが、さいわい違ちがった。そうではなかっ
た。やつが欲ほつしていたのは、飛燕フエイヤンやユリカのちっぽ
けな体ではなくて、もっと食べごたえのありそうなものだった。

　超食漢は轟ごう音おんを立てて急停止した。

　ピンク色のボディスーツを身にまとい、今はもうすっかり力を
失って、頸けい椎ついがメチャクチャに折れて死んでいる、拳姫の
遺体の前で。

　やつは無造作にそれを右手でわしづかみにして、大きく大きく開

けた口に放ほうりこんだ。

　嚙かんだ。

　二回。三回。四回。

　たったそれだけで、適当な大きさに嚙み砕くことができたようだ。

　そして、やつは、ひとまとめに蜥蜴とかげ四兄弟きようだいとも称しようされて、血をわけた兄妹かどうかは知らないが、少なくとも同族で、同どう胞ほうだったはずの拳姫を、のんだ。

　おいしそうにいただいてしまった。

「おいおいおいィィ……」これには飛燕フエイヤンも足を止めて、ただでさえも大きい目をさらに大きく見開いた。「なんつーかもォ……いっくらなんでもグルメすぎだろそりゃーよォ……」

「しょういう問題かしら……」

「んー。これはしかし」

　いきなり飛燕フエイヤン以外の声がしたので若じやつ干かん驚おどろいたが、この気配の薄うすさには覚えがあった。案の定だった。見れば、ユリカと飛燕フエイヤンの脇わきで、ルイ・カタルシスが革かわ鞄かばんの上に腰こしを下ろし、片眼鏡モノクルをハンカチでぬぐっていた。

「〝超食漢スーパーイーター〟。どうやら、思っていたよりずっと厄やつ介かいな存在になりつつあるようですね。突とつ然ぜん変へん異い的に持って生まれた性質で、もともとなんでしょうが。それにしても、こういう形で進化する個体がいるとは知りませんでした。いやはや。奥が深いなあ」

「しょんな、他人ひと事ごとみたいに──」

「おっと。そうでした。くつろいでいる場合じゃありませんね」

「あたりまえでしょう！　早くこの場所から離はなれなしゃい！　ぼやぼやしていたら！」

「あ、でも、大だい丈じよう夫ぶですよ。ぼく、あまりおいしそうな匂においはしないはずなので──」

「ユリィ！　きやがったぞ……！」「え？　きゃっ！」飛燕フエイヤンは強ごう引いんだった。ユリカを奪うばうように抱だいて走りはじめた。だが、感謝すべきかもしれない。ユリカはまだ余よ裕ゆうがあるだろうと思ってルイ・カタルシスにかまっていたのだが、認にん識しきが甘かった。超食漢は、さっきよりもさらに速かった。ユリカは飛燕フエイヤンに横よこ抱だきにされていたので、自分たちが僅きん差さで逃のがれた超食漢の手をはっきりとこの目で見ることができたし、その速度と重量感をこれ以上ないくらい体感できた。ようやく立ちあがろうとしていたルイ・カタルシスが、ぼんやりした表情で超食漢の右手につかまえられる場面も、ちゃんと目もく撃げきした。「あれ？」と、ルイ・カタルシスは言った。不思議そうだった。それが最後の言葉になった。

　超食漢は両手を打ちあわせるようにして、つかまえたルイ・カタルシスを軽々と潰つぶした。

　もちろん、そのこと自体も衝しよう撃げき的だったが、それより仰ぎよう天てんした──というより、目を疑ったことがある。

　赤くなかった。

　超食漢の両手の間で、グシャリ、と潰されて飛び散ったルイ・カタルシスの破は片へんは、まるで牛乳みたいな白い液体にまみれていた。

　その光景を見てユリカが感じたのは、総毛立つような、たとえようもないおぞましさだった。

　もしそれが、人間ではない、異界生物フリークスの体から出た液体なら、べつになんとも思わなかったかもしれないが──異界生物フリークスは超食漢のほうで、ルイ・カタルシスは人間のはずだった。今の今までそう思っていた。違ったの……？

　わからないが、超食漢も白い血の人間（？）はあまりお気に召めさなかったのかもしれない。それとも、それどころではなかったのか。誰だれもが手をこまねいて見ているか、標的にされたら逃げまわることしかできない超食漢に、果か敢かんに挑いどみかかる者がいたのだ。

言うまでもない。

ピンパーネルだった。

ちょっとしたでっぱりを頼たよりに、高層寺院の外がい壁へきを駆かけのぼって超食漢の死角に入りこみ、そこから跳とんで巨体に躍おどりかかるような真ま似ねは、ピンパーネル以外にできっこない。

超食漢も尋じん常じようではない殺気を察したのか、振ふり向こうとしたが、そのときには遅おそかった。すでにピンパーネルは超食漢の背中にとりついていた。超食漢は尻尾しつぽを振りあげてピンパーネルを打ちすえようとしたものの、あたらなかった。一・八メーテル近くあるピンパーネルだが、ときに鼠ねずみみたいにすばしっこい。まあ、超食漢と比ひ較かくすれば、ほとんど小動物みたいなものではあるのだが──小動物？

ピンパーネルって、そんなに小さい？　小さくなった？　いや、そんなはずがない。逆だ。大きい。大きすぎるのだ、超食漢が。ただ、今はそれどころではなかった。ピンパーネルだ。ピンパーネルは神速で超食漢の背中から肩かたへ、そこを足場にして頭頂部へと移動し、雌し雄ゆう一いつ対ついの短たん剣けんをひらめかせた。

斬きった、というより、ねじこんで、かきまわして、破は壊かいした。

そこならば、いくらやつがでかくても大きさはたかが知れているし、鱗うろこがぶあつくて硬かたくてもまったく関係ない。

右目だ。

ピンパーネルは超食漢の瞼まぶたを斬り開けて、眼球をさんざんに斬り刻み、ボロクソのメチャクチャにした。

「すげッ……」

いつものことだが、たしかに飛燕フエイヤンの言うとおり、すごい。あの元アッサシンに、この世界はどう見えているのだろう。きっと、ユリカとはまるで違ちがう世界に生きているのに違いない。速度も、高さも、広さも、何もかもが違うはずだ。ユリカにとってはとてつもなく難しいことが、ピンパーネルにはすごく簡単だったりするはずだ。

　だが、そんなピンパーネルにとっても、超食漢はたやすい相手ではないようだった。

　右目だけでなく、左目をも潰してしまおうとしていたピンパーネルが、断念して超食漢から飛び離れた。それもやむをえなかった。「ＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＧＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＨ……！」超食漢がとんでもない大声で吼ほえながら、両手で頭を抱かかえて暴れはじめたからだ。

「ピンパーネル……！」「ミスター・ピンパァァーッ！」超食漢が飛んだり跳はねたり近くの高層寺院に体当たりして破壊活動に精を出すものだから、周辺一帯に土つち煙けむりがもうもうと上がって、一いつ瞬しゅん、ピンパーネルの姿を見失った。まさか、ピンパーネルにかぎって大丈夫だとは思うが、あの大暴れに巻きこまれたりしてはいないだろうか。気がかりだった。杞き憂ゆうだった。ピンパーネルは土煙のなかから飛びだしてきて振り返り、超食漢を見上げたが、さすがの彼もいったん距きょ離りをとることにしたようだ。ピンパーネルはざっと周囲に視線をめぐらせてユリカと飛燕フエイヤンを見つけると、こっちに駆けてくる。まあ、それはそうだろう。見境なくドドドンズドンバタンズガンやっている今の超食漢に立ち向かうのは、いくらなんでも無茶というものだ。

　それにしても。

「──また……一回り大きくなったような気がしゅるんだけど！」

「オ？」

　飛燕フエイヤンは一度ユリカを見て、それから再び超食漢に目をやり、パチパチまばたきをした。

「ウオッ！　そーィえばたしかに超デケェーッ！　キャハハハ！　でっけーぞマジでアレ笑えねェーくらいでかすぎッ！　ありえねー！　キャハハハハハハハハ！」

「喜んでる場合じゃないでしょう！」

「ウヒャヒャヒャ！　だ、だってよォ……で、でっけェー！　で、でかすぎだろアレ……！」

「もう！」と、怒おこっている自分が、いったいどこにいるか、どんな状じよう況きようか。ユリカは唐とう突とつに思い出した。一

気に顔全体が熱くなって胸が苦しくなった。「……あの、い、いいかげん下ろしてもらえない？」

「レ？　なんで？」

「お、重いでしょう！　いちゅまでも抱えてたら……」

「ぜーッんぜん。さーっぱり重くねーけど。つーかオレってばパワフリャーだしィ。ユリィ、テメーは軽すぎ」

「ユ・リ・カ！　いいから下ろして！」

「ンだよォ。わーったよォ。ほらよ」

　ユリカは飛燕フエイヤンの腕うでから解放されて、ようやく自分の足で地面に立った。なんだか、すごくほっとした。ほっとしてなんかいられないとわかっていても、実際、胸が軽くなって、顔の熱も引いた。たぶん、飛燕フエイヤンとくっついていたとき、暑かったせいだ。真冬に着るようなコートを身につけているのに、飛燕フエイヤンに抱だかれていると、火みたいに熱いその体温を感じた。伝わってきて、ユリカをあぶった。今は、そのぬくもりから離はなれた。きっと、そのせいだろう。

「お、ミスター・ピンパー」

　ぼうっとしていたつもりはなかったのだが、飛燕フエイヤンの声でピンパーネルの合流に気づいた。

　ユリカは慌あわてててピンパーネルの全身を見まわして、たいした負傷はなさそうだと見てとり、何か声をかけようとして何を言っていいのかわからなくなり──頭のなかで順番がごっちゃになっているうちに、ピンパーネルに先を越こされた。

「ユリカ。ダイジョブ・ですカ」

「……あ、あなたこしょ」

「ワタシ・平気でス」

「しょう。しょれならいいけど……」

　いや、それはもう自分の目で確かく認にんしてわかっている。ど

うも調子が狂くるい気味のようだ。ユリカは目を覚ますためにぶんぶん首を振ってから、依い然ぜんとして絶賛大暴れ中の超食漢に視線を向けた。飛燕フエイヤンがピンパーネルに「なァ、やっぱすげェーなァミスター・ピンパー！　鬼おにだろ鬼。どーなってンだよテメーの体。キレキレすぎじゃね？　もォゼッテー超ヤヴァスギだってマジでー」とかなんとか言って、少しだけ迷めい惑わくそうな顔をされたりしているが、無視だ、無視。

　だいたい、そんなことにはかまっていられない。

　不意に、超食漢が動きを止めた。

　空を見上げる。

　それから、西の方角へ首をめぐらせて左目を細め、喉のどの奥で「Ｏｏｏｏｏｏｏｗ……」と低く唸うなった。

　何かを呼んでいるような。あるいは、呼びかけにこたえているかのような。

　超食漢はのっそのっそと歩きだした。

　まずは南へ。

　すぐ先の十字路を西へ。

　マキシマムＡＭドラゴン・ストリートの方向へ。

「──追いかけないと！」

　ユリカが駆かけだすと、ピンパーネルが無言で先行した。「ア、おいィ！　待てってユリィ、ミスター・ピンパー！　オレもオレも……！」飛燕フエイヤンもすぐに追いすがってきたが、一いつ顧こだにしなかった。ユリカはひどく焦あせっていた。胸むな騒さわぎがしてしょうがない。正直、頭のなかがきっちり整理されているわけでもなかった。まだ少し混乱している。ルイ・カタルシスが白い液体をまきちらしながら呆あつ気けなく死んで。人がたくさん死んで。そもそもの原因は異界生物フリークスが地上に出てきたことで。ピンパーネルでさえも、超食漢を止めることはできなくて──そう、超食漢だ。あの化物はいったいなんのために、どこへ行こうとしているのだろう。それよりも、カタリ、マリア。二人はどこにいるのだろう。大だい丈じよう夫ぶだろうか。怪け我がをしていない

だろうか。どうすれば二人に会うことができるだろう。

　わからない。さっぱりわからない。こういうとき、わたしは無能だ。

　でも、それ以外に思いつく方法はないから、とにかく走る。超食漢を追う。

　西へ。西へ。マキシマムＡＭドラゴン・ストリートへ。

　そこで、何かが、超食漢を呼んでいる。

４

　──こんな状況のまっただなかで。

　僕は、何をしているんだろう。

　猫ねこのジュジを抱きしめて、高層寺院の外階段を降りている。

　どこかへ行こうとして、どこに行ったらいいのか、わからないでいる。

　だから、とりあえず降りている。

　見失っている。

　何を……？

　自分の立ち位置を。

　そこが僕の居場所だと思った。

　そこにいたい、と思った。

　でも、何もしないで、ただ黙だまってそこにいることなんてできない。望まれもしないで、膝ひざを抱かかえてひたすらそこで息をしているだけの日々はごめんだ。

そこにいてもいいんだ、と思えること。

いて欲しい、と思ってもらうこと。

必要とされること。

役に立つこと。

それを証明したい。でないと、安心できない。こんなに居い心ごこ地ちがいいのに──いや、だからこそ余計に、怯おびえていないといけない。気分はまるで椅い子す取りゲームだ。今は座っていられる椅子があるからいい。けれども、なくなったら？　数が足りなくなったら？　誰だれがのけ者になるかといえば、それは僕だ。僕以外にいない。誰よりも僕自身がそれを望むだろう。

役立たずだからだ。

所しよ詮せん、できそこないだから。

そんなことは最初からわかっていた。自分は、下の下だ。それは、下を見ればきりがないけれど、上を見るともう果てしない。たまに、何もない荒こう野やにひとりぼっちで立ちつくしているような気分になるのだ。吹ふき抜ぬける埃ほこりまじりの風が嘲あざ笑わらう。太陽に嘲さげすまれている。雲が哀あわれんで涙なみだ雨あめを降らせる。マリアローズはびしょぬれになる。ぬれそぼった体が重くて、うまく動いてくれなくて、寒くて、しゃがみこんで、そのままかたまって、誰にも顧かえりみられることのない石像と化して、いつか朽くち果てる。そんな夢を何度か見た。目覚めてすぐ、否定した。

──違ちがう……！

たしかに、今はまだちっぽけで、みんなに必要とされるほど役には立たないかもしれない。だけれど、ずっとそうとはかぎらない。そう信じたい。信じて、がんばって、何かなしとげても、それは結局、まぐれにすぎないかもしれなくて、かえってプレッシャーになって。

あれだけのことができたんだから、次はもっと。

もっと、さらにいいところを見せないと。

　できるんだって、見せないと。

　証明しないと。

　僕は進歩しているんだって、前よりも戦えるんだって、これからもっとやれるようになるんだって、見せないと。

　見てもらいたい。

　そして、認めてもらいたい。

　言って欲しい。

　ここにいてもいいんだよ、って。

　ここにいてくれないか、って。

　いつの間にか、マリアローズの胸の奥には棘とげのある花が咲さいていた。それは焦しよう燥そうという名の花だった。ふとしたときに、その花の棘がちくちく刺さすのだ。急せきたてられるように、バーニング・バラッドの『剣けんの技法』をひもといて、剣聖直系正統派剣けん闘とう術の型を練習した。「水平三五線」から「輪形」につなげて「飛び揉もみ切きり」でしめる。どれもそれほど簡単な型じゃない。流れるように連続させようとすれば、なお難しい。うまくできなかった。次の日もできなかった。その次の日もやっぱりできなかった。いつになったらできるようになる？　五日後？　十日後？　一巡じゆん月げつ後？　半年後？　一年後？　十年後？　それとも、一生無理？　才能がないから？　向いてないから？

　そうかもしれない。だとしたら、仕方がない。誰にだって得手不得手がある。それなら、僕にできることをすればいい。

　だけど、何ができる？

　みんなとアンダーグラウンドへ。僕が統とう率そつする。指揮をとる。指示を出す。僕は他ほかのメンツと比べれば、少しだけ周りが見える。冷静に判断できる。場合によっては思いきった策に打って出ることもできる。本当に？

　わからない。

たまたま泉里決戦ではうまくいったから、そうじゃないかって、思って。

—ああ。

でも、現実は無残なものだった。むしろ滑こつ稽けいだった。ぜんぶ勘かん違ちがいだった。

ちょっとした判断にも迷って、ほとんど何も決められないまま、状じよう況きように押しきられるだけで、さっぱりうまくゆかない。何もできやしない。

それどころか、あらためて致ち命めい的てきな欠けつ陥かんが浮うき彫ぼりになった。

弱い。みんなと対等の立場に立つには、僕は弱すぎる。戦えなさすぎる。みんな、僕とはレベルが違いすぎる。足手まといになる。

それでも、みんなお人ひと好よしだから、べつに文句は言わないかもしれない。内心ではみそっかすだと思っていたとしても、僕一人くらい、支えてくれるかもしれない。彼らにとっては、それくらいなんでもないことなのかもしれない。

そう。

彼らにとっては。

でも、僕にとっては、なんでもなくない。

僕は証明書が欲しい。そこにいるための、証明書が。

お情けとかじゃなくて、なりゆきでもなくて、偶ぐう然ぜんの重なりあいの結果でもなくて、運命ではなくて、ちゃんとした何かが欲しい。

トマトクン。ユリカ。サフィニア。ピンパーネル。カタリ。トワニング。

彼らの仲間として、恥はずかしくないような自分になりたい。一刻も早く、なりたい。安心したい。せっかく見つけたんだ。ずっとここにいたいんだ。絶対になくしたくないんだ。失うのが怖こわいんだ。だから、一巡月後じゃいやなんだ。十日後でもいやだ。明日

でも遅おそい。今日がいい。できれば、今すぐがいい。少なくとも、いつか必ず立派な自分になれるっていう、その保証が欲しい。

「……高望み、だったのかな……」

　マリアローズはそっと笑ってみた。

　にゃー。

　腕うでのなかでジュジが鳴いた。

「あはは……もしかして、慰なぐさめてくれてるの？」

　にゃー。

　ジュジの澄すみきった青い瞳ひとみの、黒い瞳どう孔こうの部分にマリアローズの顔が映っている。

　見たくない。

　マリアローズはジュジの頭を強めに撫なでた。それがジュジの目を閉じさせるためにやったことだとしたら、今以上に自分が嫌きらいになりそうだ。そして、そのとおり、ますます嫌いになったが、誰だれが何を好きだろうと嫌いだろうと、階段はもうすぐ終わる。地上だ。高層寺院と高層寺院の間の狭せまい路地に降り立ったマリアローズは、かがむこともせず、少し乱暴に、ジュジを地面に下ろした。

「どっか行っちゃえ」

　ここまで抱だいてきて、ぬくもりをわけてもらっていたジュジに、引きつった笑え顔がおでそんな言葉を投げつけるのが、今の自分にはお似合いのような気がした。

　自分勝手で、見苦しくて、何もできない。

　猫に八つ当たりするくらいしか、できることがない。

「──そういうわけだから、さ。きみ、ホントにどっか行ったほうがいいよ。ね？」

　だが、ジュジはその場所から動こうとしない。何かを期待するみ

たいに、じっとマリアローズを見上げている。そんな目で見られたって、何もできやしないのに。

いらいらする。

マリアローズはわざと大きく舌打ちをして、ジュジに背中を向けた。路地から出るというより、ジュジから逃にげるように歩きだして、足を速めた。ジュジはきっとついてくるだろう。なぜだかそう思ったが、気にしないことにした。

だって、知ったことじゃない。僕の猫じゃないし。ジュジはルイ・カタルシスの飼い猫で、そのルイ・カタルシスはただの金のなる木だし。関係ない。どうでもいい。もう、何もかもどうでもいい。でも、だとしたら、僕はいったい何をすれば……？

わからないまま路地を抜ぬけた先は、今、外階段を使って降りてきたばかりの高層寺院と、アジアンに連れられて逃げこんだ無人の高層建築とに挟はさまれている道だった。

マリアローズはなにげなく、ぼんやりと西のほうを見た。

それから東に目を転じたとき、何も驚おどろくようなことではないのに、そこにいることを予期していてもおかしくないのに、釘くぎでも打ちこまれたかのように胸が痛んだ。

マリアローズがいる地点から、三十メーテルくらい離はなれているだろうか。

アジアンがいた。

戦っている。

当然、相手は鋏使いだ。

見たかぎりでは、アジアンは暗器を駆く使ししつつ、ピンパーネルにまさるとも劣おとらない非人間的な敏びん捷しようさで鋏使いを翻ほん弄ろうしている。ただ、泣き叫ぶスクリーミング短剣・ダガーはそれほど大量の血を吸ってはいないようだし、棘闇ソーンダークの黒衣にも何箇か所しよか瑕きずがついていた。なかなかアジアンをつかまえることができないでいる鋏使いも、一方的にやられているわけではないということだ。

何しろ、鋏使いとアジアンとでは、大人とこどもくらいの体格差がある。そのぶんリーチが違ちがう。なおかつ鋏使いも、とろくさいわけでは決してない。体力的な面でいっても、アジアンも息を乱してはいないようだが、鋏使いだって疲つかれている様子はない。色とりどりの革帯はかなり切れ切れになって、出血も見られるものの、さしたる負傷ではないのだろう。

それに、あの鋏は凶きよう悪あくだ。

人体をやすやすと切断してしまう恐おそろしいまでの切れ味を、マリアローズも自分の目ではっきり見た。

まだ深手を負わされていないアジアンも、何かの拍ひよう子しで一撃食くらえば、どうなるかわからない。わからないというより、そうとうやばいだろう。

だが、アジアンはまったく鋏使いを恐れていないようだ。退ひかない。表情を変えることもない。泉里でトマトクンと一いつ騎き討うちに及およんだ際には、途と中ちゆうから戦せん闘とうを心底愉たのしんでいるかのような言動が目立ったが、今のアジアンは違う。虐殺人形カーネイジ・ドール。その異名にふさわしく、アジアンは冷めた心で沈ちん着ちやく冷静に少しずつ鋏使いを追いつめつつあるように見える。

自信があるのだ。

それが過信にならない実力も持ちあわせている。

正直、うらやましい。僕も、ああいうふうになりたい。いや、なりたくたって、もとが違う。今さら無理だ。無理だとわかっていても、もっと違うふうに生まれたかった、と思う。僕にも、トマトクンみたいに大きな体があれば。ピンパーネルのように速ければ。サフィニアほどの魔ま術じゆつの才能があれば。カタリみたいにいつも前を向いて笑っていられる強さがあれば。ユリカのように、へこたれず、めげずに、けなげにがんばることができれば。髭ひげみたいに、筋肉がすごくて頭もよければ。

僕は、違ったはずだ。

こんな卑ひ屈くつで、弱っちい、ひねくれた人間にはなっていなかったはずだ。

誰かをねたんだりしなくてすんだはずだ。

こうして自己嫌けん悪おに陥おちいって、吐はき気を催もよおしたりもしなかったはずだ。

──逃げだしたい。

こんな自分は、もういやだ。自分で自分を抱かかえているだけで不快すぎる。誰にも見せたくない。こんなに汚きたならしい心を、そのせいでゆがんだ表情を、見られたくない。一人になりたい。一人でいい。ひとりぼっちでいい。

ああ。

それなのに、僕はアジアンに近づいてゆく。逆方向へ走るべきだと思っていても、体が拒きょ否ひする。体だけじゃない。記き憶おくが訴うつたえる。

一人きりで、眠ねむれない夜が、いくつもあった。

寂さびしくて。寂しくて！　叫びたくて！　暴れたくて……！

しがみついた毛布に顔を押しつけて、それだけでは足りずに、噛かんだ。必死に念じた。

今日、寝ねられなくても、明日は寝られる。疲れ果てれば、黙だまっていてもいつか眠りに落ちる。大だい丈じよう夫ぶだ。きっと耐たえられる。我が慢まんしていれば、寂しくなくなる。

たしかに、そうだった。でも、寂しくてたまらない夜が、また必ずくる。何度も自問した。これから何度こういう夜をすごさないといけないんだろう？　そのたびにこうして我慢しないといけないのかな？　いつまで？──死ぬまで？

泉里決戦が終わって意識をとりもどしたあと、トマトクンの家で、みんなでご飯を食べて、馬ば鹿か騒さわぎした。

そのうちカタリとユリカ、サフィニアが居間で寝てしまって、トマトクン、ピンパーネルとマリアローズが、髭のよくわからない蘊うん蓄ちくをえんえん聞かされる羽目になった。かなわない、とばかりに、途中でトマトクンとピンパーネルが寝たふりをしはじめた。マリアローズもそれにならい、髭の話が終わるのを待った。い

つしか本当に眠気が襲おそってきて、マリアローズは居間のソファで眠った。

　みんなに囲まれて。

　あたたかくて。

　心ここ地ちよかった。

　一人じゃなかった。

　あの眠れない夜は、もうこないかもしれないと思った。

　二度とこないで欲しいと願った。

　ひとりぼっちは、もういやだ。

　──アジアンが四メーテルほどの距きょ離りから鋭するどく左手を振ふって暗器を投げるなり、鋏使いに急接近する。暗器は針型の投とう擲てき武器だ。立てつづけに三本、鋏使いの膝ひざから下を狙ねらって放たれた。鋏使いは飛び下がって、これをよけた。当然、腰こしがひけている。そこにアジアンが押しよせて、泣き叫ぶスクリーミング短剣・ダガーを唸うならせた。だが、鋏使いも予想していたのだろう。強く地面を蹴けって、ものすごい脚きゃく力りょくでさらに後退して泣き叫ぶスクリーミング短剣・ダガーから逃のがれ、逆に反はん撃げきに転じた。鋏だ。二本の鋏が両側からアジアンを猛もう襲しゅうする。ジャキジャキン。鳥とり肌はだの立つ音だったが、それだけだった。あたらなかった。かすりもしなかった。

　アジアンは真上に跳とんでいた。

　いや。

　違う。

　たしかにそう見えたのに、一いつ瞬しゅん後には鋏使いの後ろに回りこんでいた。

　鋏使いもすぐに振り返ったが、すでにアジアンはまた暗器を投じながら突つっこもうとしていた。決定的だ。マリアローズの目にはそう映った。しかし、それでもアジアンは単純な突とつ撃げきをし

かけたりはしなかった。本当に短い距離のなかで、速度を多段的に変えてみせたのだ。速く。遅おそく。そして、速く。鋏使いはそれにまんまと惑まどわされた。暗器を二本の鋏で斬きり払はらったあと、アジアンを迎むかえ撃うとうとしたときにはもう、互たがいの距離はゼロ以下になっていた。

　鋏使いの脇わきを駆かけ抜ぬけたアジアンは、泣き叫ぶスクリーミング短剣・ダガーを悠ゆう然ぜんと血ち振ぶるいして、黒くろ髪かみをかきあげた。

「フッ」

「□□Ｇｕｕａｈｈ……」

　呻うめき声とともに、何かがドサガシャンと地面に落ちた。

　鋏使いの左ひだり腕うでだった。

　すれ違ちがいざまに、アジアンが泣き叫ぶスクリーミング短剣・ダガーで斬り落としたのだ。

　今度こそ本当に決定的だ。ほぼ無傷のアジアンに対して、鋏使いは片腕を失った。これでアジアンの優位は動かないだろう。ほとんど呼吸をすることも忘れて一連の攻こう防ぼうを見守っていたマリアローズが、ほっと息をついたのと同時くらいだった。信じられない光景を目にした。

　鋏使いが自分の左手を拾って、切断面同士を無理やりくっつけようとしたのだ。

　もちろん、それだけならべつに驚おどろいたりしない。少なくとも、一いつ般ぱん的な人間の感覚からすると奇き行こうのたぐいだが、離はなれてしまったものをもとに戻もどそうとする心理は理解できないこともないし、錯さく乱らんしかけた者なら、似たようなことをするかもしれない。だが、似たようなことをしたとしても、鋏使いの場合と同じ結果がえられるとは思わないほうがいいだろう。普ふ通つう、そんなことはありえない。

　噴ふきだすようにおびただしく出血している切断面から、血の色をした肉の芽みたいなものがたくさんちゅるちゅる出てきて、それらが絡からみつきあって、一体化して━真新しくおぞましい傷きず痕あとを残しただけで、本当にくっついてしまうなんて。

　しかも、あっという間に。

　鋏使いは両の鋏をシャキンシャキンやってみせたから、くっついただけではなく、機能もとりあえず回復したということか。まあ、左手の動きは多少ぎこちなかったが。

　これにはアジアンも、さすがに開いた口がふさがらないといったかんじだった。それはそうだろう。蜥蜴とかげは尻尾しつぽを切っても生えてくる、という話は聞いたことがあるけれども、切れた腕を自力で接着してしまえるとは知らなかった。蜥蜴人は皆みなそうなのか？　いや、そんなことはないはずだ。マリアローズも何度か下等蜥蜴人や蜥蜴人を相手にしたことがあるものの、そういう非常識なやつには一度も出くわしたことがない。鋏使いが特別なのだ。やはり、危険な敵だ。怖こわい、敵だ。殺さないと、たいへんなことになる、敵だ。

　その恐おそろしい敵がアジアンに襲いかかるところを、僕は黙って見ている。

　これでいいのか？　本当に、いいんだろうか？

　──よくは、ない。

　決して、いいとは思わない。思えない。

　マリアローズは右手を持ちあげて鋏使いに向けた。左手の人さし指と親指を右籠こ手ての脇についているスイッチにふれさせて、狙いを定めようとした。お笑いぐさだった。まだ十五メーテル以上離れている。あたるはずがない。仮に命中したところで、あの鱗うろこを突き破れるものか。この籠手に据すえつけられている矢の発射装置は、もともと護身用か暗殺用の代しろ物ものだ。小型のわりには威い力りよくがあるとはいえ、あくまでそのわりには、という程度でしかない。げんに、いつだったか、実戦で使っていると製作者の〝ショコラット〟に話したら、びっくりしながら呆あきれていた。「へえ。そんなモノまで使わにゃーならんなんて、よっぽど苦労してるンすねーこのウンコたれ小こ悪あく魔まめが」そう言われたときは頭にきてきっちり報復しておいたが、まさしくそのとおりだ。所しよ詮せん、苦肉の策だ。いろいろ工く夫ふうしないと、メリクルさえ満足に狩かることができない。それが僕だ。わかっている。それが事実なんだから、しょうがない。受けいれるしかない。

　だから、受けいれたうえで、マリアローズはベルトのホルダーに手をのばした。

　ハーレム・ゴードン入りの小こ瓶びん。爆ばく弾だん。

　──イシュタル・アガメムノ・ゴードン子し爵しやく。

　あの外げ道どうの錬れん金きん士しが生成したセーラム・ゴードンは、爆薬として利用できる潜せん在ざい的な可能性が最初からあった。というより、実験の初期段階においては、今のハーレム・ゴードンと似たような生成物で、徐じよ々じよに服薬後一定時間を経てから爆発するように調整されていったのだ。

　その過程をつぶさに見ていたマリアローズは、侵入者クラツカー稼か業ぎようを始めてから、ふと、あれは何かに使えるんじゃないかと思いついた。そして、コツコツためた金をはたいて中古の錬金術キットを闇やみ市いちで購こう入にゅうし、少しずつ材料を買い集めて、何度かの失敗のあと、とうとう生成に成功した。クソ忌いまわしい子爵の名からとって、ハーレム・ゴードンなんて命名したのは──どうしてだろう。はっきりとは覚えていないが、たぶん、皮肉のつもりだったのだと思う。あんな鬼き畜ちく変態でも、僕の役に立つこともあったんだって。

　実際、ハーレム・ゴードンのおかげで何度も命拾いをした。

　救われた。

　でも、考えてみれば、いやな話だ。

　死体を確かく認にんしたわけではないが、きっともう死んでいるに違いない子爵と、僕はまだ縁えんを切ることができないでいる。いまだに一人ではちゃんと戦えない僕をなんとか生かしているのが、結局、子爵の館やかたですごしたろくでもない数年間だなんて。

　それに、爆弾なんか投げて、どうする？　なんになる？　鋏使いに運よく直ちよく撃げきさせられればいいが、下手をしたらアジアンも巻きこんでしまう。ダメだ。爆弾は使えない。

　つまり、何もできない。

　悔くやしくもなんともない。

どうしようもない、としか言えない。

それが現実だ。

──参っちゃったな。

マリアローズは顔を上げた。しばらくの間、うつむいてぐだぐだ考えていたらしい。こんなときに、本当に愚おろかだ。僕みたいなバカで屑くずで愚ぐ図ずの愚か者は死んだほうがいい。いや、どうやらその前に殺されそうだった。「──って……へ？」

鋏使いがこっちへ向かってきている。

もうすぐそこにいる。

なんで？

「マリア……！」

アジアンのせっぱつまった声が鼓こ膜まくを叩たたいた。

だが、アジアンの姿は見えない。鋏使いしか見えない。でかい。二メーテル三十か四十サンチはある。そいつが、目の前に迫せまっているのだ。すごい迫はく力りよくだった。声も出ない。マリアローズはあとずさろうとしたが、背中とか腰こしとか足にうまく力が入らなかった。入らないどころか、抜ぬけた。転ぶ。転んでしまう。「Ｓｙｙｙｙｙｙ Ｓｈ……！」鋏使いが、くる。やつの、傷痕だらけで青に近い緑色の鱗が、ぬらぬら赤黒い液体でぬれている。二本の鋏が鈍にぶく光っている。なまぐさい風が頰ほおをなぶる。このままだと間ま違ちがいなくこいつに殺されてしまう。でも、どうして？　僕が役立たずだから？　弱いから？　わからなかったが、いきなり鋏使いが跳ちよう躍やくして一回転してマリアローズを飛び越こえたとき、なんとなく察した。

鋏使いは、今、マリアローズの後ろにいる。

マリアローズの前にいるのは、鋏使いを追ってきたアジアンだ。

ようするに、この瞬しゆん間かん、マリアローズを挟はさんで鋏使いとアジアンが対たい峙じしていることになる。

たぶん、鋏使いは、アジアンが一度マリアローズと一いつ緒しよ

に逃にげだしたことを覚えているはずだ。もしかしたら、アジアンがマリアローズを守ろうとしていたことも、ちゃんと理解しているかもしれない。それで、のこのこ姿を現したマリアローズを見つけた鋏使いが、この間ま抜ぬけを利用してやろうと考えた。きっと、マリアローズはアジアンにとっての弱点になりうる。鋏使いはそう判断したのではないか。

　そして、残念ながら、鋏使いの読みは正しかったようだ。

　アジアンはひどい顔をしていた。

　歯を食いしばって、両目をいっぱいに見開いて、怒おこっているような、あるいは今にも泣きだしそうな表情で、マリアローズを凝ぎよう視ししていた。

　──お願いだから。

　頼たのむから。

　そんな顔、しないで欲しい。

　僕のために。

　僕なんかのために。

　そんな価値はないのに。

　それに、どうせもう間に合わない。アジアンとマリアローズの距きよ離りはだいたい四メーテルくらいだ。鋏使いはすぐ後ろにいる。マリアローズの命は鋏使いにすっかり握にぎられている。いくらアジアンでも、無理だ。あきらめるしかない。終わりだ。

　でも、こうなるのが当然のような気もする。

　これまでだって、ほんの少し運が悪かったら。アジアンに救われなかったら。仲間たちに助けてもらわなかったら。

　本当は、もっと早く終わっていた。

　できそこないが、今までこうして生きてこられたのが、いっそ不思議なくらいだ。

　慰なぐさめもある。

　この期ごに及およんで、一つだけ選べそうなことだ。

　僕は最期に、何を、この目に焼きつけよう？

　泣き叫さけぶ寸前みたいな、アジアンの顔……？

「見るな……！」

「──え？」

　アジアンがマリアローズの心のなかを見み透すかしてそう言ったとは思えない。だから、そのまま受けとるべきだろう。「見るな」それは、今、見ているものを見るな、ということ？　今、僕が見ているのは？

　アジアンだ。アジアンを、見るな？

　だが、遅おそかった。

　マリアローズは見てしまった。

　アジアンの右手が、内側から爆ぜて、泣き叫ぶスクリーミング短剣・ダガーが地面に落ちた。

　破は裂れつした右手からは、しかし、赤い血も、脂し肪ぼうらしきものも、筋きん繊せん維いのようなものも現れなかった。

　それは、ただ黒かった。

　黒い、うねうねした、管のような、生き物のような、こんな生き物はいないだろうが、とにかく生きているかのように動く、十本か十五本か二十本か、それくらいの何かだった。地中砦とりでアヴァシーで助けてもらったときに、また、さっき高層建築から飛び降りたときに目もく撃げきしたものと同じだった。ただ、あのときよりやたらと多いし、太いし、マリアローズがなんとなく漠ばく然ぜんと想像していたものとはかけ離はなれていた。マリアローズは、ぼんやりとアジアンがそれを飼っているのだと解かい釈しゃくしていたが、まるでそれはアジアンの右手そのものであるかのようだった。実際、アジアンの右手の内側から、それは出てきたのだ。

　そして、ほとばしった。

　一いっ斉せいに伸のびた。

　一瞬だった。

　マリアローズの頭上を、顔や肩かたのすぐそばを、二十本程度の黒い何かが通りすぎていった。

　後ろで突つき刺ささり貫つらぬいて引き破る音がした。

　背中に大量の液体がピシャピシャかかった。

　マリアローズは振ふり返らなかった。

　右手を何か異形のものへと変じさせ、下を向いて、荒あらい息をして、決してこちらと目をあわせようとしないアジアンだけを、まばたきもせずに見つめていた。

　やがて、黒い何かの群れが、ずるずる音を立てて、戻っていった。

　それらは、あっという間にアジアンの右手におさまり——だが、真っ黒い臓物とでも形容するしかない不気味な形状となって、どくんどくんと脈打ち、ぴくぴく蠢うごめいている。

　アジアンは左ひだり腕うでで抱かかえこむようにしてそれを隠かくした。

　背後で、何かが動く気配がした。

どこか対岸の火事を見るような気分で振り向くと、頭部から胸から腹から手足から全身穴だらけで、血をダラダラ流して、さすがにそうとうこたえている様子の鋏使いが、おぼつかない足どりで逃にげてゆこうとしていた。

マリアローズは通りすがりの背中を眺ながめるように、鋏使いの後ろ姿を見送った。

鋏使いは東へ向かう。

あのまま行けば、マキシマムＡＭドラゴン・ストリートに出るだろう。

途と中ちゆうで立ち止まり、天を仰あおいだ鋏使いは、なんだか悲しげにさえ聞こえる声で吼ほえた。

「Ｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈ……！」

長く尾おを引く、誰だれかを呼んでいるかのようなその鳴き声に、胸を突かれたわけではないと思うけれど。

何かがこみあげてきた。目の裏側や鼻の奥が熱くなって、肩から首、背中に痺しびれるような感覚が走った。横おう隔かく膜まくが痙けい攣れんを起こした。しゃっくりみたいだ。いや、そうじゃない。出てきそうだ。我が慢まんした。必死でこらえた。何か違ちがうと思った。違うはずだ。泣いたってしょうがない。意味がない。だいたい、なんで泣く？　僕が泣く場面か？　ここで泣いたって、何も解決しない。泣かなくたって、何一つ解決しないだろうけれど、泣くのはまずい。一人じゃないし。すぐそばにアジアンがいるし。

マリアローズはアジアンに向きなおった。

アジアンはまだ自分の右手を抱えてうずくまっていた。

その肩が、背中が、頭が小刻みに震ふるえている。なんだかひどく苦しそうだ。その姿を見ていると、実際にはもらしていない呻うめき声が聞こえてくるかのようだった。

マリアローズは迷った。

　僕は、どうすればいいんだろう。

　何度も何か言いかけて、そのたびに思いとどまったあげく、またしゃっくりが出そうになったので、両手で目の周りをごしごしこすった。これ以上、黙だまっていたら、こらえられなくなりそうだった。何か言わないと、ダメだ。ただでさえダメなのに、もっとダメになってしまう。

「──大だい丈じよう夫ぶ……？」

「ああ」

　アジアンは、顔こそ上げなかったが、即そく答とうした。声こわ音ねも普ふ段だんどおりだった。普段どおりすぎて、かえっておかしいくらいだった。

「もう、だいぶおさまったヨ」

「そう」

「キミは？」

「僕？」

　大丈夫、と答えようとした。

　ちゃんとした言葉にならなかった。

　だ　い　じょ

　かろうじてそこまでしか言えなかった。一秒で視界がめちゃくちゃになった。たぶん、顔じゅうからいろいろな液体が一斉にあふれだしたんじゃないかと思う。ずっとそれを瀬せ戸と際ぎわでせきとめていた何かが、いきなりとっぱらわれてしまったかのようだった。外がい套とうの裾すそをひっつかんで顔をぬぐったが、まったく追っつかない。頭の芯しんが焼けた。焼き切れた。そうして噴ふきだしたのは、涙なみだだけじゃなかった。「も、もお……ダメだ……僕……だって、こんな……」

「マリア……？」

　不可能だ。

もう抑おさえきれない。

限界だ。

「だ、め、でしょ、だって、さ、役に立たないし、何もできないし、弱いし、なんで……僕だけ、こんなふうなの？　僕が悪いわけ？　何が、悪い、の、かな？　だ……って、ずっと、こんな……僕だって、がんばって、やって、きたの……に……でも、僕の、せいかな？　自分のせいだよ、ね……僕が、決めたんだし、ね……やめればよかった。やめとけばよかった。入らなきゃよかった。ＺＯＯに入らなかったら、こんなこと考えなくてよかったのに。一人でいればよかった。一人のほうが楽だよ。苦しいよ。寂さびしいより、つらいよ。みんなにどう思われてるのか、怖こわい。評価してもらえないんじゃないかって。認めてもらえないんじゃないかって。僕は、何もできないから、無能だから、役立たずだから、みそっかすだから、できそこないだから──背だって低いし、非力だし、魔ま力りよくもないし、剣けんとか、上手に使えないし、ひねくれてるし、やさしくないし、口先ばっかりだし……それなのに、一回だけうまくいったからって、調子に乗って！　有頂天でさ！　図ずうﾉ々ずうしい！　ただのまぐれなのに！　こんな僕なんて……いないほうがいい。いる価値がない。いてもしょうがないよ。そうとしか思えないよ。結局、何やっても、ダメだし。うまくいかないし。僕がいなくたって、みんな平気でしょ？　今日、僕がいなくなっても、誰も困らないでしょ？　でも、他ほかの誰かがいなくなったら？　トマトクンは園長マスターだし、ピンパーネルは強いし、サフィニアはすごいし、ユリカは医術士だし、髭ひげはお坊ぼうさんだし、カタリだってムードメーカーだし──で、僕は？　僕は、何？　僕の役目は……？　僕は何をすればいいの？　役に立たない僕がいてどうするわけ？　僕がいなくたって何も変わらない！　なんの問題もないじゃないか！　明日はちゃんとやってくるじゃないか……！」

大声を出して、ぜんぶ吐はきだして、すっきりした部分がないとはいわない。

ただ、すっきりしたぶん、余計にはっきりした。

ダメだ。完全に終わった。もうＺＯＯではやってゆけない。こんなことを、相手がＺＯＯではない、アジアンだとはいえ、他人の前でわめきちらしておいて、平然と「また一からがんばろう」なんて思えない。

正直、今すぐここから立ち去りたい。

恥はずかしい。

恥ずかしすぎて、頭をかち割って死んでしまいたい。アジアンと顔をあわせたくない。

アジアンに。

──アジアンなんかに、聞かれてしまった。

きたない、みにくい、よわい自分をさらけだしてしまった。

でも、逃にげだす力もない。

マリアローズは地面に座って両足をがっちり抱かかえこみ、膝ひざに額を押しつけている。

このまま、小さくなってしまえればいいのに。小さくなって、どんどん小さくなって、豆まめ粒つぶくらいになって、誰だれかに踏ふまれて死んでしまいたい。

アジアンが近づいてきて、向かいあう位置に腰こしを下ろしたことは知っていた。

足に猫ねこがじゃれついていることもわかっていた。

どっか行ってよ。

そう思う。

行ってくれるまで、僕はここでこうしているから。

いつまでも、いつまでも、こうしているつもりだから、早くあきらめて、どこかへ行ってくれないかな。

「──昔々あるところに、一人の男がいたんだ」

静かな声で、昔話なんて喋しやべっていないで。

どうせ、聞いてやしないんだから。

「男には仲間がいてネ……何人も、何十人も。男はリーダー的存在

だったんだ。最初はほんの数人だったけど、何しろ、それでも変なヤツばかりだったから、誰かがまとめないとどうにもならなくてネ。多数決をとったら、男以外は皆みな、男を指名したんだ。男は引き受けざるをえなかった。そんな柄がらでもないのに、仕方なくというかんじでサ」

　こつ、こつ、と、硬かたい物同士がぶつかる小さな音がした。

　アジアンが何かで地面を叩たたいてでもいるのだろう。

「男は、男なりに精せいーいつ杯ぱいやったんだヨ。でも、そういうところを他人に見せるのが嫌きらいな、恰かつ好こつけの男でネ。表面上はなんてことないという顔で、内心ではいつも自問自答していた。これで正しいのか？　このやり方でいいんだろうか？　少しずつ増えていく仲間の一人一人を、ちゃんと把は握あくしきれているんだろうか？　このままでいいのか？　確信なんてなかった。だけど、確信があるふりをしていないと、皆が不安がる。バラバラになる。だから、男は何があっても平然としていようと決めていた。なんとかなっていた。ちょっとした──ある出来事がきっかけで、仲間たちが動どう揺ようしはじめるまではネ」

　そのある出来事とやらが、本当は「ちょっとした」ではすまないことだったと、アジアンの口調が物語っていた。

　でも、それがどうしたっていうんだ。

「男はしくじったんだ。自分の口から言いづらいことを、昔から知っている、心やすい仲間にだけ話した。そして、本来なら仲間全員、一人一人の顔を見て決めたほうがいいことを、独断で勝手に決めた。それはまずいと知っていた。知っていながら、そうした。正直、男は疲つかれていたんだ。ずっと一人で、誰かを信用することもできずにやってきて、ようやく仲間ができた。それだけで上等すぎるくらいだったのに、リーダーなんてサ。ホント、柄じゃなかったんだヨ。そんな器うつわじゃない。そのことを男自身はよく知っていたのに、周りは違ちがった。お前しかいない、お前にしかできない、お前がいるから、と口々に言った。最初はたった六人だヨ？　六分の一で決まったんだ。そのころはまだよかった。我が慢まんできた。でも、ネ──」

　アジアンは「フフッ」と低く笑った。

「いつの間にか、四十八人。それが、一人いなくなって、一人抜ぬけ、また一人去って……男はヤケクソ気味に思ったものサ。最後にはどこまで減るだろう？　六人？　いや、あのときの六人のうち、二人、もう欠けた。じゃあ四人？　それどころか、残るのは自分一人だけかもしれない。そう思っていた。それでもいいってネ。ところが、連中ときたら、救いがたい馬ば鹿かばかりで」

　三十八人。

　三十八人だヨ、と、アジアンは繰くりかえした。三十八人も残った、と。

「──男は、驚おどろいて、呆あきれかえった。よくもこれだけ物好きの阿あ呆ほうがあつまったものだ。でも、男も同類だった。ホントは、ほっとしていたんだ。同時に、不安だった。だって、何度も言うようだけど、男はその器じゃない。そんな資質はないんだ。一度、ぜんぶ放ほうりだそうとしたことが、何よりもそのことを証明していた。男はついうっかり、仲間の前でぽつりとそのことをもらしたんだ。ボクは、みんなが思っているような男じゃない、ってネ。そうしたら、こんなことを言われた」

　そのとき、マリアローズは何か考えがあってそうしたわけではない。

　ただ自然と上半身が起きあがった。

　アジアンは片かた膝ひざを立てて地面に座っていた。

　凍こおりついた空の色をした瞳ひとみがマリアローズを見つめている。

　でも、決して冷たい目じゃない。

　あたたかい。

「『お前は勘かん違ちがいしてる。誰もお前をすごいやつだとか、偉えらい男だとか、そんなふうには思ってない。みんながお前のそばにいるのは、お前が好きだからだ』」

　アジアンは一つ息をついて、視線を斜ななめ下に泳がせて、拗すねるように、端たん整せいな顔を少しだけゆがめた。

「……まあ、ボクが言うようなコトじゃないけどネ。たぶん、サ──キミの仲間だって同じなんじゃないかな？　役に立つとか、立たないとか、それがどうでもいいことだとは言わないけど、少なくとも、それだけじゃないと思うヨ」

「そう……なのかな」

「もし、そんなことで、マリア、キミを邪じや険けんにするようなヤツらなら、ボクが承知しない。皆殺しにしてあげるヨ」

「──邪険に、なんて……」

　されていない。

　そんなことは一度たりともない。

　ＺＯＯに加盟して以来、油断していて怒おこられたり、いろいろ叱しかられて励はげまされたりしたことはあっても、責められたことはない。

　自分だ。自分一人で、勝手に舞まいあがったり、増長したりして、失敗して、落ちこんでいただけだ。バカみたいだ。

　でも、みんながあまりにもやさしいから。

　せっかく、やっとできた仲間だから。

「されてないよ……ぜんぜん、されてない。そんなこと、なくて……」

　だから、みんなの役に立てるようになりたい。みんなが僕を助けてくれたように、僕もみんなを助けてあげたい。力になりたい。本当の意味で対等になりたい。できるだけ早く、そうなりたい。

　なんだか、また泣いてしまいそうだったが、どうにかこらえた。

　アジアンがそっと笑った。

「だったら、キミはＺＯＯにいるべきだ。キミだって彼らのことが

好きなんだろう？」

　うん。

　と、強くうなずいてみせられるほど、素す直なおにはなれなかった。マリアローズは顎あごを引くように、かすかに首を縦に振ふった。それが限界だった。でも、おそらくそれで十分だったのだろう。

「大だい丈じよう夫ぶだヨ」

　アジアンはゆっくりと立ちあがり、一つ伸のびをしてから、マリアローズを見て悪戯いたずらっぽい表情を浮うかべた。

「キミはキミ自身が思っているより、はるかに成長しているしネ。ずっとキミをウォッチしつづけてるボクが言うんだから、間違いないサ」

「……変態つきまストーとい男カー」

「愛ゆえ、だヨ。マイ・スウィーテスト」

「それ」

　自分がどうしてそんなことを言おうとしたのか、よくわからなかった。

　どういう表情をすればいいのか。

　マリアローズは顔をうつむけて起きあがった。

「──なんか、久しぶりに聞いたような気がする」

「そうかい？」

「金輪際、聞きたくないけどね」

「フフッ」

　アジアンはパサリと前まえ髪がみをかきあげて、鋏使いが歩き去っていったほうへ向きなおった。その先はマキシマムＡＭドラゴン・ストリートだ。たぶん、気のせいではないだろう。遠くが何やら騒さわがしい。ジュジがマリアローズの足にまとわりついて、

にゃーと鳴いた。何か伝えようとしているのだろうか。猫ねこの気持ちを推おしはかる技能などマリアローズにはないが、もしかしたらルイ・カタルシスに会いたいのかもしれない。おかしな男だが、ジュジにとっては飼い主だ。マリアローズがジュジを抱だきあげると、それを横目で見たアジアンが走りだそうとして、足を止めて、振り返った。

　見つめあう。

　数秒。

　アジアンは何か訊ききたそうな、言いたそうな顔で、だが、ためらっているようだった。

　すぐにぴんときた。あのことだ。



　でも、アジアンはあのとき「見るな」と叫さけんだ。見られたくなかったのだ。だったら、マリアローズは見なかったことにする。見なかったのだから、当然、そのことを口にもしない。誰だれにだって、知られたくないこと、自分の胸の奥底に沈しずめておきたいことはある。マリアローズはきょとんとした表情を作って首を傾かしげてみせた。「どうしたの？　行こ」

　アジアンは安あん堵どとも落らく胆たんともつかない、短いため息をついてから、うなずいた。

「うん」

　これでよかったのか、それとも間ま違ちがいだったのか、マリアローズには判断できない。それでも、そのときは正しいと思ったから、後こう悔かいは絶対にしない、なんてことも言えない。悔くいることもあるだろう。かき消したい過去だってたくさんある。だけれど、戻もどることは決してできない。それだけはたしかだ。だから、迷っても、苦しんでも、悩なやんでも、もしそれがあやまちでも、今はとにかく進むしかない。走るしかない。

　マリアローズとアジアンは、鋏使いの惨さん禍かと群衆の混乱によるなまなましい傷きず痕あとがそこかしこに残る道を、東へ、東へと直進した。マキシマムＡＭドラゴン・ストリートに出るまで、そう時間はかからなかった。道みち幅はば約五十メーテル、その中央に竜の背骨ドラゴン・スパインと呼ばれる分ぶん離り帯たい構造物がある、首都エルデンでもっとも無む駄だに太い幹線道路だ。

　アスファルト合成骨材コンクリートの地面には、鋏使いのものとおぼしき血の跡あとがずっとつづいている。

　南、か。

「──あそこ！」

　マリアローズが叫ぶより早く、アジアンは駆かけだしていた。目測で三十メーテルくらい先だろうか。竜の背骨ドラゴン・スパインに背をあずけて、地面に腰こしを下ろしているかなり大おお柄がらな蜥蜴とかげ人がいた。どれくらい異常な回復力を持ちあわせているのか知らないが、頭や腹部、内臓などにそうとうな深手を負っていたので、最初は力つきて死んでいるのかとも思った。だが、違うようだ。左ひだり腕うでをくっつけてしまったその回復力を発揮するために、休んででもいたのか。鋏使いは身じろぎした。こっちを見て、起きあがり、逃にげだした。竜の背骨ドラゴン・スパインに沿って、南へ。鮮せん血けつを撒まき散らしながら、南へ。若じゃっ干かん足を引きずるような走り方で、南へ。

　しかし、遅おそいわけではない。先行したアジアンとの間かん隔かくはだんだん縮まってゆくが、全力疾しっ走そうしているマリア

ローズとの距きよ離りはあまり変わらない。やっぱり、猫を抱いたままだと腕も振れないし、ダメだ。思うように速度が出ない。ジュジを下ろそうかとも考えたが、すぐにそんなことはどうでもよくなった。「……は？」啞あ然ぜんとして足が止まった。「──な……」アジアンも同じだった。それもやむをえないと思う。

　だって、近づいてくる。南から。こっちへ。北へ。何か、こう、すごく巨きよ大だいな物体が。生き物が。高い部分は三メーテル、低い部分でも一メーテルはある、ギザギザの背びれみたいな形をした竜の背骨ドラゴン・スパインをドガンズガン破は壊かいしながら。その破は片へんを飛散させ、自重で道路の舗ほ装そうをへこまして、ぶっ壊こわしながら。土つち埃ぼこりというか、瓦が礫れきの嵐あらしというか、そうしたものを巻きあげながら。ものすごい足音を轟とどろかせて、やつは、まっすぐ突とつ進しんしてくる。ぐんぐん近づいてくる。

　それは、黄色っぽい鱗うろこを持つ肥満した蜥蜴人を、遠近感が完全に狂くるうくらい大きくしたような生き物だった。

　でも、もうあそこまでいってしまったら、蜥蜴人とはいえないんじゃ？

　大型の異界生物フリークスといえば、まず思い浮うかぶのは竜りゅうとその眷けん属ぞくだが、あれはそっちに近い気がする。

　いや。いや。違う。そういう問題じゃない。

〝超食漢スーパーイーター〟。

　たしかに、蜥蜴人離ばなれしすぎた巨体を誇ほこってはいたが、あんなにでかかったっけ？

　あそこまで、でかくはなかった──と、思う。マリアローズの記き憶おくが間違っていなければ。

「……とりあえず、どう見ても、僕よりあいつのほうがずっと成長しまくってるよね……しかも、すっごい速さで」

「さすがにアレを止めるとなると、いくらボクでもちょっと骨だヨ」

「てゆうか、正直、無理だと思うんだけど」

アジアンはそれには答えずに、腰の鞘さやから泣き叫ぶスクリーミング短剣・ダガーを抜ぬいて、左手で持った。やるつもりなんだ、あれを。泉里でアジアンとトマトクンがタイマン勝負を演じたときに、一度、その場面を目もく撃げきしているマリアローズは、とっさに目をそらした。短たん剣けんが掌てのひらを貫つらぬくところなんて、あまり見たいとは思わない。だいたい、泣き叫ぶスクリーミング短剣・ダガーの柄つかに浮きでているいくつもの顔らしきものは、もとからけっこう気色が悪いのだ。それで、再び超食漢のほうへと視線を移したマリアローズは、さらにいっそう呆あつ気けにとられた。

そうきたか。

そうくるとは思わなかった。

マリアローズの前方およそ四十メーテルの位置で、超食漢の超攻撃的アグレッシヴな前進が止まった。

べつに誰かが、あるいは何かが、力ずくで止めたのではない。

超食漢が自らの意思で立ち止まったのだ。

マリアローズは、そのときになってようやく、超食漢を追いかけている人間の一団がいることを知った。何しろ、それまでは超食漢が大小さまざまな物体をあたりにばらまきながら爆ばく走そうしていたため、彼らの姿が目に入らなかったのだ。土つち煙けむりやら何やらで、まだはっきりとは見えないが、ユリカやピンパーネル、カタリもあのなかに混じっているかもしれない。きっと、いるだろう。いるに違ちがいない。だが、それはそれとして。

それよりも、鋏使いだった。

鋏使いは、マリアローズとアジアンが超食漢ショックで足を止めてしまったあとも、着々と歩を進めていた。

そして、今、やつは超食漢のすぐそばにいる。目の前だ。果たして、この再会は偶ぐう然ぜんだろうか。そうとは思えない。もちろん、真相はやつらに訊きいてみないとわからないが、鋏使いと超食漢の双そう方ほうが、初めからこの出会いを意図していたのではないか。鋏使いの、あの鳴き声。あれで超食漢を呼んだのではないか。なんのために？

超食漢が鋏使いを見下ろしている。

鋏使いは超食漢を見上げている。

両者の間に、なんらかの意思の疎そ通つうがあったのか、どうか。

鋏使いが、今日だけでも数えきれない命を奪うばった二本の鋏を捨てて、両手を広げた。

迎むかえ入れるように。

それはおぞましい行こう為いではあったが、なぜだかどこか厳げん粛しゆくな儀ぎ式しきめいていた。少なくとも、その瞬しゆん間かん、鋏使いは威い風ふう堂どう々どうとしていた。そう、瞬間だった。またたく間に終わった。

超食漢が前まえ屈かがみになって鋏使いを両手でつかみ、大きく開けた口に放ほうりこんだ。

口を閉じた。

咀そ嚼しやくした。

一回。

二回。

のみこんだ。

今、気づいたのだが、やつの右目は瞼まぶたや眼球までひどく傷ついていて、無傷の左目だけが満足そうに細められた。それから、もう一度、口を開けた。ゲー、というより、ゴォォォッ。どうやら、巨大なげっぷのようだった。

超食漢は鋏使いを食べてしまった。

「……まあ、共食いしてたし……不思議じゃない、のかもしれないけど……」

「違うヨ、マリア！　あれは共食いなんかじゃない！」

いきなりアジアンが叫さけぶものだから、思わず見てしまった。

　泣き叫ぶスクリーミング短剣・ダガーがアジアンの右掌に突つき刺さった。

　貫かん通つうして、柄つかのところまで突き入れられた。

「──ああして……相手を自分のなかに取りこんでいるんだ！　早く始末しないと、手に負えなくなる……！」

　アジアンは多少顔をしかめているが、その程度ですんでいるのがおかしい。血が出ているのだ。見ているほうまで痛いくらいだ。むろん、泣き叫ぶスクリーミング短剣・ダガーも痛がっている。むろん？　いや、それも変な話だが、実際、泣き叫ぶスクリーミング短剣・ダガーは苦く悶もんしている。ＧＹＯＯＯＯＯＯＯＯＯＨＹＵＵＵＵＵＵＵＵＨ。声。声だ。怨えん嗟さの声。苦痛の声。泣き叫ぶスクリーミング短剣・ダガーの柄に浮きあがっている顔たちが、哭ないている。哭き叫んでいる。アジアンの血を啜すすっている。泣き叫ぶスクリーミング短剣・ダガーは、その血と引き換かえに、形を変えて、力を発現させる。〝死霊女王スペクトラクイーン〟レディ・麟リン霊レイが、彼女の最高傑けつ作さくとの呼び声も高いこの秘宝にこめた、真の力を。

　もはや泣き叫ぶスクリーミング短剣・ダガーは原形をとどめていない。アジアンの右手とほとんど一体化し、剣身はゆうに二メーテル以上ある。毒々しい深紅色クリムゾンの刃やいばは何節にもわかれて、節ごとで自在に折れ曲がり、見た目は短剣どころか、剣でさえない。

　断末魔デスクライの剣・ソード。

　アジアンは喪そう神しん街オレストロの最深部で眠ねむる夢追い女王の恐おそるべき遺産で地面を叩たたくと、マリアローズに片目をつぶってみせた。

「作さく為い的か、偶発的か──どっちにしても、キング・グッダーの尻しりぬぐいをしてやる義理はないが、あんなヤツがのさばっていたら、キミも安心して眠れないだろうからネ。見ていてくれ、マリア！　あの化物を華か麗れいに葬ほうむり去るボクの勇姿を……！」「や、華麗とかそんなのどうでもいいから！　前、前、前！　前見ろってば、バカ！」「フム？」

　アジアンが正面に向きなおるより早く、マリアローズはジュジを

抱だいたまま踵きびすを返して走りだしていた。ドシンドシンドシン。しばし食事の余よ韻いんにひたっていた超食漢が動きだしたのだ。身の丈たけ八メーテルか九メーテル、ひょっとしたら十メーテル。足音は地じ響ひびき同然で、まるで世界全体が迫せまってくるかのようだった。というか、また大きくなった？　この短い間に？　冗じよう談だんみたいな話だが、テトルアープでやつを目もく撃げきしてからだって、そんなに長い時間が経過したわけじゃない。冗談が冗談にならない、本当に冗談みたいな怪かい物ぶつなのだ、やつは。

　当然、もしアジアン曰いわく「キミはキミ自身が思っているより、はるかに成長している」のが事実だとしても、マリアローズには打つ手がない。逃にげるしかない。ただ、逃げるといっても、歩ほ幅はばがぜんぜん違う。超食漢は不細工なくらいの肥満体なので、巨きよ体たいをゆっさゆっさ左右に揺ゆらしながらポンポン弾はずむような、個性的で不ぶ恰かつ好こうな走法を採用している。だから、体の動かし方の効率では圧あつ倒とう的に勝利できるのだが、単位時間あたりの前進距きよ離りでは悲しいかな敗北必至だ。やばい。かなり本気でまずいかも。火事場の馬ば鹿か力というやつか、ありえないくらいの速度が出ているような気はするのだけれど、逃げきれるとはさっぱり思えない。ぜんぶの内臓がきゅっと縮まっているかのようだ。びっくりするくらい視野が狭きよう窄さくしている。ジュジを抱いているというより、ジュジにしがみついている。「ＧＹＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＷ……！」咆ほう吼こうが、近い。大きい。鼓こ膜まくが破れる。近すぎる。あわわわわわ。ダメ？　もしかして、もうダメ？　怖こわいもの見たさなんて、そんな余よ裕ゆうはなかった。むしろ、どのくらいダメなのか、見て、目で確かめないと、かえって不安で不安でたまらなかった。マリアローズは振ふり向いてしまった。足が、止まった。

　実際、華麗だった。

　ちょうど、向かってくる超食漢に、アジアンが正面から突っこんでゆくところだった。

　アジアンのとったコースは、あくまでまっすぐだった。ぶれなかった。まったく頭を上下動させないで、超低空を飛ぶがごとく駆かけるアジアンは、紅くれないの尾おを引く漆しつ黒こくの矢のようだった。速かった。なおかつ、力強かった。迷いは微み塵じんもないようだった。

アジアンは、超食漢が地面に右足をつけた、その瞬間に駆け抜ぬけた。

超食漢の股の間を、一直線に。

もちろん、ただ駆け抜けただけではない。断末魔デスクライの剣・ソードを一いつ閃せんさせた。断末魔デスクライの剣・ソードは絡からみつくように超食漢の右足を襲おそった。だが、巻きついたりはしなかった。きれいなものだった。ひょっとして、超食漢の右足って、トーフ製だったりして？　そんなことを考えてしまうくらい、なんの抵てい抗こうもなく、鮮あざやかに、スパッといった。やつの膝ひざ周りがどれくらいか知らないが、幅はさすがに二メーテルもないだろう。だいたいその三分の二ほどだと思う。斬きれた。その右足に全体重をかけたばかりだった超食漢はたまらない。崩れた、という表現がぴったりだった。超食漢の体が右側に傾かしいで、右膝の斬り残し三分の一もグジャグジャ音を立てて、血、肉、骨、その他もろもろの体内構成物をまきちらしながら──なんというか、ほとんど崩ほう壊かいした。超食漢は完全に倒たおれてしまう前に、右手を地面について体を支えたが、足が一本使いものにならなくなったのだ。「ＧＵＭＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＮＮＮＮ……！」そりゃあ、悲鳴の一つもあげたくなるだろう。

もっとも、超食漢は「やられた！　ギャー！　痛い！」で思考＋行動停止に陥おちいるほどヤワではなかった。やつはすぐさま左手で右足をしっかり確保するなり、転がった。マリアローズから見て、左の方向へ。東へ。なるほど。歩けそうもないのなら、転がればいい。しかも、おあつらえむきに、やつは肥えている。丸っこい体つきだ。よく転がる。おかげで、すごい勢いだった。転がるなんてなまやさしいものじゃない。回転。超回転だ。「──チィッ……！」アジアンも追つい撃げきしようと断末魔デスクライの剣・ソードを振るって、あたりはしたようだが、何せ超食漢は回転していたものだから、どこにあたったのかわからない。

あっという間だった。

超食漢は超高速でゴロンゴロン回って、マキシマムＡＭドラゴン・ストリートに面した高層寺院に激げき突とつして、破は壊かいして、止まった。

それから、自らぶっ壊こわした高層寺院を支えにして体を起こした超食漢は、大事に握にぎりしめていた右足の膝から下を、膝から

上に無理やり押っつけた。どうも、控ひかえめにいっても、あまり器用ではないらしい。かなり乱暴なやり方だったが、まあ、もともとそういう次元の話ではない。普ふ通つう、医術式の助けを借りなければ、くっつけようとしてもくっつくものではないのだ。

　もちろん、超食漢は普通じゃなかった。

　見た目からしてそうだし、なぜそんなことが──斬られるわ、引きちぎれるわ、潰つぶれるわでめちゃくちゃになった部分から、血色の肉の芽みたいなものがむにょむにょ出てきて、それらが絡みつきあって合体し、まがりなりにも右足がつながってしまうなんてことが、どうして起こるのか。仕組みとか仕し掛かけとか種とか秘密は不明だが、手がかりがまったくないわけではなかった。

　マリアローズは、鋏使いが似たようなことをする場面を見た。

　そして、超食漢はその鋏使いを食べてしまった。

　アジアンが言った。あれは共食いなんかじゃない。ああして、相手を自分のなかに取りこんでいるんだ、と。

　つまり、超食漢は、ただ食べて食べて、そのぶんが身になって巨きよ大だい化してゆくだけではない。

　食べることによって、変化、あるいは進化しているのだ。

　といっても、あっさり「ははあ、なるほどそーゆーことね」と納なつ得とくしてしまえるような話ではないが、否定したって、他ほかの仮定をどこからか引っぱりだしてこられるわけじゃない。どうせ、人間の常識なんてたいして役には立たないのだ。だって、やつらはこの世界とは別の法則で動いている異界の住人、異界生物フリークスなのだから。

　まあ、マリアローズの経験上、超食漢はそのなかでもけっこうぶっとんだ部類に入ると思う。が、だからこそ余計に、固定観念にとらわれていてはいけないだろう。頭を柔じゆう軟なんにするべきだ。目で見たものがぜんぶ真実だとはかぎらないけれど、疑っている間に行動が遅おくれるのは愚ぐの骨こつ頂ちようだ。そう思い、身軽になるため、とりあえずジュジを下ろした。「離はなれてて！　──って、言ったってわかんないか……」うん、わからない、と返事をするように、地面に降りたジュジは小首を傾げてマリアローズを

見上げている。しかし、一連の轟ごう音おんやら振しん動どうやら、猫ねこなら驚おどろいて暴れるか、すっかり怯おびえて身をすくませてしまいそうなものだ。それなのに、ジュジはやけに落ちつきはらっている。変わった猫だ。とはいえ、自分の身に危険が迫せまったらさすがに逃にげるだろう。そう信じることにした。

　だいたい、ジュジには悪いけれど、もう猫を抱だいていられる状じよう況きようじゃない。

　マリアローズはボコボコになった道路を走った。超食漢は半分倒とう壊かいしそうになっている建物から離れることがまだできていない。移動しようとしたのだが、バランスを崩しかけたのだ。くっついた右足のあんばいが、どうもよくないらしい。箇か所しよが膝の関節部分だけに、一応くっついただけで、機能はもとどおりになっていないのか。そういえば鋏使いも、腕うでは簡単につないでみせたものの、身体からだ中にあけられた穴はあまり治っていなかった。部位など、いろいろな条件によって、治りやすさの度合いが違ちがうのかもしれない。げんに、超食漢の傷ついた右目、というより右の眼がん窩かからは、血色の触しよく手しゆが飛びだして、のたうっていて──そうとう気持ち悪いのだが、あれはどう考えても、目ではないだろう。どうやら、なんでもかんでも復元できるわけじゃなさそうだ。

　ということは、あんな化物でも、致ち命めい的てきな打撃を与あたえつづければ、倒せる。

　皆みながそう確信して勢いづいたのかどうか、それはわからない。

　ただ、明らかに流れはこちら側に傾かたむきつつあった。その流れを引きよせたのはアジアンだ。誰だれよりも早く超食漢を追いかけていって、一撃、二撃と断末魔デスクライの剣・ソードを浴びせたのも、アジアンだった。

　だが、超食漢も無む抵てい抗こう主義の信しん奉ぽう者じゃない。しかも、図ずう体たいがでかいだけに、やつの場合、日常のなにげない仕草でも殺人技わざになる。アジアンに対する反撃も、両手を振ふりあげて、振り下ろしただけだった。「ＧＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＨＨＨＨ……！」やつの両の掌てのひらが地面を叩たたいた。「わっ」その瞬しゆん間かん、マリアローズの体が、浮ういた。すごい衝しよう撃げき！　アジアンは？──大だい丈

じよう夫ぶか。間かん一いつ髪ぱつ、飛び下がって、ぺしゃんこになる運命から逃のがれたようだ。しかし、超食漢はこれで危機を脱だつしたなんて思わないほうがいい。アジアンにつづく者たちが、超食漢に襲おそいかかろうとしていたからだ。

　いや、もう襲いかかっている。

　一人は、超食漢の左ひだり腕うでの上を駆かけのぼってゆく。砂色の衣ころもを身にまとって、雌し雄ゆう一いつ対ついの短たん剣けんを手にした彼とほぼ同時に、もう一人、かなり小こ柄がらな男が超食漢の右腕に飛び乗った。ピンパーネルと飛燕フエイヤンだ。マリアローズは十名ばかりの鉄のアイアン心臓ハーツ協会ソサエテイの一団を突つっ切って、赤いライン入りの白い女性用ナース・医術士服ユニを着た小さな後ろ姿を見つけた。「ユリカ……！」ユリカが振り返った。「──マリア！　よかった、無事だったのね！」ピンパーネルはほとんど一瞬で超食漢の左ひだり肩かたまで到とう達たつして、飛燕フエイヤンは右上じよう腕わんのあたりにいる。雄おすのグレアデと雌めすのリレッザが暴れ狂くるいはじめ、アジアンは再び距きよ離りをつめて断末魔デスクライの剣・ソードを超食漢の右手首に叩きこんでぶった斬ぎり、飛燕フエイヤンも右肩から跳とびあがって超食漢の側頭部に飛び蹴げりを食くらわせた。だが、ここでも超食漢は巨きよ体たいの利点をいかした。

「□□ＧＵＡＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＨ……！」

　でんぐり返しだ。ピンパーネルと飛燕フエイヤンが振り落とされる。アジアンも右方向に逃げた。というか、くる？　こっちに向かってくる？　あれが？　身の丈たけ十メーテル体重不明とにかく非常に重そうな超食漢が、転がってきちゃう？　なんだか今日はこんなことばっかりでいやになってしまうが、だからといって人生あきらめるわけにはゆかない。間に合うとはちょっと思えないけれど、やってみなくちゃわからないではないか。マリアローズは駆けだそうとした。いや。ダメだ。「……ちょっ──ユリカ……！」どうして？　なんで、ユリカは超食漢を待ち受けるような体勢でいるのか。足を前後に広げて、重心をぐっと低くして、極限クライマックス九手棍ナインポールを前に突きだすように構えて──いったい、ユリカは何をするつもりなのか？

「……崇すう宇う宇う宇う宇う宇う宇う宇う宇う宇うぅぅぅ……」

　ユリカは唇くちびるをすぼめて、ものすごい勢いで息を吸っていた。なんだ、あの呼吸法。明らかに、普通の呼吸じゃない。だが、そんなことはどうでもいい。「ユリカ！　逃げないと──」それなのに、マリアローズはユリカを強ごう引いんに引っぱって逃げることはしなかった。できなかった。ユリカの全身から放散されている闘気が、何かこう、ぼうっとした光として見えたように思った。それは錯さつ覚かくに違ちがいないが、今のユリカを邪じや魔ましちゃいけない。そのことだけは、頭ではなく体が理解していた。そして、マリアローズは一人で逃げることもしなかった。覚かく悟ごは一瞬で決まった。一いち蓮れん托たく生しようだ。ユリカを置いていったりするもんか。ユリカは何かやろうとしている。ユリカは無む謀ぼうな賭かけに出るような人じゃない。僕はユリカを信じる。仲間なんだから！

「疾しつっ……！」

　ユリカが走りだす。

　マリアローズは両のまなこを見開いて、しっかり見ている。何があってもいいように、いつでも動きだせるようにして、ユリカを見ている。

　ユリカは速度を上げる。

　超食漢が転がってくる。

　耳を塞ふさいでいるかのように、音は聞こえない。

　見ている。

　その瞬間を。

　超食漢がユリカと接せつ触しよくする寸前──

「覇はぁぁっ……！」

　ユリカが極限クライマツクス九手棍ナインポールを突きだした。

　右にひねって、ねじりこむように、やや下向きに。

　マリアローズの体が自然と左のほうへ動いた。目は離はなさなかった。極限クライマツクス九手棍ナインポールの上に、超食漢が

のったように見えた。ユリカが加えた力とその角度と超食漢の回転、速度、重量がそれ以外にないあるタイミングでかちあったのだ。

　跳はねあげられた。

　超食漢が。

　あの巨体が。

　同時に、女性用ナース・医術士帽キヤツプが宙に舞まった。ユリカも極限クライマツクス九手棍ナインポールごとはね飛ばされた。こっちにきた！　やっぱり！　絶対、受けとめる。僕がユリカを受けとめてみせる！　そう思って両手を広げたときにはもう、ガン、ときた。グボギッと折れる音がした。瞬間、目の前が真っ暗になってすぐ戻もどった。飛ばされた。いろんなところがザザザザこすれた。主に顔面がぼーっとする。感覚がない。息苦しい。呼吸がうまくできない。とくに鼻が。でも、ユリカは腕うでのなかにいる。がっちりと抱だきしめている。マリアローズは、ようやく自分がユリカを後ろから抱く恰かつ好こうで地面に転がっていることを知った。それから、感じた。何かとてつもなく大きい物体が、それほど遠くない場所にドシイイイィィンと落下した衝撃だった。

「……つっ……」ユリカが後頭部を押さえながら、こちらを見た。ばっと身を起こして、マリアローズを組み敷しくような体勢になった。「──マ、マリア！」「ふぇ？」ユリカはやたらめったら驚おどろいている様子だ。どうしたんだろう。なんで声がちゃんと出ないのか。でも、それどころじゃない。マリアローズは精せい一いつ杯ぱい素す早ばやく立ちあがって超食漢を捜さがした。いた。すぐそばだ。十メーテルと離れていない。やつは仰あお向むきでひっくり返っている。ユリカがやったのだ。すごい。偉えらい。だけど──なんか変だ。マリアローズは口の周りをさわってみた。

　どろり、とぬれた。

　血。血だ。すごい量だ。慌あわてて外がい套とうの裾すそでぬぐったら、痛い。めちゃくちゃ痛い。鼻だ。うあ。もしかして、鼻の骨が折れてる？　すかさずユリカが背せ伸のびして、マリアローズの顔に手をのばそうとしたが、首を振ふった。「──らいひょぶ。あとれれいい」「でも」「まら終わってらいから。動うもけるし」「……わかったわ。無理はダメよ！」マリアローズはユリカにうな

ずいてみせて、もう一度、外套で鼻と口のあたりをふいた。血は止まらない。あとからあとから流れだす。正直、痛いし、気になるが、そんなことは言っていられない。

超食漢がごろんと横転してうつぶせになり、手首から先がない右手とまだ無傷な左手を支えに、のっそりと体を起こした。

態勢を立てなおしたアジアンたちが、そこに飛びかかってゆこうとしている。

しかし、アジアンはともかく、ピンパーネルと飛燕フエイヤンが無事で元気なのはさすがというべきか。衣類は汚よごれ放題で、ところどころ破れたり切れたりしているものの、たいした怪け我がはしてないようだ。ユリカをキャッチしただけで大流血しているマリアローズとは大違いだが、誰だれかと自分を比べたってしょうがない。ＺＯＯに入る前だ。閉へい鎖さ魔宮でトマトクンに言われたじゃないか。「お前が足手まといかどうかは、力の差じゃない。心構えで決まる」と。僕も地力がついてきたんじゃないかとか、少しいい気になっていたせいで、なんだかおかしなへこみ方をしてしまったが、あの言葉を忘れていたわけじゃない。マリアローズは自分なりに心がけてきた。最善をつくす。今、自分ができることを、自分で責任をもって、しっかりやる。同じだ。ずっと同じなんだ。成長しようと、していまいと、強くなろうと、弱いままだろうと、その姿勢は変わらない。変えちゃいけない。変えずに大事にしてゆくべきものもあるということだ。

マリアローズは再度、外套で顔の下半分をぬぐって、痛みをこらえながら、右手でベルトのホルダーをまさぐった。子し爵しやく。あんたのことは大だい嫌きらいだし恨うらんでるし死んでも決して許さないけど、あんたがくれた知識はこれからもたっぷり利用させてもらう。恥はずかしくも悔くやしくもない。これが僕の武器だ。金食い虫なのが玉に瑕きずだけれど、使いどころさえ間違えなければ、剣けんよりずっと役に立つ僕の爪そう牙がだ。

その使いどころがいつ訪おとずれるのか。

見れば、鉄のアイアン心臓ハーツ協会ソサエテイは退ひいたようだ。もう超食漢の近くには、マリアローズとユリカ、それからアジアン、ピンパーネル、飛燕フエイヤンしかいない。で、マリアローズとユリカ以外が超食漢を攻こう撃げきしようとしているのだが、じつのところ、あまりはかばかしくなかった。負傷したり吹ふっ飛

ばされたりでさんざんな目に遭あっている超食漢が、攻せめよりも守り、守りよりも逃にげに入りはじめたからだ。超食漢は、襲おそいくるアジアンたちをろくに迎むかえ撃うちもせず、さっさと回転逃とう走そうコースを選せん択たくした。

「──くっ……！　あの図ずう体たいで本気で逃げられるとネ……！」「キャハハ！　マッハすぎ！　追いつけねー！」「………………！」ピンパーネルだけは無言で追走を開始したが、アジアンと飛燕フエイヤンは少々遅おくれた。マリアローズとユリカはそのあとにつづいた。超食漢の行く手には、またもやマキシマムＡＭドラゴン・ストリートの東側に面した高層寺院がある。さっきぶっ壊こわした高層寺院とは別の、もっと南よりの建物だ。このままだと道沿いの高層寺院に次々と被ひ害がいが及およぶかもしれない。当然、なかにいる坊ぼう主ずどもだって無事ではすまないだろう。というか、もう死傷者が出ているはずだが、とにかくさらなる破は壊かいはすぐにもたらされた。超食漢は回転して、突とつ撃げきして、激げき突とつして、合成骨材コンクリートやら何やらをグワガラガッシャンと飛び散らせた。

　それだけじゃない。

　ビュンビュン飛んでくる。

　大きなかたまりだ。瓦が礫れきだろうか。土つち煙けむりでよく見えないが、超食漢が投げているらしい。よけなきゃ。右に左によけないと、あたったら死んでしまう。いや、すでに死んでる！　飛んでくる物体が！　瓦礫だけじゃなかったのだ。「……にゃっ！」なんと、僧そう侶りよが！　ひしゃげた血まみれの僧侶が飛んでくる！　これは衝しよう撃げき的てきだった。坊さん嫌ぎらいのマリアローズでさえ、いくらなんでも気の毒だと思った。ただ、彼らを哀あわれむ心の余よ裕ゆうは間もなく奪うばわれた。

「──れ、れ、れっかすぎるってば……！」

　四十五度くらいの角度から飛来する、あの特とく殊しゆ鋼材の大きさをどうか見て欲しい。正確にはわからないが、二本の長い縦棒と四、五本の横棒が組みあわされていて、縦棒は十メーテル近くあるのではないか。とにかく、でかい。あの特殊鋼材が投とう擲てきされた直後、高層寺院が一気に半はん壊かいしたくらいでかい。いくらなんでもやりすぎだ。物事には限度というものがあるだろうに。あんなに大きな物体、よけようったってよけられないじゃない

か！

「……超最低ＳＵＣＫ」

　マリアローズは外套で口の周りをぬぐいながら、ちらりと隣となりのユリカを見た。

　ユリカは極限クライマックス九手棍ナインポールの先を空に向けて構えていたが、可か憐れんな顔は青ざめて、下した唇くちびるを嚙かんでいた。

　なんだよ、これ。

　こんなの。

　こんな終わり方。

　冗じよう談だんじゃない。

　やだ。

　絶対、やだ。

　けれども、足が動かない。

　マリアローズはユリカから死の特殊鋼材に視線を戻もどした。

　いや、戻そうとして、やつの背中が目に入った。

　マリアローズたちの三、四メーテル前方だ。

　──いつの間に。

　黒衣の男が半身で立って、右手を高々とかかげていた。

　その先から、深紅色クリムゾンの断末魔デスクライの剣・ソードがまっすぐ垂れさがっている。

　男は右手を振り下ろし、つづけざまに右に跳はねあげ、そこから左へ鋭するどく振った。

　断末魔デスクライの剣・ソードが目にもとまらぬ速さで踊おどり、男は踵きびすを返して駆かけてくる。

　そして、人さらいの風のようにユリカを左ひだり腕うでで、マリアローズを右腕で抱かかえると、速度をゆるめることなく、飛ぶように奔はしった。

　マリアローズは、目と鼻の先で四つに分断された特殊鋼材が地面に落ちるさまを見た。衝撃を感じた。轟ごう音おんも聞いた。直後、視界が一回転した。「──はうっ」「きゃっ！」さして必要とは思えない前方宙返りの着地を成功させたアジアンは「フッ……」と短く笑った。

「決まったネ。憎にくいくらいに」

「……てゆうか」マリアローズはアジアンの右腕から逃のがれて、なんとなく左腕もユリカから引きはがし、外がい套とうの裾すそで鼻と口の周りをふいた。「あれ、斬きる意味がろこにあったんらよ。ろうせ逃げるんらったら、無む駄らひゃないか」

「だって、ああしたほうが恰かつ好こういいじゃない？」

「アホ？」

「だとしたら、キミの魅み力りよくがそうさせ──って、マリア！　おお、マリアマリアマリア、いったいどうしたんだ、血が！　キミの美しい顔が血が血が血が……！」

「あーうっさいよるなさわるならいひょうぶなんらからバイキンうつるから！　しっしっ！」

　マリアローズは外套で顔を隠かくしながら、近づいてこようとするアジアンを追い払はらった。なんとなく、今の顔をこいつにじろじろ見られたくない。恥ずかしい？　よくわからないけれど、なんとなく。アジアンも意外にすぐあきらめてくれた。というより、勝手に怒いかりをあらたにして、使命感と復ふく讐しゆう心に駆られているようだ。アジアンは断末魔デスクライの剣・ソードと化した右手を超食漢にさしむけ、左手にどこからか出現させた真っ赤な薔ば薇らを持って、その花弁に軽く口づけした。

「──マリアが怪け我がをしたのも、マリアが危険な目に遭ったのも、マリアが傷ついたのも、ボクの愛がいまいち報むくわれないのも、何もかも！　すべてあの化物のせいだ！　このうえはボクがマリア、マリア、マリアを守る愛の騎き士しとして、正義の鉄てつ槌

ついを下すしかないネ！　覚かく悟ごするがいい、化物……！」アジアンはちらりとユリカを見た。「──たしか、キミはユリカくんといったかな？　マリアの治ち療りようをお願いするヨ、ちゃんとももとどおりにネ！　さっきのキミの絶技は見事だったが、あとはボクに任せてくれていい！　それから、マリア」

「……なんらよ」

「愛してる」

　アジアンは薔薇を放ほうりながらそう言い残すと、黒色の迅じん雷らいとなって走りだした。

　薔薇の花はきれいに弧こを描えがいて、思わずさしだしてしまったマリアローズの手のなかに落ちたが──てゆうか、なんで僕は受けとっちゃうわけ？

「た、たいへんね……マリアも、いろいろ……」ユリカはしばし呆ぼう然ぜんとしていたが、すぐ我に返った。「あ。治療──」「や」マリアローズは薔薇の処置に困りながらも、判断力は鈍にぶっていなかった。「僕らも行こ！　あいつらけに任せるの、なんかやらし！　ピンパーネルも戦ってるし！」「しょ、しょうね、行きましょう！」

　そうして薔薇を背負い袋ぶくろに挿さし、ユリカと肩かたを並べて、時折、口や鼻をぬぐいながら、走る。

　超食漢は左手で棒状の特殊鋼材をブオンブオン振ふりまわし、手首から先を失った自分の右手を齧かじるというかしゃぶりつつ、崩ほう壊かいさせた高層寺院から離はなれて、南へ移動しようとしている。

　──なんか、さっきよりも大きくなったような。

　気のせい、ではないだろう。実際、超食漢を追いかけているピンパーネルと飛燕フエイヤンが、やたらと小さく見える。彼らが急に小さくなるはずはないので、超食漢が大きくなったとしか考えられない。食えば食うほどでかくなる。ついでに、食ったものの性質までも取りこんでしまう。まったくもって、厄やつ介かいだ。厄介すぎる。アジアンなんかに言われるまでもない。早くなんとかしないと本当にまずい。

とはいえ、ピンパーネルと飛燕フエイヤンは、特殊鋼材の棒を縦じゆう横おう無む尽じんに打ち振るう超食漢に迫せまることが、なかなかできない。よしんば接近できたとしても、素す手での飛燕フエイヤンは論外だし、ピンパーネルだってどれくらいのことができるものか。何しろ、やつの鱗うろこを目め一いつ杯ぱい深く傷つけて貫つらぬいても、雄おすのグレアデと雌めすのリレッザでは、残念ながら長さが足りない。さらに、多少の傷は肉の芽があっという間にふさいでしまい、単なる傷きず痕あとと化してしまう。

飛燕フエイヤンはともかくとして、ピンパーネルがほとんど何もできないなんて。

あの元アッサシンがこれほど相手に脅きよう威いを与あたえられない状じよう況きようは、少なくともマリアローズにとって本当に初めてだった。

なんとかして動きを止められれば、活路を開くことができるかもしれないが。

そんななかで、唯ゆい一いつの可能性は二メーテル超の断末魔デスクライの剣・ソードを持つアジアンだ。

ただ、超食漢もそれはわかっているらしい。

「──愛の名のもとに……！　せいぜい華はなゝばなしく散るがいいヨ、ばけも──ノォッ！」

断末魔デスクライの剣・ソードを振りかざすアジアンの手前で、道路が破は砕さいした。超食漢が投げつけた特殊鋼材が突つき刺さったのだ。アジアンはとっさによけて断末魔デスクライの剣・ソードを繰くりだしたが、もう遅おそかった。まただ。またぞろでんぐり返しだ。一いつ瞬しゆんで距きよ離りをかせがれた。片足の具合がまだよろしくないみたいで、走ったり跳とんだりはできないようだが、転がるのは問題ないらしい。超食漢は一回二回三回四回五回転して起きあがり、手近の高層寺院の外がい壁へきを右みぎ肘ひじでグボオオンと叩たたいて穴をあけ、そのなかに左手を突っこんで何か引っこ抜ぬいた。またもや特殊鋼材の骨組みだった。

超食漢はそれを投げつけてきた。

いろいろな物体を矢や継つぎ早に投げてきた。

やつが蹴け飛とばして破は壊かいした高層寺院の分厚い扉とびらもドーンと飛んできた。

標的は主にアジアンだったが、何せ、数が多いし、モノはでかいしで、周りも鼻歌を歌って余よ裕ゆうをぶっこいてなんかいられない。マリアローズのところにもきた。一メーテル四方くらいの合成骨材コンクリート片へんだった。「ひゃっ」反射的に頭を抱かかえて伏ふせてしまったが、このままじゃやばいと思い、勇気を出して顔を上げた。「汰たっ……！」ちょうどマリアローズの前に出たユリカが、合成骨材コンクリート片を叩き落としたところだった。うっ。相変わらず情けない。が、恥はじている間にも何か飛んできた。バタバタン、ガツガツガッ、ドンガラガッシャン、ボゴーンバラバラバラ。もう嫌いや気けが差してくるほどバラエティーに富んだ物音がする。そのぶんだけ飛んできて、落ちてくる。比ひ較かく的てき大きめの物体はまだよけられるが、小石みたいな物は無理だ。あたる。頭とか肩とか胸とかいろいろな場所にあたる。痛い。いたたっ。痛い──けれど、なんだかその感覚も麻ま痺ひしてくる。だんだん恐きよう怖ふも薄うすれてくる。もしかしたら、こうして一歩一歩死に近づいているのかもしれない。現実感も喪そう失しつ気味だ。なんだか夢のなかにいるような気がしてくる。

ただ、一方で、不思議と妙みように心が落ちついていて、周りがよく見える。

礫つぶての豪ごう雨うのなか、ユリカと互たがいにかばいあいながら──ほとんどマリアローズがかばわれていたのだが、進んで、超食漢に近づいてゆきつつ、ピンパーネルと飛燕フエイヤンがたまらず高層寺院の陰かげに飛びこむ姿を見た。アジアンが飛来するさまざまな物体を断末魔デスクライの剣・ソードで次々とぶった斬ぎってはね返す光景は、ちゃんと見えていた。

でも、これじゃきりがない。

アジアンだって、いつまでああしていられるか。

僕らだって、いつまで無事でいられるか。

──と。

ガツン、ときた。右の目め尻じりの上くらい？　結構大きめの瓦が礫れきだった。これはさすがに痛かった。血も出た。右目に血が

入って、いきなり視界が半分になった。薄れていた恐怖が途と端たんに蘇よみがえった。何が夢のなか、だ。違ちがう。これは現実だ。今まではたまたま小石だけだったから、さして痛くなかっただけだ。あたれば、痛いものは痛い。運が悪ければ──死ぬ。

　体が震ふるえた。膝ひざが笑いだす。腰こしから力が抜ける。何もかもが自分に向かって飛んでくるように見える。目線が落ちる。進めなくなる──ダメだ！　こんなことじゃいけない。ユリカはちゃんと進もうとしている。あのとき、僕は誓ちかったじゃないか。ユリカに怒おこられないように、強くなるって。肉体的には無理かもしれないけど、せめて心だけは、もっと頑がん丈じようにしようって。たしかに、僕は未熟で非力だ。でも、無力じゃない。この体は僕のものだ。僕には動く体がある。僕の足は進むことができる。

　マリアローズは歯を食いしばって前を向いた。

　そして、見た。

　超食漢が再度グゴゴゴロンと後ろにでんぐり返しをした。

　さんざん壊こわした建物をあとにして、またあらたな高層寺院を犠ぎ牲せいにしようとしているのか。

　だが、次の高層寺院は、高層とまではいえない。せいぜい十五、六メーテルだ。超食漢よりちょっと高いくらいか。あの大きさだと、寺院としては使われていないかもしれない。その屋上だった。

「……え」

　なんであんなところに？

　魚が？

　いや、半魚人が？

　──カタリが……？

　カタリは両手にいつもの斧おのではなく、拾い物だろう長ちよう剣けんを一本ずつ持って、屋上のへりに立っている。飛び降りようとしているのか。けれども、なかなか決心がつかないで、ためらっているみたいだ。ぐずぐずしている。このヘタレ──って、飛び降りて、いったいどうするつもりなわけ？

　そんな疑問が頭をよぎっている間に、カタリの後ろに誰だれかが進みでてきた。カタリは一人ではなかったのだ。そいつは背が高くて、ひょろ長い印象で、黒い皮革製のジャケットとパンツを身につけていて、黒くろ髪かみを逆立ててセットしていた。色眼鏡サングラスはかけていなかった。

　王龍の変態野や郎ろうだ。

刑ジン王ワンは、もたもたしているカタリの背中を容よう赦しやなく蹴け飛とばした。

　ようするに、蹴落とした。

「のわっ！　ほげえぇぇぇぇ――――――――――――――――っ……！」

　絶ぜつ叫きよう。

　落下。

　といっても、落ちた距離自体はたいしたことがない。

　ちょうどすぐ下に超食漢がいたからだ。

　カタリは超食漢の頭の上に落ちて、ツルッと滑すべって、半魚人のくせに、奇き跡せきを起こした。

　狙ねらったのか。

　それとも、滑かつ落らく死をさけるためか。

　二本の長剣を突き立てた。

　超食漢の左目に。

　ぐっさりと。

「□□ＧＵＯＯＯＮＧ……！」

たぶん、痛みだけでないはずだ。両目を失い、いきなり視覚を完全に奪うばわれたことに対する驚きよう愕がくと衝しよう撃げき。もしかしたら、状じよう況きようを把は握あくできないことによる混乱。そうしたものすべてが超食漢をのけぞらせ、天地に轟とどろき渡わたる咆ほう吼こうとなって発せられたのだろう。

ただ、なんでもよかった。大事なことは、超食漢の目が見えなくなったことだ。それから、超食漢の動きが止まったことだ。といっても、わずか数秒だったが、それで十分だった。頭が尋じん常じようじゃない速度でフル回転。ピキーンときた。マリアローズはベルトのホルダーに両手をのばして、カバーを外しながら走った。声をかぎりに叫さけんだ。「カタリ、手を放して！　ピンプはカタリを！　爆ばく発はつが合図で、飛燕フエイヤンはテキトーに、アジアンはやつの頭……！」「──は、はだっ……！」「……はイ……！」「つーかテキトーかよ、キャハハ！」「──了りよう解かい……！」

返事は聞いた。でも、皆みながちゃんと動いているかなんて、いちいち確かく認にんしない。そんなことをやっていたら、チャンスが逃にげてゆく。だが、自信はなぜかあった。きっとうまくゆく。少なくとも、そう信じないとやっていられない。マリアローズは右目のあたりの血をぬぐって、ホルダーから抜ぬきとった。爆弾を、ぜんぶで六本。それぞれ親指と人さし指、人さし指と中指、中指と薬指で一本ずつ挟はさんだ。やつは背が高い。届くか。違う。そうじゃない。届かせてみせる。やつの足あし許もとまで。ぎりぎりまで接近して、思いきり体をそりかえらせた。何度も練習した投げ方だ。ちらりと、カタリが「おわわわわわあわわおわあわ」と落ちてきて、ピンパーネルがそれを抱だきとめるところが見えたような気がした。ほら。仲間はちゃんとやってくれる。だから、僕もやってみせる……！

マリアローズは爆弾を投げた。ほぼ真上だった。超食漢は大口を開けて吼ほえながら、地じ団だん駄だを踏ふみはじめていた。大暴れ寸前だ。マリアローズは身をひるがえして、とにかく全力疾しつ走そうでその場を離はなれた。超食漢に踏みつぶされてはたまらない。で、爆弾は。

三本が、超食漢の肩かたや顔面にあたってボボボンと爆発した。

あとの三本は、超食漢の口に入った。

少しして、ドン——と、爆発音というより、こもった破は裂れつ音みたいな音がした。

マリアローズはつんのめって半回転し、仰あお向むけに地面に倒たおれて、最後の仕上げを見守った。

超食漢は、空を振ふり仰あおぐ姿勢で、口から煙けむりを出して静止していた。

その左足を飛燕フエイヤンが蹴けったり殴なぐったりしているが、それはもう完全におまけだ。

主役は、超食漢の体を軽かる業わざ師しみたいに駆かけのぼってゆくアジアンだった。

あっという間に超食漢の右肩まで到とう達たつしたアジアンは、右手を左手で支え、断末魔デスクライの剣・ソードを振りあげて、叩たたきつけた。

一撃目は、超食漢の頭頂部あたりだった。

割って、砕くだいて、凄せい絶ぜつに破損させた。

おそらく、それがもう致ち命めい傷しようだった。

二撃目以降、断末魔デスクライの剣・ソードは思うさまに斬きった。斬って、斬り裂さいて、斬りまくって、斬り刻んだ。それでブッシャブッシャ飛び散る血やら脳のう漿しようやらを、ほとんどその身に浴びていないアジアンは、一人、優ゆう雅がに舞まいでも踊おどっているかのようだった。

結局、超食漢の頭部の上半分が、完かん膚ぷなきまで破は壊かいされるのに要した時間は、どれくらいだろう。

長くて、数十秒といったところか。十秒くらいかもしれない。

アジアンはまるでそれが数十サンチの段差であるかのように、超食漢の肩から飛び降りた。

途と中ちゆう、断末魔デスクライの剣・ソードを超食漢の土手っ腹に叩きこんで落下速度をゆるめ、着地はさながら数十サンチの段差からのように事もなげだった。

「フッ……」

アジアンは左手で前髪をかきあげた。

「まあ、愛いとしいマリアとボクの手にかかればこんなものかな」

力を失った超食漢の巨きよ体たいが、ゆっくりと後ろへ倒れてゆく。飛燕フエイヤンが「ウヒャヒャヒャ」と奇き声せいを発しながら超食漢から飛び離れた。巨体は背後の建物にのしかかり、破壊して、押しつぶし、崩ほう壊かいさせて、大量の土つち煙けむりを巻きあげ、ついには完全に倒れて、さまざまな残ざん骸がいに半ば埋うもれた。それがとりあえずはやつの墓標だった。

マリアローズは起きあがって地面にしゃがみこみ、目をすぼめて、口に外がい套とうをあてて防ぼう塵じんマスクがわりにし、なんともいえない、空白にも近い気持ちでしばらくそれを眺ながめていた。



ややあって、ユリカがかがんで顔をのぞきこんできた。

「マリア、怪け我が、見しぇなしゃい」

「……はい」

　抵てい抗こうはしなかった。抵抗する理由もなかった。白い布で顔をふかれたり、軽く触しよく診しんされたりしたときはちょっと痛かったが、我が慢まんできないほどでもなかった。医術式が始まると、マリアローズは目を閉じてじっとして、ユリカにすべてをゆだねた。ユリカの医術式はとても丁てい寧ねいで、モリーほどじゃないけれど、かなり手早い。負傷した箇か所しよが箇所だけに、かなり慎しん重ちような施せ術じゆつだったのかもしれないが、それでもさして時間はかからずに終わった。ユリカの両手が、挟むようなかんじでマリアローズの顔を撫なでた。「──平気？　痛くない？」

「うん、ぜんぜん」

　マリアローズは目を開けた。

　すぐそばに、埃ほこりで汚よごれた、しかし、十分以上に可か憐れんなユリカの顔があってびっくりしたが、彼女が満面に浮うかべた笑えみを見て、本当に、心の底から、ほっとした。

　もっとも、治ち療りようされている間に、アジアンだのカタリだのピンパーネルだの飛燕フエイヤンだの、あげくの果てに刑ジン王ワンまでもが集まってきていて、それはちょっと居い心ごこ地ちが悪いというか、なんだか照れくさいというか。

　アジアン、カタリ、ピンパーネルはわかるけれど、どういうわけか飛燕フエイヤンまで気づかわしげで、少し離れたところにいる

刑ジン王ワンに至っては、やけに真しん剣けんな、険しい表情だし──そんな、たいした怪我じゃないのに。だいたい、飛燕フエイヤンとか刑ジン王ワンに心配してもらう義理なんかないし。

「……てゆうかさ。なんなの、このメンツ……」

「まったく、究極の愛をこめて同感だネ」

「や、アジアン、きみもばっちりふくめてるから」

「どうしてボクが？　キミのいるところにボクがいるのは、しごく当然でもっとも千せん万ばんな愛の摂せつ理りだろう？」

「すごい妄もう想そうだね。熱とかない？　それとも先天的に頭がイカれちゃってる？」

「ボクは正常サ。いや、それとも狂くるっているのかな。もちろん、ボクを狂わせるものがあるとしたら、それはキミの存在以外にないわけだけどネ」

「どーやら脳に深刻な異常があるみたいだから、とりあえず死んじゃえば？」

「まーまーまー」と、カタリが分別半魚人顔で間に割って入ってきた。「マリアローズもな、そんな喧けん嘩か腰ごしにならんと。せっかくこのわしのおかげで超難敵しばき倒して、拍はく手しゆ喝かつ采さい万歳三唱っちゅうめでたいときやないか」

「なんできみのおかげなんだよ。さらっと大おお袈げ裟さに脚きやく色しよくしないでくれる？　この腐くされ魚」

「いや、せやけど今回はホンマにもう、正しよう真しん正しよう銘めいわしのおかげやろ！　全員わしに感謝すべきやろ！　敬礼すべきやろ！　わしを讃たたえるべきやろ！　むしろ崇あがめるべきやろ！」

「俺に蹴け落おとされなければ、道どう化け以下だったろうがな」

㓝

ジン王ワンが低くそう言って、ゆったりとした大おお股またで近づいてきた。だが、微び妙みような距きよ離り

㓝

感かんだった。遠くないが、近くもない。　ジン王ワンはそれくらいの場所で足を止めて、マリアローズをじっと見つめた。さっきとは違ちがって静かな眼まな差ざしだ。色眼鏡サン

㓝

グラスをかけていない　ジン王ワンの目は、狂きよう気きに彩いろどられているわけでも、陰いん湿しつな暗い輝かがやきをたたえているわけでもなく、わりとまともだった。

「お前が無事でよかった」

　でも、そんなことを言われても、どう答えればいいのか。

　マリアローズが黙だまっていると、刑ジン王ワンはなんだか少しだけ寂さびしそうにふっと微笑ほほえんで、今度はアジアンに向きなおった。

「虐殺人形カーネイジ・ドール。お前に敬意を表する。これほど心底から殺したいと思う相手は初めてだ。いつか必ずどんな手を使ってでも殺してやる」

「残念だが、それは無理だ。ボクが死ぬとしたら、マリアのために命を捧ささげるときだけだと決めているのでネ」

「それなら、お前を殺して、俺がやつをいただく。これで問題ない」

「あのー。めちゃくちゃな理り屈くつだと思うんだけど、それ以前に前提がおかしくて、僕、誰だれのものでもないわけだから、勝手に争そう奪だつしないでくれる？　てゆうか、きみら二人とも、今すぐこの世から消えてくれない？」

「キミを残して消えるなんてできないヨ」「お前を手に入れないまま消えるつもりはない」

　返事は同時だった。マリアローズは暗あん澹たんたる気持ちで頭を抱かかえた。どうしてだろう。日々生きてゆくごとに、厄やつ介かい事ばかり増えてゆくような気がする。これって僕のせい？　サフィニアじゃないけど、そういう星のもとに生まれついてしまったんだろうか。アジアンと刑ジン王ワンとの間には険悪なムードが漂ただよいまくりだが、いっそ殺しあって相討ちに

なって二人とも永えい眠みんしてくれればいいのに。そんなささやかな願いも叶かなわなかった。刑ジン王ワンがうまいタイミングで先に視線を外し、ちらりと飛燕フエイヤンに目をやった。

「そろそろ行くぞ、飛燕フエイヤン」

「ンぇ？　でもオレァまだミスター・ピンパーとバトってねーし。なァ、うっぜェーでっけーのとか片づいたし、やろーぜオレとバトバトしよーぜ、ミスター・ピンパー」

　飛燕フエイヤンは飛んだり跳はねたりしながら、ピンパーネルの周りをぐるぐる回りはじめた。当然、ピンパーネルは表情こそあまり変えていないものの、やっぱり迷めい惑わくそうだ。ただ、飛燕フエイヤンは駄だ々だっ子同然だし、無駄に元気だし、放ほうっておいたら、ずっとああして飛びまわっているんじゃないか。そうならなかったのは、刑ジン王ワンが飛燕フエイヤンの襟えり首くびをひっつかまえて持ちあげたからだった。

「それは次の機会にしろ。もし本当に〝古代九頭竜の呪のろい〟がとけたのなら、闇やみ市いちにも被ひ害がいが出ているかもしれない」

「──持つんじゃねーよ！　はッ、なッ、せッ、つーの！」

「戻もどるぞ」

「わーったってッ！　わーったから下ろせ！」

「ああ」

　手を放されると、飛燕フエイヤンは着地するなり

刑

ジン王ワンの脹ふくら脛はぎに下段蹴りロー・キツクを見み舞まった。が、手加減していたのだろう。

刑

ジン王ワンは痛がるそぶりも見せなかった。王龍のひょろ長い変態は、最後にマリアローズを一いち瞥べつしただけで、あとはもう脇わき目めもふらず背中を向けて歩き去っていった。

「ちぇっ！」飛燕フエイヤンは一つ舌打ちをしてから、ピンパーネルをビシッと指さした。「ンでもよォ、ミスター・ピンパー。今度会ったらガチでバトるって約束、テメー忘れンなよ！」

「……約束・してナい」

「キャハハ！　かてェーこたァ言いっこナシ！　禿はげンぞギャハッ！　ユリィもまたなー！」

「ユ・リ・カ！　何度言ったらわかるの！」

「ウヒャヒャヒャ」

「もう……」

　ほっぺたをふくらませてぷんぷんしているユリカを後しり目めに、飛燕フエイヤンは甲かん高だかい笑い声をあげながら

𠛬ジン王ワンを追いかけて走っていった。

　しかし、悪気はないのかもしれないが、なんとも騒そうぞうし𠛬くて傍はた迷惑なやつだ。当然、ジン王ワンもかなり迷惑だし、アジアンは言うに及およばない。災厄。最悪。超最低ＳＵＣＫ。マリアローズはため息をついた。どうも今日は厄日っぽい。とはいえ、手をかえ品をかえ降りかかってきた災難も、さすがにそろそろ品切れだろう。そう思った矢先だった。

　後ろから何かが近づいてくる。足音。複数だ。「むだぉぅっ！」半魚人が奇き声せいを発した。見れば、カタリは足音がした方向へ目をやって、顎あごが外れそうなくらいでっかく口を開けている。何か仰ぎよう天てんするようなことでもあったのか。マリアローズも、思わず身構えてしまったが、振ふり返ってみると──やはり災難はもうネタ切れらしい。なんのことはない、黒の巻き毛に黒い瞳ひとみ、褐かつ色しよくの肌はだが精せい悍かんそうなロドリゴ・ファルコーネ率いる鉄のアイアン心臓ハーツ協会ソサエティの一団だった。

「あんたら、ＺＯＯと……昼飯時ランチタイムの、アジアンか」

　ファルコーネはマリアローズたちを見まわして、男っぽい、渋しぶみのきいた笑えみを浮うかべてみせた。

「たいしたもんだ。遠くから見てたが、世辞抜きで、見事と言うしかねえ。あの一戦はきっと語り種ぐさになるぜ。俺の仲間も、あの蜥蜴とかげどもにだいぶ殺やられちまったからな。あんたらにそのつもりはなかっただろうが、仇かたきを討ってくれたようなもの

だ。やつらにかわって礼を言わせてくれ。おかげで、俺も目的を果たすことができたしな」

「……目的？」

　何か、忘れているような気が。

　思い出す前に、カタリが発はつ狂きようしたように叫さけんだ。

「──かぁぁぁぁーっ！　鋏はさみぃぃぃぃ！　鋏が！　ハァァサァァミィィがぁぁぁ……！」

「悪いな、カタリ」

　ファルコーネは自分の両りよう腕うでで抱えるようにして持っている物体に目を落とした。それは、まぎれもない。鋏使いの鋏だ。もしかして、彼らは撤てつ退たいしたのではなく、これを回収しにいっていたのか。だとしたら、筋金入りだ。

「だが、稀少物レア・蒐集家ハンターの価値を決めるのは、払はらった犠ぎ牲せいでも示した勇気でもねえ。手に入れた品物の価値だ。まあ、お前は若いわりに知識もあるし、根こん性じようもある。これから先、いくらでもチャンスはあるさ。こいつにだって、いつでもさわらせてやるから、そう気を落とすな」

「落とすがな！　落としまくりや！　うがあああああああああああああああああっ……！」

「その悔くやしさをバネにして、せいぜい精しよう進じんするんだな」

　ファルコーネはユリカに一言礼を言ってから、仲間とともに引き返していった。なんのかの言って、あの男、稀少物レア・蒐集家ハンター仲間のカタリにゲットした鋏を自じ慢まんしにきただけなんじゃ。そう考えるとかなり嫌いや味みなやつだが、仮にカタリが鋏を手に入れていたら、同じことをしたに違ちがいないにゃー。結局、お互たがい様かにゃー。

「──って……」

　にゃー。

猫ねこ？

鳴き声は近かった。いつの間にか、ジュジがユリカに抱だかれて、全身を撫なでまわされている。ちょっと被毛は汚よごれているが、無事だったようだ。タフな猫だ。

ジュジ、か。

目的。

あれ？

「……そういえば、ルイ・カタルシスは？」

誰だれか知っている者はいないかと思って訊きいてみたら、ユリカが表情を曇くもらせてジュジをぎゅっと抱きしめ、首を横に振った。

「しょれが──」

「そ、そっか……」

好ましいタイプの男ではなかったが、ジュジの飼い主でもあるし、死んだと聞かされると、さすがにちょっとだけしんみりしてしまう。

それにしても、今日、この騒さわぎで、いったい何人が命を落としたのだろう。また、刑ジン王ワンが言っていたように、〝古代九頭竜の呪のろい〟がとけてしまったのだとしたら、被ひ害がいは市内全域に拡大している可能性だってある。最悪の場合、異界生物フリークスがこぞって地上にあふれだし、エルデンが混沌とエルデ恐怖の巷エイニオンと化してしまうかもしれないのだ。それって、たいへんなことだ。無統治とか無む秩ちつ序じょとか、そんな言葉も人間がのさばっているからこそ出てくるのであって、異界生物フリークスの大群がこの街にはびこっている悪

徳、暴力、その根源にある欲望、金、それらを根こそぎ薙なぎ倒たおしたあとには──金？

「……あ」

　ああ。

　あああ。

　ああああ。

　全身の力が、残らず、ぜんぶ、一気に抜ぬけた。

　倒れそうになったマリアローズの体を、ピンパーネルとアジアンがとっさに両側から支えた。ユリカが慌あわてててジュジを地面に下ろしてマリアローズの瞳どう孔こうを調べた。

「マリア……！　マリア、しっかり！　マリア！　わたしの声、聞こえてる？　マリア！」

「マリア！　マリアマリアマリア！　ど、どうしたんだヨ、頭を打ったのがいけなかったのかな？　き、キミ、ユリカくん、し、し、しっかり、しっかり調べてくれヨ！　ええ！」

「あなたに言われなくたってわかってるわ！　マリア！」

「…………はーい、聞こえてまーす…………」

「よかった！　で、大だい丈じよう夫ぶ？　吐はき気は？　眩暈めまいは？　頭じゆ痛ちゆうは？」

「…………ないでーす…………」

　でも、泣いちゃいそうだ。

　金。

　お金。

　ダラー。

　すぐそこに馬ば鹿かでかい超食漢の首が一つあるので、最低二億ダラーはもらえる計算なのに。

　ちょっとだけ半魚人の気持ちがわかった。マリアローズは、ぼんやりした視界の隅すみに、赤い首輪をした灰色のジュジが、何度か振ふり返りながら走り去ってゆく姿をとらえていた。ジュジ。飼い主を失ったきみは、いったいこれから、どこへ行くんだろう。

Omenage 897 10th revolution 8th day

サンランド無統治王国首都エルデン第三区

"n'ebula;

chapter.11 something in progress

老人と花

落ちかけた太陽に照らされて、建ちならぶ新旧大小さまざまな集合住宅が、茜あかね色いろに染まっている。

夕暮れの気配が濃のう厚こうに立ちこめるなか、エルデン第三区の雑然とした街並みは、あやうさをはらんだ奇き妙みような静寂しじまに沈しずんでいた。

だが、この頑がん丈じようさ以外に長所はなさそうな四階建ての一階、「n'ebula」の看板を出して営業している定食屋には、だらけた空気が流れている。

もとより、昼食には遅おそすぎるし、夕食にはまだ少しだけ早い。晩ばん飯めし時どきに備えた仕込みもすでに終わっている。この店の主にして料理長、年ねん齢れい不ふ詳しよう、外見年齢八十歳くらい、身体能力推定二十代のオトミ婆ばあさんは、大だい胆たん不敵な見た目にして味は抜ばつ群ぐんの料理を作ると評判だが、この時間帯はほとんど開店休業状態だ。厨ちゆう房ぼうのなかで椅い子すに腰こしを下ろしたオトミ婆さんが煙草たばこをふかして、もう一人の料理人兼けん給仕係の若い男がカウンターに突つっ伏ぷして居い眠ねむりしているほかは、広い店内に二人しかいない。

しかも、そのうち一人はほとんどこの店に住みついている老人だ。

実質、客は一人だけといってもいいだろう。

しかし、その一人が見るからにただものではなかった。

掃そう除じはちゃんとしてあるものの、古びてうらぶれたこのn'ebulaにまったく似合わない。

美しい女だ。

それも、彫ほりの深いくっきりした顔立ちや、紫むらさき色いろのドレスにつつまれた豊満だがひきしまった体つきや、絹のごとき艶つやのある髪かみの毛など、造形としての美だけではない。瞳ひとみに宿る意思の力が果てしなく強く、存在感が強きよう烈れつで、全身から凄すごみのある色気がにじみだし、それでいて欲情をはねつけるような高潔さを身にまとっている。肉体と精神が調和しているようで、しのぎを削けずっていて、バランスがとれているよ

うで、アンバランスで、表情によって、感情によって、めまぐるしく印象が激変してしまいそうな女だ。

　女は常連の老人と向かいあって座り、猪ちよ口こで無色透とう明めいの酒を飲んでいる。

　そのなめらかで細い両手の指が猪口をそっと支えて唇くちびるに運ぶ仕草も、なんともいえず流りゆう麗れいで、楚そ々そとしていて、それでいて華はながある。

　ふと、女は店の外に目をやった。

「──風が、変わったわ……」

　やや低い声は、聞く者の胸に染しみ入るように、深い。

「王のくだらぬ悪戯いたずらも、もうお仕し舞まいかしら」

「そのようじゃの」

　老人は顔の上半分を覆おおう弱視矯きよう正せい用ようとおぼしきゴーグルをつけている。頭頂部に一ひと房ふさ、それから両耳をつなぐように残っている髪の毛は、すべて白い。ゴーグルのせいでわかりづらいが、シミや皮ひ膚ふのたるみなどから見て、オトミ婆さんと同じくらいの年だろうか。もっとも、原色使いのド派手な小こ袖そでを、腹に巻いたサラシが見えるくらいだらしなく前をはだけて着流し、片かた膝ひざを倒たおして行ぎよう儀ぎ悪く椅子に座った姿は、なんとも年とし甲が斐いがない。

「しかし、よもや我らが王の古き大いなる呪じゆが失うせ、そのうえわずか四半日でまた息を吹ふき返すなどとは……」

　老人は徳とつく利りから女の猪口に酒をそそぎ、自分の猪口には女の申し出を断って自らついだ。

　一気に飲み干して、熱い息を吐いた。

「──時が移り、人は変わり、近ごろはこの街の匂においさえも昔とは違ちごうて思える。年はとりたくないものじゃな。老骨は世の趨すう勢せいに従うこともできず、おろおろと迷う気力もなく、ただ座して朽くち果てるときを待つのみじゃ」

「ご冗じょう談だんを」

　女が婉えん然ぜんと微笑ほほえみ、猪口をテーブルに置いて徳利を手にとった。今度は老人も拒こばまず、黙だまって猪口を差しだした。

「冗談などではないぞ。我わが輩はいも老いたわ。ほれ、このとおり目もきかぬしの。朝から晩まで飲む酒だけがただ一つの愉たのしみよ」

「でしたら、あたくしの話にも興味がおありにならない？」

「そうは言うておらぬ。ヴェロニカ、おぬしは美しいしの。老いて衰おとろえしなびた我輩でも、美を愛めでる心まで失うしのうたわけではない。おぬしがこうして足を運んでくれるだけでも、話を聞く価値はあるというものじゃて」

「あたくしは強い殿との方がたが好きなのです、B□B。年など関係なく」

「年よりをけしかけるつもりか。悪い女じゃ」

「いいえ。本当のことを申しあげているだけ。あたくしは強い殿方が好き。でも、出し惜おしみをする男は嫌きらい。何かをひた隠かくしに隠している男は、すべて探さぐりだして、暴あばきだして、丸まる裸はだかにして、縊くびり殺してしまいたくなるのです」

「だが、本当におぬしが好むのは、そうしたままならぬ男なのじゃろう」

「けれど、そういう男はたいてい死んでしまうわ」

「ヴェロニカ。その仮名カナはおぬしに似合わぬな」

「あたくしがつけたのではないから」

　ヴェロニカという花の名を持つ女とB□Bと呼ばれた老人は、ともに沈ちん黙もくした。

　開け放されたままの出入口のドアから、かすかな、もはやあやうさの粒りゅう子しなど微み塵じんもふくんでいない夕風が吹きこんできた。

いや。



風だけではない。

灰色の、小さな獣けものだった。

　猫ねこだ。

　赤い首輪をつけた青い瞳の猫が、ドアをくぐって、まっすぐ女に向かってきた。

　オトミ婆ばあさんが近所の野の良ら猫に餌えさをやるものだから、この建物はすっかり猫屋や敷しきと化している。だから、n'ebulaに猫が入ってくるのもさして珍めずらしいことではない。だが、食い物はもらっても野良猫の矜きよう持じは失うべからず、というオトミ婆さんの言いつけを守って、この近辺の野良猫は断固として首輪を拒きよ否ひする。従って、その灰色の猫は野良猫ではない。

「ジュジ」

　近づいてくる猫に気づいた女が、その名を呼んだ。

「あなた一人ということは、分身スペアは壊こわれてしまったのね」

「まあね」

　と、猫が答えた。

　だが、女はもちろん、老人もべつだん驚おどろく様子はない。

　ジュジは老人に向きなおって、口を開くこともなく、また人語を発した。

「直接お目にかかるのは初めてですね。ルイ・アシュモダイ・アデモンディオです。このような姿で申し訳ありませんが、以後、お見知りおきを」

「それはいっこうにかまわぬが、次にまみえるとき、おぬしをおぬしとわかるかの。耄もう碌ろくしておるもので、自信がないわい」

「あなたが耄碌しているのだとしたら、全人類の九十九パーセント以上は痴ち呆ほうだということになります」

「いやいや。かつては我輩もおのれをひとかどの者ぞとうぬぼれておったが、やはり寄る年波には勝てぬよ」

「そんなことを仰おつしやらないでください。ぼくは本気で思っているんですから。彼女を打ち負かすことのできる者がいるとしたら、それはあなた以外にいない、とね」

　老人は返事をせずに猪口の酒をあおった。

　まるで何もかもが静止しているかのような時間が重々しく流れた。

　夕ゆう闇やみが深まりつつある。

　女は口くち許もとに微笑みをたたえたまま、次し第だい次第に闇に近づいてゆく外を眺ながめていた。

　不意に、その唇くちびるがそっと動いて、声にならない声をつむいだ。

　──滅ほろぶがいいわ、こんな街、と。

　それから女は椅い子すから立ちあがり、かがんでジュジを抱だきあげた。

　老人がようやく口を開いた。

「毎度、同じ答えですまぬがの……よく、考えさせてもらおう」

「それは、もう」

　女の腕うでのなかで、ジュジが応じた。

「時間はまだありますしね。近いうちにまたおうかがいします。お返事がいただけるまで、何度でもね。いいでしょう、リルコ？」

「ええ」

　二つの名を持つ女は、ひっそりとうなずいた。

『薔薇のマリア Ⅳ. LOVE'N'KILL』了

あとがき

　僕はずっと何をすればいいのかわかりませんでした。自分が何をしたいのかもよくわかりませんでした。小さいころから「おまえはサラリーマンにはなれない」と言われつづけてきて、自分でもなぜかそう思っていたので、ちゃんと就職して定年まで勤め上げるという考えは僕のなかに一いつ切さいありませんでした。そうしてあることをきっかけに、歌をうたうようになりました。結局のところは挫ざ折せつして、何かしようと思い、小説を書きはじめました。正直、僕はそのときから小説を書いてお金をもらえるようになるつもりでした。何しろ、マリアローズではありませんが、生きてゆくためにはお金が必要ですし、「サラリーマンにはなれない」と思いこんでいたので、そうするよりほかにありませんでした。それから僕はそのためにどうすればいいのか考えるようになりました。小説を書くごとに課題を見つけて、それを解決することに全力をそそぎました。最初に書き上げてある新人賞に応おう募ぼした小説は箸はしにも棒にもかかりませんでしたし、僕に天てん賦ぷの才などないことは明らかでした。それでもやるしかありませんでした。あきらめたら、また別のことを探さなければなりません。もう「何をすればいいのか」「自分は何がしたいのか」と考えるのはこりごりでした。僕は小説を書きました。悩なやんだり落ちこんだり傷ついたり眠ねむれなかったりしながら、とにかく小説を書きました。そして、どうにかこうして皆みなさんに自分の書いた小説を読んでいただけるようになり、今は別の喜びを噛かみしめています。

　五冊目です。

『薔薇のマリア』の五冊目で、十文字青の五冊目です。

　物語としては、ようやく序章が終わり、本章に入りかけたというところです。当初の予定どおり、これで簡単には終わらせることができなくなりましたが、なんとか完走したいと思っています。少なくとも、行けるところまで行くつもりです。よろしければ、どうか最後までおつきあいください。

　それでは、ＢＵＮＢＵＮさんをはじめ、本書の制作、出版、販はん売ばいに関かかわったすべての方々、そして、今、本書を手にとってくださっている皆様へ、愛と感謝をこめつつ。

　またお会いしましょう。

　次は、おそらく桜の咲さくころに。

十文字　青

カバー・口絵・本文イラスト / BUNBUN

デザイン / 朝倉哲也 + design CREST

MAP製作 / On Graphics

薔ば薇らのマリア

Ⅳ．LOVE'N'KILL

十じゆう文もん字じ　青あお

平成25年9月30日　発行

発行者　宍戸健司

発行所　株式会社角川書店

〒102-8078　東京都千代田区富士見2-13-3

http://www.kadokawa.co.jp/

本電子書籍は下記にもとづいて制作しました

角川スニーカー文庫『薔薇のマリア　Ⅳ．LOVE'N'KILL』平成18年1月1日初版発行

平成20年3月10日8版発行

BOOK☆WALKER